

一般国道9号米子道路埋蔵文化財発掘調査報告書 I

鳥取県西伯郡淀江町

FUKUOKA

SITE

福岡遺跡

1992

財団法人

鳥取県教育文化財団

建設省

倉吉工事事務所

「福岡遺跡」正誤表

箇 所		誤	正
P 1	20行	12月11日	12月13日
折り込み	挿図7⑧	灰色粘質ブロック混	灰色粘質土ブロック混
折り込み	挿図9⑧	(黄色ブロック混)	(黄色土ブロック混)
折り込み	挿図10⑨	礫	礫混
P 19	20行	⑤層	③層
P 23	2行	S K-81と接合	S K-81出土土器と接合
P 30	39行	S K-17と接合関係	S K-17出土土器と接合関係
P 42	25行	①層	1層
	31行	①層	1層
	37行	①層	1層
P 43	1行	①層	1層
P 111	S K-52		H=2.90m
P 128	S X-01		*赤線範囲は植物遺体
P 141	15行	高坏 (Po71 挿図106)	高坏 (Po81 挿図107 図版32)
P 198	33行	デサイト	ディサイト
P 202	27行	沈砂地	沈砂池
P 202	図7	侵食谷	浸食谷
P 203	5行	沈砂地	沈砂池

序 文

鳥取県内には優れた文化遺産がたくさん保存されています。それら先人の築き上げた文化を大切にし後世に伝えることは現代に生きる我々に課せられた使命だと考えます。

鳥取県西部にある淀江町は、北に雄大な日本海、南に秀峰大山と特に美しい自然環境に囲まれています。また、天の真名井・本宮の泉の名水、本州では唯一の石馬、最近発見され全国の注目を集めている上淀磨寺の壁画等、名所・旧蹟も数多く知られています。

今回の調査は、一般国道9号米子道路工事に伴い、平成2年4月から鳥取県教育文化財団が行なった淀江町福岡遺跡の埋蔵文化財発掘調査です。建設省が事業計画に基づいて鳥取県教育委員会と協議し、淀江町教育委員会が試掘調査を行なったところ福岡遺跡の所在が確認されたため、当財団が建設者の委託を受けて発掘調査を行ないました。

調査の結果、弥生時代・古墳時代・中世の遺跡が確認され、200基以上が密集する弥生時代の土坑群や中世墓等、たくさんの貴重な資料を得ることができました。将来、これらの資料が、広く研究者に活用され、古代史解明の一助となることを期待する次第です。

おわりに、この調査に御理解と御協力を頂いた地元の皆様をはじめ、ご指導頂いた方々、関係各位に心から感謝し、厚く御礼申し上げます。

平成4年3月

財團法人鳥取県教育文化財団

理事長 西 尾 邑 次

例 言

1. 本報告書は、一般国道9号米子道路工事に伴う、西伯郡淀江町福岡に所在する福岡遺跡の埋蔵文化財発掘調査記録である。
2. 発掘調査は、建設省倉吉工事事務所の委託により、財団法人鳥取県教育文化財団西部埋蔵文化財調査事務所が行なった。なお、調査着手段階では遺跡名が確定していなかったため、発掘調査通知等では「福岡所在遺跡」と呼称していたものである。
3. 報告書の作成は、調査員の討議に基づいて執筆・編集し、編集担当者は目次に記載した。
4. 出土遺物の整理・実測・トレース・写真撮影等は、鳥取県埋蔵文化財センターの協力を得た。
5. 写真整理・遺構図面の整理・トレース等は、西部埋蔵文化財調査事務所にて行なった。
6. 出土遺物・図面等は、鳥取県埋蔵文化財センターに保管されており、出土遺物は将来淀江町教育委員会へ移管する予定である。
7. 下記の先生方には、お忙しい中、現地での指導に加えて本報告の為に原稿を頂いた。
鳥取大学 教育学部 教授 赤木三郎先生
鳥取大学 医学部 教授 井上貴央先生
8. 京都芸術短期大学故小谷次男先生には布製品について、大阪市立博物館前田洋子先生には和鏡について御教示頂いた。
9. 石器の実測・分類等について瀧川友子氏に御協力頂いた。
10. 現地調査及び報告書作成にあたって下記の方々に助言・指導を頂いた。
牛嶋 茂 加賀見省一 金村浩一 加納真人 久保猿二朗 下高瑞哉 杉谷愛象 早田 勉
田中弘道 谷野重美 富山直人 中原 齊 中山和之 西浦日出夫 益田 晃 松田 潔
三好純一 吉村博恵 (敬称略 五十音順)
11. 出土遺物の科学分析は古環境研究所に依頼した。

凡 例

1. 本報告書における方位は、磁北を示す。
2. 調査区に $10 \times 10\text{m}$ のグリッドを設定した。調査区を縦断する軸をアルファベット、それに直交する軸をアラビア数字で表し、北隅交点をグリッド名とした。
3. 本報告書における遺構記号・遺物記号は次のように示す。
SA: 杭列 SB: 捩立柱建物 SD: 溝状遺構 SK: 土坑 SX: 土壙墓 P: ピット
Po: 土器・土製品 S: 石器 W: 木製品 F: 鉄製品 J: 和鏡 C: 銅製品
4. 遺構挿図中におけるセクション・エレベーションの基準線標高はH=の記号で表す。
5. 土坑の遺構図については、S=1:20のものは各図面にスケールを付した。それ以外の土坑の遺構図面はS=1:40である。
6. 弥生時代・古墳時代の土坑の切り合い関係については、その新旧が明確なものは、挿表1(土坑一覧表)に記した。また、新旧関係が不明なものは、遺構平面図中の遺構輪郭線を破線で表記した。
7. 土器等の観察表(挿表4)中の①~⑧は以下の数値を示す。なお、数値後の※は復元値、△は残存値である。
①口径 ②器高 ③最大径 ④底部径 ⑤脚径 ⑥長さ ⑦幅 ⑧穴径

目 次

序文

例言

凡例

目次

第1章 調査の経緯

第1節 発掘調査に至る経緯	1
第2節 発掘調査の経過	1
第3節 調査方法と体制	3

第2章 位置と環境

第1節 遺跡の位置	5
第2節 歴史的環境	6

第3章 遺 構

第1節 弥生時代の遺構	西川	11	
1. 土 坑	2. 溝		
第2節 古墳時代の遺構	加藤	36	
1. 土 坑	2. 溝		
第3節 中世以降の遺構	太田	38	
1. 土 坑	2. 溝	3. 掘立柱建物	4. ピット群
5. 石 列	6. 杭 列	7. 中 世 墓	

第4章 出土遺物

第1節 繩文土器	139
第2節 弥生土器	139
第3節 古墳時代以降の土器	141
第4節 木製品	143
第5節 石 器	145
第6節 その他の遺物	146

第5章 まとめ

第1節 土坑群について	西川	189
第2節 土壙墓 (SX-01) について	西川	192
第3節 小結	太田	196

付論

浜江町福岡遺跡の自然環境	197	
鳥取大学教育学部教授 赤木三郎		
福岡遺跡 2 区SX-01より検出された中世人骨の歯牙について	205	
鳥取大学医学部教授 井上貴央		
福岡遺跡における自然科学分析	古環境研究所	209
① 福岡遺跡におけるプラント・オパール分析		
② 福岡遺跡出土木材の樹種同定		
③ 放射性炭素年代測定結果		

挿図目次

挿図 1	福岡遺跡基準坑設定図	2
挿図 2	福岡遺跡位置図	5
挿図 3	周辺遺跡分布図	8
挿図 4	地層観察土層断面図	9
挿図 5	サンプリング土層断面図	9
挿図 6	1区遺構配置図・土層断面図	10
挿図 7	2区遺構配置図・土層断面図	折り込み
挿図 8	3区遺構配置図・土層断面図	折り込み
挿図 9	4区遺構配置図・土層断面図	折り込み
挿図10	5区遺構配置図・土層断面図	折り込み
挿図11	SK-01・02・03・04・05・06遺構図	46
挿図12	SK-07・08・09・10・11・12遺構図	47
挿図13	SK-13・14・16遺構図	48
挿図14	SK-17・18・24遺構図	49
挿図15	SK-15・19遺構図	50
挿図16	SK-20・23遺構図	51
挿図17	SK-21・22・25・26・27・28・29遺構図	52
挿図18	SK-30・31・32遺構図	53
挿図19	SK-33・34・37・38遺構図	54
挿図20	SK-35遺構図	55
挿図21	SK-39・40・41・42・43・46遺構図	56
挿図22	SK-44・45遺構図	57
挿図23	SK-47遺構図	58
挿図24	SK-48・49・51・54・55遺構図	59
挿図25	SK-50遺構図	60
挿図26	SK-53・56・57・58遺構図	61
挿図27	SK-59・60・62遺構図	62
挿図28	SK-61・63・65・66・67・68遺構図	63
挿図29	SK-72・73遺構図	64
挿図30	SK-69・70・71・75・76遺構図	65
挿図31	SK-77・78・79・80・81遺構図	66
挿図32	SK-82・83・85遺構図	67
挿図33	SK-84・86・87・88遺構図	68
挿図34	SK-89・90番台・100・101遺構図	69
挿図35	SK-102・103・104・106遺構図	70
挿図36	SK-105・107・108・109遺構図	71
挿図37	SK-110・111・112・113・114・117遺構図	72
挿図38	SK-115・116遺構図	73
挿図39	SK-118・119・120・121・122・123遺構図	74

挿図40	SK-124・125・126・127遺構図	75
挿図41	SK-128・129・130・131遺構図	76
挿図42	SK-132・133・134・135・136・137・138遺構図	77
挿図43	SK-139・140・143遺構図	78
挿図44	SK-141・142・145遺構図	79
挿図45	SK-144・190・195遺構図	80
挿図46	SK-146・147・148・149・150・151遺構図	81
挿図47	SK-152・153・155・156・157遺構図	82
挿図48	SK-154・159・163遺構図	83
挿図49	SK-158・160・161・162・164遺構図	84
挿図50	SK-165・166・167・168・170・171遺構図	85
挿図51	SK-172・173・174・175・176遺構図	86
挿図52	SK-177・179・180・183遺構図	87
挿図53	SK-178・181・185遺構図	88
挿図54	SK-182遺構図	89
挿図55	SK-184・186・187・188遺構図	90
挿図56	SK-189・191・192・193・194・197遺構図	91
挿図57	SK-196・198・201・203遺構図	92
挿図58	SK-204・205遺構図	93
挿図59	SK-207・208・209遺構図	94
挿図60	SK-206・212遺構図	95
挿図61	SK-210・211・214遺構図	96
挿図62	SK-213・215・216・217・218遺構図	97
挿図63	SK-219・220・221・224遺構図	98
挿図64	SK-222遺構図	99
挿図65	SK-223・225・227・228遺構図	100
挿図66	SK-226・229・230遺構図	101
挿図67	SK-231・233・236遺構図	102
挿図68	SK-232遺構図	103
挿図69	SK-234・235遺構図	104
挿図70	SK-237・238・240遺構図	105
挿図71	SK-239・243・244遺構図	106
挿図72	SK-241・242・245・246・248遺構図	107
挿図73	SK-249・251・253・254・255遺構図	108
挿図74	SK-247・259遺構図	109
挿図75	SK-258・261・262・263・264遺構図	110
挿図76	SD-03・04遺構図	折り込み
挿図77	SD-05・06・07・08遺構図	折り込み
挿図78	SK-36・52・64・74・169・202遺構図	111
挿図79	SK-199・200遺構図	112
挿図80	SK-250・252遺構図	113
挿図81	SK-256・257・260遺構図	114

挿図82	SD-17・18・19・20遺構図	折り込み
挿図83	SD-28・29・30・36遺構図	折り込み
挿図84	SK-401・402・403・404・405・406遺構図	115
挿図85	SK-407・408・409・410・411・412・413遺構図	116
挿図86	SK-414・415・416・417・418・419・420遺構図	117
挿図87	SK-421遺構図	折り込み
挿図88	SD-11遺構図	119
挿図89	SD-14・26遺構図	120
挿図90	SD-39・40遺構図	121
挿図91	SD-41遺構図	122
挿図92	SD-42遺構図	折り込み
挿図93	SB-01・02遺構図	折り込み
挿図94	4区・ピット内遺物出土状況図 I	123
挿図95	4区・ピット内遺物出土状況図 II	124
挿図96	4区・ピット内遺物出土状況図 III	125
挿図97	4区・ピット内遺物出土状況図 IV	126
挿図98	4区・ピット内遺物出土状況図 V・石列配置図・SK-501遺構図	127
挿図99	SX-01遺構図	128
挿図100	遺構内出土遺物実測図(1)	147
挿図101	遺構内出土遺物実測図(2)	148
挿図102	遺構内出土遺物実測図(3)	149
挿図103	遺構内出土遺物実測図(4)	150
挿図104	遺構内出土遺物実測図(5)	151
挿図105	遺構内出土遺物実測図(6)	152
挿図106	遺構内出土遺物実測図(7)	153
挿図107	遺構内出土遺物実測図(8)	154
挿図108	遺構内出土遺物実測図(9)	155
挿図109	遺構内出土遺物実測図(10)	156
挿図110	遺構内出土遺物実測図(11)	157
挿図111	遺構内出土遺物実測図(12)	158
挿図112	绳文土器・遺構外出土遺物実測図(1)	159
挿図113	遺構外出土遺物実測図(2)	160
挿図114	遺構外出土遺物実測図(3)・土製品実測図	161
挿図115	陶磁器実測図	162
挿図116	5区出土遺物実測図	163
挿図117	木製品実測図(1)	164
挿図118	木製品実測図(2)	165
挿図119	木製品実測図(3)	166
挿図120	木製品実測図(4)	167
挿図121	木製品実測図(5)	168
挿図122	木製品実測図(6)	169
挿図123	木製品実測図(7)	170

挿図124 木製品実測図（8）	171
挿図125 木製品実測図（9）	172
挿図126 石鏃・石錐・加工痕剥片実測図	173
挿図127 石核・石鏃実測図	174
挿図128 和鏡・古錢・鉄製品実測図	175

挿 表 目 次

挿表 1 土坑一覧表	129
挿表 2 溝一覧表	137
挿表 3 石器組成表	145
挿表 4 土器・土製品・陶磁器観察表	176
挿表 5 木製品一覧表	186
挿表 6 石器類観察表	188
挿表 7 和鏡・古錢・鉄製品一覧表	188

図 版 目 次

図版 1 福岡遺跡遠景	SK-116完掘状況・遺物出土状況
図版 2 福岡遺跡全景	図版10 SK-121土層断面
図版 3 1・2区調査区全景	SK-122完掘状況・土層断面
図版 4 4区調査区全景	SK-128遺物出土状況
図版 5 2区土坑群検出状況	図版11 SK-131完掘状況
SK-14遺物出土状況	SK-143土層断面
SK-18土層断面	SK-159土層断面
SK-24遺物出土状況	SK-160土層断面
図版 6 SK-33完掘状況・遺物出土状況	図版12 SK-165完掘状況
SK-35遺物出土状況	SK-171土層断面
SK-39土層断面	SK-182完掘状況
図版 7 SK-40土層断面	SK-191完掘状況
SK-45遺物出土状況	図版13 SK-195土層断面
SK-47遺物出土状況	SK-209完掘状況
図版 8 SK-50遺物出土状況	SK-211遺物出土状況
SK-53完掘状況	SK-212遺物出土状況
SK-58・59完掘状況	図版14 SK-213土層断面
SK-73土器内面植物遺体	SK-215・216・217完掘状況
図版 9 SK-76完掘状況	SK-226土層断面
SK-84・85・86・87・102・104完掘状況	SK-227遺物出土状況

図版15	SK-235土層断面 SK-239遺物出土状況 SK-256遺物出土状況 中学生見学風景	図版27 D-19グリッドPit 2 石出土状況 D-19グリッドPit 5 石出土状況 C-15グリッドPit 3 柱材出土状況
図版16	SK-259完掘状況・遺物出土状況	図版28 SA-01検出状況 2区サンプリング土層断面
図版17	SK-263遺物出土状況 SK-252完掘状況・遺物出土状況 SK-257遺物出土状況	4区サンプリング土層断面 図版29 5区調査前
図版18	SK-421土層断面・遺物出土状況	SD-39・40・41・42完掘状況
図版19	SX-01石組・人骨検出状況	SA-02検出状況
図版20	SX-01遺物出土状況	SK-501完掘状況
図版21	SD-03完掘状況・土層断面 SD-04完掘状況・土層断面	図版30 土器（1）
図版22	SD-05・06土層断面 SD-05・06・07・08完掘状況	図版31 土器（2）
図版23	SD-11完掘状況・土層断面 SD-12土層断面 SD-13・14完掘状況	図版32 土器（3）
図版24	SD-17・18完掘状況・土層断面 SD-28・29完掘状況・土層断面	図版33 土器（4）
図版25	B-16グリッドPit群完掘状況 B-17グリッドPit群完掘状況 D・E-19グリッドPit群完掘状況 D-20グリッドPit 8 遺物出土状況	図版34 土器（5）
図版26	B-16グリッドPit48石出土状況 C-16グリッドPit 5 石出土状況 C-19グリッドPit16石出土状況 E-20グリッドPit 4 石出土状況	図版35 土器（6） 図版36 土器（7）・石器（1） 図版37 土器（8）・石器（2） 図版38 木製品（1） 図版39 木製品（2） 図版40 木製品（3） 図版41 種子・和瓢・合子・櫛 図版42 古鏡・鉄製品・柱材 図版43 SK-421布出土状況・布断片 SX-01検出歯牙 図版44 地層観察 第1・第2・第3トレンド 図版45 地層観察 第4・第5・第6トレンド

科学分析図版

- 分析図版 1 福岡遺跡出土材の顕微鏡写真
 分析図版 2 福岡遺跡出土材の顕微鏡写真
 分析図版 3 福岡遺跡出土材の顕微鏡写真
 分析図版 4 福岡遺跡プラント・オパール顕微鏡写真
 分析図版 5 福岡遺跡プラント・オパール顕微鏡写真

第1章 調査の経緯

第1節 発掘調査に至る経緯

今回の調査は、一般国道9号米子道路工事に伴う埋蔵文化財発掘調査である。建設予定地は、鳥取県西伯郡淀江町の中央部に当たり、古くから条里制が施行された地域として知られている。調査地一帯は、1975年から1980年にかけて圃場整備工事対象地域となり、工事に伴う緊急発掘調査が行なわれている。調査によって条里制の畦畔・木杭・柵文時代の遺跡、弥生時代の縄刻文土器等、多くの貴重な資料が発見され注目を集めた。

調査に先立ち、1989年に淀江町教育委員会が試掘調査を行なった。その結果、弥生時代と中世の遺物・遺構が検出され、福岡遺跡が確認された。この為、建設省倉吉工事事務所と鳥取県教育委員会が協議し本調査の実施を決定し、財団法人鳥取県教育文化財団が倉吉工事事務所より発掘調査の委託を受け、西部埋蔵文化財調査事務所が、平成2年4月より調査を開始した。

参考文献

『淀江の条里』 淀江町教育委員会 1978

『宇田川』 淀江町教育委員会 1981

『淀江町内遺跡発掘調査報告書』 淀江町埋蔵文化財調査報告書第14集 淀江町教育委員会 1989

第2節 発掘調査の経過

福岡遺跡の調査範囲については、試掘調査の結果をもとに鳥取県教育委員会と鳥取県埋蔵文化財センターが協議し、約20,000m²にわたる発掘調査面積が確定し、そのうち約17,000m²（第1区～第4区）を平成2年度、約3,000m²（第5区）を平成3年度に調査することを決定した。

これを受けて、西部埋蔵文化財調査事務所は、平成2年4月に福岡遺跡の発掘調査を開始した。低湿地のなか湧き水・雨水等の排水に留意しながら調査を進め、11月1日・12月11日にセスナ機を利用して調査後の航空写真撮影を行ない、12月27日には第1区～第4区までの発掘作業を終了した。引き続き、平成3年3月まではその整理作業を行なった。

平成3年4月より第5区の発掘調査にかかり、5月15日にはその発掘作業を終了した。続いて整理作業を終了し、前年度分（第1区～第4区）と併せて本報告書のまとめを行なった。



写真1 福岡遺跡全景（北西より）



掲図 1 福岡遺跡基準杭設定図

調査日誌抄

平成2年度

4月7日	B.M.確認・移動	11月1日	セスナ機による空撮
4月9日	発掘作業開始、重機稼動開始	11月5日	S K-421より布製品出土
4月19日	10mグリッド設定、杭打ち	11月19日	プラント・オパールサンプリング
4月21日	2区遺構検出開始	12月1日	現地説明会開催
5月7日	S D-01~03検出	12月13日	第2回セスナ機による空撮
5月21日	1区遺構検出開始	12月27日	平成2年度発掘作業終了
5月25日	1区排水用溝切り		
6月13日	1区全体写真撮影	4月9日	5区調査開始
6月29日	3区遺構検出開始	4月11日	重機稼動開始
7月5日	4・5区トレンチ設定	4月24日	S D-41・42検出
7月17日	S K-116堅杵出土	5月9日	調査後地形測量
7月30日	S X-01人骨出土	5月13日	全体写真撮影
8月23日	4区遺構検出開始	5月14日	杭列写真撮影
9月5日	4区pit群検出	5月15日	発掘調査終了
9月19日	台風により調査地水没		
9月28日	淀江中学校1年生発掘現場見学		

第3節 調査方法と体制

発掘調査範囲は低湿地であり、しかも水田地帯の中にあることから、湧き水・排水等に対する対策が重要となつた。軟弱地盤の為、安全勾配を確保しながら沈砂池・排水溝を掘り下げた。調査区内の湧き水は、沈砂池に集めてそのうわ水をポンプで排出した。また、調査区内に廃土の置き場がないことから、ダンプカーにより調査区外へ搬出した。

発掘調査は、まず、排水溝の断面を利用し調査区全域の土層状況を観察した。土層観察により、遺物包含層・遺構検出面を確認した後、重機を投入して、調査員の立ち会いのもと、遺物包含層の途中あるいは遺構検出面直上まで表土除去を行なった。その後、任意の基準線を基に10m単位でグリッドを設定しながら本調査にはいった。



写真2 調査参加者

調査主体 財団法人鳥取県教育文化財団

理事長 西尾邑次（鳥取県知事）

副理事長兼常務理事 坂田昭三

事務局長 若松良雄

財団法人鳥取県教育文化財団 鳥取県埋蔵文化財センター

所長 山根豊己（鳥取県教育委員会文化課長） 平成2年度

土井田憲治（鳥取県教育委員会文化課長） 平成3年度

次長 中島安一 平成2年度

山根豊己 平成3年度

庶務係長 中村金一（鳥取県埋蔵文化財センター庶務係長）

調査指導係長 田中弘道（鳥取県埋蔵文化財センター次長）

調査担当 財団法人鳥取県教育文化財団 西部埋蔵文化財調査事務所

所長 永原功

主任調査員 太田正康

調査員 佐藤隆文 平成3年度

原田雅弘

西川徹

加藤誠司 平成2年度

整理作業員 杉田千津子 桑崎知早子

整理作業参加者 左藤博 濵川友子

調査指導 鳥取県埋蔵文化財センター

調査協力 淀江町 淀江町教育委員会

発掘作業参加者（五十音順）

浅中雅彦、綾木秀子、安藤絹恵、安藤美代子、池島篤義、池島みやえ、井澤勇、石倉信子、井上みのり、岩本美保子、梅林幸子、遠谷勇、遠谷清子、遠藤進、遠藤和子、大塚和子、角野恵美子、門脇寿子、京久野春美、国頭秀行、国野吉久、国野キヨミ、幸形勝男、幸形砂恵子、越田民代、佐野利男、清水速水、須山たかこ、陶山幸子、陶山静恵、陶山幸子、閑とし子、竹本和子、種田のり子、高虫美智恵、田原恭吉、田原健吾、中嶋洋子、仲田茂子、中野亜子、中原浩子、中原八千代、長尾茂、西田恭子、西田美亜江、野口正道、野口英子、野坂悦子、野坂貞子、野崎喜美栄、橋本春子、花房幸子、吹田茂代、吹野房子、吹野雪乃、福原智寿子、細川砂子、本多ミチエ、松尾武、松賀文子、松田とし子、松原志津枝、松原園子、松山岩水、美島利至、三谷健之介、湊綾子、村岡美津子、村岡洋子、元次美恵子、森田清、森田愛子、森田キミエ、森田寿美枝、森田輝子、森田正子、諸遊泰知、山内玉江、山中敬太、山根武男、山本たつ子、八幡定己、吉岡初江、吉村淳子、渡辺郁子、渡辺幸子、渡辺達子、渡辺鶴子、渡辺幸子

整理作業員（五十音順）

伊藤恵美子、稻垣美智恵、岩田文章、神矢紀子、倉益和美、中本和子、野崎悦子、松岡朋子、山崎保子、山本清子、山本久美恵、米沢牧子

第2章 位置と環境

第1節 遺跡の位置

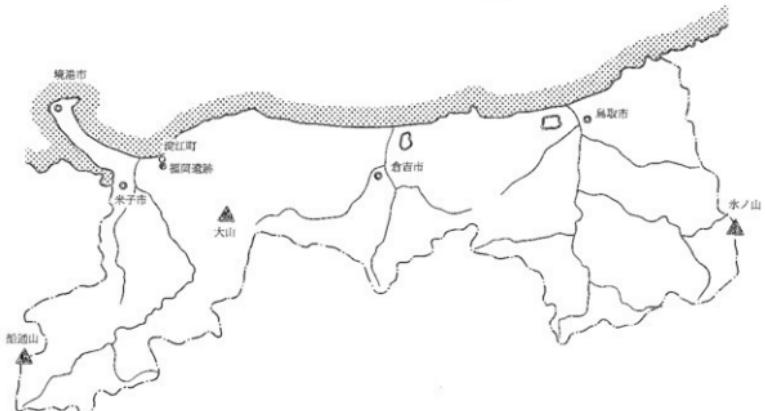
鳥取県は中国地方の日本海側に位置し、東部を兵庫県、西部を島根県、南部を岡山県・広島県にそれぞれ接している。県域は、古代には東部が因幡国、西部が伯耆国に該当する。地形的には三大河川によって東・中・西部の三地域に分けられる。東部を流れる千代川の下流域には、鳥取藩池田家三十二万五千石の城下町として発展し、現在は県庁所在地である鳥取市が位置している。中部を流れる天神川の中流域には、かつては伯耆国の大河原郡が置かれていた倉吉市が位置している。西部を流れる日野川の下流域には、「山陰の商都」と呼ばれる商業の町であり、交通の要衝として発展し続いている米子市が位置している。米子市の北側に延びる弓ヶ浜半島の突端部には、日本海側最大の漁業基地である港湾都市の境港市が位置している。鳥取県は、これらの4地域を中心に、39市町村よりなる。総面積は3,492.34km²であるが、75%は林野であり、生活圏は山間の谷部と海岸沿いに開けた沖積平野に展開している。人口は61万5,258人(平成3年10月1日現在)である。

淀江町

淀江町は中国山地最高峰を誇る大山(海拔1,711m)の北西麓に広がる淀江平野を中心とした日本海に面する町である。東側を大山町、西側を米子市に囲まれており、総面積は25.86km²、人口は9,162人(平成3年9月末現在)である。

福岡遺跡

福岡遺跡は、鳥取県西伯郡淀江町大字福岡に所在し、JR山陰本線の淀江駅より、県道坊領淀江停車場線を東に季羅山方向に約600m進んだ水田のなかにある。遺跡は扇状地の扇端部近くにあたり、淀江平野のほぼ中央部である。海拔3~9mの低地性の遺跡である。



拠図2 福岡遺跡位置図

第2節 歴史的環境

旧石器時代 淀江町の歴史は土器の発明使用以前の時代にまで遡ることができる。淀江町小波で黒曜石製のナイフ形石器、中西尾で黒曜石製の有舌尖頭器が出土している。周辺地域では、大山町坊領・莊田、名和町東坪・門前、米子市奈喜良、岸本町久古で、いずれもサヌカイト製の有舌尖頭器が発見されている。これらの石器を含めて、鳥取県内各地で旧石器時代～縄文時代草創期にかけての遺物は出土しているが、現在までのところ遺跡の確認にはいたっていない。

縄文時代 淀江町内の縄文時代の代表的な遺跡としては鮒ヶ口遺跡⁽¹⁾・河原田遺跡⁽¹⁾の2遺跡があげられる。鮒ヶ口遺跡では、前期に位置付けられる爪形文土器・条痕文土器、九州の曾畠式土器や多数の石器等が出土しており、河原田遺跡では、後期～晩期に位置付く磨消縄文土器・沈線文土器・無文土器や石器等が出土している。その他に壺瓶山第1遺跡・井手挾遺跡においても縄文時代の土器あるいは遺構が検出されているがまとまった資料にはなっていない。今後周辺遺跡の調査が期待される。

周辺地域をみると、大山町では、大道原・莊田・蔵洞第1・塙田遺跡より早期の押型文土器が出土しており、前期の中高遺跡・後期～晩期の別所遺跡・块状耳飾りが出土した長田第11遺跡(松尾頭遺跡)が知られている。米子市では、早期の上福万遺跡・早期末～後期の陰田第7遺跡・前期～晩期の目久美遺跡に代表される多くの遺跡が確認されている。

弥生時代 弥生時代になると確認される遺跡数も増加する。前期の遺跡として、今津岸の上遺跡⁽²⁾があげられる。最近の発掘調査で、長径約135mと推定されるV字状環濠が検出されており、弥生時代の集落形成を知るうえで貴重な遺跡である。

中期の遺跡としては、晚田遺跡⁽¹⁾・角田遺跡⁽¹⁾等が知られるが、角田遺跡では発掘調査により線刻絵画土器が発見されており非常に注目される。大型の壺の頸部に、太陽・舟と舟を漕ぐ人・建物2棟・樹木・鹿が描かれ、弥生時代の生活様式を知る大きな手がかりとなる重要な資料である。さらに、弥生時代において、海上交通が文化発展に決定的影響を与えることを考えると、淀江町内でこの絵画土器が出土したことの意味は大きい。

後期の遺跡としては、百塚第1遺跡・楚利遺跡・井手挾遺跡・坂ノ上遺跡等が確認されている。弥生時代の集落遺跡は、今後の調査によりその数がかなり増加するであろう。

古墳時代 周辺地域と比較して、淀江町の特殊性があらわるのがこの古墳時代である。淀江町内の丘陵上には数多くの古墳群が存在する。晚田・小枝山・城山・向山・瓶山・稻吉・高井谷・中西尾・西尾原・百塚・壺瓶山・中間・小波古墳群がそれである。

現在確認されている町内最古の古墳は、小枝山古墳群中の上の山古墳⁽³⁾(中期前半)である。天神垣神社の裏山にあり、円筒埴輪・形象埴輪・葺石・主体部の竪穴式石室2基が確認された。第1石室からは、三角板革緩短甲片・衝角付骨片等、第2石室からは、滑石製小勾玉・小玉が500個以上出土しており、石室も現存する貴重な古墳である。中期後半の古墳として向山3号墳・坂ノ上1号墳(中間古墳群)が知られるが、前期～中期の古墳造営については未解明部分が多い。

後期になると、向山古墳群中に向山4号墳・長者ヶ平古墳・岩屋古墳・小枝山古墳群中に小枝山12号墳・石馬谷古墳といった大型前方後円墳が築かれる。長者ヶ平古墳⁽⁴⁾では、県内唯一の出土例である金銅製冠や環頭大刀・三輪玉・銅鈴等が発見されている。また、本州唯一の石馬は、石馬谷古墳より出土したという伝承もあり、淀江町における古墳文化の特殊性を示すものである。石馬は、九州の福岡県八女市にある岩戸山古墳でも出土しており、その関連性については今後さらに検討されるであろう。

首長墓として大型前方後円墳が築かれる一方、家族墓の性格を持つ小型古墳が群集墳として営まれるのも後期の様相である。上述した古墳群の調査が進めば、群集墳を造営した各集落の相関等、その

実態が明らかになるであろう。

古墳時代の聚落遺跡をあげると、前期は百塚第1遺跡・井手挿遺跡、中期は百塚第1遺跡・百塚第4遺跡・百塚第5遺跡・百塚第6遺跡、後期は福頤遺跡・百塚第1遺跡・百塚第4遺跡・百塚第5遺跡等が確認されている。

歴史時代 最近の発掘調査により、日本最古級の彩色壁画が出土し全国の注目を集めた上淀廃寺がまずあげられる。白鳳期の仏教壁画の存在が確認されたのは、現存する奈良県法隆寺の壁画に次いで全国で2例目であり、発掘調査により出土したのは初めてである。この発見によって、壁画が描かれた時代・壁画を描いた絵師・上淀廃寺と法隆寺の相關等、多くの重要な課題が与えられたといえる。

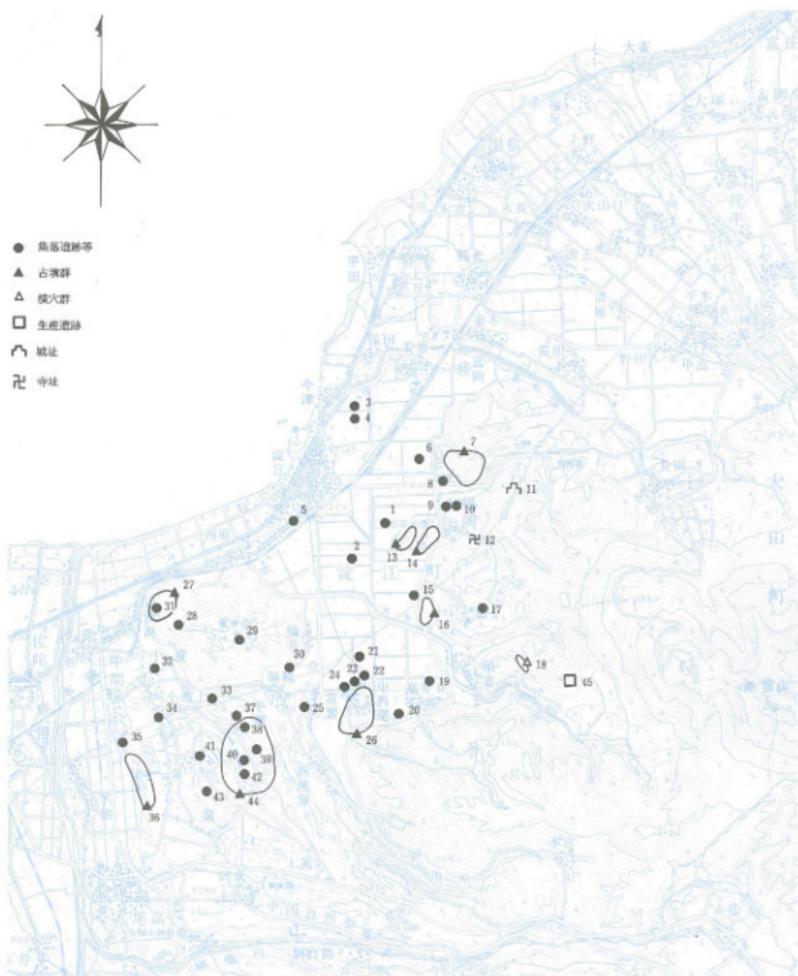
平安時代になると、鳥取県西部地区には伯耆6郡のうち汗入・会見・日野の3郡が置かれ、淀江町のほとんどは汗入郡に属し、一部会見郡に含まれる。汗入郡は、現在の中山町・名和町・大山町・淀江町が該当し、郡衙は汗入郷にあったと推定されるがその位置は不明である。会見郡は、現在の淀江町の一部・米子市・境港市・西伯町・会見町・日吉津村・岸本町が該当し、岸本町の長者屋敷遺跡が会見郡衙ではないかと考えられている。

国・郡・里の行政制度が確立した後、淀江平野には条里制地割の土地制度が施行される。淀江平野の条里制については現在の土地地割にもその形を若干残すが、昭和50年～55年にかけて土地改良工事に伴う条里の発掘調査⁽²⁾⁽⁶⁾が行なわれ、石列・杭列等による土地区画が確認されている。

淀江町内における生産遺跡の調査はまだまだこれからであるが、楚利遺跡⁽¹⁾では平安時代の鍛冶跡が確認され、他には大蓋原たたら・金くそ谷たたらの存在が知られている。⁽⁷⁾

註

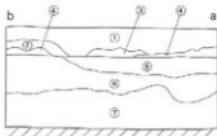
- (1)『宇田川』 淀江町教育委員会 1981
- (2)『淀江町内遺跡発掘調査報告書II』 淀江町埋蔵文化財調査報告書第18集 淀江町教育委員会 1990
- (3)『淀江町誌』 淀江町 1985
- (4)『向山古墳群』 淀江町埋蔵文化財発掘調査報告書第17集 淀江町教育委員会 1990
- (5)『淀江条里遺構地域緊急調査報告書』 淀江町教育委員会 1976
- (6)『淀江の条里』 淀江町教育委員会 1978
- (7)『鳥取県生産遺跡分布調査報告書』 鳥取県教育委員会 1984



1 福岡道路 2 手挽道跡 3 今津岸の上道跡 4 今津埋田道跡 5 川向道跡 6 安原訊尻道跡 7 梶田古墳群 8 梶田道路 9 宮廻り道跡
 10 楠利道跡 11 北原城址 12 上淀寺跡 13 櫛山古墳群 14 南山古墳群 15 小伏山古墳群 16 鳴山古墳群 17 駒ヶ道跡 18 四十九谷燒穴跡
 19 角田道跡 20 高谷道跡 21 斑ヶ口道跡 22 河原田道跡 23 中西尾道跡 24 手挽道跡 25 宮紫道跡 26 西尾古墳群 27 佐原山古墳群
 28 唐船山第1道跡 29 壱岐川第2道跡 30 壱岐山第3道跡 31 壱岐山第4道跡 32 小伏道跡 33 大下細道跡 34 原田道跡 35 横ノ上道跡
 36 中間古墳群 37 百原第1道跡 38 百原第2道跡 39 百原第3道跡 40 百原第4道跡 41 百原第5道跡 42 百原第6道跡 43 百原第7道跡
 44 有原古墳群 45 大糸原たたら

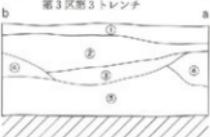
挿図3 周辺遺跡分布図

H=8.70m 第4区第1トレンチ



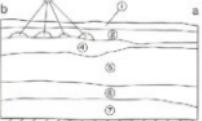
- ①茶褐色粘質土
- ②黄灰色粘質土
- ③黄褐色粘質土
- ④灰白色粘質土 (砂少量混)
- ⑤青灰色粘質土 (灰褐色砂礫混)
- ⑥青灰褐色粘質土 (砂少量混)
- ⑦灰褐色砂礫

H=6.70m



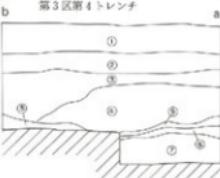
- ①黄褐色砂礫
- ②灰褐色砂礫 (灰褐色粘質土少量混)
- ③灰褐色砂礫 (黄褐色砂礫混)
- ④灰状灰褐色粘質土 (砂少量混)
- ⑤灰褐色砂礫

H=7.70m 第4区第2トレンチ



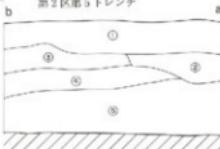
- ①茶褐色粘質土
- ②灰褐色粘質土
- ③青褐色粘質土
- ④灰褐色粘質土 (砂少量混)
- ⑤青灰色粘質土 (灰褐色砂礫混)
- ⑥灰褐色粘質土 (砂少量混)
- ⑦茶褐色砂礫

H=6.20m



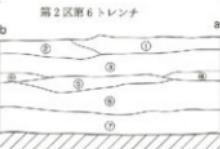
- ①茶褐色粘質土
- ②青灰色粘質土 (砂少量混)
- ③青灰色粘質土 (灰褐色砂礫少量混)
- ④灰褐色砂礫
- ⑤青灰色粘質土
- ⑥青褐色粘質土
- ⑦浅褐色砂礫

H=4.70m



- ①灰褐色粘質土 (灰褐色砂礫少量混)
- ②青褐色粘質土
- ③灰褐色砂礫 (灰褐色粘質土混)
- ④青灰色粘質土
- ⑤灰褐色砂礫

H=4.20m

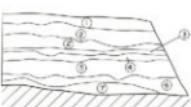


- ①灰褐色粘質土 (黄褐色砂礫少量混)
- ②灰褐色粘質土 (黄褐色砂礫混)
- ③青褐色粘質土 (灰褐色粘質土混)
- ④青褐色粘質土
- ⑤灰褐色砂礫
- ⑥青褐色粘質土 (③より疊がり)
- ⑦灰褐色砂礫

S = 1 : 100

図4 地層観察土層断面図

H=4.20m 2区サンプリング土層断面



- ①暗褐色粘質土 (耕土)
- ②黄褐色粘質土 (黄褐色土ブロック多量混) (客土)
- ③青灰色粘質土 (黄褐色土ブロック混) (客土)
- ④灰褐色砂
- ⑤茶褐色粘質土 (灰褐色・黒褐色土混)
- ⑥青褐色粘質土 (灰色土・黒褐色粘質土少量混)
- ⑦灰褐色粘質土

H=7.70m 4区サンプリング土層断面

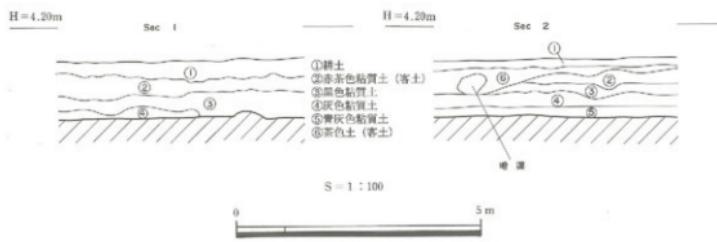
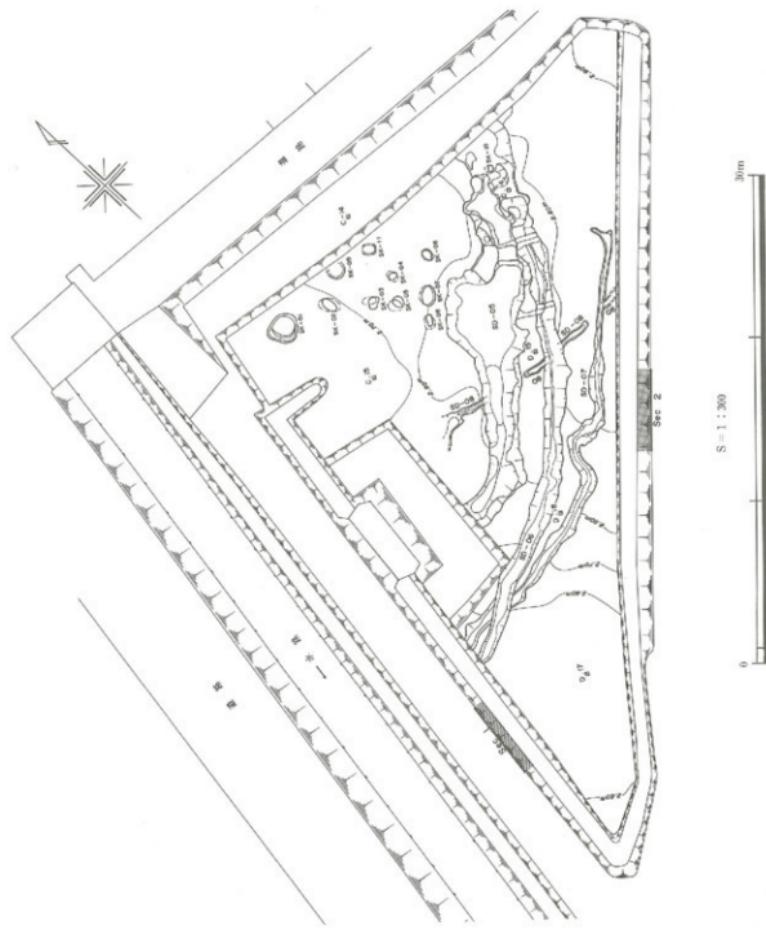


- ①茶褐色粘質土 (灰色粘質土・褐色砂少量混)
- ②茶褐色粘質土 (褐色砂多量混)
- ③灰白色粘質土
- ④明黄褐色シルト (AT)
- ⑤暗灰褐色砂
- ⑥灰褐色粘質土

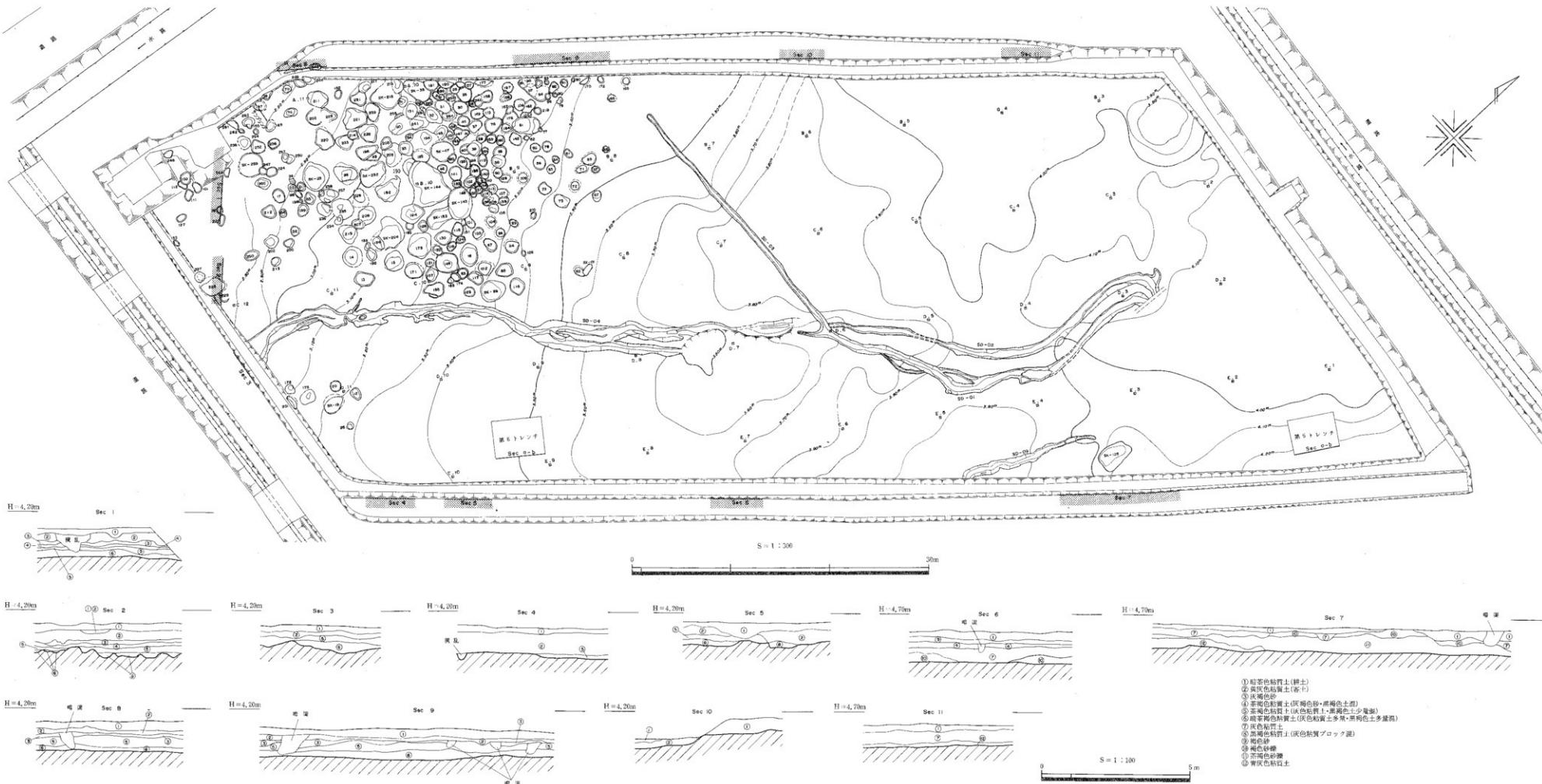
S = 1 : 80

4 m

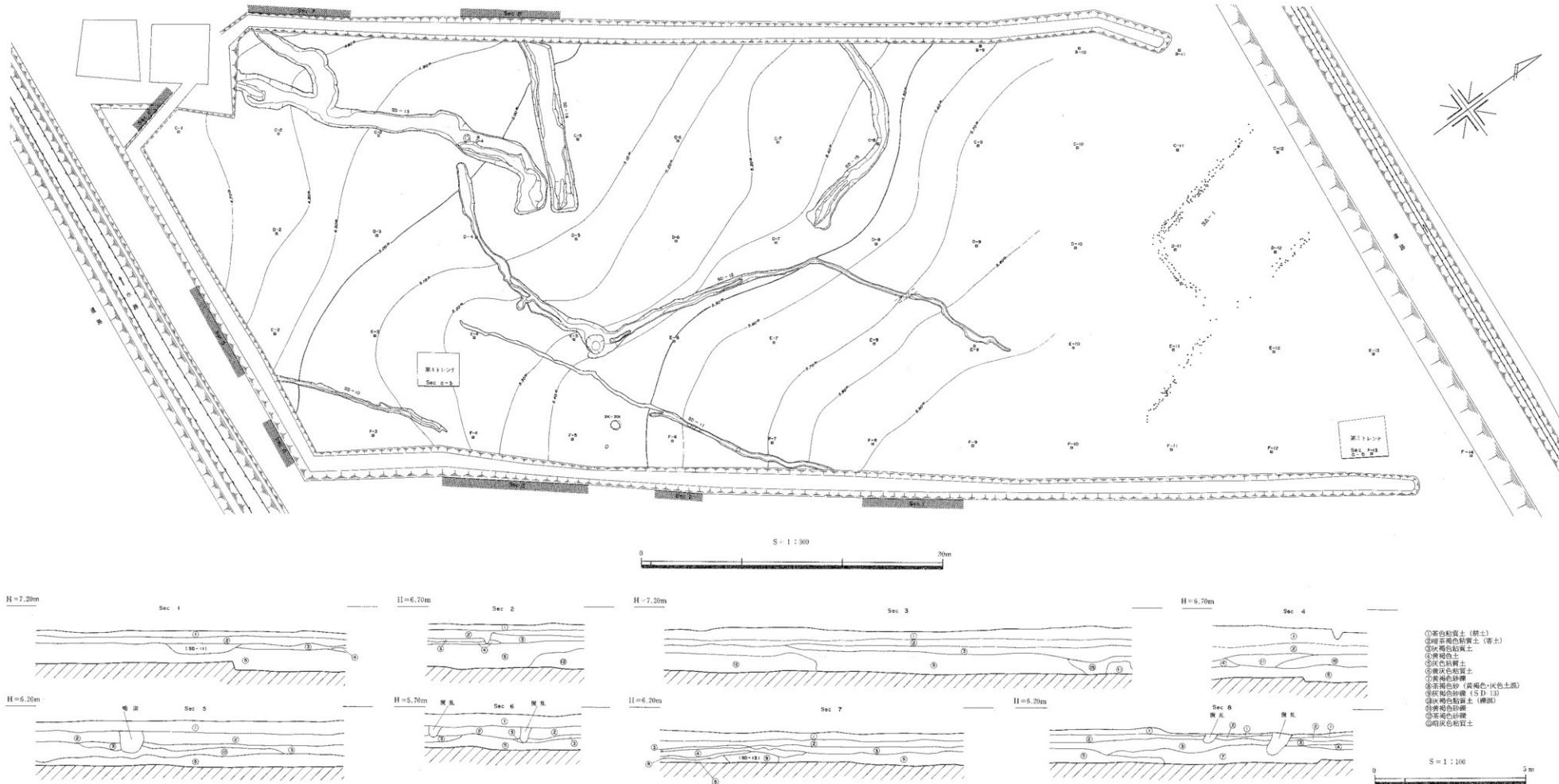
図5 サンプリング土層断面図



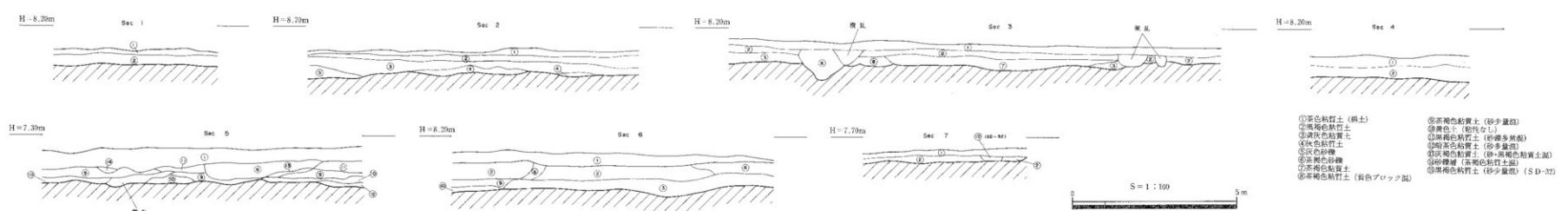
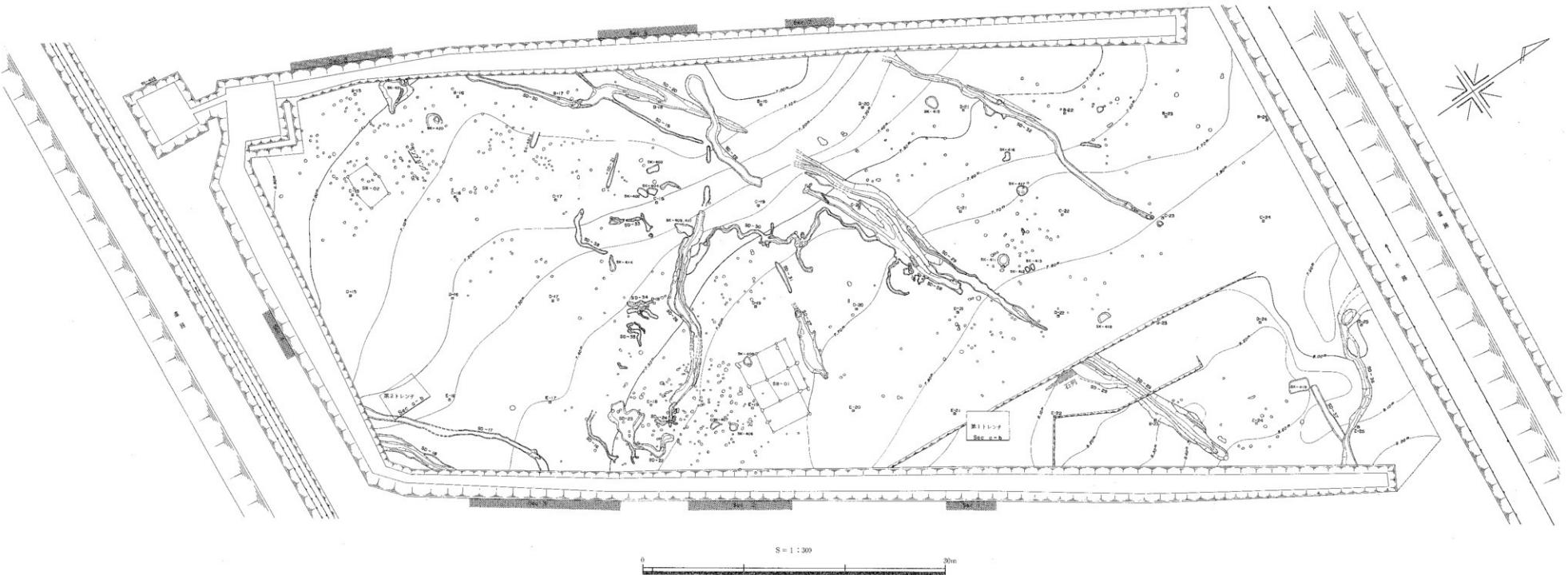
插図 6 1区遺構配置図・土層断面図



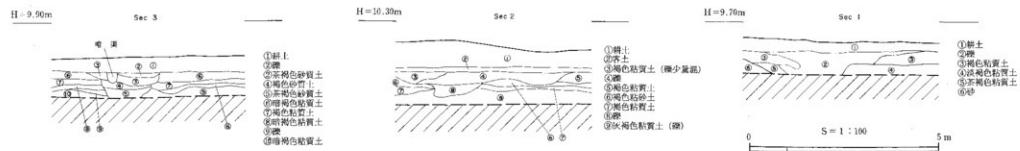
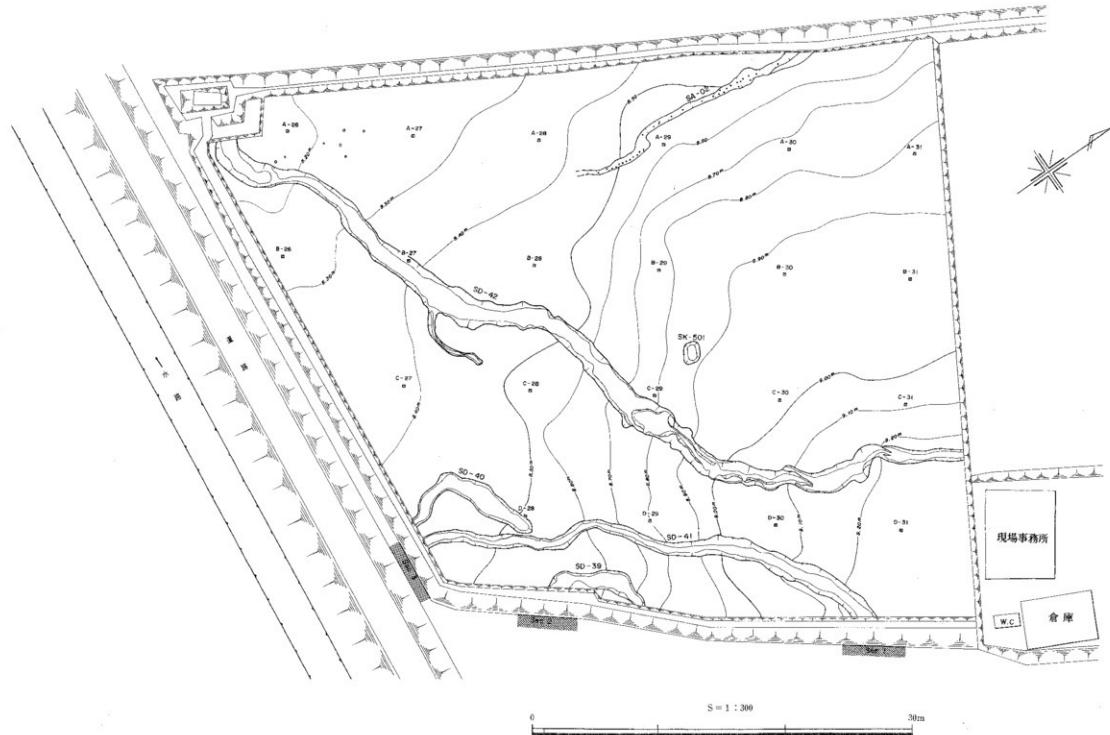
挿図 7 2区遺構配置図・土層断面図



挿図 8 3区造構配置図・土層断面図



挿図9 4区遺構配置図・土層断面図



插図10 5区造構配置図・土層断面図

第3章 遺構

第1節 弥生時代の遺構

福岡遺跡のなかで弥生時代の遺構と考えられるものは、1・2区から検出された溝と土坑である。

溝は、自然の小河川と考えられるものと、人工的なものの2つに大別される。前者は、北東から南西へ走向し、南西先端で東へ曲がる。これに対し、後者はほぼ東から西へ走向し、東側先端で前者と接する。

これらの溝に区画されるような位置を中心として、264基の土坑が存在する。これらの土坑の多くは弥生時代に属すると考える。時期的には弥生時代中期後葉頃であり、土坑間に時期差はあまりないと見られ、短期間にこれらの土坑群が形成されたのであろう。

1. 土 坑

S K-01 (挿図11)

位 置 B14グリッドの中央部に位置する。坑底標高は2.50mを測る。

形 態 平面形は円形、底面形は梢円形、断面形は不定形である。壁の立ち上がりは外傾する。検出面での規模は(0.97×0.93-0.28m)で、底面の凹凸が明瞭である。

土 層 埋土は①～⑥層である。②・③・④・⑥層には灰色粘質土がブロック状に混じる。

S K-02 (挿図11)

位 置 B14グリッドの東部に位置する。坑底標高は2.14mを測る。

形 態 平面形、底面形共に梢円形で、断面形は袋状を呈する。壁の立ち上がりは内傾する。検出面での規模は(0.96×0.50-0.50m)である。底面の凹凸は比較的目立たない。

土 層 埋土は①～⑤層で、ほぼ水平に堆積する。

遺 物 埋土中より土器胴部片、木片が出土した。

時 期 出土遺物より弥生時代と考える。

S K-03 (挿図11)

位 置 C14グリッドの西部に位置する。坑底標高は1.98mを測る。

形 態 平面形、断面形は不定形、底面形は梢円形である。壁の立ち上がりは、東側で外傾、西側で内傾する。検出面での規模は(0.72×0.64-0.48m)で、底面は平坦である。

土 层 埋土は①～⑤層である。

S K-04 (挿図11)

位 置 C14グリッド西部に位置し、坑底標高は2.40mを測る。

形 態 平面形、底面形共に梢円形である。断面形は袋状を呈する。壁の立ち上がりは内傾する。検出面での規模は(0.52×0.43-0.37m)で、底面は平坦に近い。

土 层 埋土は①～④層である。③層には粘質土がブロック状に混じる。

S K-05 (挿図11・100 図版30)

位 置 C11グリッドに位置する。坑底標高は2.10mを測る。

形 態 平面形、底面形は梢円形、断面形は不定形である。壁の立ち上がりは、東側で外傾、西側で内傾する。検出面での規模は(0.72×0.55-0.60m)である。

土 层 埋土は①～⑩層である。⑨層は、灰色粘質土ブロック層である。①層は、炭が混じる。④層は、炭化植物遺体が薄く層状に入る。

遺 物 土坑上部より弥生土器P o 1が出土した。土器は、底部から胴下部が復元された。

時 期 出土遺物より弥生時代前期と考える。

S K-06 (挿図11・100 図版30)

位置 C14グリッド中央付近に位置する。坑底標高は2.20mを測る。

形態 平面形、断面形共に不定形である。底面形は梢円形を呈する。壁の立ち上がりは、西側で内傾、東側で外傾する。東側壁は、底面から内傾しながら立ち上がり、中段から外傾する。検出面での規模は($0.79 \times 0.54 - 0.53$ m)で、底面には僅かに凹凸がある。

土層 埋土は①～④層である。②層には植物遺体(イネ科の雑草?)が混じる。

遺物 土器底部片Po2が出土した。S K-08出土土器片と接合する。

時期 出土遺物より弥生時代前期と考える。

S K-07 (挿図12)

位置 C14グリッドの中央部に位置する。坑底標高は2.05mを測る。

形態 平面形、底面形共に梢円形で、断面形は不定形である。壁の立ち上がりは外傾する。底面近くで壁面が外側に張り出すのが大きな特徴である。検出面での規模は($1.80 \times 1.31 - 0.69$ m)で、底面はほぼ平坦である。

土層 埋土は①～⑥層である。④層には炭化植物遺体が混じる。

S K-08 (挿図12・100 図版30)

位置 C14グリッド南に位置する。坑底標高は2.20mを測る。

形態 平面形、底面形共にひょうたん形である。断面形は袋状である。壁の立ち上がりは、北東部で直立、他は内傾する。検出面での規模は($0.67 \times 0.33 - 0.59$ m)である。

土層 埋土は①～④層である。④層は、青灰色粘質土がブロック状に混じる。①・②層は、炭が混じる。

遺物 土坑上部より、弥生土器胴部片が出土した。この土器は、S K-06の出土土器Po2と接合し、底部から胴下部を復元した。

時期 出土遺物より弥生時代前期と考える。

S K-09 (挿図12)

位置 B14グリッドの東部に位置する。坑底標高は2.13mを測る。

形態 平面形、底面形共に不定形で、断面形は不明である。壁の立ち上がりは、残存部を見る限り外傾する。検出面での規模は($不明 \times 1.39 - 0.54$ m)である。

土層 埋土は①～⑧層である。

S K-11 (挿図12)

位置 C14グリッド北西隅に位置する。坑底標高は2.43mを測る。

形態 平面形、底面形、断面形はいずれも不定形である。壁の立ち上がりは外傾する。検出面での規模は($1.55 \times 1.14 - 0.55$ m)である。

土層 埋土は①～⑤層である。⑤層には粘質土がブロック状に混じる。

S K-12 (挿図12)

位置 D10グリッドの南西隅に位置する。坑底標高は2.67mを測る。

形態 平面形、底面形共に梢円形である。断面形は逆梯形である。壁の立ち上がりは、北東部分で直立気味に内傾するが、他の箇所では外傾する。検出面での規模は($1.09 \times 0.90 - 0.56$ m)で、底面中央部分は少し壅む。

土層 埋土は①～⑥層である。④・⑤層には粘質土がブロック状に混じる。

S K-13 (挿図13)

位置 B10グリッドの南部に位置する。坑底標高は2.97mを測る。

形態 平面形、底面形、断面形いずれも不定形である。壁の立ち上がりは内傾するが、南側では直立気味である。検出面での規模は($1.96 \times 1.24 - 0.41$ m)で、底面は凹凸が明瞭である。

土 層	埋土は①～⑥層である。②層には炭片、⑤層には粘質土ブロックが混じる。
S K-14	(挿図13・118 図版5・39)
位 置	B14グリッドの南東隅に位置する。坑底標高は2.31mを測る。
形 態	平面形、底面形共に円形である。断面形は不定形である。壁の立ち上がりは、西側で外傾し、他は内傾する。検出面での規模は(1.65×1.62-0.48m)である。
土 層	埋土は①～⑤層である。
遺 物	埋土中より棒状木製品W1が出土した。
S K-15	(挿図15・100)
位 置	B10グリッド北東部に位置する。坑底標高は2.83mを測る。
形 態	平面形、底面形、断面形いずれも不定形である。壁の立ち上がりは、南・北側で内傾、東・西側で外傾する。検出面での規模は(0.95×0.75-0.28m)で、底面は凹凸が明瞭である。
土 層	埋土は①～⑦層である。
遺 物	甕片Po3が出土した。S K-143出土土器片と接合する。
時 期	出土遺物より弥生時代中期後葉と考える。
S K-16	(挿図13・100 図版30)
位 置	B9グリッド東に位置する。坑底標高は2.71mを測る。
形 態	平面形、底面形共に楕円形である。断面形は不定形である。壁の立ち上がりは、北東側で内傾、他は外傾する。検出面での規模は(2.31×1.69-0.48m)である。
土 層	埋土は①～⑩層である。
遺 物	土坑南西上部より、甕Po4が出土した。甕は口縁部から胴部を復元した。
時 期	出土遺物より弥生時代中期後葉と考える。
S K-17	(挿図14・100)
位 置	A11グリッド東に位置する。坑底標高は2.61mを測る。
形 態	平面形、底面形、断面形はいずれも不定形である。壁の立ち上がりは、北～東～南東部分で外傾し、その他は内傾する。検出面での規模は(1.32×1.08-0.30m)である。
土 層	埋土は①～⑥層である。②・③層は黄白色粘質土、⑤層は黄白色・灰色粘質土が、それぞれブロック状に混じる。
遺 物	埋土中より甕口縁部・胴部Po5が出土した。甕はS K-212出土土器と接合し、口縁部から胴下部まで全体の3分の1が復元できた。
時 期	出土遺物より弥生時代中期後葉と考える。
S K-19	(挿図15・100・120 図版30・40)
位 置	D11グリッド北西隅に位置する。坑底標高は2.70mを測る。
形 態	平面形、底面形は楕円形である。断面形は不定形である。壁の立ち上がりは東～南東部で外傾しその他は内傾する。検出面での規模は(2.12×1.53-0.47m)で、底面中央部に(113×100-37cm)を測る窪みがある。
土 層	埋土は①～⑦層である。①層は褐色・黄褐色粘質土、③層は灰色・淡灰色粘質土、⑤層は灰色・黒褐色・褐色粘質土、⑥層は褐色粘質土が、それぞれ各層にブロック状に混じる。
遺 物	埋土中より甕口縁部から胴下部片Po6と底部Po7が出土した。甕は、全体の3分の1が復元された。埋土中より棒状木製品(柄)W2が出土した。
時 期	出土遺物より弥生時代と考える。
S K-20	(挿図16・101 図版30)
位 置	C11グリッド北東隅に位置する。坑底標高は2.75mを測る。

形態	平面形、底面形共に円形、断面形は不定形である。壁の立ち上がりは、北と南東～南が外傾し、東と西が内傾する。検出面での規模は（ $1.22 \times 1.12 - 0.34m$ ）である。
土層	埋土は①～⑤層である。①層は、灰色粘質土がブロック状に混じる。②層と③層の間に炭層が入る。
遺物	埋土中より壺の口縁部片 Po 8 が出土した。
時期	出土遺物より弥生時代中期後葉と考える。
S K-23	(挿図16・101 図版30)
位置	A 11グリッド北東隅に位置する。S K-23と切り合い、出土遺物により、S K-23がS K-23より古い。坑底標高は2.63mを測る。
形態	平面形、底面形共に不定形、断面形は皿状である。壁の立ち上がりは外傾する。検出面での規模は（ $3.08 \times 2.74 - 0.33m$ ）で、土坑底面中央に（ $34 \times 22 - 55cm$ ）を測るピットがある。
土層	埋土は①～④層である。③・④層には、灰褐色粘質土がブロック状に混じる。
遺物	土坑底面近くで弥生土器の底部から胴上部 Po 9 が出土した。
時期	出土遺物より弥生時代中期後葉と考える。
S K-24	(挿図14・101 図版5・30)
位置	A 11グリッド北西隅に位置し、S K-18と切り合う。坑底標高は2.71mを測る。
形態	平面形、底面形、断面形いずれも不定形である。壁の立ち上がりは外傾する。検出面での規模は（不明× $0.43 - 0.11m$ ）である。
土層	埋土は③～⑦層の5層である。このうち③層は、砂粒が混じる。なお、S K-18と切り合う部分があるが、切り合い関係はつかめなかった。
遺物	土坑上面より甕の口縁部から底部 Po 10 が出土し、全体の2分の1を復元した。
時期	出土遺物より弥生時代中期後葉と考える。
S K-25	(挿図17)
位置	D 10グリッドの南部に位置する。坑底標高は2.75mを測る。
形態	平面形は円形、底面形は梢円形、断面形は不定形である。壁の立ち上がりは、南側一部分で内傾し、他は外傾する。検出面での規模は（ $0.71 \times 0.70 - 0.38m$ ）で、底面はやや凹凸がある。
土層	埋土は①～⑥層である。②・③層には炭片が少量混じる。
S K-28	(挿図17・101 図版30)
位置	A 9グリッド西に位置し、S K-26・179・180と切り合い、土層断面より、S K-26がS K-28を切る。坑底標高は2.80mを測る。
形態	平面形、底面形共に円形である。断面形は不定形である。壁の立ち上がりは内傾する。検出面での規模は（ $0.96 \times 0.86 - 0.26m$ ）である。
土層	埋土は①・②層である。①層には灰色・褐色粘質土、②層には灰色粘質土が、それぞれブロック状に混じる。
遺物	土坑上部より壺の口縁部片 Po 11 が出土した。
時期	出土遺物より弥生時代中期後葉と考える。
S K-30	(挿図18・101 図版30)
位置	A 9グリッド西に位置し、土層断面より、S K-30がS K-26に切られる。坑底標高は2.67mを測る。
形態	平面形は円形、底面形、断面形は不定形である。壁の立ち上がりは、南東部でわずかに外傾するが、その他はすべて内傾する。検出面での規模は（ $1.60 \times 1.28 - 0.44m$ ）である。
土層	埋土は①～③層である。いずれの層にも灰色粘質土がブロック状に混じる。
遺物	埋土中より壺の口縁部片 Po 12 と底部 Po 13 が出土した。
時期	出土遺物より弥生時代中期後葉と考える。

S K-32 (挿図18・120)

位 置 A 9 グリッド南西隅に位置し、土層断面より、S K-32はS K-241・251を切る。坑底標高は2.62mを測る。

形 態 平面形、底面形共に楕円形、断面形は不定形である。壁の立ち上がりは、東側で直立する部分があるが、大半は内傾する。検出面での規模は（1.99×1.42-0.46m）である。

土 層 埋土は①～⑫層である。このうち、①・④・⑤・⑨層には灰色粘質土が、③・⑩層には褐色粘質土が、いずれもブロック状に混じる。

遺 物 埋土中より剣部片が出土した。土坑底面直上より木製品W 3 が出土した。

S K-33 (挿図19・101 図版6・30)

位 置 A 10 グリッド北に位置し、S K-34・154・203と切り合い、土層断面より S K-208を切る。坑底標高は2.42mを測る。

形 態 平面形は円形、底面形、断面形は共に不定形である。壁の立ち上がりは外傾する。検出面での規模は（1.48×1.45-0.69m）である。

土 層 埋土は①～③層である。このうち②層は、灰色粘質土がブロック状に混じる。

遺 物 埋土中より甕Po14・15と底部Po16が出土した。甕は、いずれも口縁部から胸部を復元した。

時 期 出土遺物より弥生時代中期後葉と考える。

S K-35 (挿図20・101・102・120・123 図版6・40)

位 置 A 9 グリッド南東隅に位置し、S K-42・181・225と切り合う。このうち、土層断面より S K-35はS K-42・181に切られる。坑底標高は2.65mを測る。

形 態 平面形、底面形、断面形はいずれも不定形である。壁の立ち上がりは、南東部のみ内傾するが、その他のは外傾する。検出面での規模は（2.97×不明-0.29m）である。

土 層 埋土は①～⑥層である。①・②層は灰色粘質土が、④層は灰色・褐色粘質土が、それぞれブロック状に混じる。

遺 物 埋土中より、甕Po17・18・19と底部Po20が出土した。また、埋土中より杭W 4 、底面より棒状木製品W 5 が出土した。

時 期 出土遺物より弥生時代中期後葉と考える。

S K-37 (挿図19)

位 置 A 9 グリッド中央部に位置し、土層断面より S K-44を切る。坑底標高は2.73mを測る。

形 態 平面形、底面形共に楕円形で、断面形は不定形である。壁の立ち上がりは、北東部で直立気味に外傾するが、他では内傾する。検出面での規模は（1.47×0.98-0.38m）で、底面には凹凸が目立つ。

土 層 埋土は①～⑥層である。①層には粘質土がブロック状に混じる。

遺 物 土器胴部片が出土した。

時 期 出土遺物より弥生時代と考える。

S K-39 (挿図21 図版6)

位 置 A 9 グリッド中央部に位置し、S K-38・40と切り合う。坑底標高は2.16mを測る。

形 態 平面形、底面形共に楕円長方形で、断面形は不定形である。壁の立ち上がりは外傾する。検出面での規模は（1.42×1.14-0.78m）で、底面の凹凸は明瞭である。

土 層 埋土は①～④層である。①・②層には粘質土がブロック状に混じる。

S K-40 (挿図21 図版7)

位 置 A 9 グリッド中央部に位置し、S K-39と切り合う。坑底標高は2.73mを測る。

形 態 平面形、底面形共に楕円形で、断面形は不定形である。壁の立ち上がりは内傾する。検出面での規模は（1.11×0.80-0.44m）で、底面には凹凸が目立つ。

土 層 埋土は①～④層である。①層には粘質土がブロック状に混じる。③層は植物遺体層である。

S K -43 (挿図21)

位 置 A 9 グリッド中央部に位置し、S K-147と切り合う。坑底標高は2.63mを測る。

形 態 平面形は楕円形、底面形、断面形は不定形である。壁の立ち上がりは、東側で内傾するが、他では外傾する。検出面での規模は(0.85×0.48-0.54m)で、底面には凹凸が目立つ。

土 層 埋土は①～③層である。①・③層には粘質土がブロック状に混じる。

遺 物 土器胴部片が出土した。

時 期 出土遺物より弥生時代と考える。

S K -44 (挿図22・102 図版30)

位 置 A 9 グリッド中央部に位置し、土層断面より S K-37に切られる。坑底標高は2.69mを測る。

形 態 平面形は円形、底面形は楕円形、断面形は不定形である。壁の立ち上がりは、北側で内傾、南側で外傾する。検出面での規模は(1.31×1.19-0.45m)である。

土 層 埋土は①～⑤層である。

遺 物 埋土中より、甕 Po23・24・25の3個体が出土した。Po23は口縁部から底部まで全体の2分の1を復元、Po24は口縁部から胴上部を復元し、Po25は口縁部である。

時 期 出土遺物より弥生時代中期後葉と考える。

S K -45 (挿図22・102 図版7・30)

位 置 A 9 グリッド中央部に位置する。坑底標高は2.69mを測る。

形 態 平面形、底面形共に楕円形、断面形は袋状を呈する。壁の立ち上がりは内傾する。検出面での規模は(1.22×0.89-0.29m)である。

土 層 埋土は①～③層である。③層は植物遺体層である。

遺 物 埋土中より甕 Po26・27と底部Po28が出土した。

時 期 出土遺物より弥生時代中期後葉と考える。

S K -47 (挿図23・103・118 図版7・39)

位 置 A 9 グリッド南東隅に位置し、S K-150・154と切り合う。このうち S K-150は、土層断面より S K-47を切る。坑底標高は2.75mを測る。

形 態 平面形は楕円形、底面形、断面形は不定形である。壁の立ち上がりは、西と南東部で外傾し、その他は内傾する。検出面での規模は(2.56×2.02-0.38m)である。

土 層 埋土は①～⑥層である。

遺 物 土坑中央上部より甕 Po29・30が出土した。Po29は、完形に復元した。Po30は、口縁部である。

土器は S K-15・47出土土器と接合した。土坑底面直上より棒状木製品W 6がほぼ完形で出土した。

時 期 出土遺物より弥生時代中期後葉と考える。

S K -50 (挿図25・103・121・126 図版8・36・40)

位 置 A 10 グリッド北に位置し、土層断面より、S K-225を切り、S K-191・241に切られる。坑底標高は2.43mを測る。

形 態 平面形、底面形は楕円形、断面形は不定形である。壁の立ち上がりは、東～南で外傾、西では底面から外傾しながら立ち上がり、検出面近くで内傾する。検出面での規模は(不明×1.52-0.60m)である。

土 層 埋土は①～④層である。④層は、灰色・褐色・黒褐色粘質土がブロック状に混じる。

遺 物 埋土中より甕 Po32・33が出土した。土坑東部肩より石錐S 1、底面直上より剣状木製品W 7が出土した。

時 期 出土遺物より弥生時代中期後葉と考える。

S K-51 (挿図24・103)

位置 A10グリッド北東隅に位置する。坑底標高は2.73mを測る。

形態 平面形、底面形、断面形はいずれも不定形である。壁の立ち上がりは外傾する。検出面での規模は $(1.06 \times 0.96 - 0.22\text{m})$ である。

土層 埋土は①層である。灰色・灰褐色・褐色粘質土がブロック状に混じる。

遺物 検出面上部より甕の口縁部片P-o34が出土した。

時期 出土遺物より弥生時代中期後葉と考える。

S K-53 (挿図26・121 図版8・40)

位置 B 8グリッド西に位置する。坑底標高は2.88mを測る。

形態 平面形、底面形共に楕円形で、断面形は不定形である。壁の立ち上がりは、南東部で内傾、他は外傾する。検出面での規模は $(0.97 \times 0.84 - 0.50\text{m})$ である。

土層 埋土は①～⑦層である。

遺物 土坑底面直上より木製品W 8が2本重なった状態で出土した。

S K-55 (挿図24)

位置 A 8グリッド南東隅に位置する。坑底標高は2.93mを測る。

形態 平面形は円形、底面形、断面形は共に不定形である。検出面での規模は $(0.92 \times 0.88 - 0.40\text{m})$ で、壁直下が一段深くなっている。

土層 埋土は①～⑨層である。①・③・④・⑦層には、黒褐色粘質土を主とするブロックが混じる。

S K-56 (挿図26)

位置 A 9グリッド南東隅に位置する。坑底標高は2.78mを測る。

形態 平面形、底面形は円形であり、断面形は袋状を呈する。検出面での規模は $(1.12 \times 0.94 - 0.50\text{m})$ である。

土層 埋土は①～⑨層である。⑨層は植物遺体である。①・②・③・⑥層には黒色粘質土が混じる。

S K-57 (挿図26)

位置 B 8グリッド北西隅に位置する。坑底標高は3.07mを測る。

形態 平面形、底面形は円形であり、断面形は袋状を呈する。壁の立ち上がりは、一部では直立するが大部分は内傾する。検出面での規模は $(0.78 \times 0.66 - 0.43\text{m})$ である。

土層 埋土は①・②層である。

S K-58 (挿図26 図版8)

位置 A 9グリッド北東隅に位置し、S K-59・60と切り合う。坑底標高は2.79mを測る。

形態 平面形は円形、底面形は不定形、断面形は逆梯形を呈する。壁の立ち上がりは一部分では直立するが、大部分では外傾する。検出面での規模は $(1.34 \times 1.14 - 0.52\text{m})$ である。

土層 埋土は①～④層である。

S K-59 (挿図27 図版8)

位置 A 9グリッド北東隅に位置し、S K-58と切り合う。坑底標高は2.84mを測る。

形態 平面形、底面形共に楕円形を呈し、断面形は袋状である。北東壁には幅10cmの段が認められる。検出面での規模は $(0.95 \times 0.76 - 0.47\text{m})$ である。

土層 埋土は①～③層である。①層には粘質土がブロック状に混じる。

S K-60 (挿図27)

位置 A 9グリッド北東隅に位置し、S K-58・128と切り合う。坑底標高は2.94mを測る。

形態 平面形、底面形は円形を呈し、断面形は袋状である。底面はいびつな形をしている。検出面での規模は $(1.08 \times 0.96 - 0.40\text{m})$ である。

- 土 層** 埋土は①～④層である。①層には粘質土がブロック状に混じる。
- S K -61** (挿図28)
- 位 置** A 8 グリッド東側に位置する。坑底標高は2.94mを測る。
- 形 態** 平面形、底面形は楕円形を呈し、断面形は逆梯形である。検出面での規模は(0.89×0.61-0.40m)である。
- 土 層** 埋土は①～⑥層である。①層は擾乱層である。
- S K -62** (挿図27)
- 位 置** C 8 グリッド西側に位置し、土層断面よりS X-01に切られる。坑底標高は2.97mを測る。
- 形 態** 平面形、底面形は楕円形を呈する。断面形は、北及び西側は内傾するが、東及び南側では外傾する。検出面での規模は(1.21×0.75-0.59m)である。
- 土 層** 埋土は①～⑦層である。⑦層には粘質土がブロック状に混じる。
- S K -66** (挿図28・109 図版31)
- 位 置** A11グリッド北東隅に位置する。坑底標高は2.79mを測る。
- 形 態** 平面形、底面形共に楕円形、断面形は不定形である。壁の立ち上がりは外傾する。検出面での規模は(0.81×0.51-0.10m)である。
- 土 層** 埋土は①層である。
- 遺 物** 土坑北西部肩近くで甕口縁部片 P o37が出土した。
- 時 期** 出土遺物より弥生時代後期後葉と考える。
- S K -67** (挿図28)
- 位 置** B 8 グリッド北側に位置する。坑底標高は2.90mを測る。
- 形 態** 平面形、底面形は円形を呈し、断面形は袋状であるが、北側は直立に近い立ち上がりであるのに対し、南側はえぐられ方が大きい。検出面での規模は(0.66×0.56-0.60m)である。
- 土 層** 埋土は①～③層である。①層には粘質土がブロック状に混じる。
- S K -68** (挿図28)
- 位 置** A 8 グリッド北東部に位置する。坑底標高は3.02mを測る。
- 形 態** 平面形は不定形、底面形はほぼ円形、断面形は袋状である。検出面での規模は(0.79×0.64-0.39m)で、底面は中央が盛り上がる。
- 土 層** 埋土は①～④層である。②層は茶褐色粘質土と灰色粘質土が混在する層で、③層にはそれらがブロック状に混じる。④層は壁が崩れ落ちたものと考える。
- S K -69** (挿図30)
- 位 置** A 8 グリッド北東部に位置し、S K -71と切り合う。坑底標高は2.98mを測る。
- 形 態** 平面形、底面形共に楕円形、断面形は逆梯形である。検出面での規模は(1.59×1.25-0.47m)である。底面南側はテラス状となり、2段に落ち込む。
- 土 層** 埋土は①～⑦層である。③・⑥・⑦層には粘質土が混じる。
- S K -70** (挿図30)
- 位 置** Z11グリッド北東隅に位置する。坑底標高は2.38mを測る。
- 形 態** 平面形、底面形共に不定形である。断面形は袋状で壁面中程で最大径を有する。壁の立ち上がりは、北東側で外傾し、他は内傾する。検出面での規模は(0.94×0.76-0.38m)である。
- 土 層** 埋土は①層である。灰色粘質土がブロック状に混じる。
- 遺 物** 埋土中より弥生土器胴部片が、土坑上部より板状木製品が出土した。
- 時 期** 出土遺物より弥生時代と考える。
- S K -71** (挿図30・103)

- 位 置 B 8 グリッド北西部に位置し、S K-69と切り合う。坑底標高は2.89mを測る。
- 形 態 平面形は橢円形で、底面形は不定形、断面形は袋状である。検出面での規模は(1.00×0.69~0.61m)である。
- 土 層 埋土は①~④層で、すべてに粘質土がブロック状に混じる。④層を人為的に埋め戻した後、①~③層が自然堆積したものと考える。
- 遺 物 埋土中から底部P o38が出土した。
- 時 期 出土遺物より弥生時代と考える。
- S K-72 (挿図29・103 図版31)
- 位 置 B 8 グリッド西に位置する。坑底標高は2.87mを測る。
- 形 態 平面形、底面形ともに円形、断面形は不定形である。壁の立ち上がりは内傾する。検出面での規模は(0.77×0.78~0.58m)である。
- 土 層 埋土は①~④層である。①・③層は灰色粘質土が、②層は茶褐色粘質土が、④層は黒褐色粘質土が、それぞれブロック状に混じる。
- 遺 物 土坑底面から甕P o39が出土した。甕は、口縁部から洞部の破片である。
- 時 期 出土遺物より弥生時代中期後葉と考える。
- S K-73 (挿図29・103 図版8・31)
- 位 置 B 8 グリッド中央部に位置する。坑底標高は2.84mを測る。
- 形 態 平面形、底面形共に橢円形、断面形は不定形である。壁の立ち上がりは、直立に近い外傾である。検出面での規模は(1.62×1.18~0.66m)である。
- 土 層 埋土は①~④層である。①層は灰色粘質土、②層は黒褐色・茶褐色粘質土、⑤層は黒褐色・灰色粘質土が、それぞれブロック状に混じる。④層は植物遺体である。
- 遺 物 土坑底面より土器底部P o40が出土した。土器内面には、植物遺体が付着していた。
- 時 期 出土遺物より弥生時代と考える。
- S K-75 (挿図30)
- 位 置 B 8 グリッド南西部に位置する。坑底標高は2.83mを測る。
- 形 態 平面形、底面形共に不定形である。断面形は逆梯形であるが、北・西側の一部で、壁の立ち上がりが内傾する。検出面での規模は(1.44×1.21~0.55m)である。
- 土 層 埋土は①~⑤層である。①・③・④層には粘質土が混じる。堆積状況より、人為的に埋め戻された可能性がある。
- S K-76 (挿図30 図版9)
- 位 置 A 9 グリッド北部中央に位置する。坑底標高は2.46mを測る。
- 形 態 平面形、底面形共に卵形、断面形は逆梯形である。検出面での規模は(1.81×1.36~0.48m)で、北西部に長方形の落ち込み(108×79~28cm)がある。
- 土 層 埋土は①~⑧層で、すべてに粘質土がブロック状に混じる。①・②層には酸化した鉄分が含まれる。
- S K-78 (挿図31)
- 位 置 A 8 グリッド南東部に位置する。坑底標高は2.82mを測る。
- 形 態 平面形は円形で、底面形は橢円形、断面形は袋状である。検出面での規模は(0.85×0.80~0.50m)である。
- 土 層 埋土は①~⑤層で、ほぼ水平に堆積している。④層は植物遺体で、それ以外の層には粘質土が混じる。
- S K-79 (挿図31)
- 位 置 A 8 グリッド中央部西側に位置し、暗渠により西側の一部が削平されている。坑底標高は2.89mを測

る。

形態 平面形は楕円形と考えられ、底面形は不定形である。断面形は、壁の立ち上がりが北側の一部で内傾する他は、直立または外傾している。検出面での規模は(0.67以上×不明-0.47m)である。

土層 埋土は①～③層で、すべてに酸化した鉄分が含まれている。

S K-81 (挿図31・104 図版31)

位置 A 8 グリッド南に位置し、S K-105・178と切り合う。土層断面より、S K-81はS K-105を切る。坑底標高は2.66mを測る。

形態 平面形、底面形共に楕円形、断面形は不定形である。壁の立ち上がりは、北東部で内傾するが、その他の外傾する。検出面での規模は(2.50×1.64-0.83m)である。

土層 埋土は①～②層である。⑤層は、灰色粘質土がブロック状に混じる。⑨層は砂質土である。⑩～⑪層と⑫～⑯層は、それぞれ別遣構が存在する可能性があり、さらに⑭～⑯層と⑮～⑯層が、別遣構の可能性がある。

遺物 埋土中より壺の口縁部から底部P o41、甕の口縁部から胴下部P o42、胴部片P o43が出土した。P o43は、S K-115出土土器と接合した。

時期 出土遺物より弥生時代中期後葉と考える。

S K-83 (挿図32)

位置 B 9 グリッド北部中央に位置し、西側の一部が攪乱されている。坑底標高は2.70mを測る。

形態 平面形、底面形共に卵形である。断面形は、壁の立ち上がりが西側の一部で内傾する他は、ほとんど直立している。検出面での規模は(0.89以上×0.80-0.62m)で、底面は中央が盛り上がる。

土層 埋土は①～⑤層で、③・④層には黄白色土ブロック、⑤層には黒色土がそれぞれ混じる。

S K-84 (挿図33 図版9)

位置 B 9 グリッド北東部に位置する。坑底標高は2.56mを測る。

形態 平面形はほぼ円形であるが、底面形は不定形である。断面形は、壁の立ち上がりが北側から西側にかけては内傾し、南側から東側にかけては外傾する。検出面での規模は(1.36×1.25-0.76m)である。

土層 埋土は①～⑪層で、①層には黄白色土、⑤層には暗灰色土がそれぞれブロック状に混じり、⑪層は砂粒を含む。

S K-85 (挿図32・104 図版9)

位置 B 9 グリッド北東隅に位置する。坑底標高は2.74mを測る。

形態 平面形、底面形共に円形、断面形は不定形である。壁の立ち上がりは、北～西部分で内傾、東部分で外傾、南部分では底面から内傾して立ち上がり、検出面近くで外傾する。検出面での規模は(1.43×1.36-0.63m)である。

土層 埋土は①～⑥層である。②層は茶褐色粘質土、③・⑥層は黒色粘質土が、それぞれブロック状に混じる。③層には砂粒が混じる。

遺物 土坑底面近くより甕P o44が出土した。甕は、口縁部から胴下部まで全体の3分の1を復元した。

時期 出土遺物より弥生時代中期後葉と考える。

S K-86 (挿図33 図版9)

位置 B 9 グリッド中央部北側に位置する。坑底標高は2.52mを測る。

形態 平面形、底面形共にややいびつな隅丸方形、断面形は北側の一部を除き袋状である。検出面での規模は(0.94×0.84-0.76m)である。

土層 埋土は①～⑤層である。①・②層には黄白色土、④・⑤層には黒色土がそれぞれブロック状に混じる。

S K-87 (挿図33 図版9)

- 位 置** B 9 グリッドのほぼ中央に位置する。坑底標高は2.69mを測る。
- 形 態** 平面形、底面形共に隅丸長方形である。断面形は、北側部分で壁の立ち上がりが内傾するが、ほぼ逆梯形である。検出面での規模は(1.52×0.99-0.60m)で、底面には凹凸がある。
- 土 層** 埋土は①～④層である。①・②層には黄白色土、③・④層には黒色土がそれぞれブロック状に混じる。
- S K -88 (挿図33)**
- 位 置** A 10 グリッド南東隅に位置する。坑底標高は2.35mを測る。
- 形 態** 平面形、底面形共に不定形である。壁の立ち上がりは、南・北部分で外傾し、東・西部分で内傾する。検出面での規模は(2.57×1.62-0.62m)である。
- 土 層** 埋土は①～⑦層である。
- S K -89 (挿図34)**
- 位 置** C 9 グリッド西に位置する。坑底標高は2.60mを測る。
- 形 態** 平面形、底面形共に橢円形、断面形は不定形である。壁の立ち上がりは、北部で外傾し、その他でほぼ直立する。検出面での規模は(2.62×1.98-0.78m)である。
- 土 層** 埋土は①～⑤層である。①層は、灰色粘質土がブロック状に混じる。③層は、植物遺体である。
- 遺 物** 埋土中より弥生土器胴部片が出土した。
- 時 期** 出土遺物より弥生時代と考える。
- S K -102 (挿図35 図版9)**
- 位 置** B 9 グリッド北側中央に位置し、S K -117と切り合う。土層断面よりS K -102が古い。坑底標高は2.81mを測る。
- 形 態** 平面形は円形であると考えられ、底面形は不定形である。断面形は袋状である。検出面での規模は(不明×1.30-0.56m)で、底面は中央がやや盛り上がる。
- 土 層** 埋土は①～⑦層である。①・②層には粘質土が混じり、④層には黒色粘質土と砂、⑦層には黒色粘質土がそれぞれ少量混じる。
- S K -103 (挿図35)**
- 位 置** B 9 グリッド中央部に位置する。坑底標高は2.70mを測る。
- 形 態** 平面形は隅丸方形で、底面形は不定形である。断面形は、壁の立ち上がりが北側から西側にかけて直立気味であるが、ほぼ袋状である。検出面での規模は(0.91×0.81-0.55m)で、南側半分はテラス状となり2段に落ち込む。
- 土 層** 埋土は①～⑥層である。②～⑤層には粘質土がブロック状に、また⑥層には黒色土がそれぞれ混じる。
- S K -104 (挿図35 図版9)**
- 位 置** B 9 グリッド中央部北側に位置する。坑底標高は2.75mを測る。
- 形 態** 平面形はややいびつな橢円形で、底面形は不定形、断面形は袋状である。検出面での規模は(0.72×0.61-0.52m)で、底面には北から南へ延びる舌状のテラス部分があり、土坑内を二分していたものと考える。
- 土 層** 埋土は①～⑧層である。②・⑧層には黒色土、③・⑥層には粘質土がブロック状にそれぞれ混じる。②・⑦層は、舌状のテラス部分を高くするための人为的な盛土であると考えられる。
- S K -107 (挿図36)**
- 位 置** B 9 グリッド北西部に位置し、S K -113・138とそれぞれ切り合う。土層断面より、S K -107がS K -113・138より古い。坑底標高は2.63mを測る。
- 形 態** 平面形は不明で、底面形は不定形である。断面形は袋状と考える。検出面での規模は不明であるが、

底面の長軸は1.23m以上、短軸は0.97m以上であり、残存部での深さは0.55mである。

土層 埋土は①～⑦層である。①・②・⑥・⑦層には黒色粘質土が混じる。

S K-108 (挿図36・104)

位置 B 9 グリッド北に位置する。坑底標高は2.72mを測る。

形態 平面形、底面形、断面形はいずれも不定形である。壁の立ち上がりは外傾する。検出面での規模は $(0.96 \times 0.80 - 0.52\text{m})$ である。

土層 埋土は①～⑤層である。③・④層は、黒褐色粘質土がブロック状に混じる。

遺物 土坑底面より甕 Po46・47が出土した。この2個体は接合しなかったものの、出土位置などから同一個体と考える。

時期 出土遺物より弥生時代中期後葉と考える。

S K-109 (挿図36)

位置 B 9 グリッド北西部に位置し、S K-139と切り合う。土層断面より S K-109が新しい。坑底標高は2.96mを測る。

形態 平面形、底面形共に隅丸長方形である。断面形は、壁の立ち上がりが南西部分で内傾するが、その他は外傾する。検出面での規模は $(0.96 \times 0.62 - 0.34\text{m})$ である。

土層 埋土は①～⑦層である。①・②層には黄白色土がブロック状に、⑦層には黒色土がそれぞれ混じる。また④層には③層が混入している。

S K-110 (挿図37)

位置 A 9 グリッド北西部に位置する。坑底標高は2.77mを測る。

形態 平面形、底面形共に楕円形であり、断面形は袋状である。検出面での規模は $(1.52 \times 1.13 - 0.45\text{m})$ である。

土層 埋土は①～⑩層である。②・⑤・⑥層には粘質土がブロック状に、⑨層には黒色粘質土、⑩層には黒色粘質土と砂がそれぞれ混じる。

S K-113 (挿図37)

位置 B 9 グリッド北西部に位置し、S K-107・114とそれぞれ切り合う。土層断面より S K-113がS K-107・114を切る。坑底標高は2.66mを測る。

形態 平面形、底面形共にややいびつな楕円形である。断面形は、壁の立ち上がりが北西部分で内傾するが、その他は外傾する。検出面での規模は $(1.51 \times 0.90 - 0.46\text{m})$ である。

土層 埋土は①～⑦層である。①・④層には粘質土がブロック状に、③・⑥層には黒色土がそれぞれ混じる。

S K-114 (挿図37)

位置 B 9 グリッド北西部に位置し、S K-113と切り合う。土層断面より S K-114が切られる。坑底標高は2.70mを測る。

形態 平面形、底面形共に楕円形と考える。断面形は袋状である。検出面での規模は $(0.88\text{以上} \times 0.58 - 0.48\text{m})$ である。

土層 埋土は①～④層である。①層には粘質土がブロック状に、②・④層には黒色粘質土がそれぞれ混じる。

S K-115 (挿図38・104)

位置 A 9 グリッド北に位置する。坑底標高は2.61mを測る。

形態 平面形は円形、底面形は楕円形、断面形は不定形である。壁の立ち上がりは、北～北西部で直立し、その他で外傾する。検出面での規模は $(1.06 \times 1.04 - 0.42\text{m})$ である。

土層 埋土は①～⑤層である。このうち、②層は黒褐色・灰色粘質土、④層は灰色粘質土が、それぞれブ

ロック状に混じる。

遺物 埋土中よりSK-81と接合するPo43、土坑上面より土器Po49が出土した。Po49は、底部から胴部片であった。

時期 出土遺物より弥生時代と考える。

SK-116 (挿図38・105・117・122 図版9・39)

位置 C9グリッド北西部に位置する。坑底標高は2.78mを測る。

形態 平面形、底面形は円形、断面形は不定形である。壁の立ち上がりは、西部分で外傾、北東部分で内傾、南～東で直立する。検出面での規模は(1.50×1.39-0.62m)である。

土層 埋土は①～⑩層である。①・③～⑤・⑦・⑨の各層に灰色粘質土が、②層には灰褐色粘質土がそれぞれロック状に混じる。

遺物 埋土中より甕口縁部片Po50、土器片Po51が出土した。土坑中央底面近くで堅杵W9、埋土中より木製品W10が出土した。

時期 出土遺物より弥生時代中期後葉と考える。

SK-118 (挿図39)

位置 B9グリッドのほぼ中央に位置し、SK-124と切り合う。土層断面よりSK-118が古い。坑底標高は2.73mを測る。

形態 平面形はいびつな楕円形で、底面形はほぼ円形である。断面形は逆梯形である。検出面での規模は(1.41×1.20-0.42m)である。

土層 埋土は①～⑥層である。④層を除き粘質土がロック状に混じる。

SK-119 (挿図39)

位置 B9グリッド南東寄りに位置する。坑底標高は2.76mを測る。

形態 平面形、底面形共に不定形である。断面形は、壁の立ち上がりが北側で内傾するが、ほぼ逆梯形である。検出面での規模は(1.20×0.73-0.40m)である。

土層 埋土は①～④層である。①・②層には粘質土がロック状に、③・④層には黒色土がそれぞれ混じる。

SK-120 (挿図39)

位置 B9グリッド南東部に位置し、SK-145と切り合う。土層断面よりSK-120が新しい。坑底標高は2.70mを測る。

形態 平面形は卵形で、底面形は楕円形である。断面形は、壁の立ち上がりが東側で内傾し、その他は外傾する。またその傾斜は西側ほど緩やかである。検出面での規模は(1.22×0.81-0.40m)である。

土層 埋土は①～⑤層である。③～⑤層には粘質土がロック状に混じる。

SK-121 (挿図39・105 図版10)

位置 B9グリッド南東隅に位置する。坑底標高は2.78mを測る。

形態 平面形、底面形共に楕円形、断面形は不定形である。壁の立ち上がりは、南部分でわずかに内傾するが、その他は外傾する。検出面での規模は(0.83×0.63-0.40m)である。

土層 埋土は①～⑧層である。②層は茶灰色粘質土がロック状に混じる。①・②層には砂が、②・③層には炭が混じる。

遺物 土坑底面直上より土器底部から胴上半部Po52が出土した。土器は、SK145・177出土土器片と接合した。

時期 出土遺物より弥生時代中期後葉と考える。

SK-122 (挿図39 図版10)

位置 B9グリッド西側中央に位置し、SK-132・141とそれぞれ切り合う。土層断面よりSK-122がどち

- らよりも古い。坑底標高は2.85mを測る。
- 形 態 平面形は楕円形と考えられ、底面形は円形である。断面形は逆梯形と考える。検出面での規模は不明だが、底面規模は径が0.85mで、深さは0.56mである。
- 土 増 埋土は①～③層で、①・②層には粘質土がブロック状に混じる。
- S K-123 (挿図39・105)
位 置 C 9 グリッド西に位置する。坑底標高は3.11mを測る。
- 形 態 平面形、底面形は一部削平を受けているがほぼ円形である。断面形は、中央部が平坦で周囲が深くなっている。壁の立ち上がりは、西側部分で内傾するが、他は外傾する。検出面での規模は(1.05×不明-0.18m)である。
- 土 層 埋土は①・②層である。①層は、黄白色粘質土がブロック状に混じる。
- 遺 物 埋土中より土器底部片 P o53が出土した。
- 時 期 出土遺物より弥生時代と考える。
- S K-124 (挿図40)
位 置 B 9 グリッドのほぼ中央に位置し、S K-118と切り合う。坑底標高は2.70mを測る。
- 形 態 平面形、底面形共に楕円形である。断面形は逆梯形であるが、西側では壁の立ち上がりに変化がみられる。検出面での規模は(0.90×0.88-0.40m)である。
- 土 層 埋土は①～⑦層である。④・⑤層を除き粘質土がブロック状に混じる。③～⑥層は東側の壁が崩れたものと考える。
- S K-128 (挿図41・105 図版10・31・32)
位 置 B 9 グリッド北東隅に位置し、S K-60と切り合う。坑底標高は2.53mを測る。
- 形 態 平面形、底面形共に楕円形である。断面形は袋状を呈する。壁の立ち上がりは内傾する。検出面での規模は(0.97×0.67-0.72m)である。
- 土 層 埋土は①～③層である。②層は植物遺体である。
- 遺 物 土坑底面直上より壺P o54が、埋土中より甌P o55が出土した。壺P o54は、口縁部から底部まで全体の2分の1を復元した。
- 時 期 出土遺物より弥生時代中期後葉と考える。
- S K-130 (挿図41)
位 置 B 9 グリッド南に位置する。坑底標高は2.80mを測る。
- 形 態 平面形、底面形共に隅丸方形、断面形は不定形である。壁の立ち上がりは、西側で外傾し、他の部分は内傾する。検出面での規模は(1.36×1.12-0.39m)である。
- 土 層 埋土は①・②層である。①層には灰色粘質土小ブロックが、②層には褐色・灰色粘質土ブロックが混じる。
- 遺 物 埋土中より副部片が出土した。
- 時 期 出土遺物より弥生時代と考える。
- S K-131 (挿図41 図版11)
位 置 B 9 グリッド中央部に位置し、S K-143と切り合う。土層断面より S K-131が切られる。坑底標高は2.79mを測る。
- 形 態 平面形、底面形共に楕円形、断面形は袋状である。検出面での規模は(1.42以上×0.89-0.43m)である。底面は中央がやや盛り上がる。
- 土 層 埋土は①～④層で、すべてに灰色粘質土がブロック状に混じる。
- S K-132 (挿図42)
位 置 B 9 グリッド西側に位置し、土層断面より S K-122と S K-135を切る。坑底標高は2.32mを測る。

- 形 態** 平面形、底面形は楕円形を呈し、断面形は基本的に逆梯形であるが、北東壁下は一部えぐられてい る。また、底面はいびつな形をしている。検出面も一部攢乱を受けていた。検出面での規模は(1.60× 1.08~0.91m)である。
- 土 層** 埋土は①~⑥層である。①~③層には粘質土がブロック状に混じり、⑥層には砂が混じる。
- S K-135 (挿図42)**
- 位 置** A 9 グリッド東側に位置し、土層断面より S K-132に切られる。坑底標高は2.46mを測る。
- 形 態** 平面形、底面形は隅丸長方形を呈し、断面形は逆梯形である。壁の立ち上がりは、直立に近いもの であり、南・北壁下は一段掘り込まれている。検出面での規模は (1.30×0.90~0.76m) である。
- 土 层** 埋土は①~⑥層である。①層には粘質土がブロック状に混じる。
- S K-140 (挿図43)**
- 位 置** A 9 グリッドの北東隅に位置する。坑底標高は2.68mを測る。
- 形 態** 平面形、底面形は楕円形を呈し、断面形は袋状である。南側の立ち上がりは直立に近いが、北側は えぐれが大きい。検出面での規模は (0.90×0.63~0.53m) である。
- 土 层** 埋土は①~④層である。①・②層には粘質土がブロック状に混じる。
- S K-141 (挿図44)**
- 位 置** A 9 グリッド東側に位置し、土層断面より S K-122を切る。坑底標高は2.60mを測る。
- 形 態** 平面形、底面形は楕円形、底面形は円形を呈する。断面形は不定形であり、東側は外傾して立ち上がるのに 対し、西側では内傾する。検出面での規模は (1.48×1.14~0.30m) である。
- 土 层** 埋土は①~⑤層である。②・④層には粘質土がブロック状に混じる。
- S K-142 (挿図44)**
- 位 置** A 8 グリッド南側に位置する。坑底標高は2.71mを測る。
- 形 態** 平面形、底面形とも楕円形を呈する。断面形は不定形であり、東側では内傾して壁が立ち上がるの に対し、西側では外傾している。検出面での規模は (1.37×1.14~0.53m) である。
- 土 层** 埋土は①~④層である。①・②層は砂質土である。
- S K-143 (挿図43 図版II)**
- 位 置** B 9 グリッド西に位置し、土層断面より S K-122に切られ、S K-131・144・153を切る。坑底標高 は2.34mを測る。
- 形 態** 平面形、底面形共に楕円形、断面形は不定形である。壁の立ち上がりは、北から東のみ内傾し、そ の他は外傾する。検出面での規模は (3.30×2.36~0.90m) である。
- 土 层** 埋土は①~⑨層である。このうち、①層は灰色粘質土、②層は灰色・褐色粘質土が、ブロック状に 混じる。③~⑥層は土坑廃棄後埋まる過程で土坑の肩が崩落したと考えられる。
- 遺 物** 埋土中より甕の口縁部から胴部が出土した。S K-15出土土器片 P o3と接合した。
- 時 期** 出土遺物より弥生時代中期後葉と考える。
- S K-144 (挿図45・105)**
- 位 置** A 9 グリッド南東隅からB 9 グリッド南西隅にかけて位置し、S K-184と切り合い、土層断面より S K-143・190・195に切られる。坑底標高は2.62mを測る。
- 形 態** 平面形、底面形、断面形はいずれも不定形である。壁の立ち上がりは外傾する。検出面での規模は (5.00×3.82~0.50m) である。
- 土 层** 埋土は①~⑩層である。①・②・⑤・⑥・⑩層には、粘質土がブロック状に混じる。
- 遺 物** 埋土中より、甕の底部から胴部 P o22、口縁部片 P o58が出土した。P o22は、S K-41・223出土土器 と接合関係が認められた。
- 時 期** 出土遺物より弥生時代中期後葉と考える。

S K-145 (挿図44・105)

位 置 B 9 グリッド南東隅に位置し、S K-120と切り合う。坑底標高は2.60mを測る。

形 態 平面形、底面形は円形で、断面形は不定形である。壁の立ち上がりは外傾する。検出面での規模は(2.21×1.93-0.51m)である。

土 層 埋土は①・②層である。

遺 物 埋土中より土器底部から胴部片 P o52、胴部片 P o59が出土した。P o52は、S K-121・177出土土器と接合した。

時 期 出土遺物より弥生時代中期後葉と考える。

S K-148 (挿図46)

位 置 A 9 グリッド中央部に位置し、土層断面より S K-45・154に切られる。坑底標高は2.71mを測る。

形 態 平面形、底面形とも橢円形を呈し、断面形は袋状である。検出面での規模は(1.52×1.06-0.49m)である。

土 层 埋土は①～③層である。①～③層とも粘質土がブロック状に混じる。

S K-149 (挿図46)

位 置 A 9 グリッド北側に位置する。坑底標高は2.76mを測る。

形 態 平面形は脛丸方形、底面形、断面形は不定形を呈する。壁の立ち上がりは、東側では内傾するのに対し、西側では外傾する。底面は2段となっており、約20cmの段差が存在している。検出面での規模は(1.09×1.01-0.31m)である。

土 层 埋土は①～④層である。①・③・④層は粘質土がブロック状に混じる。

S K-153 (挿図47・105)

位 置 B 9 グリッド南に位置し、土層断面より S K-129・143に切られる。坑底標高は2.66mを測る。

形 態 平面形、底面形、断面形いずれも不定形である。壁の立ち上がりは外傾する。検出面での規模は(不明×1.50-0.42m)である。

土 层 埋土は①～⑩層である。このうち、③層には、灰色・黄褐色粘質土ブロック、④層には、褐色粘質土ブロック、⑤層には、灰色粘質土ブロック、⑩層には、褐色・灰色粘質土ブロックが、それぞれ混じる。

遺 物 埋土中より、弥生土器底部片 P o60、胴部片 P o56が出土した。P o56はS K-173出土土器と接合し、壺の口縁部から胴部を復元した。

時 期 出土遺物より弥生時代中期後葉と考える。

S K-154 (挿図48・106)

位 置 A 9 グリッド南に位置し、土層断面より S K-148を切り、S K-34・47・195に切られる。坑底標高は2.48mを測る。

形 態 平面形は、別の土坑に切られているが、円形と思われる。底面形、断面形は不定形である。壁の立ち上がりは外傾する。検出面での規模は(2.60×不明-0.62m)である。

土 层 埋土は①～⑤層である。①～④層には粘質土が混じる。

遺 物 埋土中より壺口縁部片 P o61が出土した。

時 期 出土遺物より弥生時代中期後葉と考える。

S K-156 (挿図47)

位 置 A 9 グリッド中央部に位置し、土層断面より S K-147に切られる。坑底標高は2.70mを測る。

形 態 平面形は橢円形、底面形、断面形は不定形である。壁の立ち上がりは、南側で直立し、北側で内傾する。検出面での規模は(不明×0.66-0.50m)である。

土 层 埋土は①～③層である。②層には、粘質土がブロック状に混じる。

S K -158 (挿図49)

位 置 C 9 グリッド南西隅に位置する。坑底標高は2.96mを測る。

形 態 平面形、底面形、断面形いずれも不定形である。壁の立ち上がりは、北側で内傾、その他は外傾する。検出面での規模は(2.06×1.50-0.42m)で、底面中央部に(88×61-30cm)の窪みがある。

土 層 埋土は①～⑦層である。③層は、灰色粘質土がブロック状に混じる。

S K -160 (挿図49 図版11)

位 置 A 9 グリッド北西部に位置する。坑底標高は2.68mを測る。

形 態 平面形、断面形は不定形、底面形は楕円形である。壁の立ち上がりは北と南で外傾、東と西で内傾する。検出面での規模は(0.96×0.84-0.58m)である。

土 层 埋土は①～⑥層である。①層には、黄褐色粘質土ブロックが混じる。②・⑤層には、茶灰色粘質土ブロックが混じる。③層には、黄灰色粘質土ブロック・砂粒が混じる。⑤層には、黒色粘質土ブロック・砂粒が混じる。⑥層には、砂粒が混じる。

S K -161 (挿図49)

位 置 A 9 グリッド北東隅に位置する。坑底標高は2.74mを測る。

形 態 平面形、底面形共に卵形、断面形はほぼ梯形である。検出面での規模は(0.82×0.64-0.45m)である。

土 层 埋土は①～④層である。①・②層には、黄灰色粘質土、③・④層には、茶灰色粘質土が、それぞれブロック状に混じる。

S K -164 (挿図49)

位 置 A 9 グリッド北に位置し、S K -178と切り合う。坑底標高は2.34mを測る。

形 態 平面形、底面形共に楕円形と推定される。断面形は不定形である。壁の立ち上がりは内傾する。検出面での規模は(不明×0.76-0.72m)である。

土 层 埋土は①・②層である。①層は、褐色・暗褐色・黄褐色粘質土ブロックが混在する。

S K -165 (挿図50 図版12)

位 置 A 7 グリッド南東隅に位置する。坑底標高は3.05mを測る。

形 態 平面形は円形、底面形は楕円形、断面形は袋状である。検出面での規模は(0.70×0.67-0.37m)である。

土 层 埋土は①層である。黄褐色・褐色・黒褐色粘質土がブロック状に混在する。

S K -171 (挿図50 図版12)

位 置 B10 グリッド北東隅に位置する。坑底標高は2.78mを測る。

形 態 平面形、底面形、断面形いずれも不定形である。壁の立ち上がりは、東側の一部分で直立するが、その他は外傾する。検出面での規模は(1.92×1.74-0.40m)である。

土 层 埋土は①～⑦層である。②・④・⑤・⑦層は粘質土が、②層には砂質土が、それぞれ混じる。

S K -173 (挿図51・105)

位 置 B10 グリッド北側に位置する。坑底標高は2.60mを測る。

形 態 平面形、底面形、断面形はいずれも不定形である。壁の立ち上がりは南側で内傾するが、大部分では外傾する。検出面での規模は(2.85×2.00-0.52m)である。

土 层 埋土は①～⑤層である。①・③層では粘質土が混在している。

遺 物 底面付近より甕 Po56、底部 Po57が出土した。甕 Po56はS K -153出土胴部片と接合し、口縁部から胴部を復元した。

時 期 出土遺物より弥生時代中期後葉と考える。

S K -174 (挿図51)

- 位 置** B 9 グリッド東に位置し、S K-63と切り合う。坑底標高は3.43mを測る。
- 形 態** 平面形は円形、底面形は楕円形、断面形は不定形である。壁の立ち上がりは、南で内傾するが、その他は外傾する。検出面での規模は(1.16×1.08-0.44m)である。
- 土 層** 埋土は①～⑤層である。⑤層は、灰色粘質土と灰褐色粘質土がブロック状に混在する。
- S K-177 (挿図52・105)**
- 位 置** A 9 グリッド北西隅に位置する。残存坑底標高は2.57mを測る。
- 形 態** 排水溝破壊により全体形は不明だが、残存する平面形及び底面形は半円形を呈する。断面形は袋状である。残存部の規模は(2.07×0.45-0.48m)である。
- 土 層** 埋土は①～③層である。
- 遺 物** 底面より胴部P o52が出土した。土器は、S K-121・145出土土器片と接合した。
- 時 期** 出土遺物より弥生時代中期と考える。
- S K-178 (挿図53・106 図版32)**
- 位 置** A 8 グリッド南側に位置し、S K-81・164・167と切り合う。坑底標高は2.80mを測る。
- 形 態** 平面形、底面形は不定形を呈し、断面形は逆梯形である。検出面での規模は(不明×1.51-0.31m)で、底面南側に(不明×50-10cm)の窪みがある。
- 土 層** 埋土は①・②層である。①層には粘質土がブロック状に混じる。
- 遺 物** 底面より壺P o64、上面より底部P o65が出土した。
- 時 期** 出土遺物より弥生時代中期後葉と考える。
- S K-179 (挿図52・106 図版32)**
- 位 置** A 9 グリッド西侧に位置し、S K-27・28と切り合う。残存坑底標高は2.74mを測る。
- 形 態** 排水溝破壊により全体形は不明だが、残存する平面形及び底面形は半円形を呈する。断面形は不定形である。壁の立ち上がりは、西側で内傾、他は外傾する。残存部の規模は(0.86×0.49-0.32m)である。
- 土 層** 埋土は①・②層である。①層には粘質土がブロック状に混じる。
- 遺 物** 中ほどより壺P o66が出土した。壺は口縁部へ胴上部を復元した。
- 時 期** 出土遺物より弥生時代中期後葉と考える。
- S K-182 (挿図54・106 図版12)**
- 位 置** B 10 グリッド西侧に位置する。坑底標高は2.66mを測る。
- 形 態** 平面形、底面形、断面形いずれも不定形である。壁の立ち上がりは、一部内傾するが大部分は外傾する。検出面での規模は(2.81×1.74-0.42m)である。
- 土 層** 埋土は①～④層である。④層は植物遺体である。
- 遺 物** 底面付近より壺P o67と木製品が出土した。木製品は先端部を削り出した続状のものである。
- 時 期** 出土遺物より弥生時代中期後葉と考える。
- S K-183 (挿図52・106)**
- 位 置** B 10 グリッド北側に位置し、土層断面よりS K-184に切られる。坑底標高は2.60mを測る。
- 形 態** 平面形、底面形共に円形を呈する。断面形は逆梯形であるが、東側は底面近くで壁がえぐれている。検出面での規模は(0.90×0.72-0.39m)である。
- 土 層** 埋土は①～③層である。③層は植物遺体である。
- 遺 物** 埋土中より、底部P o68が出土した。
- 時 期** 出土遺物より弥生時代と考える。
- S K-184 (挿図55・106)**
- 位 置** B 10 グリッド北西隅に位置し、土層断面よりS K-183を切り、S K-144とは切り合う。坑底標高は

2.68mを測る。

形 態 平面形、底面形は共に不定形、断面形は椀状である。検出面での規模は(2.16×1.90-0.40m)である。

土 層 埋土は①～③層である。①・③層には粘質土がブロック状に少量混じる。

遺 物 埋土中より底部片Po69・70が出土した。

時 期 出土遺物より弥生時代と考える。

S K-191 (挿図56 図版12)

位 置 A9グリッド南東隅に位置し、土層断面よりS K-50を切り、S K-241と切り合う。坑底標高は2.50mを測る。

形 態 平面形、底面形、断面形のいずれも不定形である。壁の立ち上がりは内傾する。検出面での規模は(1.52×1.06-0.58m)である。

土 層 埋土は①～⑥層である。③層には褐色・黄褐色・灰色粘質土が混在する。④層には灰色・黒褐色粘質土、⑦層には灰色・褐色粘質土が、それぞれブロック状に混じる。⑥層には砂が混じる。

S K-196 (挿図57・106・107 図版31)

位 置 A10グリッド中央部に位置し、S K-49と切り合う。坑底標高は2.70mを測る。

形 態 平面形、底面形、断面形はいずれも不定形である。壁の立ち上がりは外傾する。検出面での規模は(2.16×1.11-0.35m)である。

土 層 埋土は①・②層である。

遺 物 埋土中より、無頸壺Po72、甕の口縁部Po73が出土した。

時 期 出土遺物より弥生時代中期後葉と考える。

S K-201 (挿図57)

位 置 D11グリッド西に位置する。坑底標高は2.76mを測る。

形 態 平面形、底面形は削平のため不明である。断面形は不定形である。壁の立ち上がりは、底部から内傾して立ち上がり、土坑上半部で外傾する。検出面での規模は(不明×不明-0.45m)である。

土 層 埋土は①～⑤層である。⑤層は灰色・黒褐色粘質土がブロック状に混じる。①・③層には砂粒が混じる。③・④層には炭が混じる。

S K-203 (挿図57・107 図版33)

位 置 A10グリッド北側に位置し、土層断面よりS K-208を切る。坑底標高は2.71mを測る。

形 態 平面形、底面形とも橢円形を呈する。断面形は椀状である。検出面での規模は(1.36×1.05-0.33m)である。

土 層 埋土は①～③層である。①・②層には粘質土がブロック状に混じる。

遺 物 土坑上面より、甕Po80が出土した。甕はS K-208出土土器と接合した。

時 期 出土遺物より弥生時代中期後葉と考える。

S K-204 (挿図58)

位 置 B10グリッド中央部に位置し、土層断面よりS K-194に切られる。坑底標高は2.50mを測る。

形 態 平面形、底面形、断面形いずれも不定形である。壁の立ち上がりは、一部分では内傾するが、大部分では外傾する。検出面での規模は(3.00×2.34-0.84m)である。

土 層 埋土は①～③層である。①～③層とも粘質土がブロック状に混じる。

遺 物 埋土中より口縁部片、底部が出土した。

時 期 出土遺物より弥生時代と考える。

S K-205 (挿図58・106)

位 置 A10グリッド南西隅に位置する。坑底標高は2.51mを測る。

- 形 態** 暗渠破壊により全体形は不明だが、残存する平面形及び底面形は半円形を呈する。断面形は内傾している。残存部の規模は(1.64×1.13-0.25m)であり、底面南側に(61×50-7cm)の窪みが認められる。
- 土 層** 埋土は①・②層である。①・②層とも粘質土がブロック状に混じる。
- 遺 物** 埋土中より、甕Po77、底部Po78が出土した。Po78はSK-221・239出土土器と接合した。
- 時 期** 出土遺物より弥生時代中期後葉と考える。
- SK-206** (挿図60・107)
- 位 置** B10グリッド西側に位置し、土層断面よりSK-207を切る。坑底標高は2.70mを測る。
- 形 態** 平面形、底面形とも円形を呈する。断面形は不定形であり、北側では外傾するのに対し、南側では内傾する。検出面での規模は(1.70×1.61-0.39m)である。
- 土 層** 埋土は①・②層である。①・②層とも粘質土がブロック状に混じる。
- 遺 物** 埋土中より甕Po79が出土した。甕は1個体が完全に復元できるものではなかった。
- 時 期** 出土遺物より弥生時代中期後葉と考える。
- SK-208** (挿図59・107 図版33)
- 位 置** A10グリッド北側に位置し、土層断面よりSK-233・203に切られる。坑底標高は2.62mを測る。
- 形 態** 平面形、底面形は不定形を呈する。断面形は大部分外傾するが、南側で一部内傾している。検出面での規模は(2.45×1.50-0.51m)であり、底面南側に(147×105×12cm)の窪みがある。
- 土 層** 埋土は①～④層である。②・③層には、粘質土がブロック状に混じる。
- 遺 物** 埋土中より甕Po80が出土した。土器は、SK-203出土土器と接合した。
- 時 期** 出土遺物より弥生時代中期後葉と考える。
- SK-209** (挿図59 図版13)
- 位 置** B8グリッド南東隅に位置する。坑底標高は2.78mを測る。
- 形 態** 平面形は円形、底面形は梢円形、断面形は袋状である。検出面での規模は(0.97×0.96-0.53m)である。
- 土 層** 埋土は①・②層である。①層には灰色・暗褐色粘質土、②層には暗褐色・褐色粘質土が、それぞれブロック状に混じる。
- SK-211** (挿図61・107・108 図版13・32・33)
- 位 置** A10グリッド南西隅に位置する。坑底標高は2.49mを測る。
- 形 態** 平面形、底面形は梢円形を呈し、断面形は皿状である。検出面での規模は(2.18×1.58-0.25m)である。
- 土 層** 埋土は①・②層である。
- 遺 物** 埋土中より、高坏Po81、甕Po89が出土した。Po89はSK-226・252出土土器と接合した。
- 時 期** 出土遺物より弥生時代中期後葉と考える。
- SK-212** (挿図60・107・123・125 図版13・38)
- 位 置** B11グリッド西側に位置する。坑底標高は2.65mを測る。
- 形 態** 平面形、底面形は円形を呈し、断面形は皿状である。検出面での規模は(1.48×1.36-0.30m)である。
- 土 層** 埋土は①～③層である。①・③層には、粘質土がブロック状に混じる。
- 遺 物** 甕Po5、甕Po82、木製品W11・12、棒状木製品が出土した。Po5は、SK-17と接合関係が認められた。W11は、片面に赤色顔料が塗付された板状のものである。全体形は不明であるが、厚さ4mm前後の薄い板状であること、赤色顔料が塗付されていること、等間隔で横方向の小孔列が穿たれていること、これらの点から橋B類(『鬼虎川の木質遺物』1987 勝東大阪市文化財協会)を考えるものである。

ある。

なお、一部が坑底に突き刺さり直立する状態で検出された。この周囲には、地山とよく似た土が盛りあがった状態で存在する。これは、置橋の固定のための込め土と考えられる。置橋の使用法の一例を示すものであろう。なお、この橋は土坑に伴うものであることより、何らかの祭祀に使用されたものと思われる。樹種はモミ属である。W12は、ほぼ太さのそろった棒状のものである。一方は丸く面取りされており、他方は焼けて失なわれていた。棒状木製品には明確な加工痕は確認できなかった。

性 格 祭祀に関連したものと考える。

時 期 出土遺物より弥生時代中期後葉と考える。

S K-213 (挿図62 図版14)

位 置 B11グリッド中央部に位置する。坑底標高は2.69mを測る。

形 態 平面形は楕円形、底面形、断面形は不定形である。壁の立ち上がりは、東側で外傾し、西側ではほぼ直立、北と南で内傾する。検出面での規模は(0.97×0.76-0.27m)である。

土 層 埋土は①～⑪層である。⑨層では灰色粘質土、⑩層には灰色・黄褐色粘質土が、それぞれブロック状に混じる。②層と③層の間、④層と⑤層の間、⑧層と⑨層の間に、それぞれ炭の層が薄く入る。

S K-216 (挿図62・107 図版14・33)

位 置 A10グリッド北西隅に位置し、S K-215・217に切られる。土層断面よりS K-216が古い。坑底標高は2.50mを測る。

形 態 平面形、底面形、断面形はいずれも不定形である。壁の立ち上がりは外傾する。検出面での規模は(3.42×不明-0.40m)である。

土 层 埋土は①～⑥層である。このうち、①・③・④層は粘質土がブロック状に混じる。

遺 物 埋土中より、甕Po84が出土した。

時 期 出土遺物より弥生時代中期後葉と考える。

S K-219 (挿図63)

位 置 B10グリッド南側に位置し、S K-207に切られる。坑底標高は2.60mを測る。

形 態 平面形は円形、底面形は楕円形を呈する。断面形は大部分が内傾しているが、南側が袋状になっている。検出面での規模は(1.82×1.75-0.42m)であり、底面東側に(58×48-10cm)・(50×28-11cm)の2つの窪みがある。

土 层 埋土は①～④層である。

遺 物 埋土中より土器片が出土した。

時 期 出土遺物より弥生時代と考える。

S K-221 (挿図63・106)

位 置 A10グリッド西側に位置し、土層断面よりS K-222を切る。坑底標高は2.35mを測る。

形 態 平面形、底面形、断面形いずれも不定形である。壁の立ち上がりは、南側で中ほどがえぐられ袋状になっているが、他は外傾している。検出面での規模は(2.78×1.84-0.43m)である。

土 层 埋土は①・②層である。

遺 物 埋土中より底部片Po78と甕口縁部片が出土した。Po78はS K-205・239出土土器と接合した。

時 期 出土遺物より弥生時代中期後葉と考える。

S K-222 (挿図64・107・108 図版33)

位 置 A10グリッド中央部に位置し、土層断面よりS K-221に切られる。坑底標高は2.13mを測る。

形 態 平面形、底面形、断面形いずれも不定形である。壁の立ち上がりは、東側で中ほどがえぐられて袋状になっているが、他は外傾する。検出面での規模は(2.03×1.80-0.67m)である。

土 层 埋土は①～③層である。

- 遺 物** 上層より甕 Po86・87、底部 Po88、その他の土器片が出土した。接合関係は認められなかつたが、土器片の中には SK-221から混入したと考えられるものが含まれる。
- 時 期** 出土遺物より弥生時代中期後葉と考える。
- SK-223** (挿図65)
- 位 置** A10グリッド南西隅に位置する。残存坑底標高は2.60mを測る。
- 形 態** 暗渠破壊により全体形は不明だが、残存する平面形及び底面形は不定形を呈する。断面形は椀状である。残存部の規模は(1.57×1.07-0.32m)である。
- 土 層** 埋土は①～③層である。①・②・③層とも粘質土がブロック状に混じる。
- 遺 物** 上面付近より土器片が出土した。SK-41・144出土土器Po22と接合した。
- 時 期** 出土遺物より弥生時代中期後葉と考える。
- SK-226** (挿図66・103・108 図版14・31・33)
- 位 置** B10グリッド西側に位置する。坑底標高は2.59mを測る。
- 形 態** 暗渠破壊により全体形は不明だが、残存平面形は楕円形を、底面形は不定形を呈する。断面形は袋状であるが、南側はえぐれが大きいのに対し、北側は小さい。残存部の規模は(1.03×0.90-0.76m)である。底面中央部に(16×15-35cm)を測るビットがある。
- 土 層** 埋土は①～⑥層である。①・②・④層には、粘質土がブロック状に混じる。
- 遺 物** 甕 Po31・89・90・91、底部 Po92が出土した。Po31はSK-48出土土器と、Po89はSK-211・252出土土器と、Po90はSK-232・247出土土器とそれぞれ接合した。
- 性 格** 柱穴状の穴が底面に残ることから落し穴の可能性を考えられるが、立地が低地であることから疑問がある。
- 時 期** 出土遺物より弥生時代中期後葉と考える。
- SK-228** (挿図65・108 図版33)
- 位 置** B12グリッド北東隅に位置する。坑底標高は2.38mを測る。
- 形 態** 平面形、底面形とも不定形を呈する。断面形は大部分袋状であるが、東側は外傾している。検出面での規模は(2.48×1.75-0.38m)であり、底面南側に(67×50-13cm)の窪みがある。
- 土 層** 埋土は①～③層である。①・②層には粘質土がブロック状に混じる。
- 遺 物** 壺胴部 Po93、木製品が出土した。胴部は1個体が完全に復元できるものではなかった。木製品は薄く削りだした板状のものである。
- 時 期** 出土遺物より弥生時代前期中葉と考える。
- SK-230** (挿図66・123 図版40)
- 位 置** A11グリッド北側に位置し、土層断面よりSK-257に切られる。坑底標高は2.57mを測る。
- 形 態** 平面形は楕円形、底面形は不定形を呈する。断面形は椀状である。検出面での規模は(0.94×不明-0.33m)である。
- 土 層** 埋土は①・②層である。
- 遺 物** 底面より木製品W14が出土した。W14は先端部を削った杭状のもので2片あり、同一個体と考えられるが接合しなかつた。
- SK-232** (挿図68)
- 位 置** A10グリッド東側に位置する。坑底標高は2.62mを測る。
- 形 態** 平面形、底面形、断面形いずれも不定形である。壁の立ち上がりは、内傾する所と外傾する所がある。検出面での規模は(3.07×1.50-0.56m)である。
- 土 層** 埋土は①～④層である。
- 遺 物** 底面付近より甕が出土した。甕は、SK-226出土土器Po90と接合した。

- 時 期 出土遺物より弥生時代中期後葉と考える。
- S K-233 (挿図67)
- 位 置 A10グリッド南側に位置し、土層断面よりS K-214に切られる。坑底標高は2.40mを測る。
- 形 態 平面形、底面形ともに円形を呈する。断面形は皿状である。検出面での規模は(1.74×1.50-0.37m)であり、(110×42-12cm)の窪みがある。
- 土 層 埋土は①層である。
- 遺 物 埋土中より胴部片が出土した。
- S K-234 (挿図69)
- 位 置 B10グリッド南西隅に位置し、土層断面よりS K-235を切る。坑底標高は2.54mを測る。
- 形 態 平面形、底面形は楕円形、断面形は不定形である。壁の立ち上がりは南東部のみ内傾、その他は外傾する。検出面での規模は(0.96×0.77-0.43m)で、底面北側に(44×36-12cm)の窪みがある。
- 土 層 埋土は①～⑦層であり、①・⑤・⑦層には粘質土がブロック状に混じる。②層には砂が少量混じる。
- S K-235 (挿図69・108 図版15)
- 位 置 B10グリッド南西隅に位置し、土層断面よりS K-234・236・237に切られている。坑底標高は2.38mを測る。
- 形 態 平面形、底面形ともに梢円形を呈する。断面形は東側が外傾し、西側は袋状にえぐられている。検出面での規模は(2.40×1.87-0.61m)である。
- 土 層 埋土は①～⑫層である。⑤層には炭片が含まれる。
- 遺 物 埋土中より甕P o94、木製品が出土した。木製品は薄く削り出した板状のものである。
- 時 期 出土遺物より弥生時代中期後葉と考える。
- S K-236 (挿図67・122)
- 位 置 B10グリッド南西隅に位置し、土層断面よりS K-235・237を切る。坑底標高は2.59mを測る。
- 形 態 平面形、底面形ともに円形を呈する。断面形は南側が外傾し、北側は袋状にえぐれる。検出面での規模は(1.52×1.34-0.41m)である。
- 土 層 埋土は①・②層である。①・②層とも粘質土がブロック状に混じる。
- 遺 物 埋土中より胴部片、木製品W15が出土した。W15は細長い棒状の木製品であり加工痕が認められる。
- S K-237 (挿図70・108・109 図版33)
- 位 置 B10グリッド南西隅に位置し、S K-235を切り、S K-236・238に切られている。坑底標高は2.44mを測る。
- 形 態 平面形、底面形とも梢円形を呈し、断面形は逆梯形である。検出面での規模は(1.86×1.38-0.49m)であり、底面南側に(99×52-10cm)の窪みがある。
- 土 層 埋土は①～⑥層であり、①・④層には炭片が含まれる。②・③・⑤層には粘質土がブロック状に混じる。
- 遺 物 上面近くより甕P o95と底部片P o96が出土した。
- 時 期 出土遺物より弥生時代後葉と考える。
- S K-238 (挿図70・109 図版31)
- 位 置 A10グリッド南東隅に位置し、土層断面よりS K-237を切り、S K-23と切り合う。出土遺物より、S K-238がS K-23より新しい。坑底標高は2.69mを測る。
- 形 態 平面形は円形、底面形は梢円形を呈する。断面形は皿状である。検出面での規模は(0.57×0.57-0.21m)である。
- 土 層 埋土は①層である。
- 遺 物 土坑上面よりP o97が出土した。

- 時 期 出土遺物より弥生時代後期後葉と考える。
- S K-239 (挿図71・108・117 図版15・36・39)
- 位 置 A10グリッド北西部に位置し、坑底標高は2.40mを測る。
- 形 態 平面形、底面形、断面形いずれも不定形である。壁の立ち上がりは、東側で内傾、南側で外傾、西側で内傾、北側で直立気味と不規則である。検出面での規模は(1.89×1.42-0.50m)で、底面北東寄りに(66.0×53.0-22.8cm)の窪みがある。
- 土 層 埋土は①～⑤層である。③・④層には、粘質土がブロック状に混じる。
- 遺 物 埋土中よりS K-205・221と接合する底部P o78、土坑底面上20cm位の位置より底部P o98、棒状木製品W16が出土した。W16は先端部と中央部を加工している。
- 時 期 出土遺物より弥生時代と考える。
- S K-242 (挿図72・108)
- 位 置 A 9 グリッド西部に位置し、S K-31・189に切られる。坑底標高は2.75mを測る。
- 形 態 平面形、底面形は橢円形、断面形は不定形である。壁の立ち上がりは外傾する。検出面での規模は(1.42×0.83-0.25m)で、底面東寄りに(42.0×24.5-6.0cm)の窪みがある。底面には凹凸がかなり目立つ。
- 土 层 埋土は①～③層である。
- 遺 物 底面上13cm付近より底部P o99が出土した。
- 時 期 出土遺物より弥生時代と考える。
- S K-254 (挿図73・108)
- 位 置 A 9 グリッドのほぼ中央部に位置し、土層断面よりS K-31に切られる。土層断面よりS K-254が田である。坑底標高は2.83mを測る。
- 形 態 平面形、底面形共に不定形である。断面形は皿状を呈する。壁の立ち上がりは緩やかに外傾する。検出面での規模は(1.73×不明-0.40m)で、底面は平坦である。
- 土 层 埋土は①～③層である。
- 遺 物 底面上20cm付近で甕P o104が出土した。
- 時 期 出土遺物より弥生時代中期後葉と考える。
- S K-258 (挿図75)
- 位 置 A11グリッド南部に位置する。坑底標高は2.08mを測る。
- 形 態 平面形、底面形共に不定形である。断面形は皿状を呈する。壁の立ち上がりは外傾する。検出面での規模は(不明×1.40-0.27m)である。
- 土 层 埋土は①・②層である。共に、粘質土がブロック状に混じる。
- 遺 物 底面上27cm付近で焼け焦げた木片が出土した。
- S K-259 (挿図74・108・117・125 図版16・39・40)
- 位 置 A11グリッド中央部に位置し、土層断面よりS K-247に切られる。坑底標高は1.99mを測る。
- 形 態 平面形、底面形共に円形で、断面形は不定形である。壁の立ち上がりは外傾する。検出面での規模は(2.60×2.48-0.57m)で、底面は緩やかに傾斜する。
- 土 层 埋土は③～⑧層である。土層断面よりS K-247に切られるのは明瞭である。西側に隣接するS K-252との切り合いは不明である。
- 遺 物 甕P o107・108と木製品が多数出土した。その内、W28は匙状木製品、W38は柵である。
- 時 期 出土遺物より弥生時代中期後葉と考える。
- S K-263 (挿図75・124 図版17)
- 位 置 A11グリッド西部に位置し、土層断面よりS K-155に切られる。坑底標高は2.11mを測る。

形 態 平面形、底面形、断面形はいずれも不定形である。壁の立ち上がりは外傾する。検出面での規模は(1.38×不明-0.25m)で、底面には凹凸がみられる。

土 層 埋土は①～③層である。

遺 物 底面上5cm付近より板状木製品W42が出土した。

2. 溝

S D-01・02・04 (挿図76・110 図版21・34)

位 置 D 2グリッド南西隅より C 11グリッド南部にかけて検出した。検出段階では区別したが、土層状況、出土遺物、溝の走向等から同一遺構と考える。1区のS D-06へもつながっていく。検出面での標高は、2.90～3.80mで、土坑密集区の東側に位置する。S D-03を切る。

形 態 溝は緩やかに蛇行するが、溝の走向はほぼN-45°-Wの方向である。検出規模は、全長93.0m、幅1.0～2.5m、深さ0.10～0.25m程度である。断面形は不定形である。

土 層 埋土は、茶褐色系・黒褐色系の砂質土及び粘質土である。埋土中に炭片が少量混じる。

遺 物 土器片 P o114～116・118～125の壺・甌等が出土した。

時 期 出土遺物より弥生時代中期後葉と考える。

S D-03 (挿図76・110 図版21・33)

位 置 D 6グリッド北西部より A 7グリッド中央部にかけて検出した。S D-01・02・04に切られる。検出面での標高は、3.5～3.8mを測り、土坑群の北側に位置する。

形 態 溝の走向はN-88°-Wの方向である。検出規模は、全長29.5m、幅0.35～0.65m、深さ0.2～0.3mを測る。断面形は椀状を呈する。

土 層 埋土は①～⑤層であり、粘質土に砂混じりの層である。S D-01・02・04に比べ黒褐色系の埋土が目立つ。

遺 物 底面直上より P o117、その他数点の土器が出土した。溝西側先端付近の底面に杭が打ち込まれた状態で出土した。

時 期 出土遺物より弥生時代中期中葉と考える。

S D-05 (挿図77・121 図版22・38)

位 置 C 13グリッド南東部より C 15グリッド南部にかけて検出した。S D-06に切られる。検出面での標高は2.7～2.8mを測り、土坑群の東側に位置する。

形 態 溝の走向はほぼS-45°-Wの方向であるが、C 15グリッド南部で大きく西方向へ曲がる。検出規模は、全長23.8m、幅1.6～4.9m、深さ0.5～0.7mを測る。壁面、底面共に凹凸が目立ち、断面形は不定形である。数回にわたる水の強い流れによって削られたと考える。

土 層 土層は、褐色系・茶褐色系・黒褐色系の粘質土及び砂質土である。土層断面G-G'より、3回以上の大好きな堆積があったと推定する。

遺 物 埋土中より、土器片、木製品W43等を検出した。W43は木歎で、溝底面上20cm付近で出土した。

時 期 出土遺物より弥生時代と考える。

S D-06 (挿図77 図版22)

位 置 C 13グリッド南東部より C 16グリッド南西部にかけて検出した。S D-05・07・08を切る。検出面での標高は2.60～2.80mで、土坑群の東側に位置する。2区S D-04の延長と考える。

形 態 溝は緩やかに曲がりながら走向し、その向きは一定ではない。検出規模は、全長35.0m、幅0.8～1.8m、深さ0.2～0.25mを測る。断面形は皿状を呈する。

土 層 埋土は①・②層である。茶褐色粘質土に砂や小砾が混じる。S D-07の埋土と類似する。

S D-07 (挿図77 図版22)

位 置 D 14グリッド中央付近より C 16グリッド南西部にかけて検出した。S D-06に切られる。検出面での

標高は2.60～2.80mで、土坑群の東側に位置する。

形 態 溝は緩やかに曲がりながら走向し、その向きは一定ではない。検出規模は、全長24.6m、幅0.26～1.05m、深さ0.23～0.32mを測る。断面形はほぼ椀状を呈する。

土 層 埋土は茶褐色粘質土で、砂や小礫が混じる。SD-06の埋土と類似する。

第2節 古墳時代の遺構

福岡遺跡で古墳時代の遺構は、2区の土坑と4区の溝である。土坑は、1・2区合計で264基検出されているが、このうち古墳時代の遺構は、A11・B11グリッドに集中して、13基検出された。弥生時代の土坑に比べ残存の深さが浅く、ほとんどが30cm以下である。溝は、自然の小河川と考えられ、いずれもほぼ東から西の方向へ走っている。

1. 土 坑

S K-199 (挿図79・109 図版32)

位 置 B11グリッド北東隅に位置する。坑底標高は2.67mを測る。

形 態 平面形、底面形ともに楕円形を呈する。断面形は大部分皿状であるが、東側の一部が袋状にえぐられている。検出面での規模は(1.35×1.09-0.36m)である。

土 層 埋土は①・②層である。①・②層とも粘質土がブロック状に混じる。

遺 物 底面より甕Po74、高壺Po75が、上面より土器片が出土した。Po75はSK-200・202出土土器と接合した。

時 期 出土した遺物より古墳時代前期と考える。

S K-200 (挿図79・109 図版32)

位 置 B11グリッド中央部に位置する。坑底標高は2.64mを測る。

形 態 平面形、底面形ともに楕円形を呈する。断面形は大部分椀状であるが、東側がえぐられている。検出面での規模は(1.06×0.91-0.32m)である。

土 層 埋土は①～③層である。①・③層には粘質土がブロック状に混じる。

遺 物 高壺Po75・76が出土した。Po75は、SK-199・202と接合関係が認められた。Po76は、SK-202と接合関係が認められた。

時 期 出土遺物より古墳時代前期と考える。

S K-202 (挿図78・109 図版32)

位 置 B11グリッド中央部に位置する。坑底標高は2.59mを測る。

形 態 平面形、底面形は共に不定形、断面形は皿状である。検出面での規模は(1.51×1.24-0.22m)である。

土 層 埋土は①層である。

遺 物 高壺Po75・76が出土した。Po75はSK-199・200と、Po76はSK-200と接合関係が認められた。

時 期 出土遺物より古墳時代前期と考える。

S K-250 (挿図80・119・124 図版38)

位 置 B11グリッド南部に位置する。坑底標高は2.68mを測る。

形 態 平面形、底面形ともに楕円形で、断面形は不定形である。壁の立ち上がりは外傾する。検出面での規模は(1.54×0.97-0.23m)である。

土 層 埋土は①・②層である。②層には粘質土がブロック状に混じる。

遺 物 底面直上より板状木製品WI7・18が出土し、底面上12cmの位置で土師器洞部片が出土した。

時 期 出土遺物より古墳時代と考える。

S K-252 (挿図80・109・120・121 図版17・33・40)

- 位 置** A11グリッド中央部に位置する。弥生時代の土坑S K-259と接している。坑底標高は2.10mを測る。
- 形 態** 平面形、底面形、断面形いずれも不定形である。壁の立ち上がりは、北東部と南西部で内傾するが他では外傾する。検出面での規模は(1.41×1.39-0.35m)で、底面は平坦である。
- 土 層** 埋土は①～③層である。弥生時代の土坑の埋土にみられる粘質土ブロックは混じらない。
- 遺 物** 底面直上より土師器甕P o102、弥生甕P o101、木製品W19・20が出土した。W19は地面に刺さった状態で検出した。
- 時 期** 出土遺物より古墳時代前期と考える。
- S K-256** (挿図81・109・117 図版15・30・40)
- 位 置** A11グリッド中央部に位置する。坑底標高2.25mを測る。
- 形 態** 平面形、底面形共に楕円形で、断面形は不定形である。壁の立ち上がりは、北側で直立気味に外傾するが、他では内傾する。検出面での規模は(1.23×0.88-0.45m)で、底面はほぼ平坦である。
- 土 層** 埋土は①～③層である。③層には粘質土がブロック状に混じる。
- 遺 物** 底面上37cm付近で甕片P o105、木製品W21が出土した。W21は磨滅の為先端部が丸くなる。
- 時 期** 出土遺物より古墳時代前期と考える。
- S K-257** (挿図81・109 図版17・33)
- 位 置** A11グリッドの中央付近に位置し、S K-230を切る。坑底標高2.61mを測る。
- 形 態** 平面形、底面形共に不定形で、断面形は椀状を呈する。壁の立ち上がりは外傾する。検出面での規模は(0.87×不明-0.27m)である。底面はすり鉢状に窪み、中央部で最も深くなる。
- 土 層** 埋土は①層である。
- 遺 物** 底面直上より甕片P o106が出土した。
- 時 期** 出土遺物より古墳時代後期と考える。
- ## 2. 溝
- S D-17** (挿図82 図版24)
- 位 置** E-17グリッド北東隅よりE-16グリッド南西部にかけて検出した。検出面での標高は7.20～7.40mで、東側にS D-18が並走する。
- 形 態** 溝の走向はS-45°-Wの方向である。検出規模は、全長19.5m、幅0.35～0.8m、深さ0.13m前後で、断面形は椀状を呈する。
- 土 層** 埋土は茶褐色粘質土で、砂礫が混じる。S D-18の埋土と同じである。
- S D-18** (挿図82 図版24)
- 位 置** E-16グリッド北東隅より同グリッド南部にかけて検出した。検出面での標高は7.30～7.40mで西側にS D-17が並走する。
- 形 態** 溝の走向はS-60°-Wの方向である。検出規模は、全長8.3m、幅0.8～1.45m、深さ0.45m前後を測る。断面形は不定形である。
- 土 层** 埋土は茶褐色粘質土で、砂礫が混じる。S D-17の埋土と同じである。
- 遺 物** 埋土中より土器片数点を検出した。
- 時 期** 出土遺物より古墳時代と考える。
- S D-19・20・28・29** (挿図82・83 図版24)
- 位 置** E-24グリッド北西部よりA-17グリッド南部にかけて検出した。検出段階では区別したが、土層状況、溝の走向等から同一遺構と考える。検出面での標高は7.00～8.20mで、4区のほぼ中央に位置する。
- 形 態** 溝の走向はS-70°-Wの方向である。検出規模は各所で異なるが、全長85m、幅1.0～2.0m前後、深さ0.1～0.3m程度である。断面形は不定形である。
- 土 層** 埋土は、茶褐色系、黒褐色系の砂質土及び粘質土がほとんどである。一部、灰色砂質土層がある。

遺物	S D-28・29より土器片を検出した。特にD-23グリッド部分では多数出土した。
時期	出土遺物より古墳時代と考える。
S D-36	(挿図83)
位置	E-25グリッド北部よりC-25グリッド北東隅にかけて検出した。検出面での標高は8.00～8.30mで、4区北東隅に位置する。
形態	溝は蛇行しており、走向は一定でない。検出規模は、全長17.0m、幅0.5～1.7m、深さ0.25～0.6mを測る。断面形は不定形である。溝は西側で急に深くなる。
土層	埋土は、灰褐色系・暗灰色系の粘質土及び砂礫土である。
遺物	埋土中より土器片、黒曜石製加工痕削片 S 5 が出土した。
時期	出土遺物より古墳時代と考える。

第3節 中世以降の遺構

1区より溝2基、2区より土壤基1基、3区より溝7基・杭列、4区より土坑21基・溝23基・掘立柱建物2基・ピット群・石列、5区より土坑1基・溝4基・杭列・ピットを検出した。福岡遺跡の中で中世の遺構分布の中心は4区であるが、この事実と4区該当地区の小字名が「倉常」だということを考え合わせると非常に興味深い。これらの遺溝は、今後資料の集積を待ち、当地に存在する条里制に関連して歴史的に位置付ける必要がある。また、2区の土壤基については、単独で低地に存在する理由等さらに検討する必要がある。

1. 土坑

S K-401	(挿図84)
位置	B-17グリッド中央北寄りに位置し、北西側をトレンチにより削平されている。坑底標高は6.90mを測る。
形態	平面形、底面形とも長方形であったと考える。断面形は逆梯形である。検出面での規模は(1.59以上×0.68以上-0.18以上m)である。
土層	埋土は茶褐色系の2層で、粘質土ブロックを含む。
S K-402	(挿図84)
位置	B-18グリッド北東部に位置する。坑底標高は6.88mを測る。
形態	平面形、底面形ともほぼ椭円形である。断面形は逆梯形である。検出面での規模は(1.17×0.60-0.25m)である。
土層	埋土は2層である。堆積の状況から、人為的に埋められたものと考える。
S K-403	(挿図84)
位置	B-18グリッド北東部に位置する。坑底標高は6.93mを測る。
形態	平面形、底面形は不定形である。断面形は北側部分がテラス状となる逆梯形である。検出面での規模は(1.28×0.62-0.21m)である。
土層	埋土は灰茶褐色粘質土1層で、砂が混じる。
S K-404	(挿図84)
位置	B-18グリッド北東部に位置する。坑底標高は7.00mを測る。
形態	平面形、底面形とも長方形に近い不定形である。断面形は逆梯形である。検出面での規模は(1.00×0.62-0.14m)で、底面北側に溝状の細い落ち込みと、ピット状の落ち込みがある。
土層	埋土は①～⑦層である。②・③・⑥・⑦層には小疊が混じる。
S K-405	(挿図84)
位置	南側沈砂池の西壁で断面により確認した。坑底標高は5.88mを測る。
形態	断面形は、上部がラッパ状に開く長方形である。検出された規模は、上面で1.00m、底面で0.62m、

深さ0.72mである。

土 層 SK-405の埋土は⑧から⑫層で、ほぼ水平に堆積している。⑪層に植物遺体が含まれている他は、疊または砂が混じる。

性 格 井戸である可能性もあるが、底面の絶対高が高いため、検討の余地がある。

S K-406 (挿図84)

位 置 E-19グリッド北西部に位置する。坑底標高は7.44mを測る。

形 態 平面形、底面形ともほぼ円形である。断面形は皿状である。検出面での規模は(0.90×0.84-0.15m)である。

土 層 埋土は灰褐色粘質土1層で、砂が混じる。

S K-407 (挿図85)

位 置 E-19グリッド北西部に位置する。坑底標高は7.46mを測る。

形 態 平面形、底面形とも不定形である。断面形は逆梯形である。検出面での規模は(0.92×0.60-0.13m)である。

土 层 埋土は灰褐色粘質土1層で、砂が混じる。

S K-408 (挿図85)

位 置 D-19グリッド中央北側に位置する。坑底標高は7.30mを測る。

形 態 平面形、底面形とも不定形である。断面形は東側がテラス状となる逆梯形である。検出面での規模は(1.16×0.80-0.37m)である。

土 层 灰褐色砂質土1層である。

性 格 S B-01に付随する施設であるとも考えられる。

S K-409・410 (挿図85)

位 置 C-19グリッド南西部に位置する。互いに切り合うが、土層断面よりS K-410が新しい。坑底標高はS K-409が7.02m、S K-410が7.12mを測る。

形 態 切り合っているためそれぞれの形態は不明であるが、平面形、底面形とも不定形であったと考える。断面形はとともに逆梯形であるが、S K-409には南側にテラス状の部分がある。検出面でのそれの規模は、S K-409が(1.08以上×0.92-0.26m)、S K-410が(1.30×0.96以上-0.19m)である。

土 层 どちらとも褐色系の埋土で、S K-409の③層を除けば疊が混じる。

S K-411 (挿図85)

位 置 C-22グリッド中央に位置する。坑底標高は7.67mを測る。

形 態 平面形、底面形ともほぼ円形である。断面形は皿状である。検出面での規模は(1.35×1.09-0.16m)で、西側にピットがあり、それぞれ切り合う関係にあるが、土層断面よりS K-411の方が新しい。

土 层 埋土は①層の灰褐色砂質土で、細かい炭片が混じる。

遺 物 埋土中より土師質土器片が出土した。

時 期 出土遺物より中世と考える。

S K-412 (挿図85)

位 置 C-22グリッドのほぼ中央に位置する。坑底標高は8.68mを測る。

形 態 平面形、底面形とも長方形である。断面形は逆梯形である。検出面での規模は(0.54×0.35-0.13m)である。

土 层 埋土は灰褐色粘質土1層で、小疊が混じる。

S K-413 (挿図85)

位 置 C-22グリッドのほぼ中央に位置する。坑底標高は8.64mを測る。

形 態 平面形、底面形とも方形である。断面形は逆梯形である。検出面での規模は(0.68×0.42-0.15m)

である。

土 層 埋土は灰褐色粘質土1層で、小礫が混じる。

S K-414 (挿図86)

位 置 C-18グリッド中央に位置する。坑底標高は6.92mを測る。

形 態 平面形、底面形とも不定形である。断面形は逆梯形である。検出面での規模は(1.73×0.63-0.41m)である。

土 層 埋土は2層で、ともに灰茶褐色系であるが、①層は粘質土で、②層は砂礫が堆積している。

性 格 位置、形態よりS D-38とのつながりを考えられ、溝状造構の可能性もある。

S K-415 (挿図86)

位 置 A-21グリッド北東部に位置する。坑底標高は7.41mを測る。

形 態 平面形、底面形ともにほぼ橢円形である。断面形は皿状である。検出面での規模は(1.39×1.05-0.12m)である。

土 層 埋土は灰褐色砂質土1層で、細かい炭片が混じる。

S K-416 (挿図86)

位 置 B-22グリッド中央に位置する。坑底標高は7.44mを測る。

形 態 平面形、底面形とも不定形である。断面形は逆梯形である。検出面での規模は(0.91×0.47-0.17m)である。

土 層 埋土は灰褐色砂質土1層で、小礫が混じる。

S K-417 (挿図86)

位 置 B-22グリッドのほぼ中央に位置する。坑底標高は7.61mを測る。

形 態 平面形、底面形ともに不整円形である。断面形は逆梯形である。検出面での規模は(1.02×0.97-0.10m)で、底面にピットが3ヶ所ある。これらのピットは、土層断面よりSK-417よりも先に掘られたものであると判断される。

土 層 埋土は灰褐色砂質土1層で、小礫が混じる。ピットの埋土も同色で、小礫も混じるが、砂質土ではなく粘質土である。

S K-418 (挿図86)

位 置 D-22杭とD-23杭を結ぶライン上のほぼ中間に位置する。東側を暗渠により削平されている。坑底標高は7.73mを測る。

形 態 平面形、底面形ともに橢円形であったと考える。断面形は皿状である。検出面での規模は(1.25×0.69以上-0.09m)である。

土 層 埋土は灰褐色粘質土1層である。

遺 物 底面南側より瓦質土器片が出土している。

時 期 出土遺物より中世と考える。

S K-419 (挿図86)

位 置 D-25グリッド中央に位置する。坑底標高は8.14mを測る。

形 態 平面形、底面形とも長方形である。検出面での断面形は皿状であるが、当初は逆梯形であったと考える。検出面での規模は(2.19×1.18-0.05m)である。

土 层 埋土は灰茶褐色砂質土1層で、小礫が混じる。

S K-420 (挿図86)

位 置 B-16グリッド北西部に位置する。東側をトレンチにより削平されている。坑底標高は6.58mを測る。

形 態 平面形、底面形とも不定形である。断面形は逆梯形である。検出面での規模は(1.54×0.94以上-0.48m)で、北側に(49以上×45-25cm)の落ち込みがある。

- 土 層** 埋土は全て褐色系であるが、③層のみ砂質土である。①・②層には小礫が混じる。
S K-421 (挿図87・110 図版18・34・43)
- 位 置** A-16グリッドにあり、調査区の西端に位置する。西側を排水溝により削平されている。坑底標高は6.64mを測る。
- 形 態** 平面形、底面形ともに不定形である。断面形は皿状である。検出面での規模は(3.55以上×3.55-0.34m)で、底面に北西から南東方向にのびる溝状の落ち込み(156×28-3cm)と、ビット状の落ち込み(38×23-6cm)がある。底面には小礫を意図的に配しており、特に南東端には明らかに一ヶ所にまとめた集石がある。
- 土 層** 埋土は①～③層で、①・③層は茶褐色系の粘質土である。②層は灰の堆積層で、方形に広がる帶状の部分となって検出された。③層の粘質土は自然に堆積したものではなく、底面に小礫を配した後に貼ったと考えられるものである。
- 遺 物** ①層中より、須恵器盤Po110、土師質皿Po111、坏Po112・113の破片の他、土師質土器片が出土している。また特筆されるものとして、③層上面に置かれるような形で布の断片が出土している。出土した布の大きさは(17×10cm)程度の長方形で、部分的に幾重にも重なるようなものである。布を織物と編み物に分類した場合、出土した布は織物と考えられ、その織りは平織りと呼ばれるものである。その織密度は1cm間に縦糸20本、横糸12本となる。またこの織物を構成している糸は右捻りで、1cm間に4回の捻りが認められ、比較的よく捻られている。材質については縦糸が1cm間に20本で、織密度が「麻」といわれるものと同じことから、当該布も「麻」で織られたものと考える。このように布が単独で出土することは非常に稀であるが、このことには、②層に堆積していたアルカリ性を示す灰の吸水性によって保水されていたことと、アルカリ性に強い麻の性質とが考えられる。
- 性 格** ③層は、土坑底面に集石を施した後に、底面を平坦にするためのものと考えられる。②層に堆積している灰は、その中に炭片すら含んでおらず、またその下に布が残っていること、③層に火を受けた痕跡がないことから考えても、その場で火を燃やしていた事実ではないと考える。以上の2点から性格を推察することは妥当であり問題点も多いが、何らかの祭的な行為が考えられる。今後これに類似した遺構の発掘件数の増加を待ちたい。
- 時 期** 出土した土器より中世と考える。
- S K-501** (挿図98・116 図版29・37)
- 位 置** C-30グリッドに位置する。坑底標高は8.38mを測る。
- 形 態** 平面形は隅丸長方形、底面形は橢円形、断面形は椀状である。検出面での規模は(1.62×1.10-0.38m)である。
- 土 層** 埋土は①層であり、現在の耕土と同質のものである。
- 遺 物** 埋土中よりPo217が出土した。Po217は燈明皿である。
- 時 期** 出土遺物より近世以降と考える。
- ## 2. 溝
- S D-08** (挿図77 図版22)
- 位 置** D14グリッド南東部よりC15グリッド中央部にかけて検出した。埋土観察によりS D-05・06を切るが、S D-07との切り合い関係は不明である。検出面での標高は2.80m前後で、土坑群の南側に位置する。
- 形 態** 溝の走向はN-82°-Wの方向である。検出規模は、全長13.5m、幅0.25-0.4m、深さ0.13m前後を測る。断面形は椀状を尾する。
- 土 層** 埋土は①・②層で、茶褐色粘質土に砂が混じる。
- S D-11** (挿図88 図版23)

- 位置 F-8グリッドよりD-4グリッド北東隅にかけて検出した。検出面での標高は5.20~5.80mで、3区東側に位置する。
- 形態 溝の走向はS-52°-Wの方向である。検出規模は、全長40.1m、幅0.2~0.7m、深さ0.08~0.2mを測る。断面形は椀状を呈する。
- 土層 埋土は①・②層で、灰褐色粘質土と褐色粘質土である。
- S D-14 (挿図89 図版23)
- 位置 C-5グリッド北部よりD-5グリッド西部にかけて検出した。検出面での標高は4.90~5.10mで、S D-13の北側に位置する。
- 形態 溝の走向はN-68°-Wの方向である。検出規模は、全長16.9m、幅2.5~2.6m、深さ0.5m前後を測る。断面形は不定形である。溝の東部分から判断して、溝の掘り込みはかなりしっかりしており、直線的である。
- 土層 埋土は①~③層で、黄灰色・灰褐色の砂礫層である。
- S D-26 (挿図89)
- 位置 E-19グリッド南部よりC-19グリッド南部にかけて検出した。検出面での標高は7.40~7.60mを測る。ピット群の西側に位置する。
- 形態 緩やかに蛇行するが、溝の走向はN-53°-Wの方向である。検出規模は、全長19.3m、幅0.8~1.8m、深さ0.18~0.4mを測る。断面形は不定形である。
- 土層 埋土は灰褐色砂礫層の1層である。礫は比較的大きくぎっしりつまっている。
- 遺物 埋土中より土器片を検出した。
- 時期 出土遺物より中世以降と考える。
- S D-39 (挿図90・126 図版29・37)
- 位置 D-28グリッドで検出した。検出面での標高は8.50~8.70mを測る。
- 形態 緩やかに湾曲する。溝の走向はS-40°-Wの方向である。検出規模は、全長8.0m、幅0.7~1.7m、深さ0.2~0.3mを測る。
- 土層 埋土は褐色砂礫①層である。
- 遺物 埋土中より若干の土器片と黒曜石製石鏃S 10が出土した。S 10は未成品である。
- S D-40 (挿図90・126 図版29・37)
- 位置 C-28グリッドからD-28グリッドにかけて検出した。検出面での標高は8.30~8.50mを測る。
- 形態 大きく湾曲している。溝の走向はS-70°-WからS-20°-Eへ変化している。検出規模は、全長12.0m、幅0.8~1.9m、深さ0.18~0.3mを測る。
- 土層 埋土は褐色砂礫①層である。礫は小振りである。
- 遺物 埋土中より黒曜石製加工痕剥片S 15が出土した。
- S D-41 (挿図91・116 図版29・37)
- 位置 D-31グリッドよりD-28グリッド南部にかけて検出した。検出面での標高は8.50~9.20mを測る。
- 形態 ほぼ直線状を呈する。溝の走向はS-40°-Wの方向である。検出規模は、全長36.0m、幅0.9~2.0m、深さ0.3~0.94mを測る。断面形はU字状が基本である。
- 土層 埋土は褐色砂礫①層である。
- 遺物 埋土中より繩文土器P o218、弥生土器片、黒曜石片が出土した。
- S D-42 (挿図92・116・126・127 図版29・37)
- 位置 C-32グリッド南部よりA-26グリッド西部にかけて検出した。検出面での標高は8.10~9.20mを測る。
- 形態 緩やかに蛇行するが、溝の走向はS-60°-Wの方向である。検出規模は、全長62.0m、幅0.9~3.0m、深さ0.16~1.05mを測る。断面形は不定形である。

土層 埋土は褐色砂礫①層である。
遺物 埋土中より縄文土器 P o219・220、弥生土器片、黒曜石製石鏃 S 8・9 とサヌカイト製石鏃 S 11、黒曜石製石錐 S 12・13・14が出土した。S 9・13・14は未成品である。

3. 掘立柱建物

S B-01 (挿図93・111・122 図版34・42)
位置 D-19・-20、E-20グリッドにわたって位置する。D・E-19グリッドを中心とするピット群の北側にあたり、西下がりの緩傾斜面に立地する。西端柱穴ラインのほぼ内側にSK-408がある。検出面での標高は7.60～7.70mを測る。
形態 梁間2間(4.38m)、軒行3間(7.66m)の総柱建物で、北側に廂を持つものと推定され廂部分は北側1m前後の所に柱穴が並ぶ。但し、東側P 4・P 5間の柱穴と、P 4北側の廂柱穴は検出していない。柱穴間距離はP 1から2.66・2.60・2.40・-・-・2.42・2.62・2.60・2.13・2.25・(P 2-10) 2.36・(P 3-11) 2.10・(P 6-11) 2.05・(P 7-10) 1.84・(P 9-10) 2.84・(P 10-11) 2.43mで、廂部分はP 12から2.75・2.64・-である。主軸はN-81°-Wである。
柱穴 各柱穴の検出面での規模はP 1(21×19-34) P 2(28×24-42) P 3(31×20-31) P 4(29×15-48) P 5(20×18-43) P 6(42×28-59) P 7(24×20-51) P 8(34×26-39) P 9(24×17-10) P 10(25×24-30) P 11(27×25-34) P 12(21×20-25) P 13(43×29-15) P 14(34×21-23) cmである。
土層 各柱穴とも埋土は灰茶褐色粘質土1層である。
遺物 P 3より柱材W46が出土した。またP 11内から柱材であったと考えられる腐食した木片が多数出土している他、P 5内から石が出土している。

時期 P 1の東隣にあるピット内より出土した瓦質土鍋P o143や、周辺から出土した遺物などから、中世の建物であると考える。

S B-02 (挿図93・122 図版42)
位置 B-15・-16、C-16グリッドにわたって位置する。B-16グリッドを中心とするピット群の南側にあたり、西下がりの緩傾斜面に立地する。検出面での標高は7.00～7.10mを測る。
形態 梁間1間(2.30m)、軒行2間(3.90m)の建物と推定される。柱穴間距離はP 1から1.76・1.94・2.30・1.84・2.06・2.20mである。主軸はほぼ東西軸である。
柱穴 各柱穴の検出面での規模はP 1(24×23-42) P 2(21×20-32) P 3(26×23-40) P 4(29×23-43) P 5(18×16-31) P 6(29×26-29) cmである。
土層 各柱穴とも埋土は灰茶褐色粘質土1層である。
遺物 P 1より柱材W47と、その柱を安定させるためと考えられる石が出土している他、P 4・P 6からも底面より石が出土している。また図化できなかったがP 6内より土師質土器片が出土している。これらの他P 5の西隣にあるピットからも柱材が出土している。

時期 出土遺物より中世の建物と考える。

4. ピット群 (挿図94～98・111 図版25～28・34)

4区において多数のピットを検出した。特にB-16グリッド、D・E-19グリッドを中心とした場所に集中している。それらの中には、柱材が残っているものと内部に石があるものみられ、いくつかは掘立柱建物として第3節で説明している。しかし、今回検出したピットの大半は互いに対応するピットは見られない。ピットの径は様々であるが、概ね20～30cmのものが多い。これらのピットが掘られた時期については、ピット内より出土した瓦質土鍋P o143、土師質小皿P o144などから、中世のものと考える。

今回の調査においては掘立柱建物などの構造物を復元、推定することができず、ピット群の性格を把握するにはいたらなかった。しかし、4区にあたる場所の字名が「倉常」と呼ばれていることを考えると、今後、文献資

料などを詳細に調べることにより、ピット群と字名との関連が見出される可能性もあり、検討の余地を残すものである。

5. 石列 (挿図98)

4区D-23グリッド南側中央で、南北方向に延びる石列を検出した。検出面での標高は8.10m前後を測る。確認できた規模は、長さ3.75m、幅は最大幅で0.9mを測るが、後世の搅乱により原位置を保っていると考えられるものは少なく、実際には長さ、幅とも規模は大きくなるものであろう。並べられている石の大きさは大小様々であり、小さなものは径5cm程度のものから、大きなものは径15cmを超えるものもある。これらの石には河原石もあれば山石もあり、適当な大きさの石を選んで並べていたようである。平面的にはSD-28から南に向かって延びており、当初SD-28に付随する施設かと考えられたが、SD-28内で土師器が出土しているのに対し、石列内からは底面に回転糸切り痕の見られる土師質土器の小片が出土し、明らかに時間的な差異が認められるものであった。この石列に与えられる性格としては、掘り込み等は確認できていないものの、水路に伴うものと思われる。またその時期は、出土遺物から中世であると考える。

6. 杖列

S A-01 (図版28)

位 置 3区北部にて検出した。検出面での標高は5.80~6.20mである。

形 態 0.2~0.4m間隔でほぼ2列に並ぶ。杖列は、短辺9.6m、長辺14.4m以上の長方形区画を設定する。

性 格 水田の畦畔の補強と考える。条里制関連造構か否かは明瞭でない。

時 期 中世以降と考える。

S A-02 (図版29)

位 置 5区西部にて検出した。検出面での標高は8.40~8.55mである。

形 態 0.3~1m間隔をとり、幅0.4m程度の溝状造構の中に並ぶが、形態より2グループに大別できる。

性 格 水田畦畔に關係するものと考える。

時 期 中世以降と考える。

7. 中世墓

S X-01 (挿図99・125・128 図版19・20・41・42・43)

位 置 C8グリッド西側に位置し、土層断面よりSK-62を切る。墳底標高は2.84mを測る。

形 態 平面形、底面形とともに隅丸長方形を呈し、断面形は壁が明瞭に直立する。検出面での規模は(1.20×0.56~0.71m)である。

土 層 埋土は①~③層である。②・③層にかけて、6個の大きめの石を用いた石組みが存在した。

人 骨 底面より1体分の人骨が出土した。人骨の遺存状態は不良であったが、頭を北に、顔を東に向か、横臥屈葬での埋葬が復元された。頭部を除く遺骸の上下から、植物繊維（草状）が認められた。被葬者は熟年女性と考えられる¹¹⁾。

遺 物 底面より、和鏡J1、鉄製品F1・2・3、木製品W50・51・52・53（以上、遺骸東側）、木の実1・2（遺骸西側）を検出した。

和鏡J1は、面形7.3cm、鏡胎厚0.1cm、縁厚0.3cm、縁頂幅0.3cm、重畳35.6gを測る。鏡背には、鳥を二羽配した網薄双鳥文鏡である。鏡座は判別できない。内区には、鏡を挟んで対象な位置に薄と鳥の図像が配置され、鏡と薄の間に不明瞭な図像が一对ずつ認められる。界囲は細綿单圈、外区は網目文である。縁は外傾式厚縁中領である¹²⁾。発锈はほとんどないが、文様の鏽出はやや明瞭さに欠ける。外区文様に鏽くずれ部分があるのは、湯口があったためであろう。表裏とも暗青色を呈す。鏡面にわずかに残る2mm程度の付着物が纖維状のもの¹³⁾だとすれば、布で包まれていた可能性がある。平安時代末期（12世紀後半）のもの¹⁴⁾である。

鉄製品F1・2・3は、いずれも針であるが、銹がひどく遺存状態はよくない。F1は先端部を欠

損し、残存長は2.3cmである。F 2は完形品であり、長さ3.9cmである。F 3は先端部を欠損したものであり、残存長3.5cmである。いずれも糸を通す穴が認められ、F 1・3ともにF 2と同一形態であったと考えられる。

木製品W50・51は1対となる合子で、鏡箱として利用されたと考えられるものである。身をW50、蓋をW51とする。W51は、口径13.25cm、器高2.0cm、頂部厚0.5cmを測る。ロクロで削られ、内外面とも黒漆塗りである。一部は欠損するが、保存状態は良好である。W50は、口径12.5cm、器高2.4cm、底部径13.0cm、底部厚0.7cmを測る。ほぼ垂直に立ちあがる器体口縁部に段をつけ、蓋と接合するようにしたものである。ロクロで削られ、内外面とも黒漆塗りであり、W51と同様である。一部を欠損するが、保存状態は良好である。W50・51とも樹種はイヌノキである。

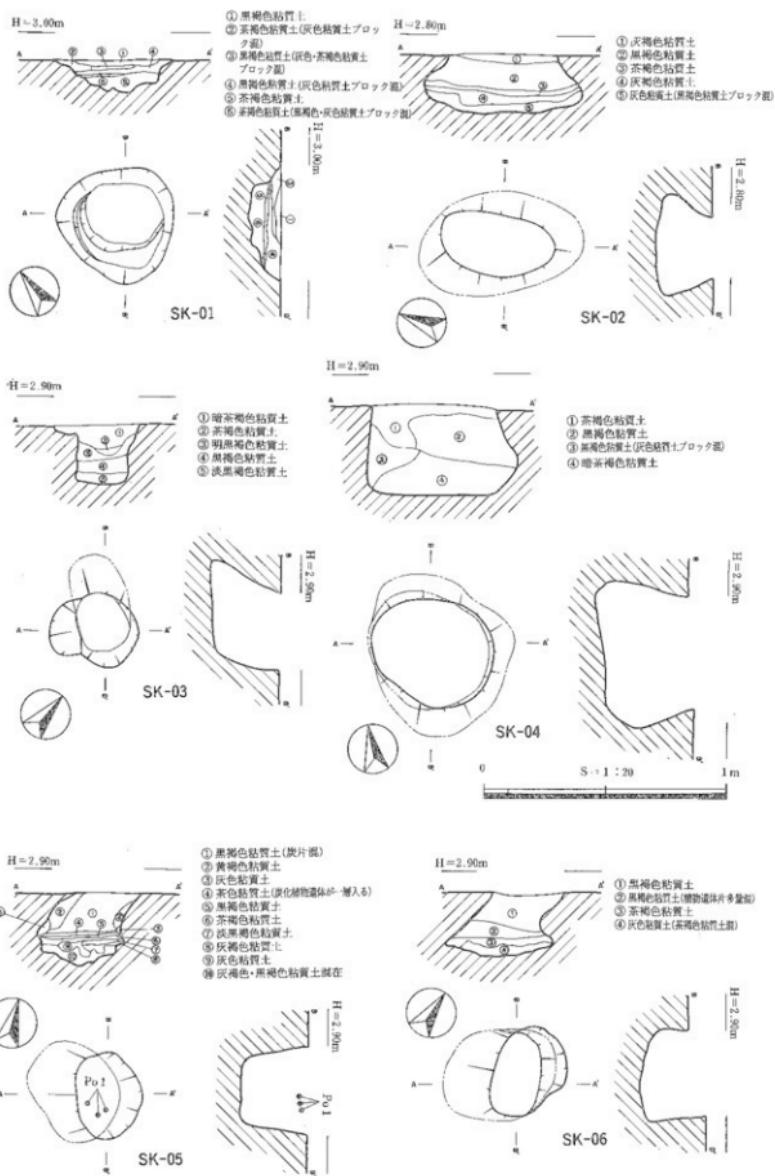
木製品W52・53は櫛である。W52は、肩部に丸味を持つ長方形の横櫛でA II型式⁽⁵⁾に属し、一般には梳櫛と呼ばれるもので、黒漆塗りの精製品である。背の断面形は柳葉形であり、歯は細く3cmあたり平均歯数は38枚となっている。幅12.6cm、高さ3.9cm、厚さ0.85cmである。2つに折れていたが完存する。W53も、肩部に丸味を持つ長方形の横櫛でA II型式⁽⁵⁾に属する。一般に解櫛と呼ばれるもので、黒漆塗り⁽⁶⁾の精製品である。背の断面形は柳葉形であり、3cmあたりの平均歯数は8枚である。残存幅9.05cm、推定幅約13cm、高さ3.9cm、厚さ0.8cmである。残存部は2つに折れ、約3分の1を失っている。W52・53とも樹種はトチノキである。

その他に、栗の実、柿の種子を検出した。栗の実は20個以上出土した。

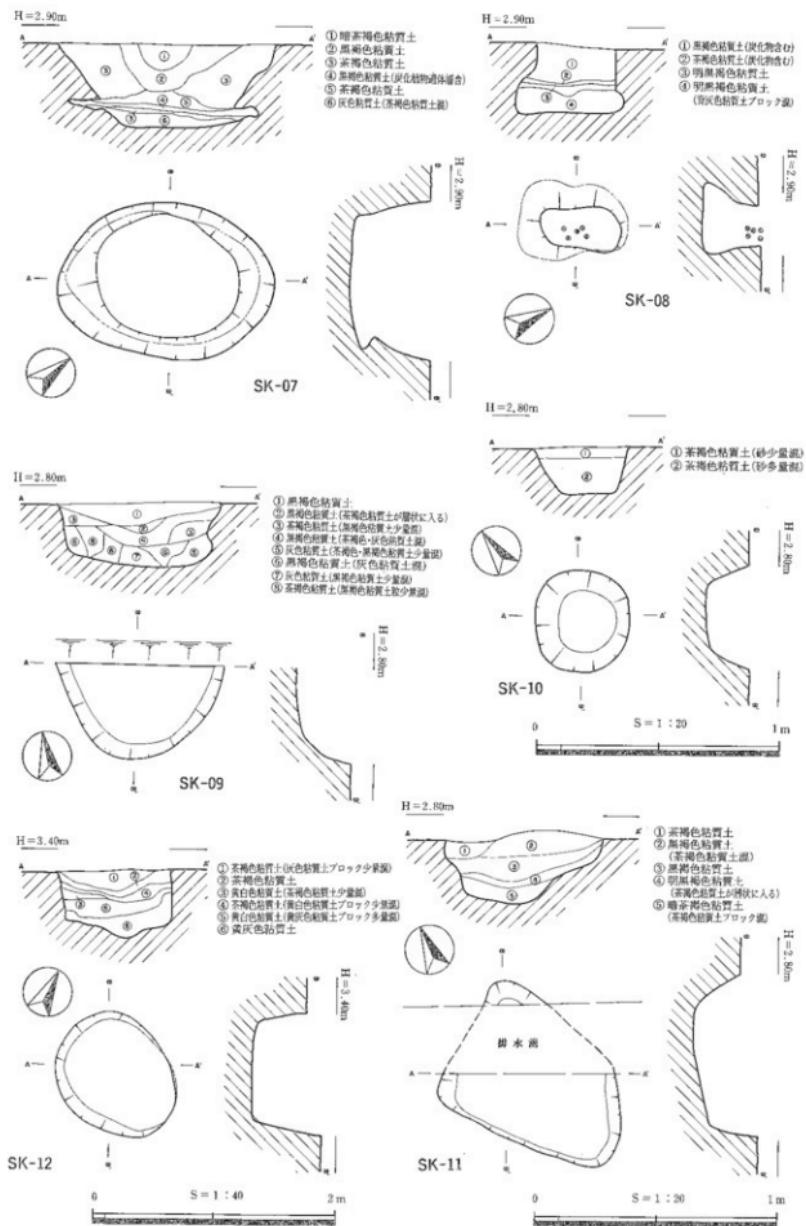
性 格 土壙墓である。

時 期 平安時代末期以降である。

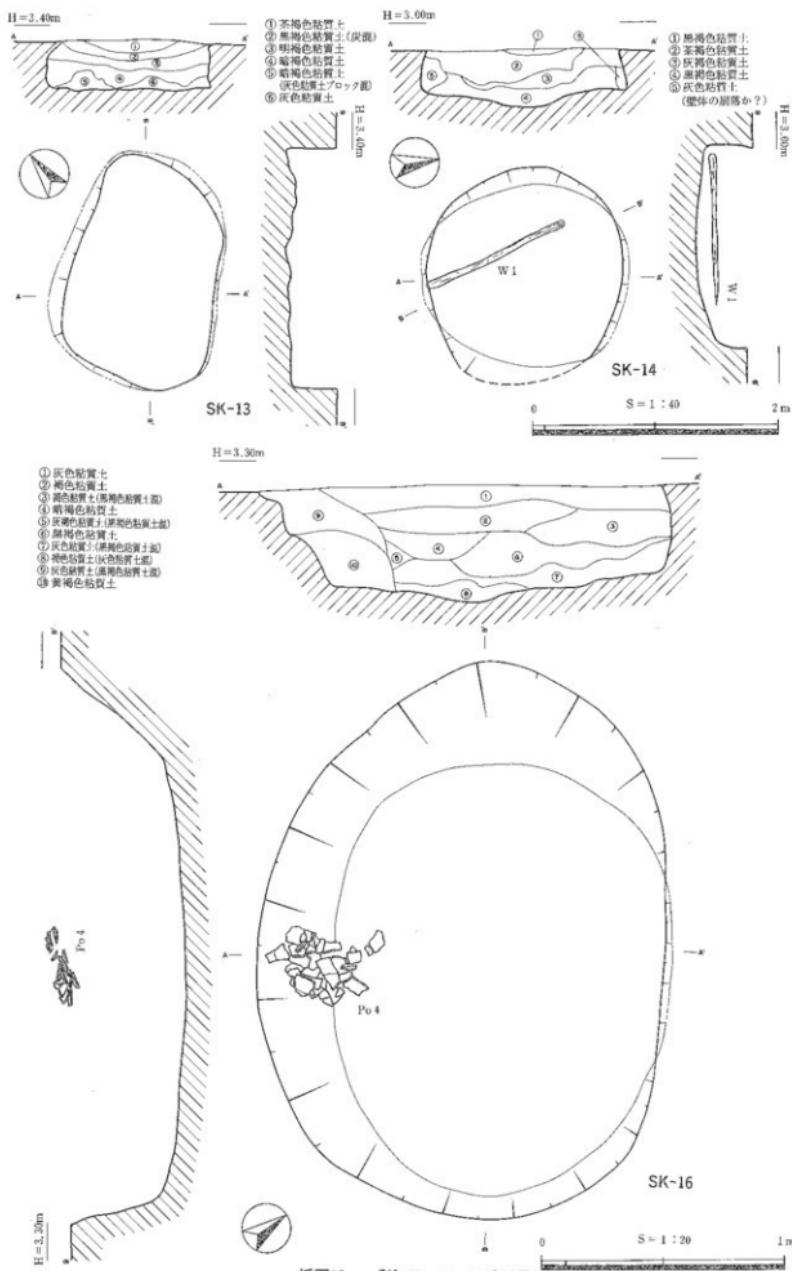
- 註 (1) 鳥取大学医学部 井上貴央氏御教示
(2) 中野政樹「和鏡」『日本の美術』42号 至文堂 1969
(3) 京都芸術短期大学 故小谷次男氏御教示
(4) 大阪市立博物館 前田洋子氏御教示
(5) 「木器集成図録」 近畿古代篇 1985
(6) W50・51・52・53とも「黒漆」は外見上よりの判断であり、科学分析は行なっていない。



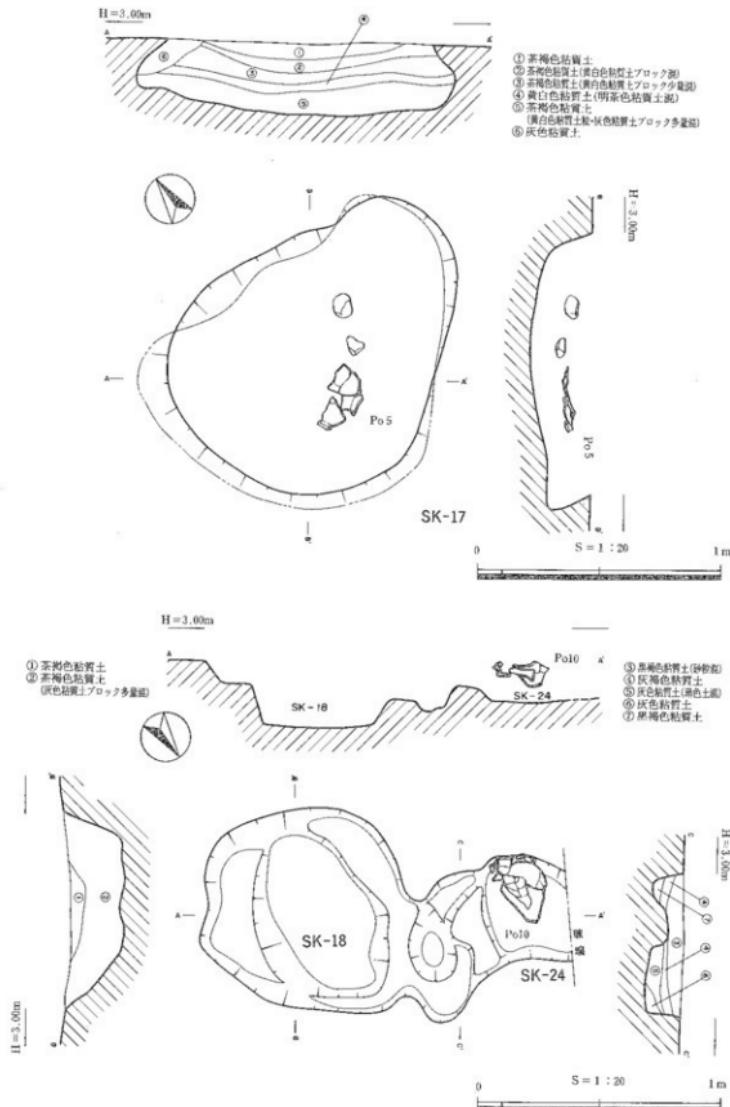
擲圖11 SK-01・02・03・04・05・06遺構図



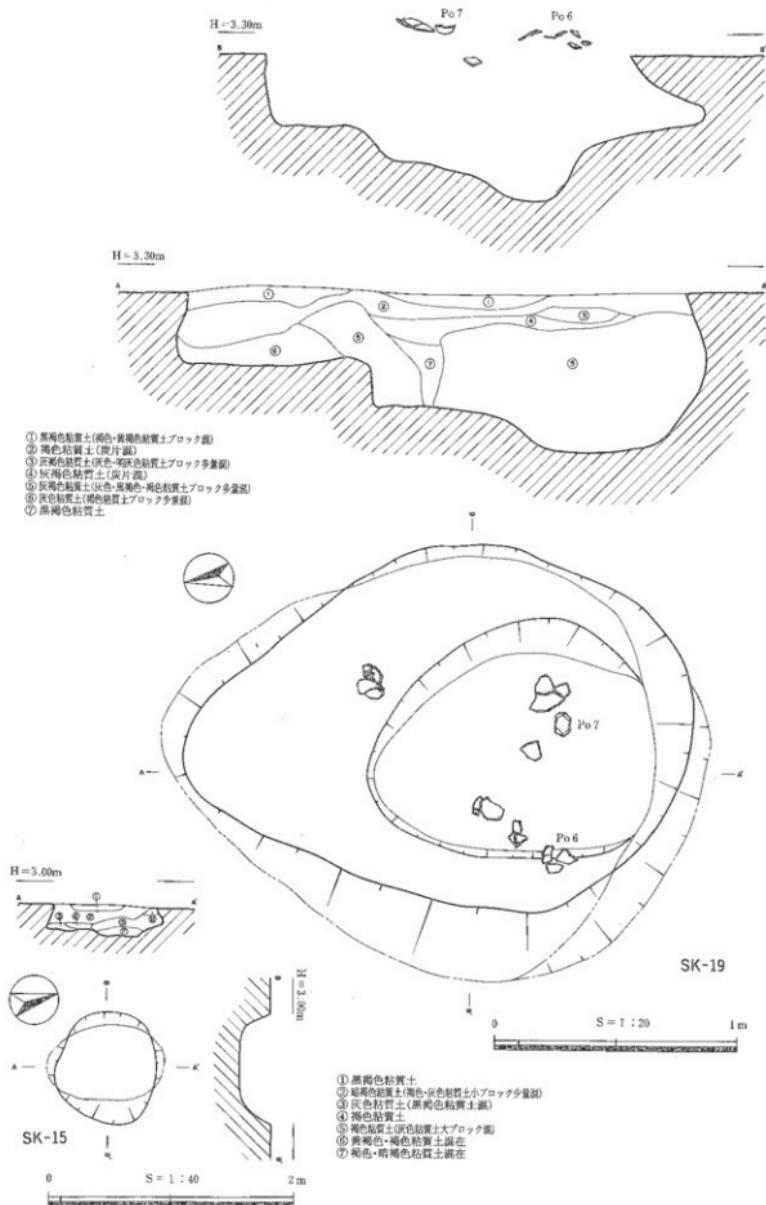
插図12 SK-07・08・09・10・11・12造精図



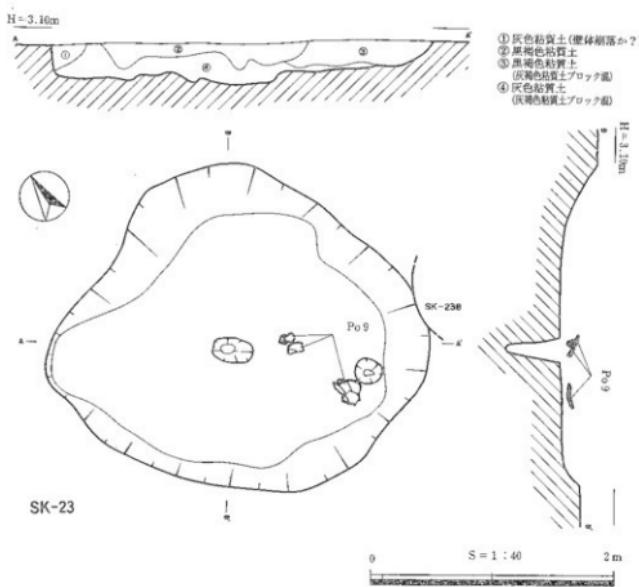
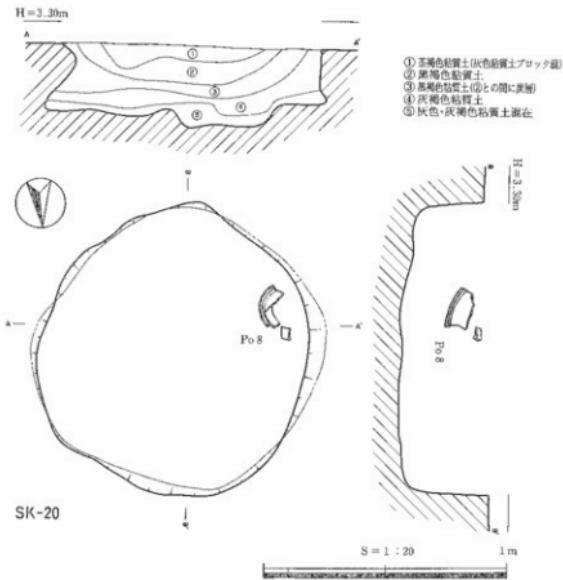
- 48 -



挿図14 SK-17・18・24造構図



擲図15 SK-15・19遺構図



摺図16 SK-20・23造構図

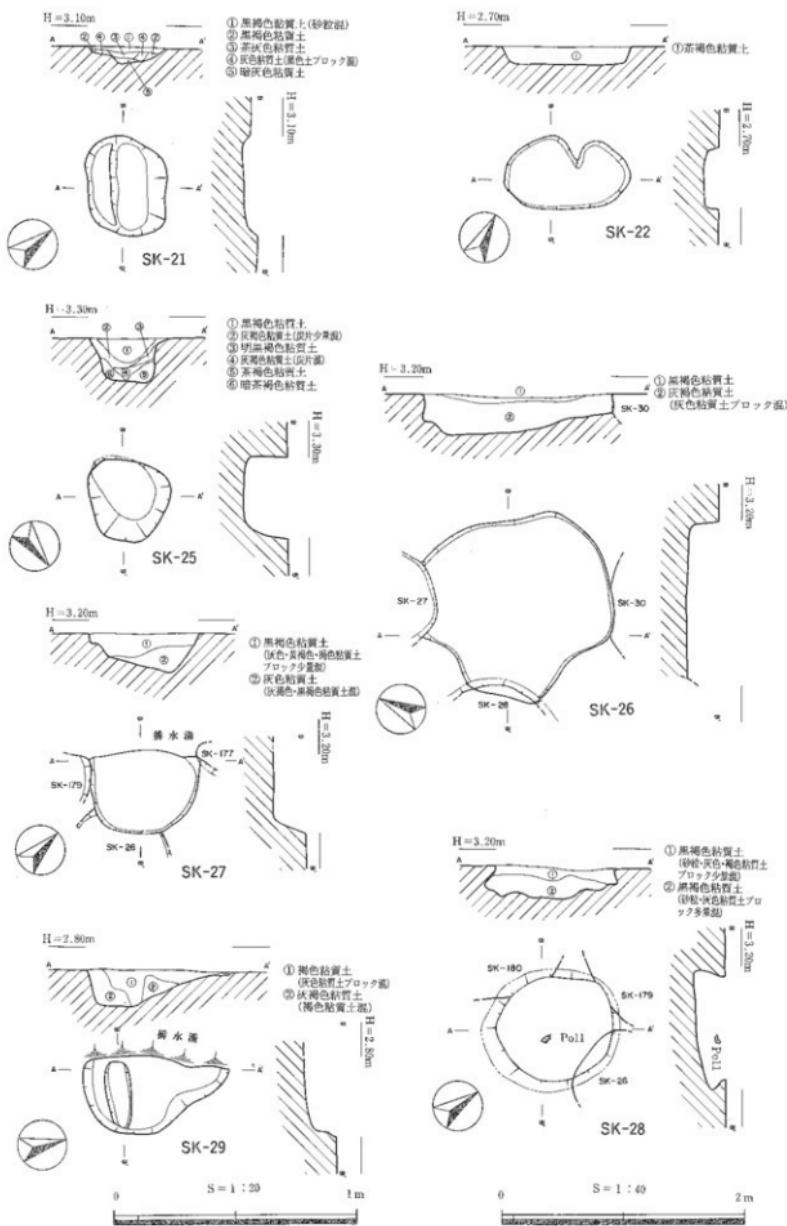
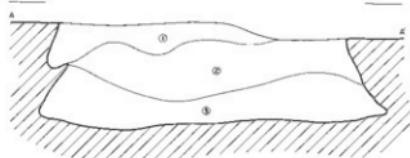
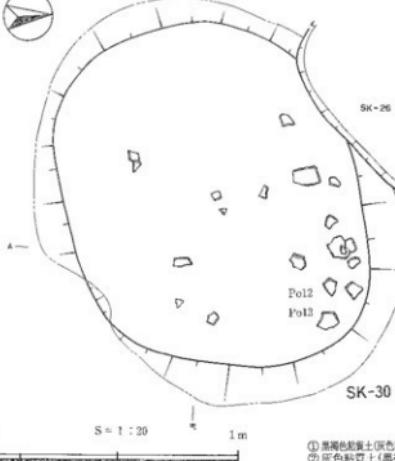


図17 SK-21・22・25・26・27・28・29遺構図

H = 3.20m



- ① 黒褐色粘質土(灰色粘質土ブロック少量部)
- ② 黒褐色粘質土(灰色粘質土ブロック多量部)
- ③ 黑褐色粘質土(灰色粘質土ブロック多量部)



SK-26

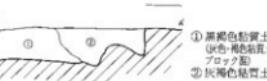
SK-30

0

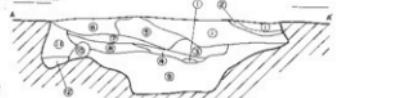
S = 1 : 20

1 m

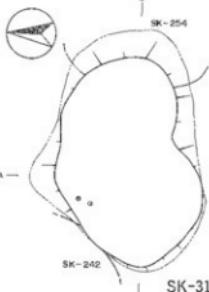
H = 3.30m



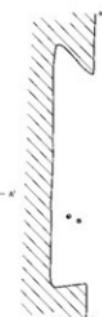
H = 3.20m



H = 3.20m



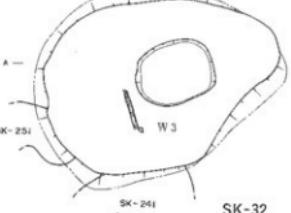
SK-31



H = 3.20m



H = 3.20m

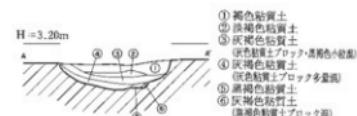
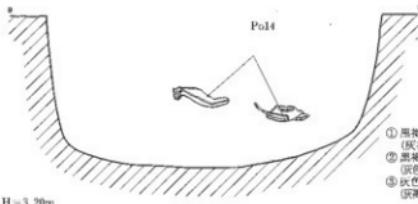


SK-32

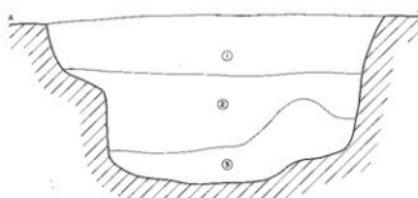
0 S = 1 : 40 2 m

挿図18 SK-30・31・32遺構図

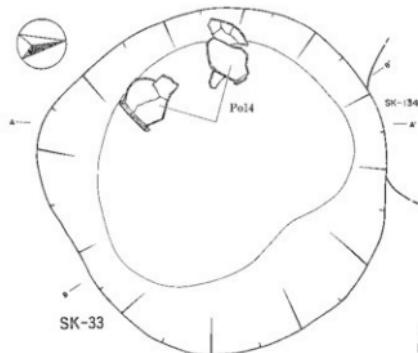
H = 3.20m



H = 3.20m



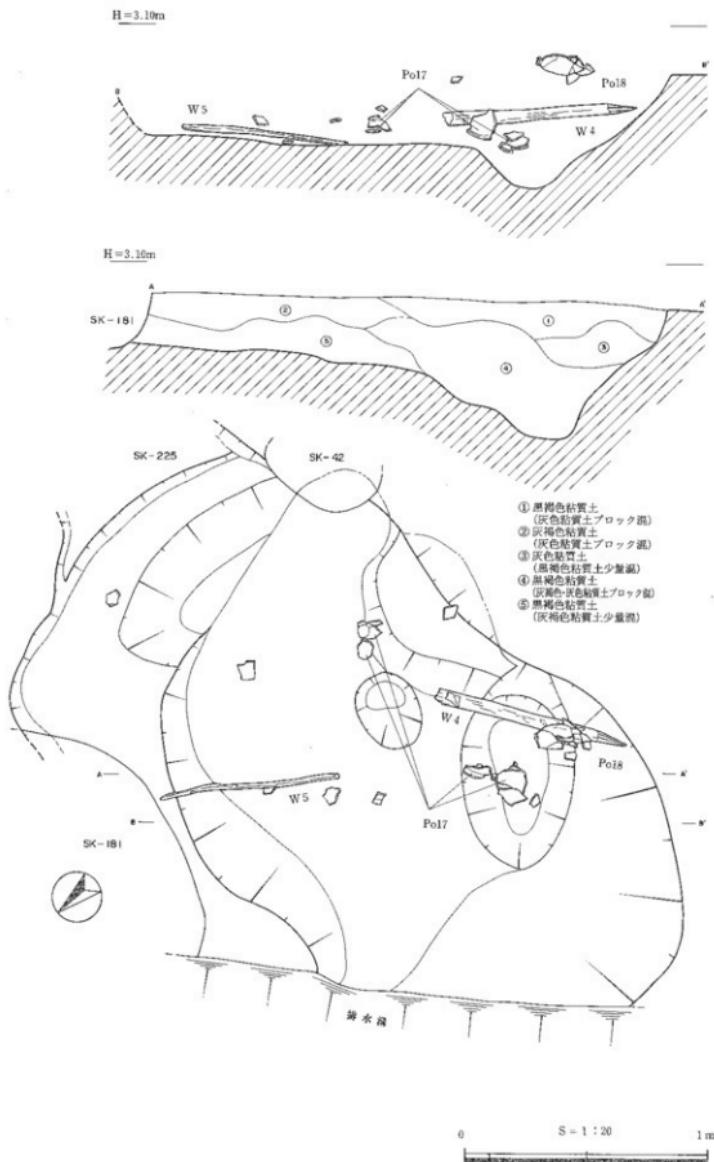
H = 3.30m



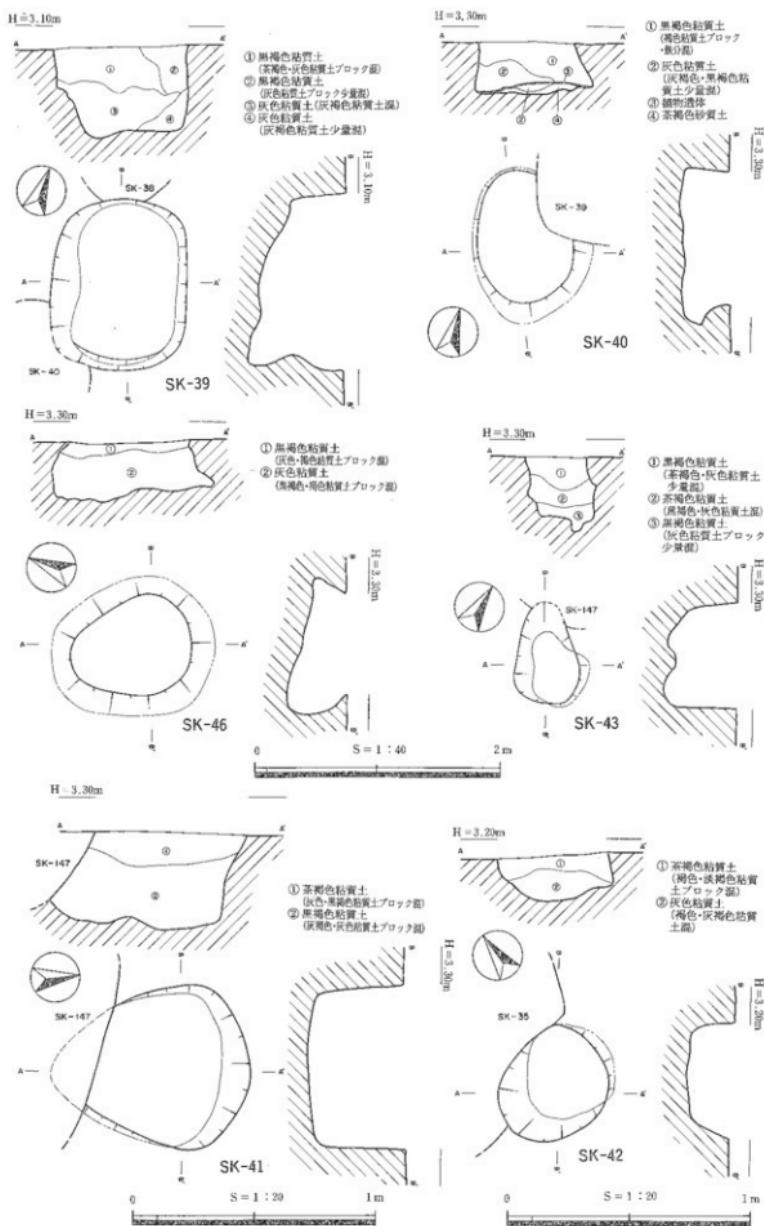
0 S = 1 : 20 1 m



拵図19 SK-33・34・37・38造構図

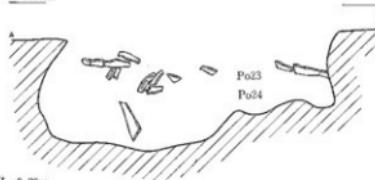


挿図20 SK-35遺構図

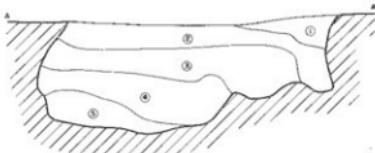


挿図21 SK-39・40・41・42・43・46遺構図

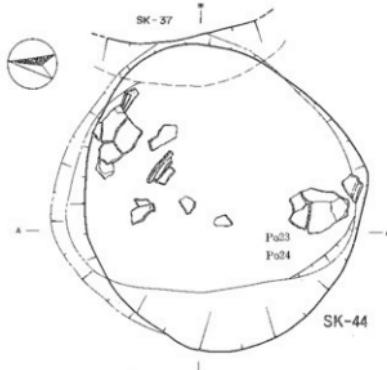
H = 3.30m



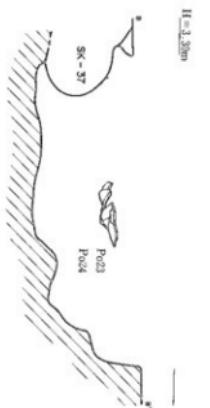
H = 3.30m



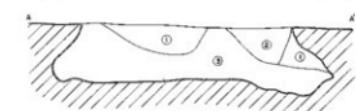
- ① 灰色粘質土(褐色粘質土層)
- ② 黑褐色粘質土(鉛分层)
- ③ 灰褐色粘質土(灰色粘質土層)
- ④ 灰色粘質土(深褐色粘質土少量)
- ⑤ 灰色粘質土(褐色粘質土層)



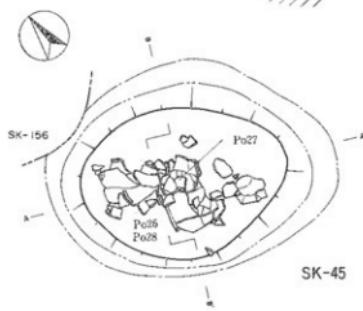
H = 3.30m



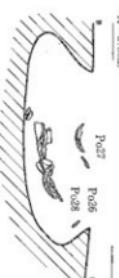
S = 1 : 20



- ① 深褐色粘質土
- ② 明顯褐色粘質土(深褐色粘質土層)
- ③ 黑褐色粘質土(化粧陶器多量)



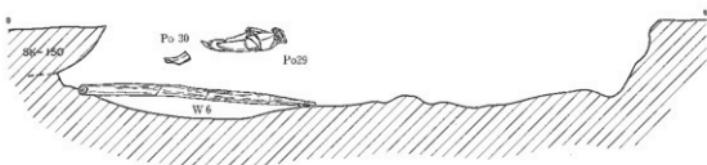
0 S = 1 : 20 1 m



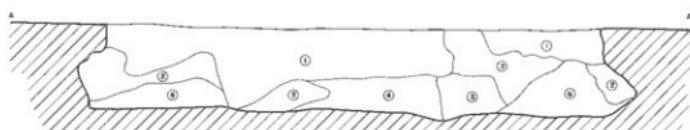
S = 1 : 20

拵図22 SK-44・45遺構図

H = 3.30m



H = 3.30m



- ① 黑褐色黏質土(深褐色粘質土良分少量)
- ② 灰褐色黏質土(鉄分量)
- ③ 灰褐色粘質土
- ④ 黑褐色粘質土
- ⑤ 灰褐色粘質土(灰褐色粘質土混)
- ⑥ 灰色粘質土(褐色粘質土少量混)

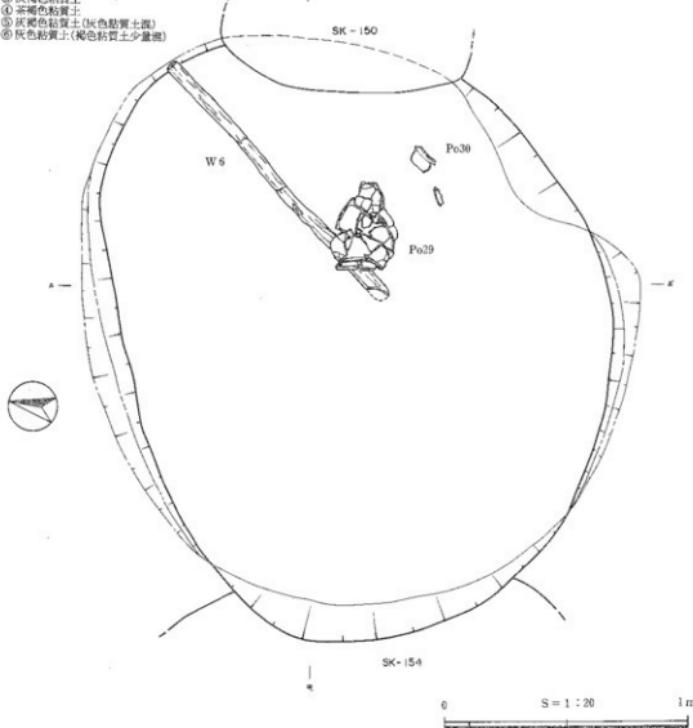
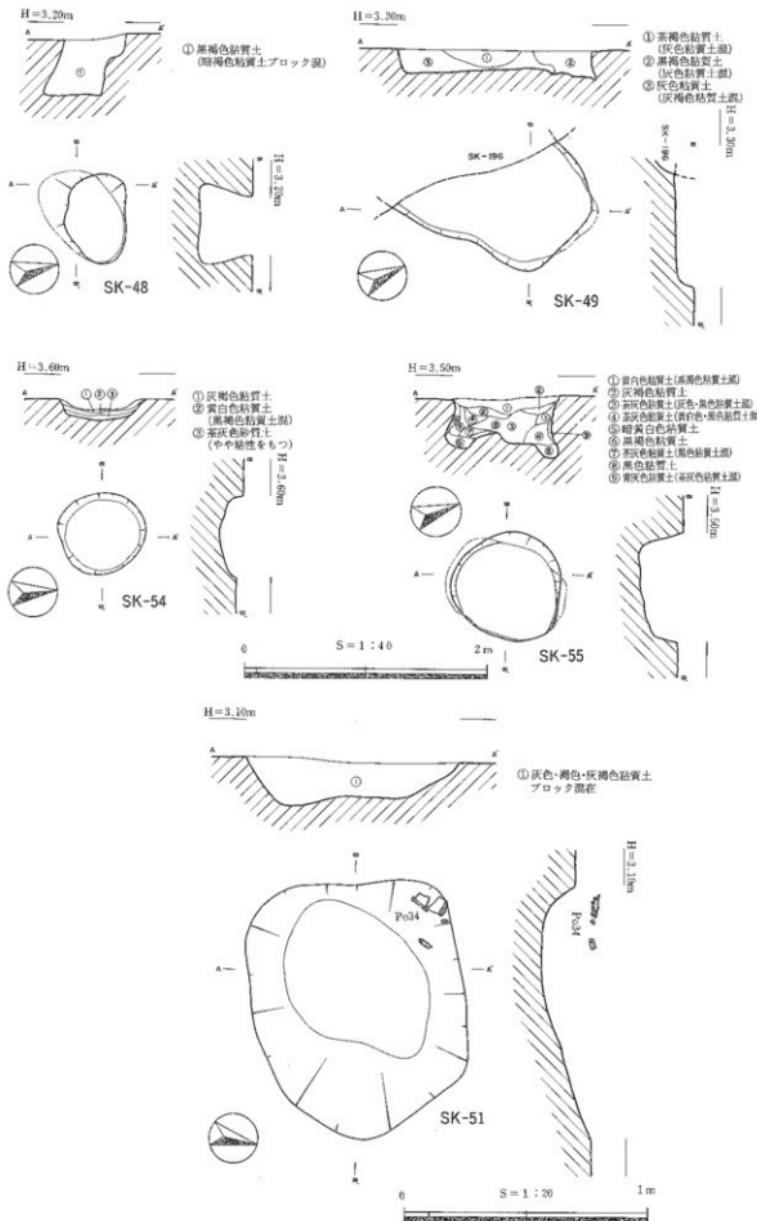


插圖23 SK-47遺構圖



挿図24 SK-48・49・51・54・55縫構図

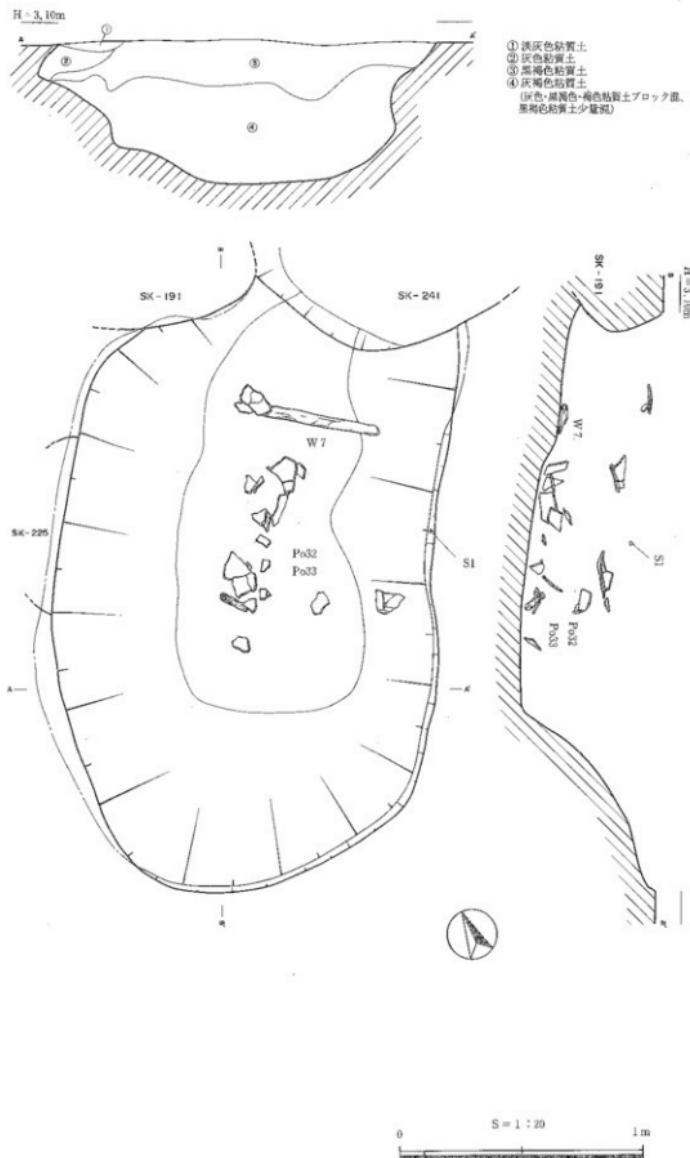
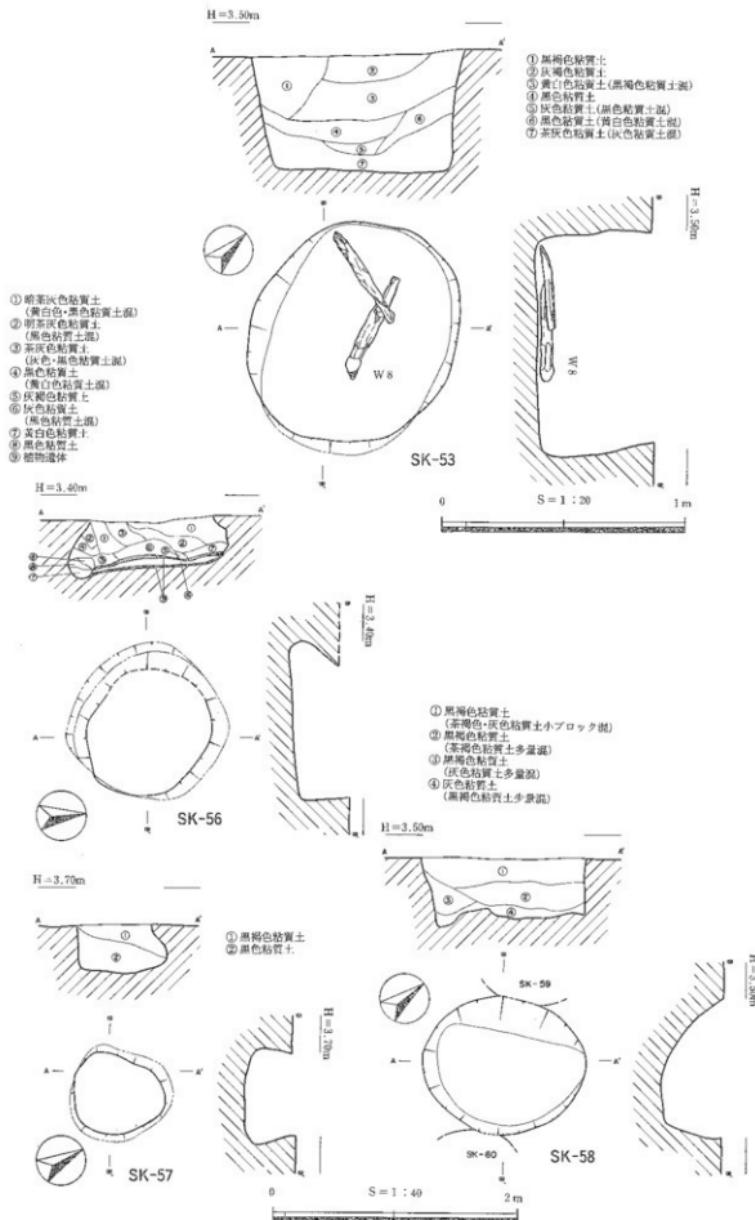
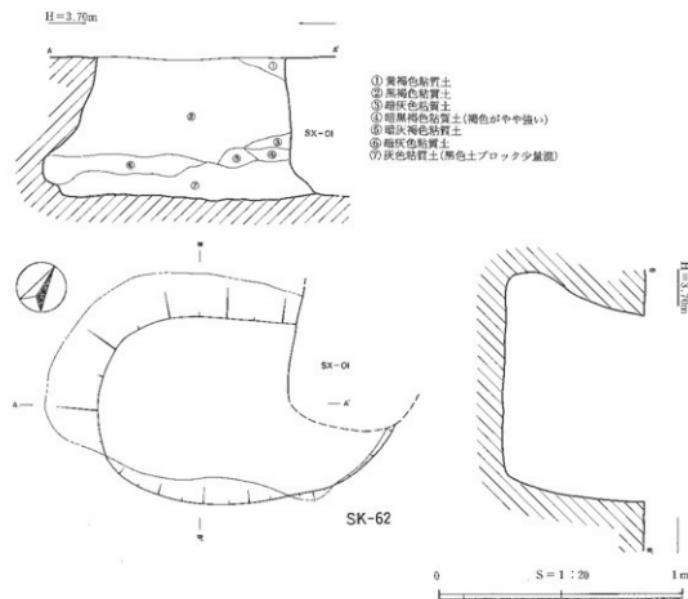
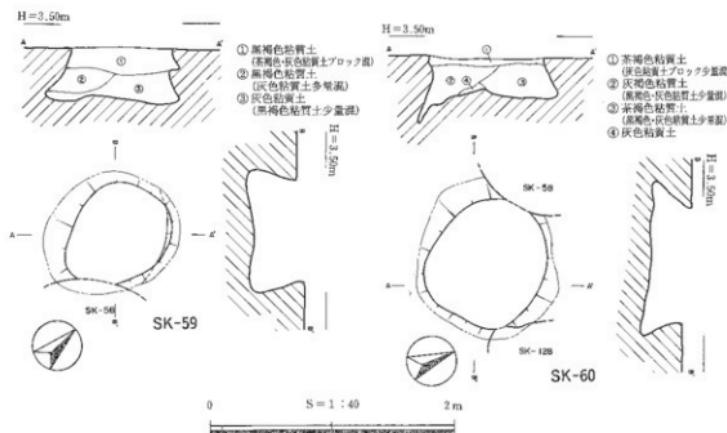


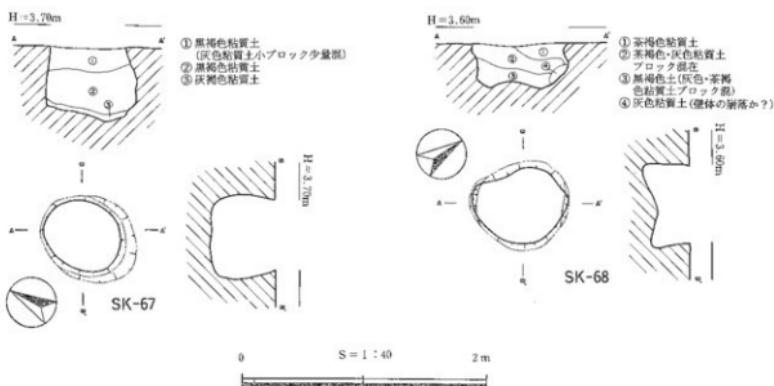
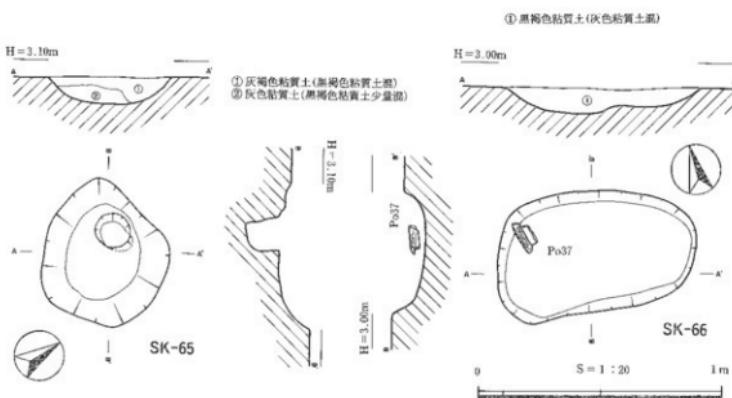
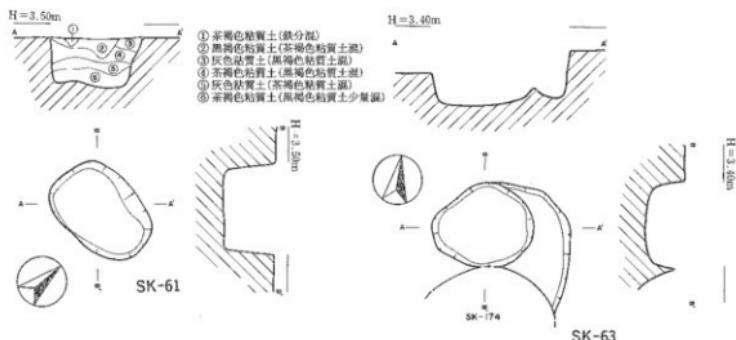
図25 SK-50遺構図



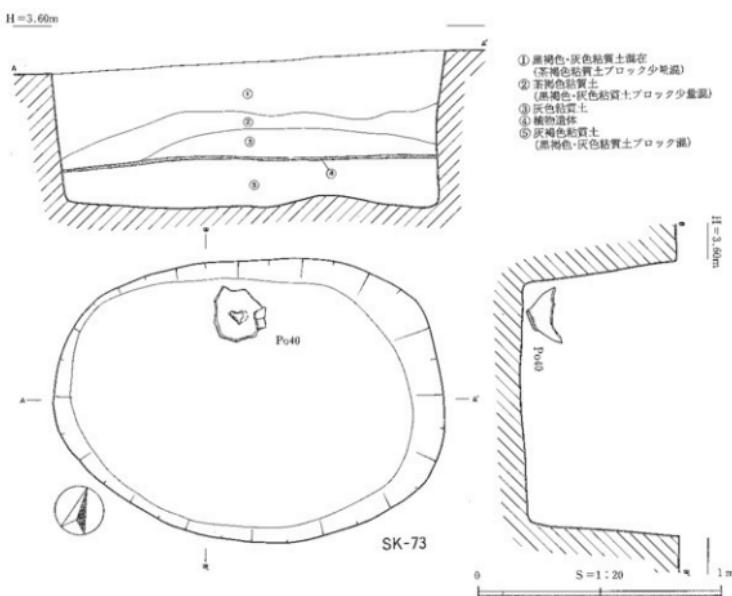
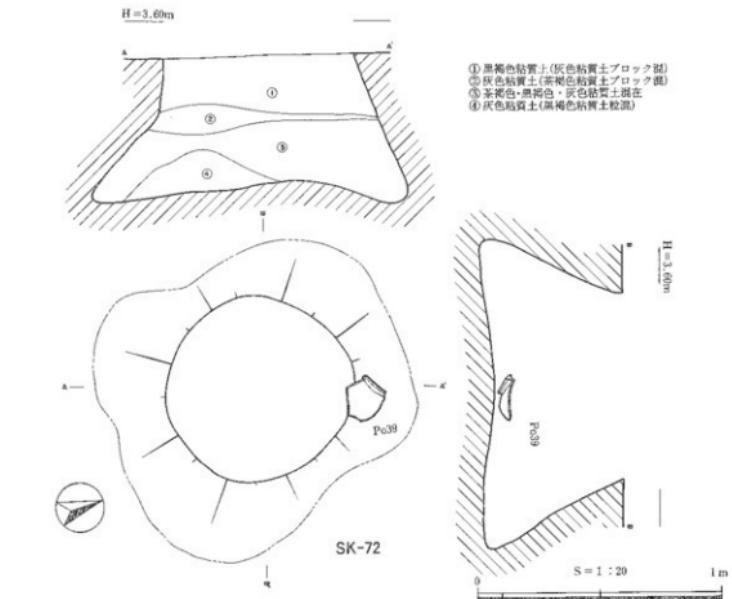
插図26 SK-53・56・57・58遺構図



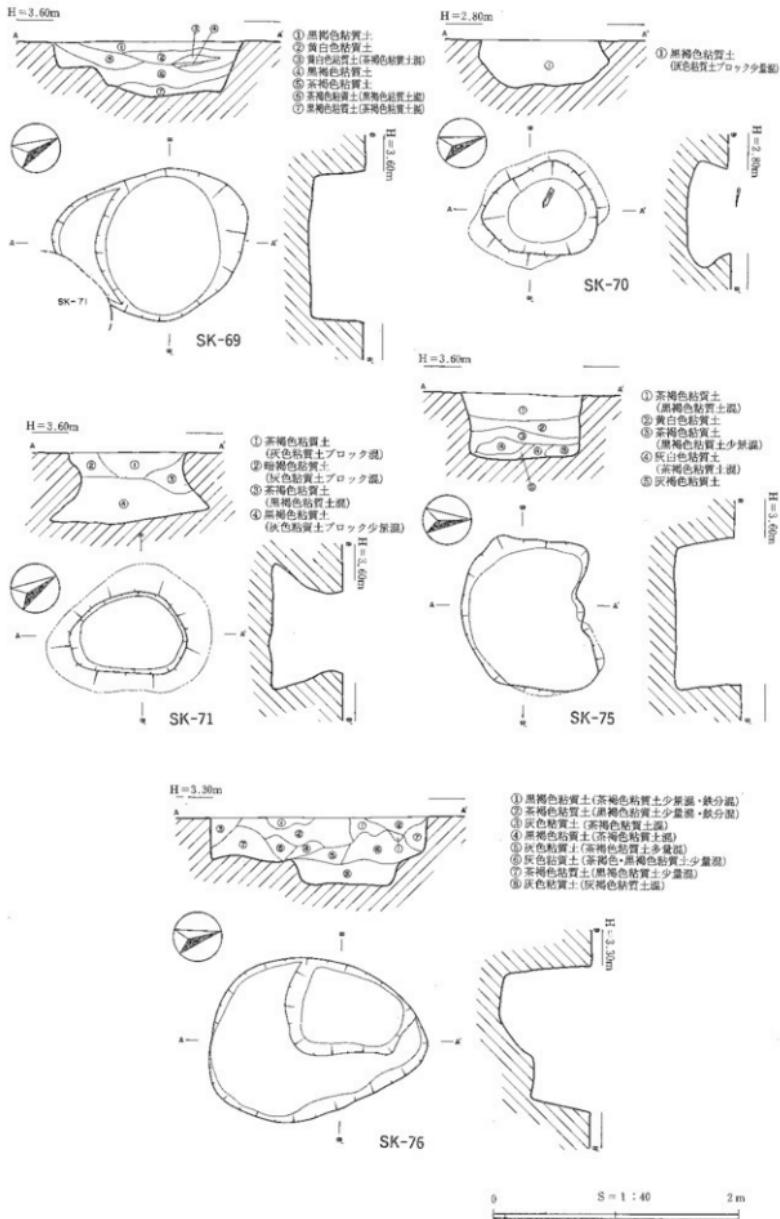
掲図27 SK-59・60・62造構図



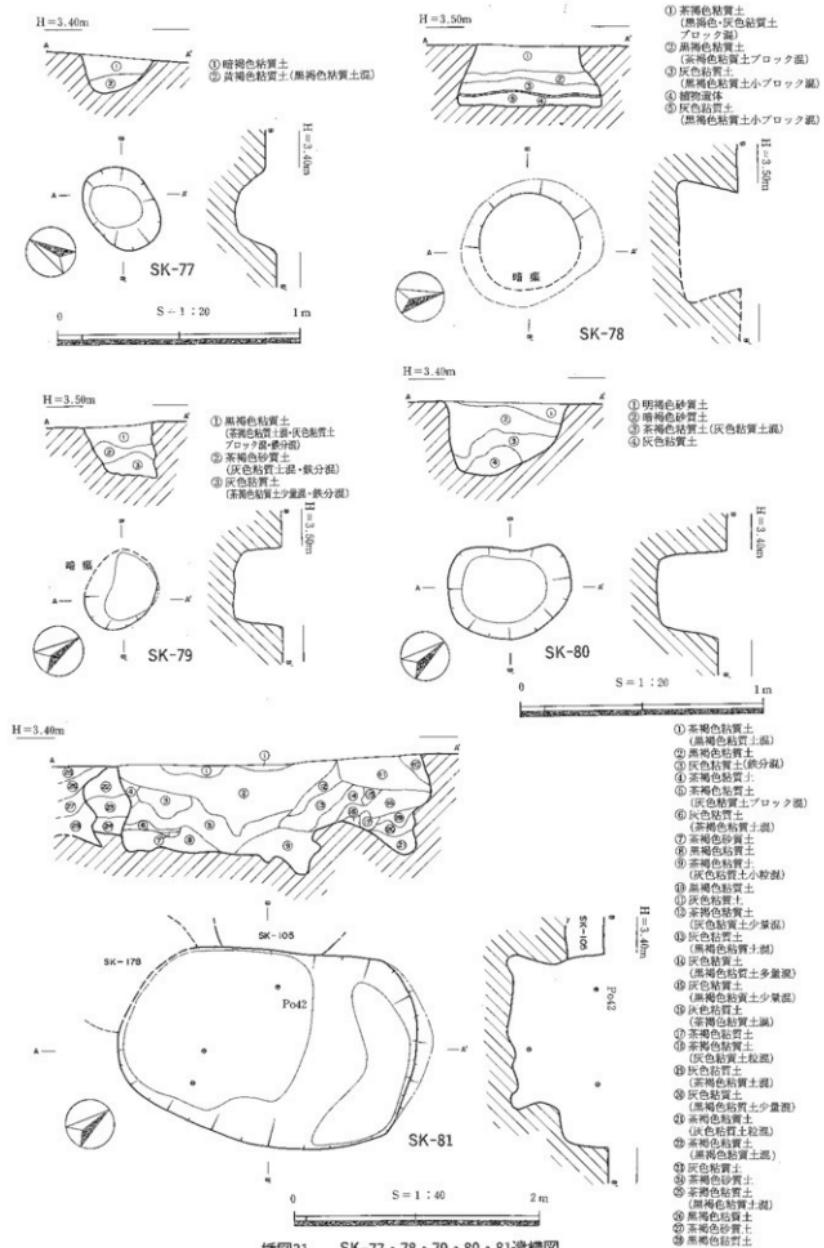
插図28 SK-61・63・65・66・67・68遺構図



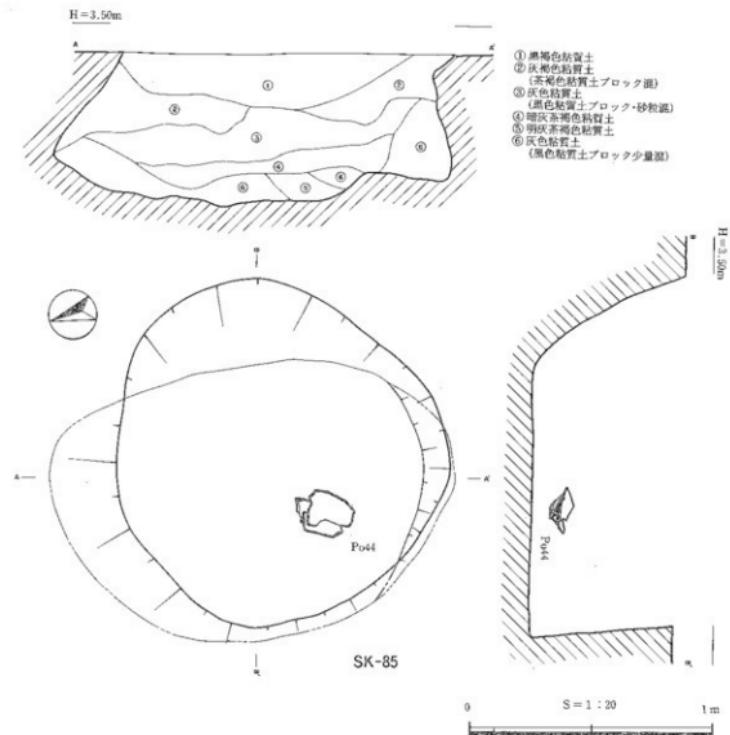
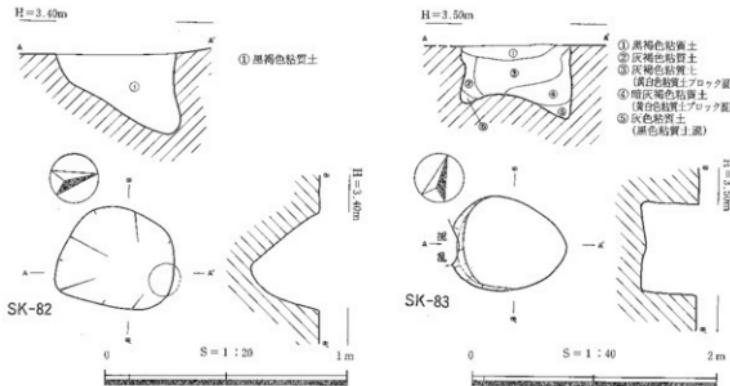
挿図29 SK-72・73遺構図



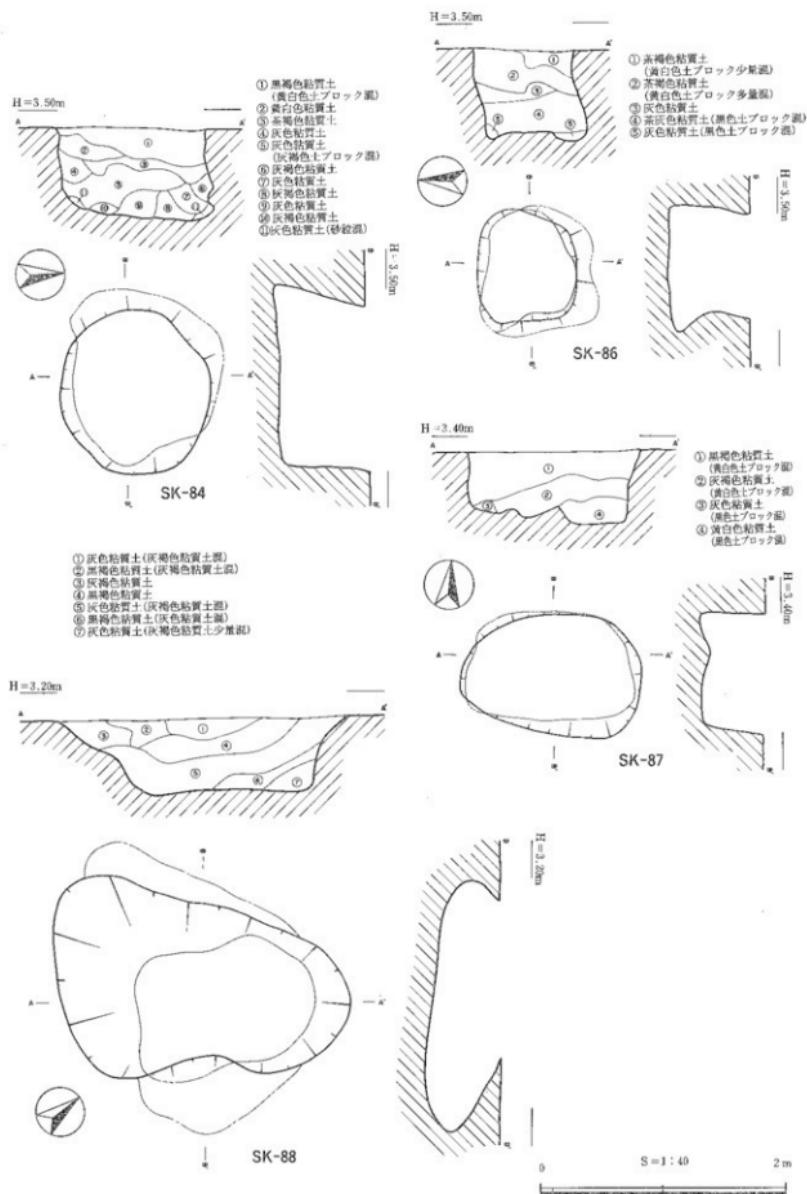
插図30 SK-69・70・71・75・76遺構図



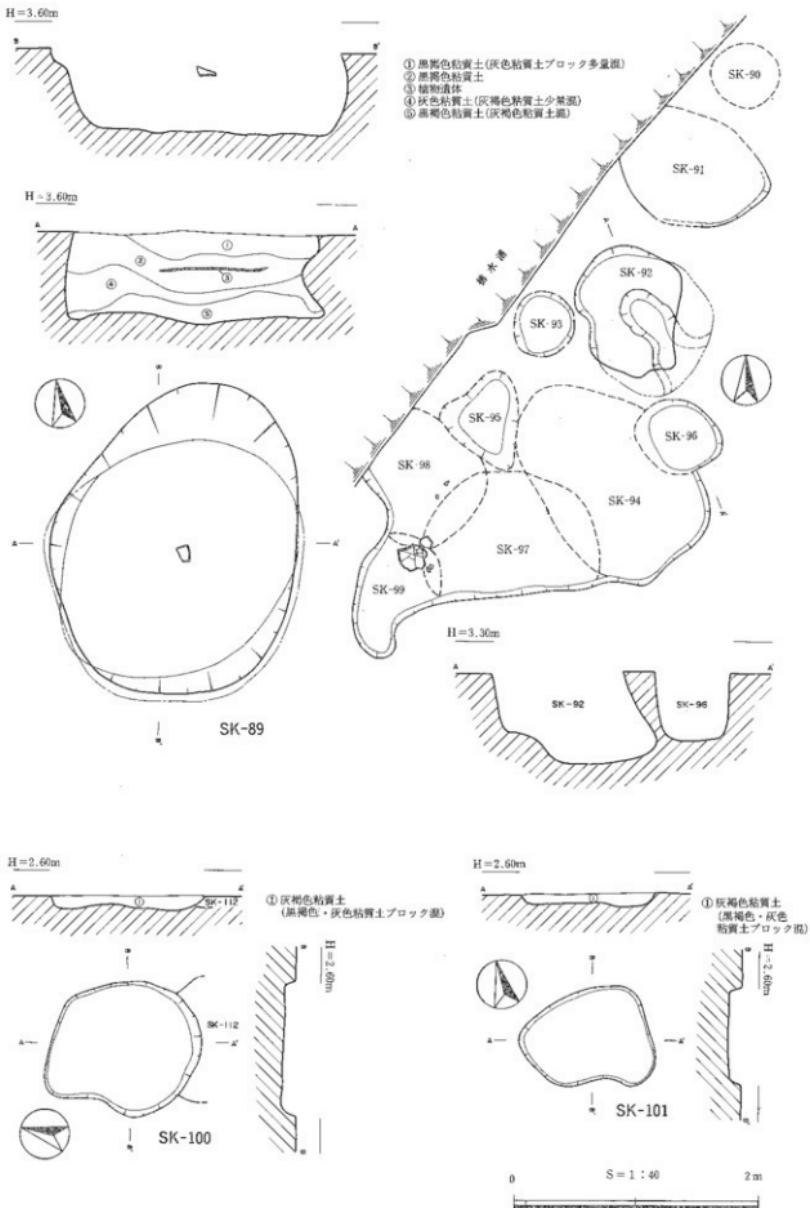
插図31 SK-77・78・79・80・81遺構図

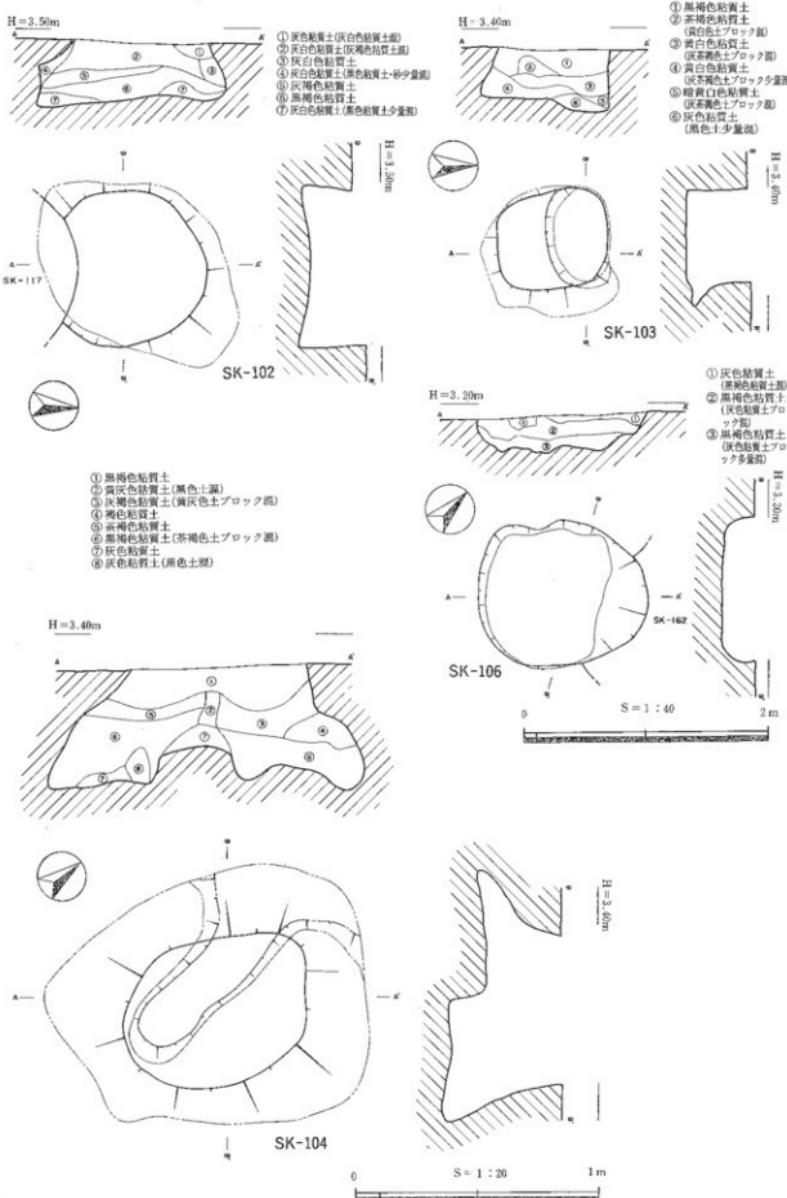


掲図32 SK-82・83・85造構図



插図33 SK-84・86・87・88遺構図





插図35 SK-102・103・104・106遺構図

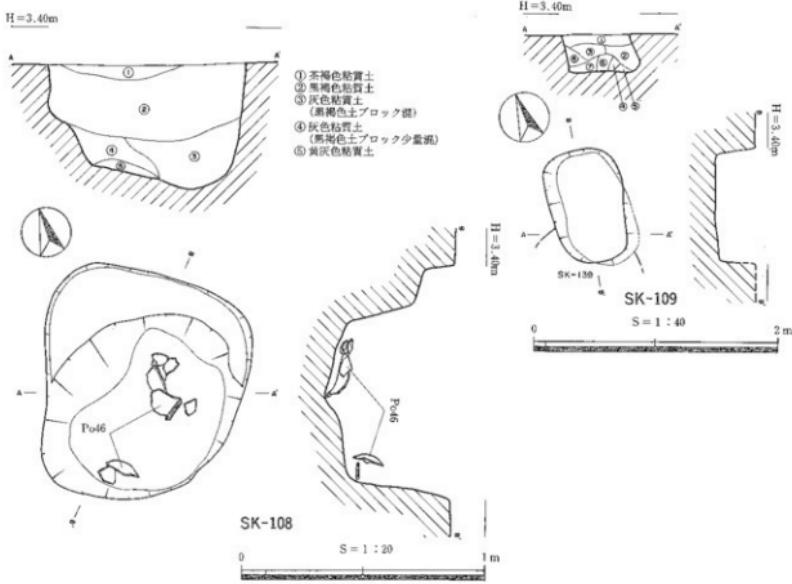
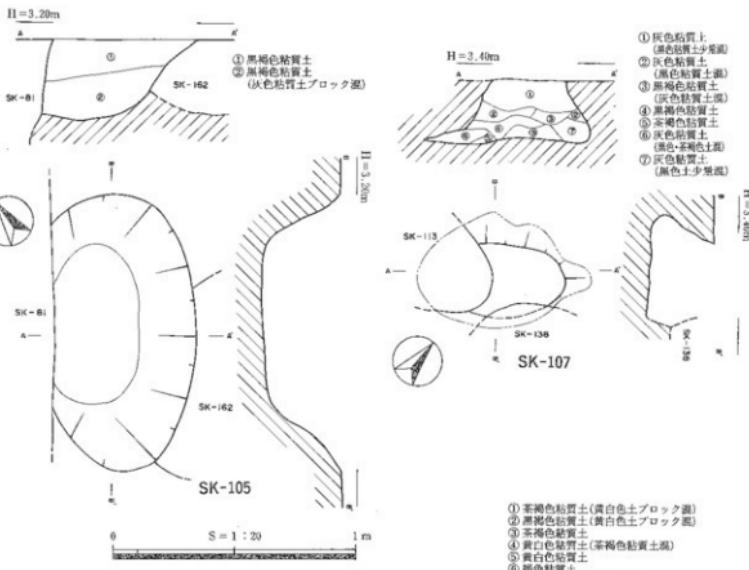


插圖36 SK-105・107・108・109遺構図

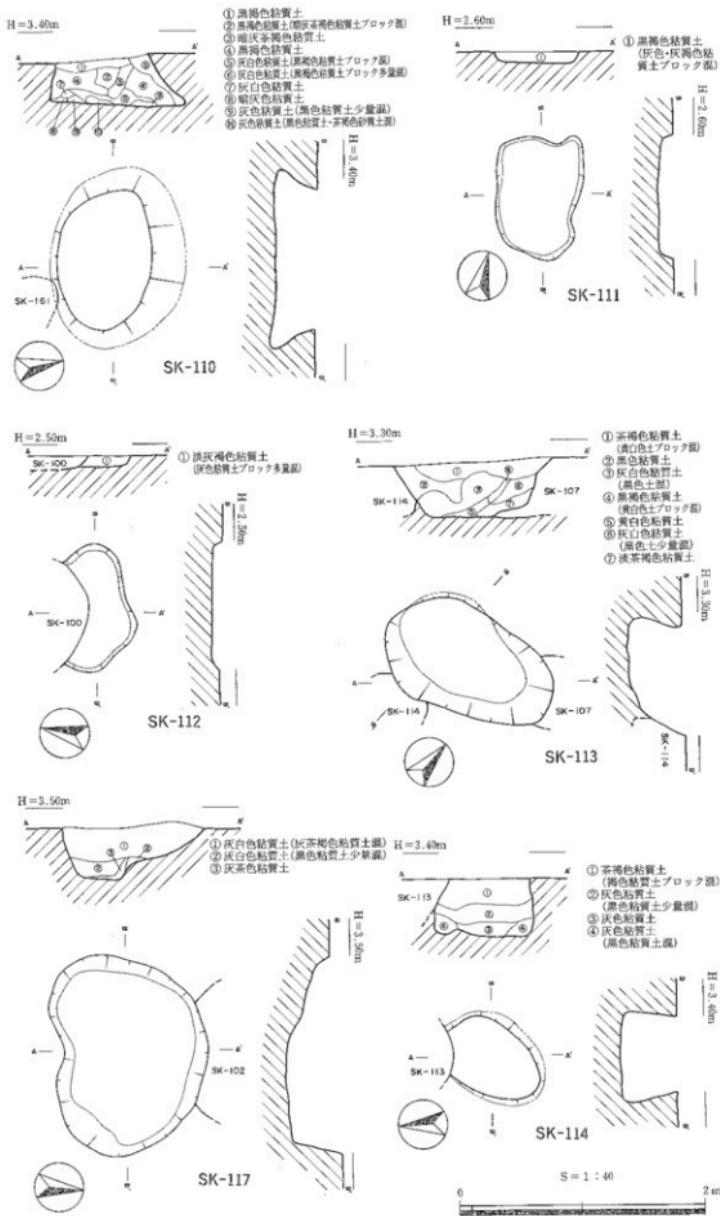
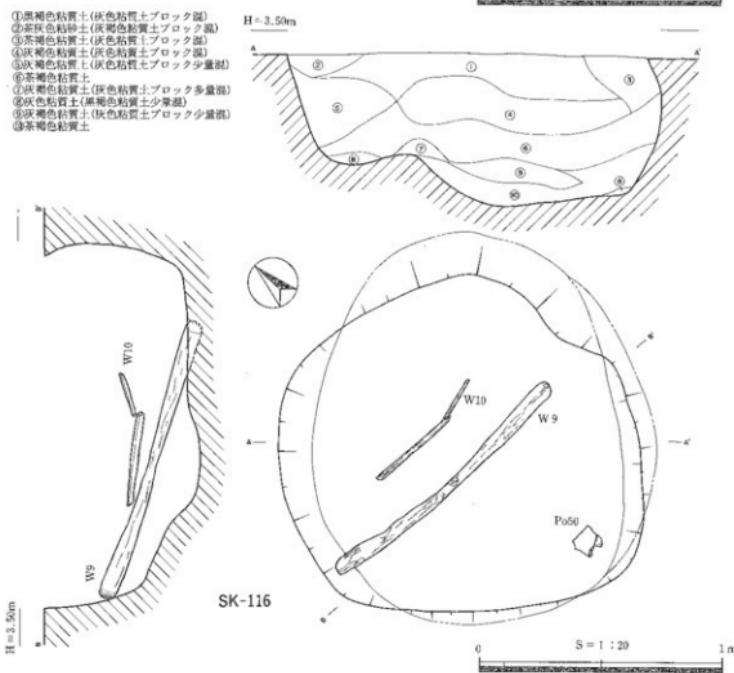
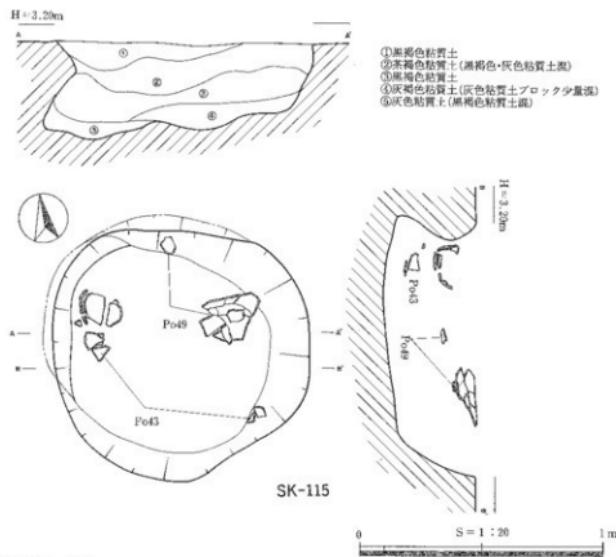


図37 SK-110・111・112・113・114・117断面図



挿図38 SK-115・116造積図

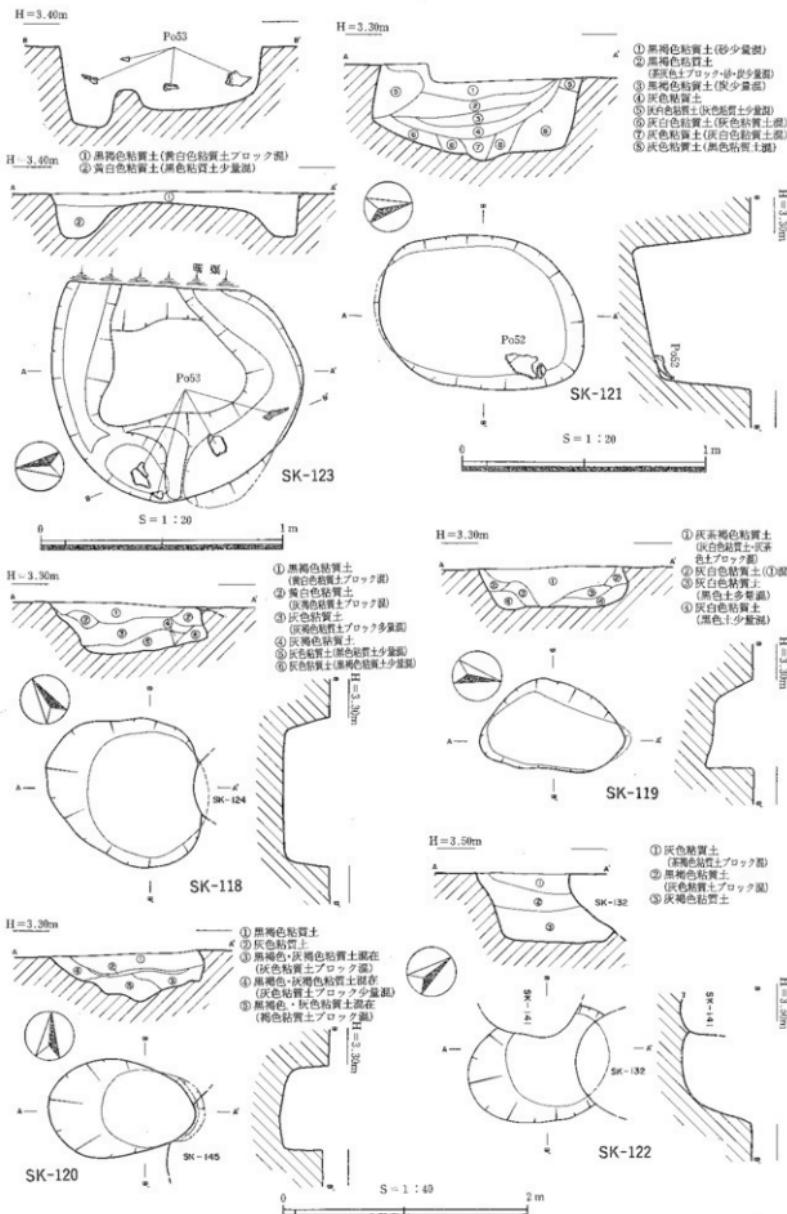
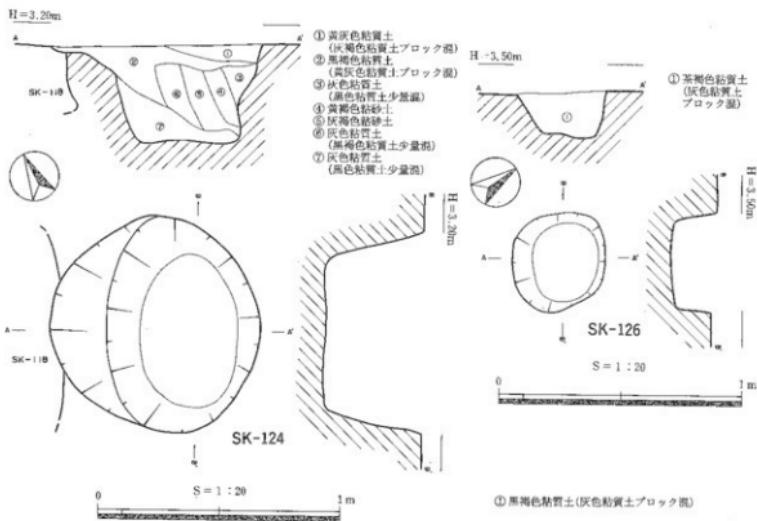
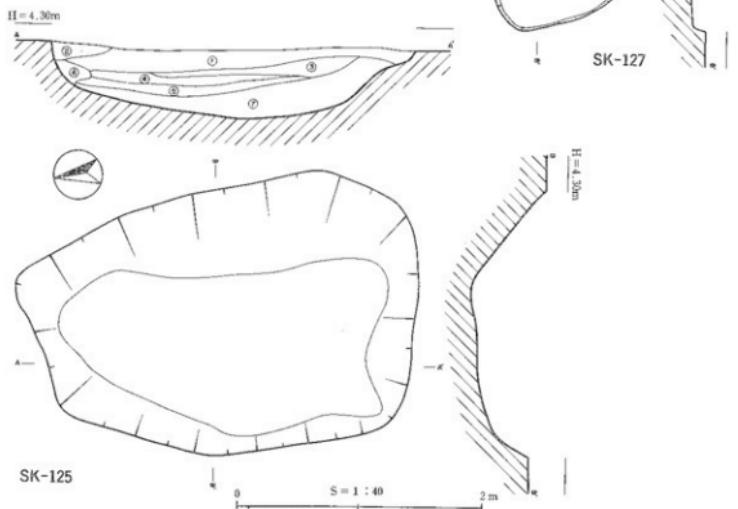


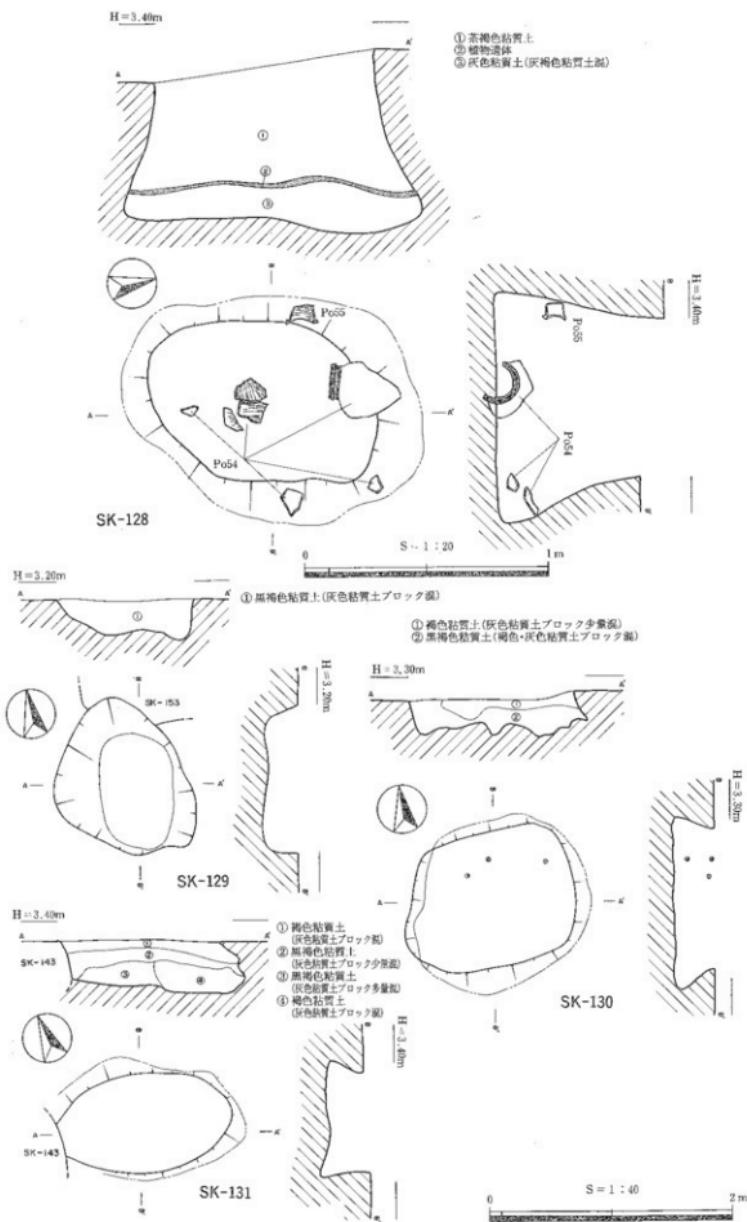
図39 SK-118・119・120・121・122・123遺構図

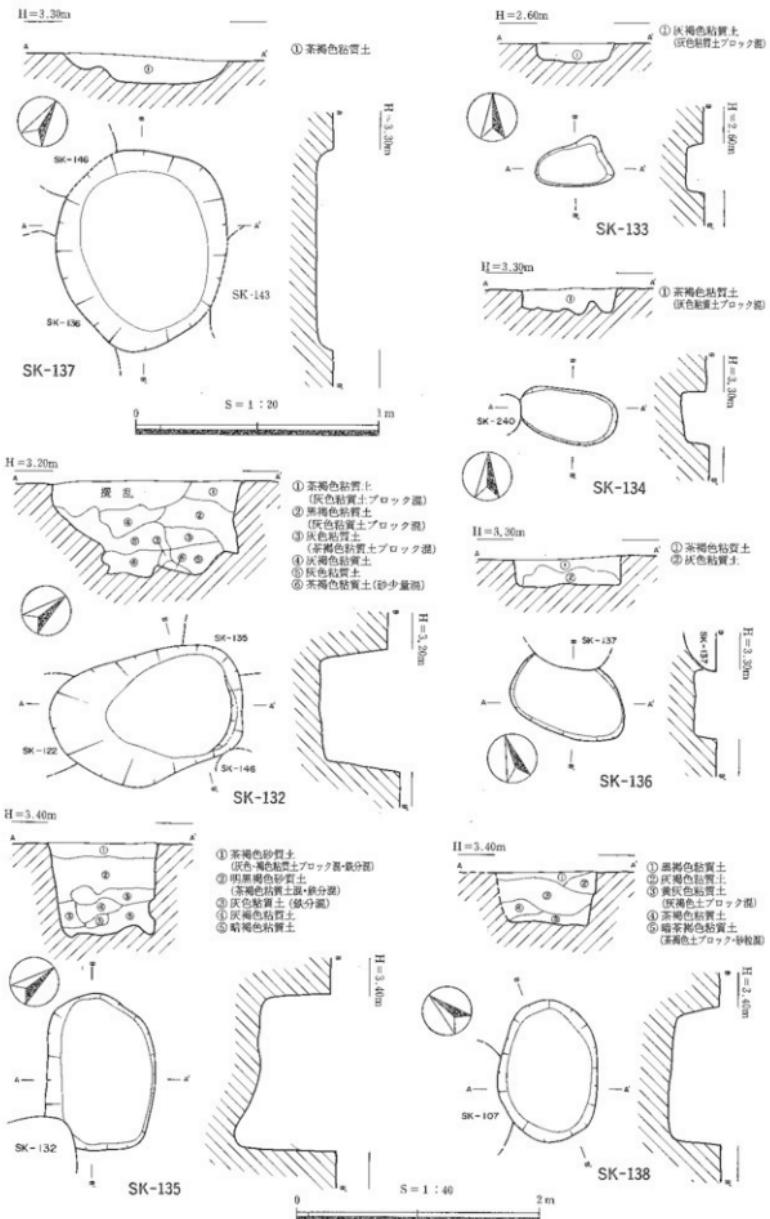


- ① Blackish brown loamy soil
 ② Grayish brown loamy soil (many angular)
 ③ Grayish brown loamy soil (angular)
 ④ Blackish brown loamy soil (angular), grayish brown loamy soil (small amount)
 ⑤ Blackish brown loamy soil (angular), grayish brown loamy soil (small amount)
 ⑥ Brownish gray loamy soil (angular, blackish brown loamy soil)
 ⑦ Brownish gray loamy soil (many angular)

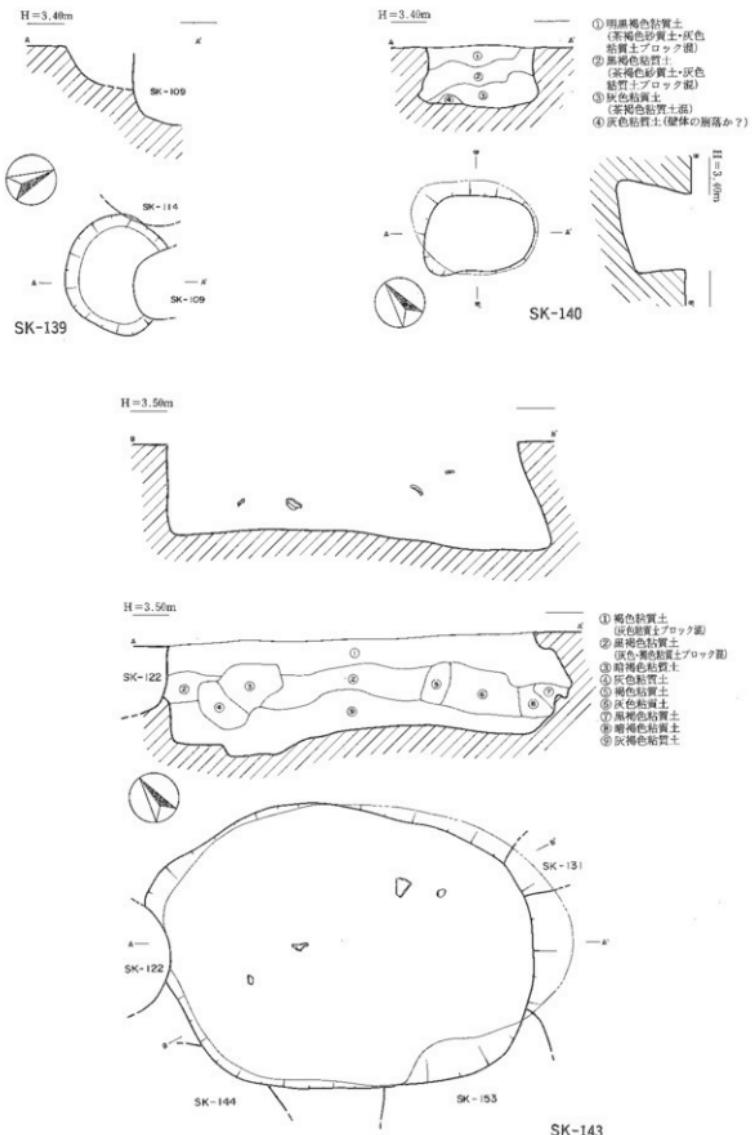


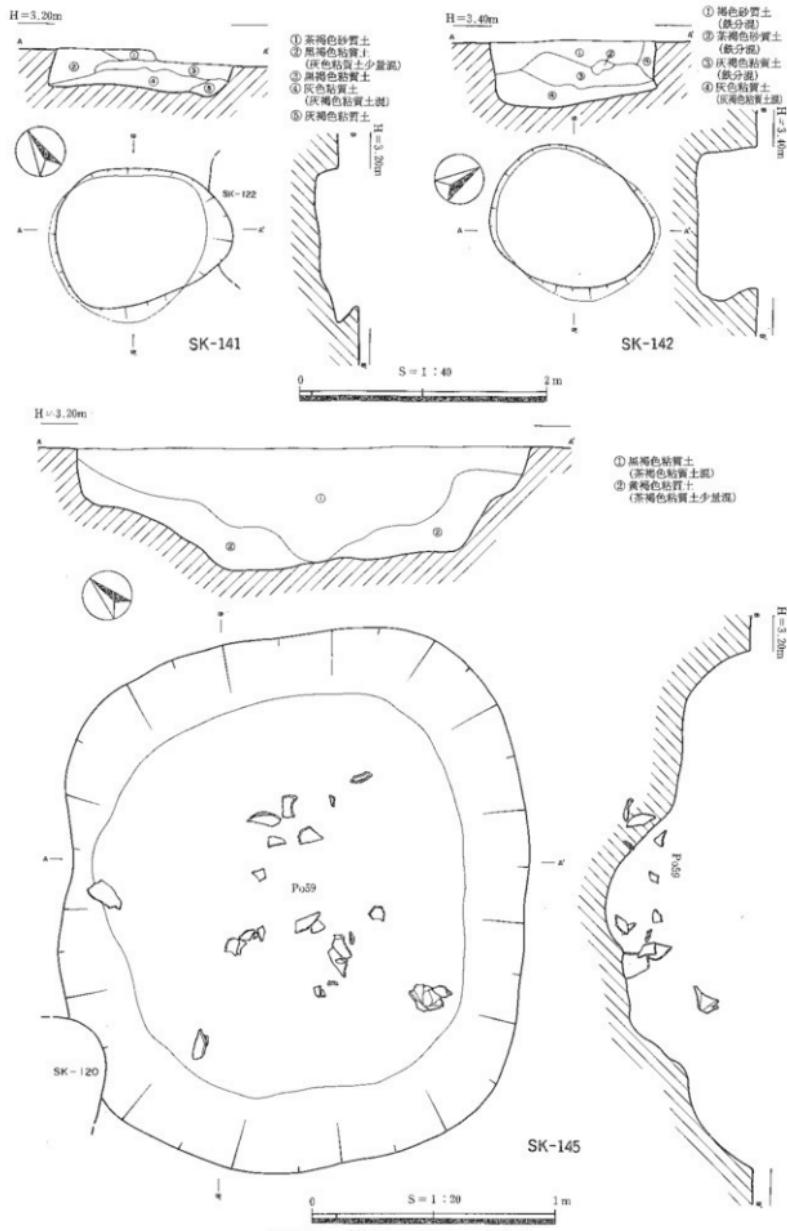
挿図40 SK-124・125・126・127造構図





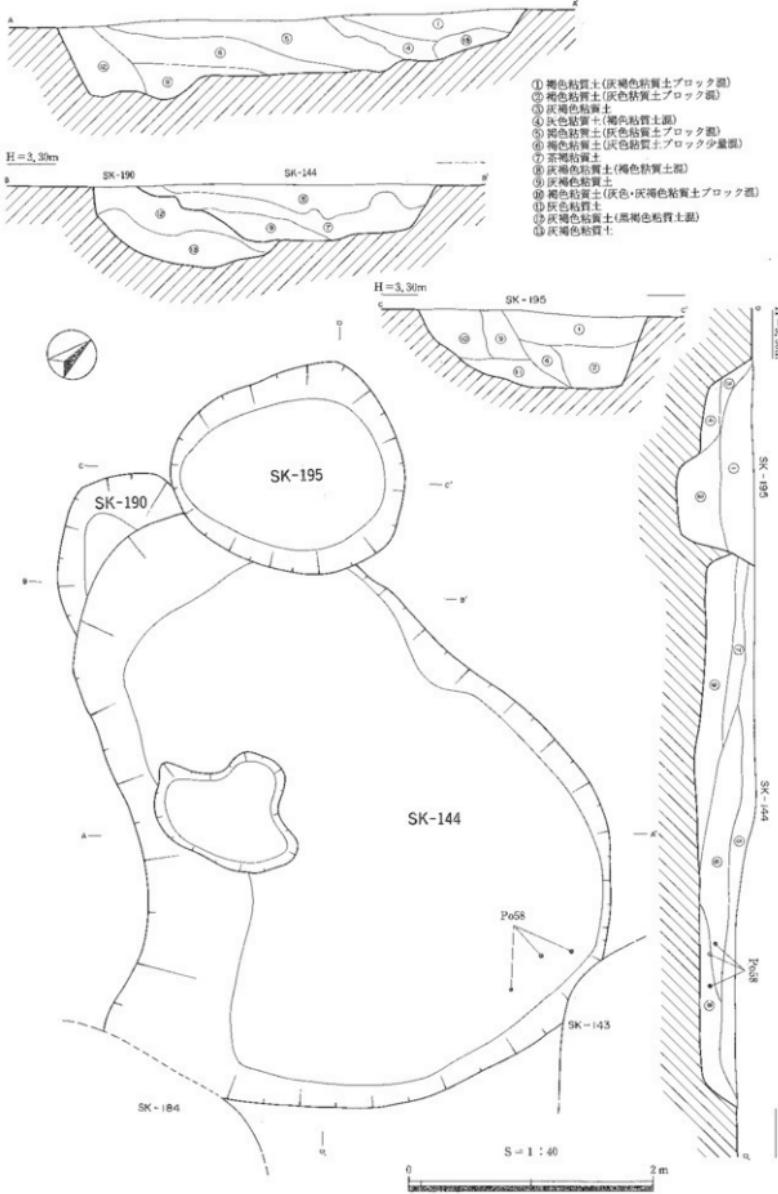
挿図42 SK-132・133・134・135・136・137・138造構図





挿図44 SK-141・142・145遺構図

H = 3, 30m



挿図45 SK-144・190・195遺構図

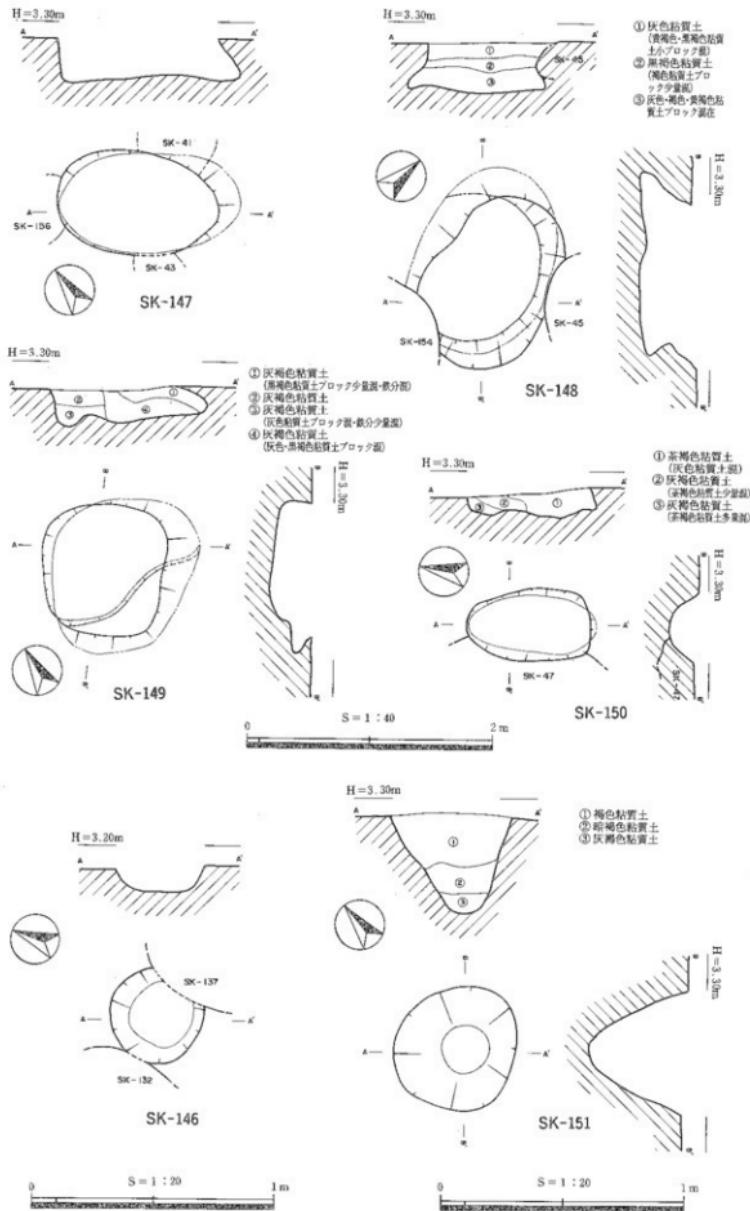
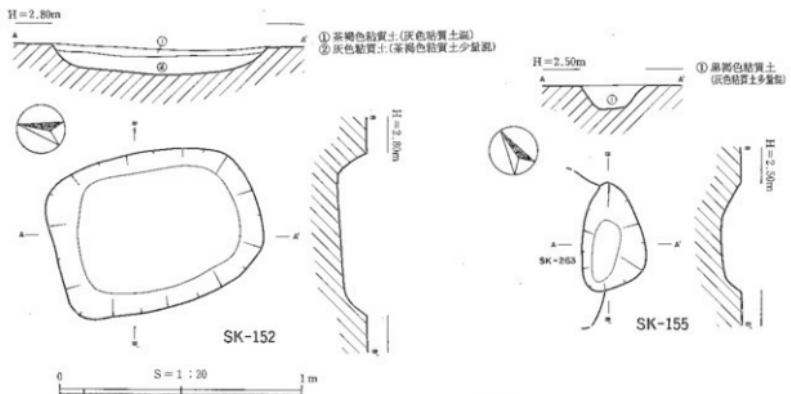


図46 SK-146・147・148・149・150・151造構図



- ① 棕色粘質土
- ② 灰褐色粘質土
- ③ 棕褐色粘質土(灰色・黄褐色粘質土ブロック混入)
- ④ 黑褐色粘質土(灰色粘質土ロック少量混入)
- ⑤ 灰褐色粘質土(黑褐色粘質土小量・灰色粘質土ブロック混入)
- ⑥ 灰色粘質土
- ⑦ 黑褐色粘質土(灰褐色粘質土混入)
- ⑧ 棕褐色粘質土
- ⑨ 灰色粘質土
- ⑩ 黑褐色粘質土(褐色・灰色粘質土ブロック混入)
- ⑪ 灰褐色粘質土
- ⑫ 灰色粘質土(黑褐色粘質土粒混入)



- ① 棕色粘質土(灰色粘質土ブロック混入)
- ② 棕色粘質土
- ③ 黑褐色・棕色粘質土混在
- ④ 黄褐色粘質土
- ⑤ 棕色粘質土(黑褐色粘質土粒混入)
- ⑥ 灰色・褐色粘質土ブロック混在
- ⑦ 棕褐色粘質土(黑褐色粘質土ブロック混入)
- ⑧ 灰褐色粘質土(灰色粘質土ブロック混入)

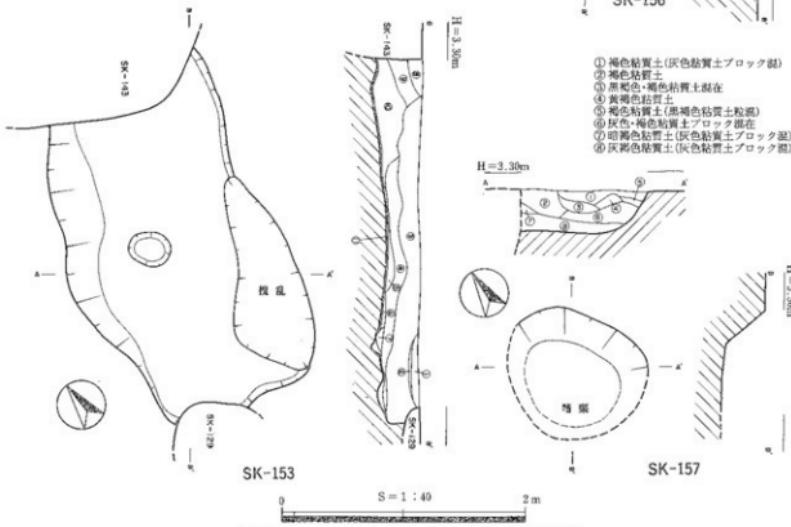


插图47 SK-152・153・155・156・157遺構図

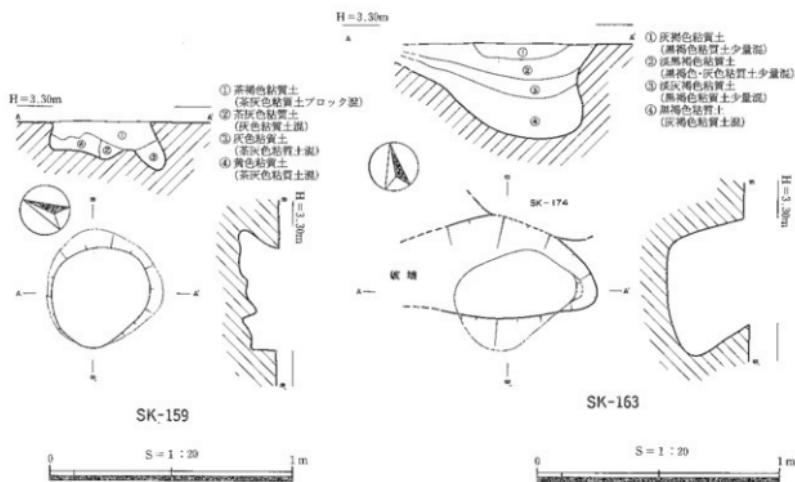
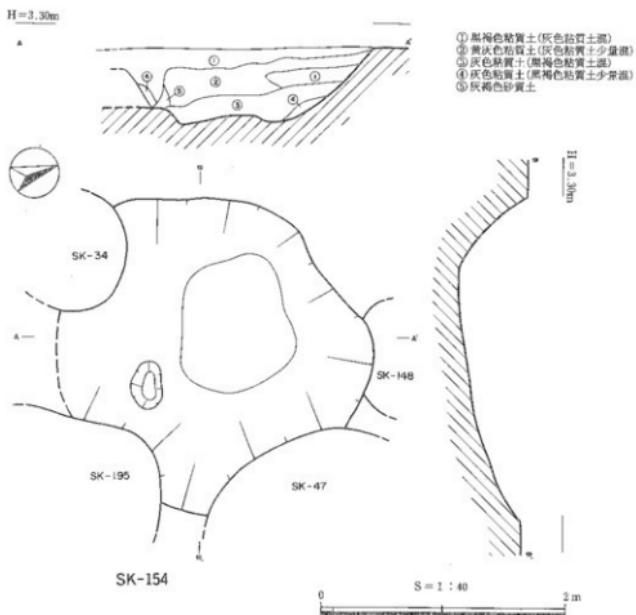
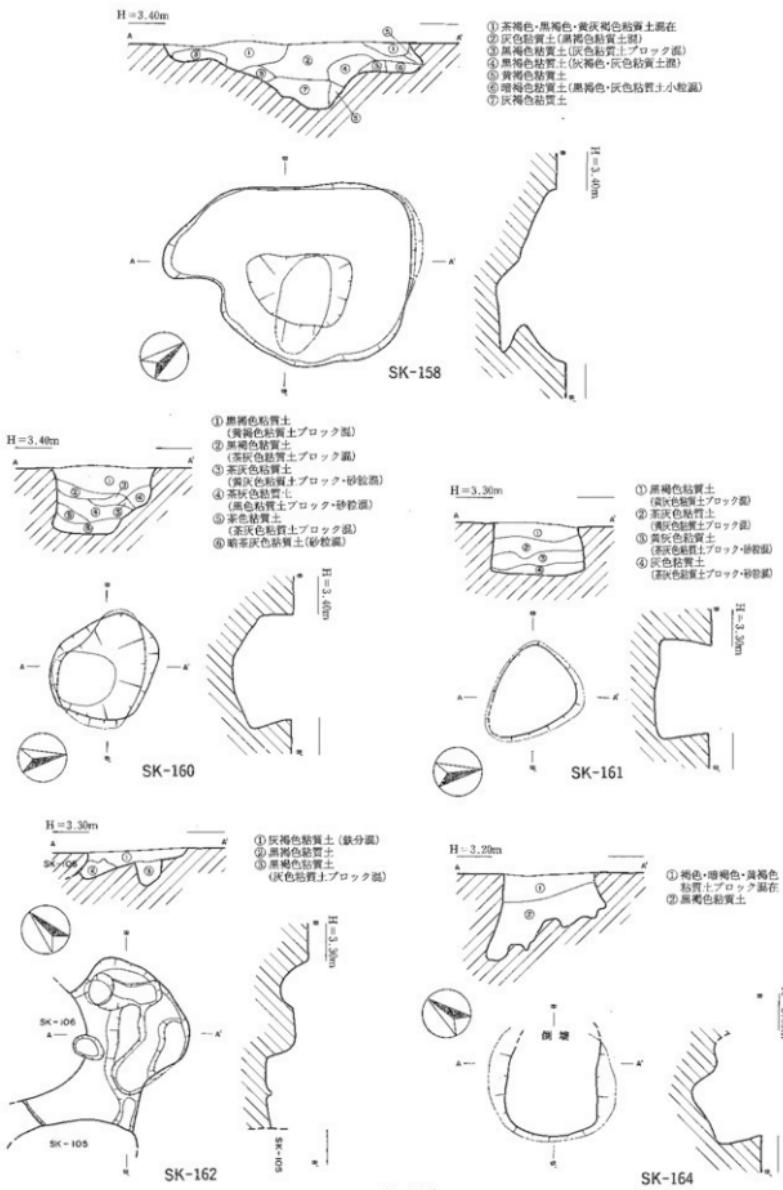
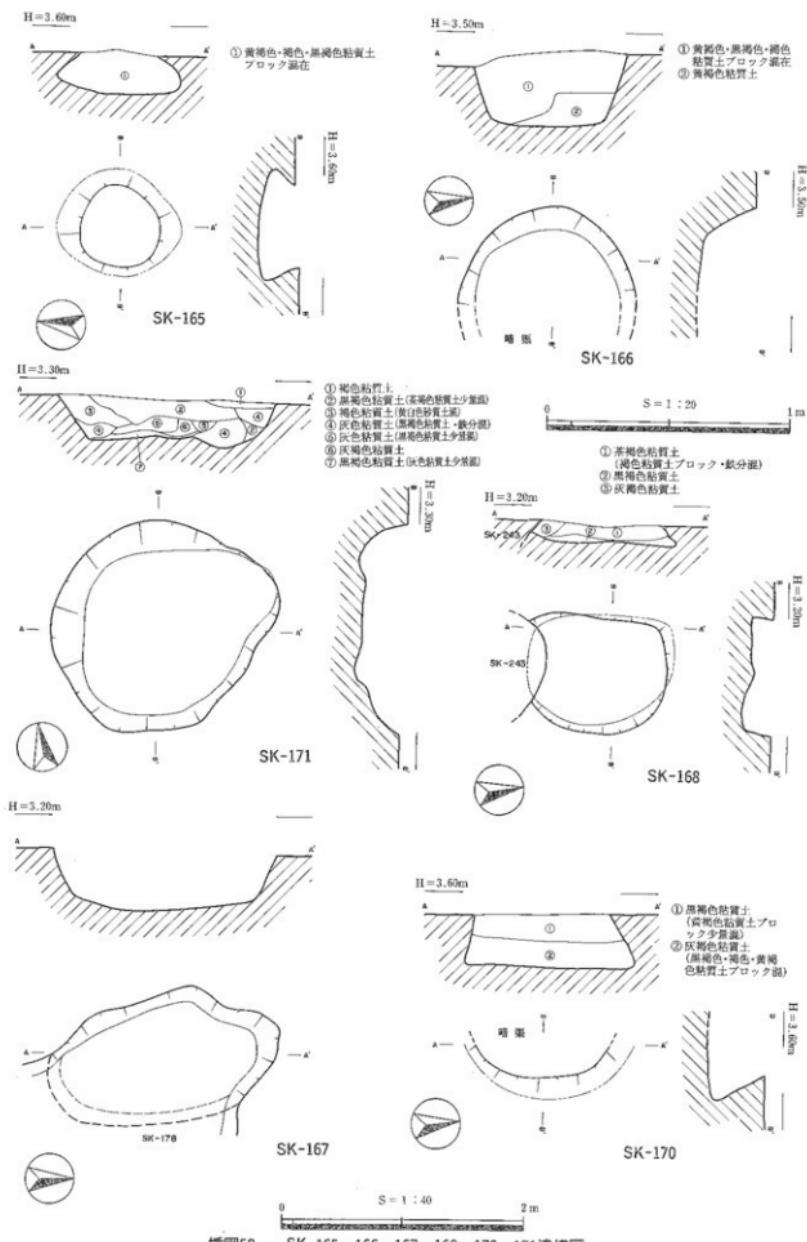


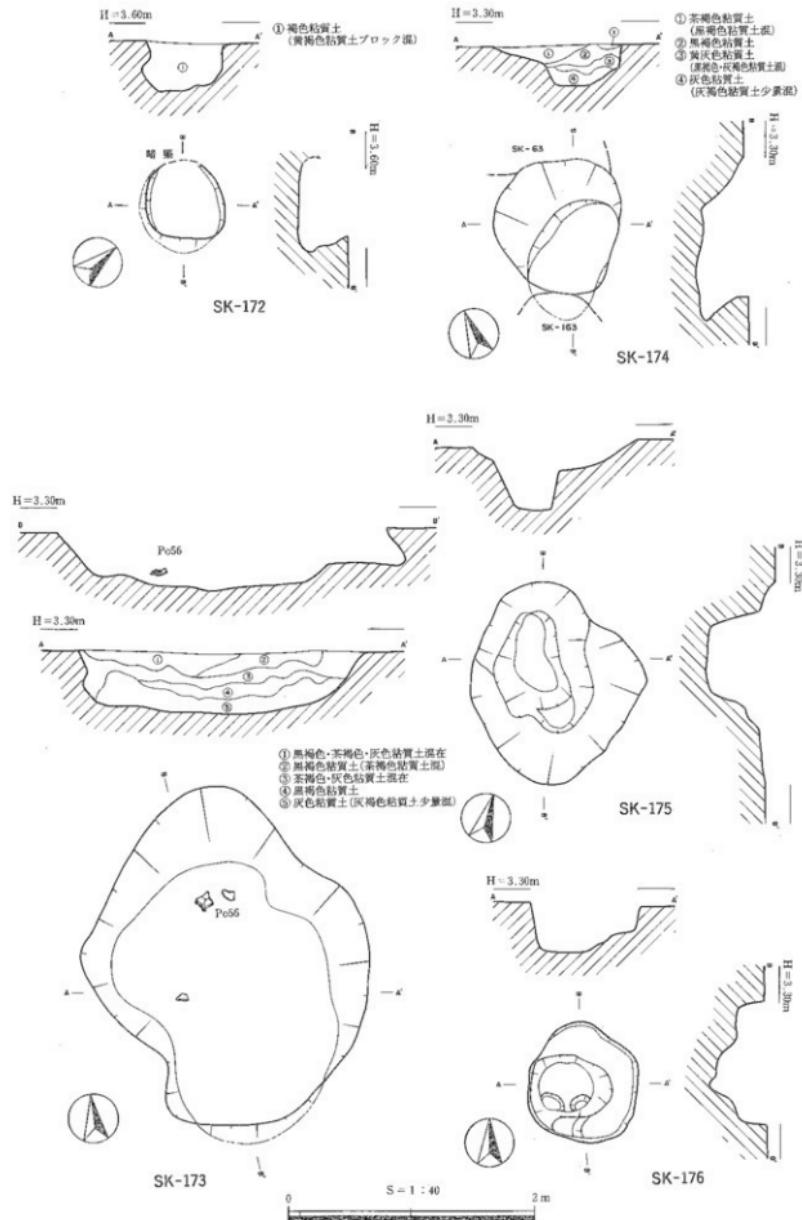
図48 SK-154・159・163遺構図



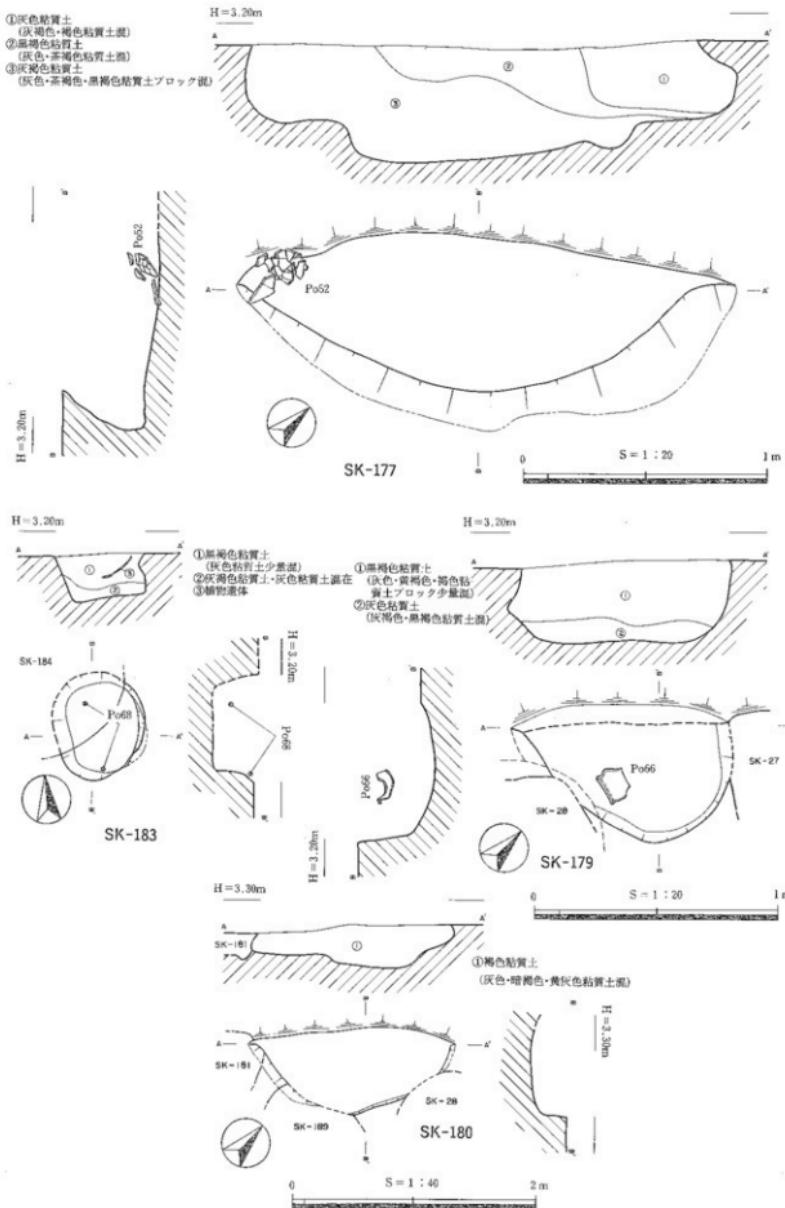
插図49 SK-158・160・161・162・164断縫図



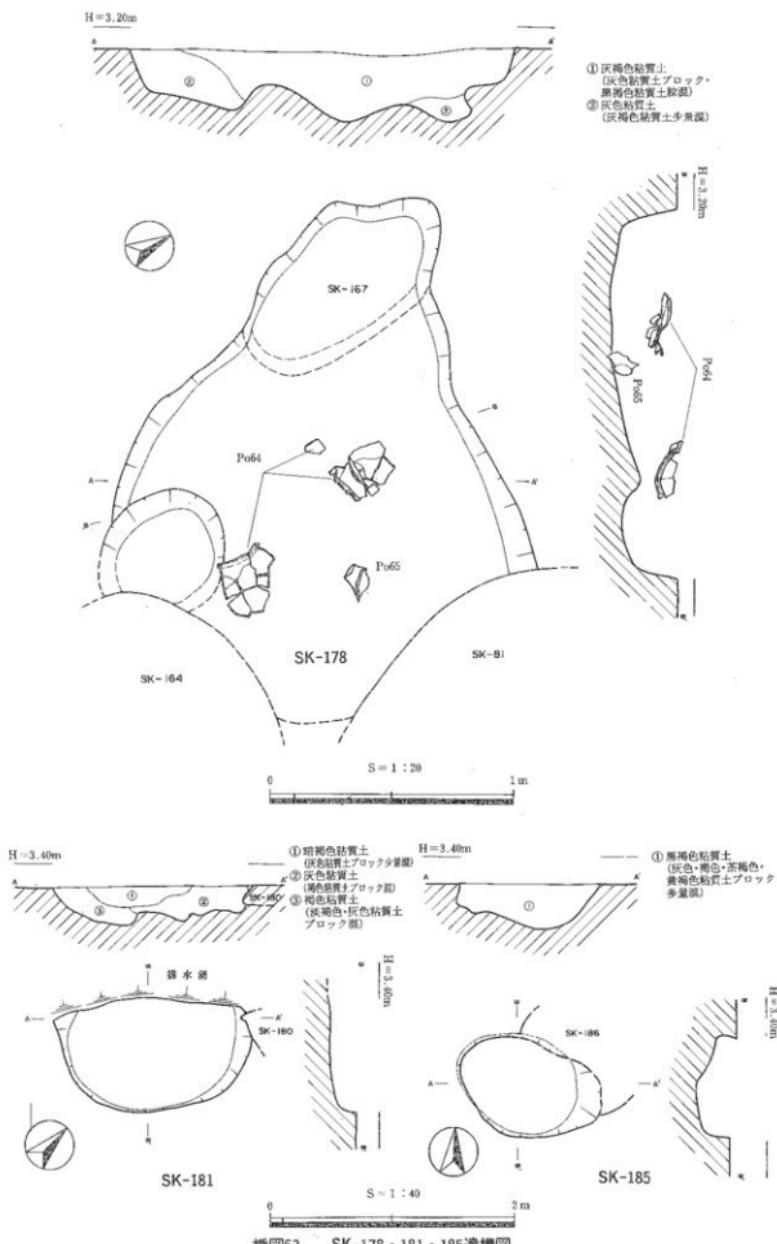
摺図50 SK-165・166・167・168・170・171造構図

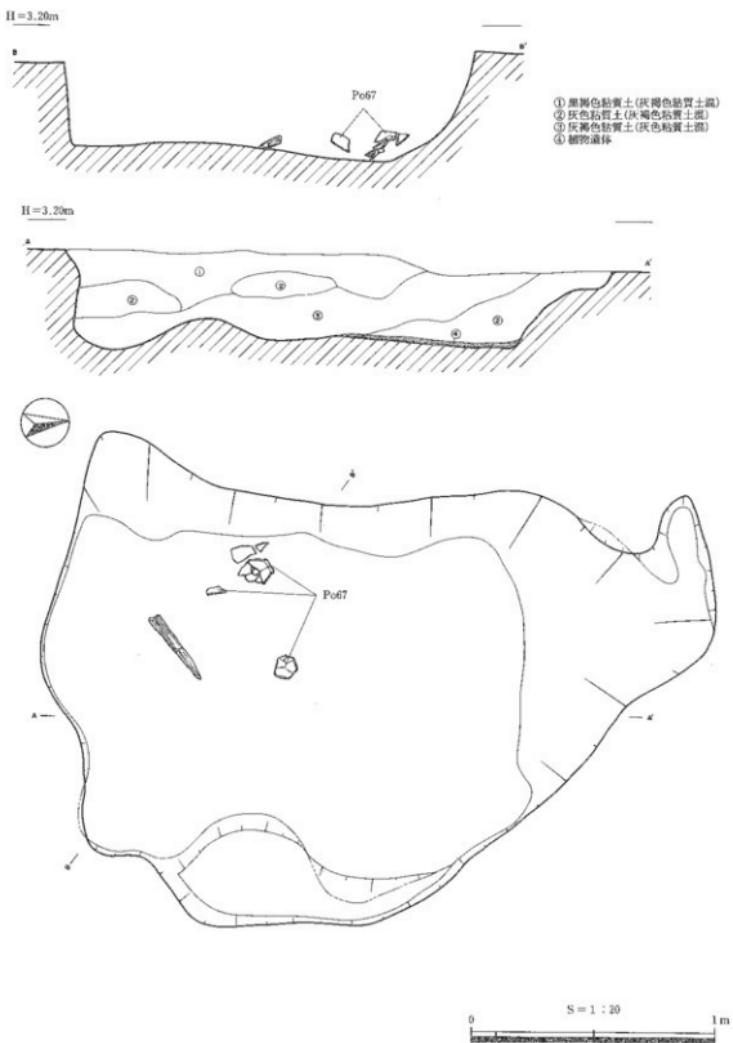


攝圖51 SK-172・173・174・175・176遺構図

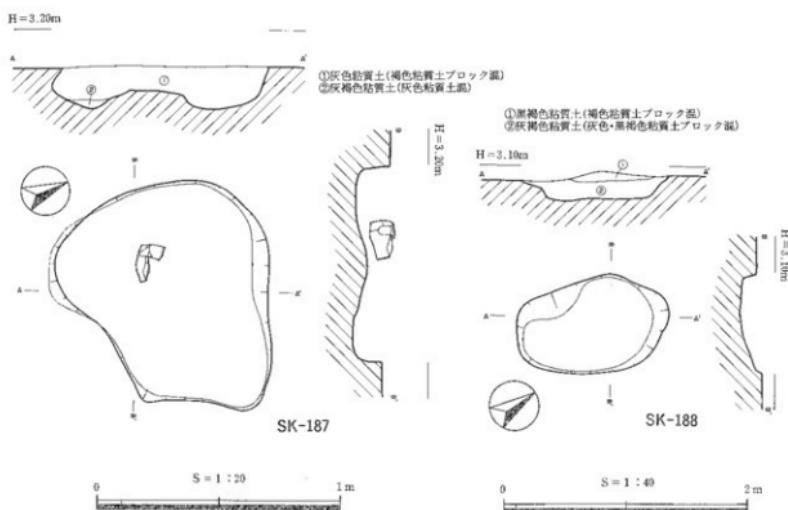
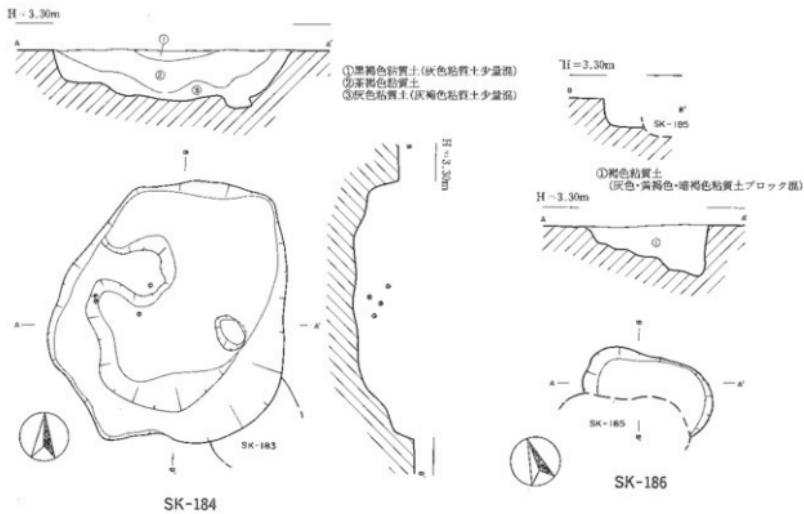


插図52 SK-177・179・180・183遺構図

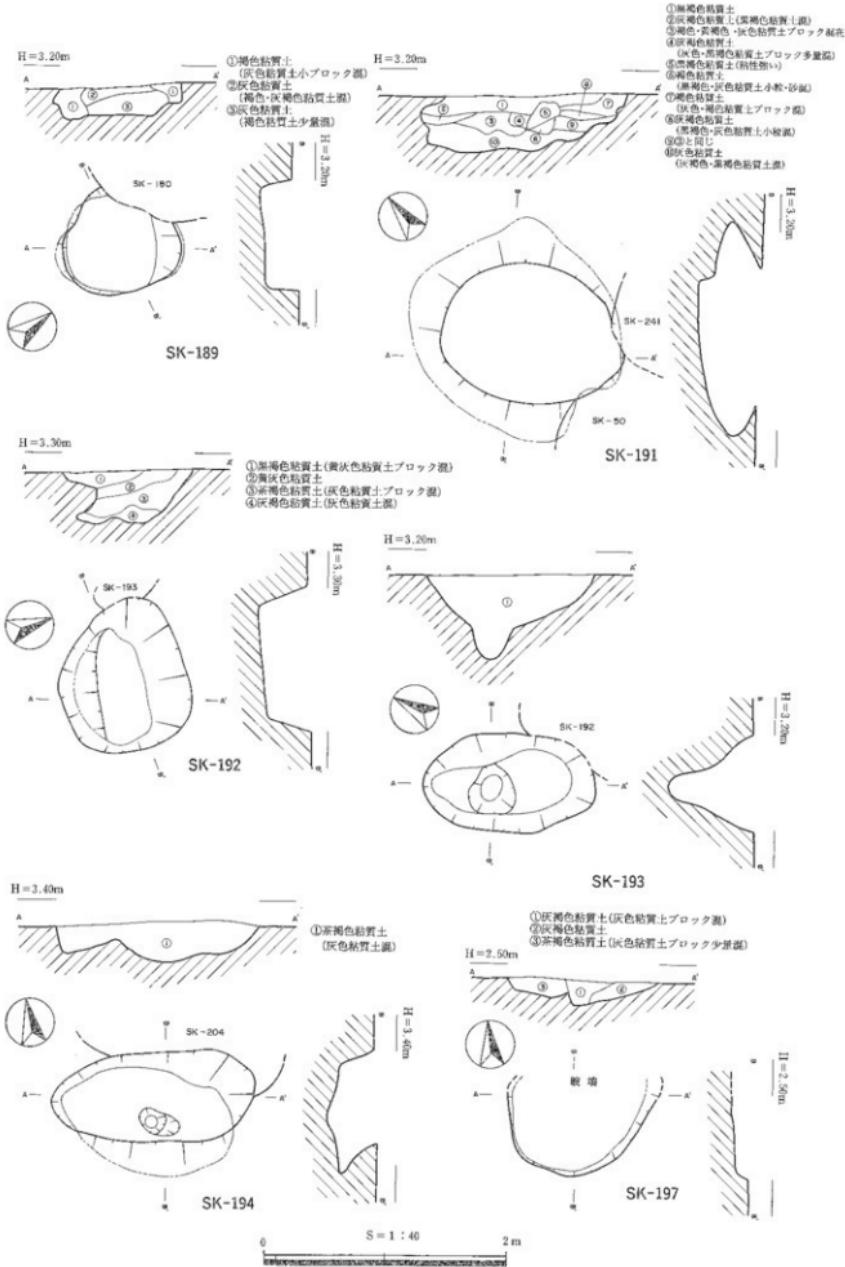




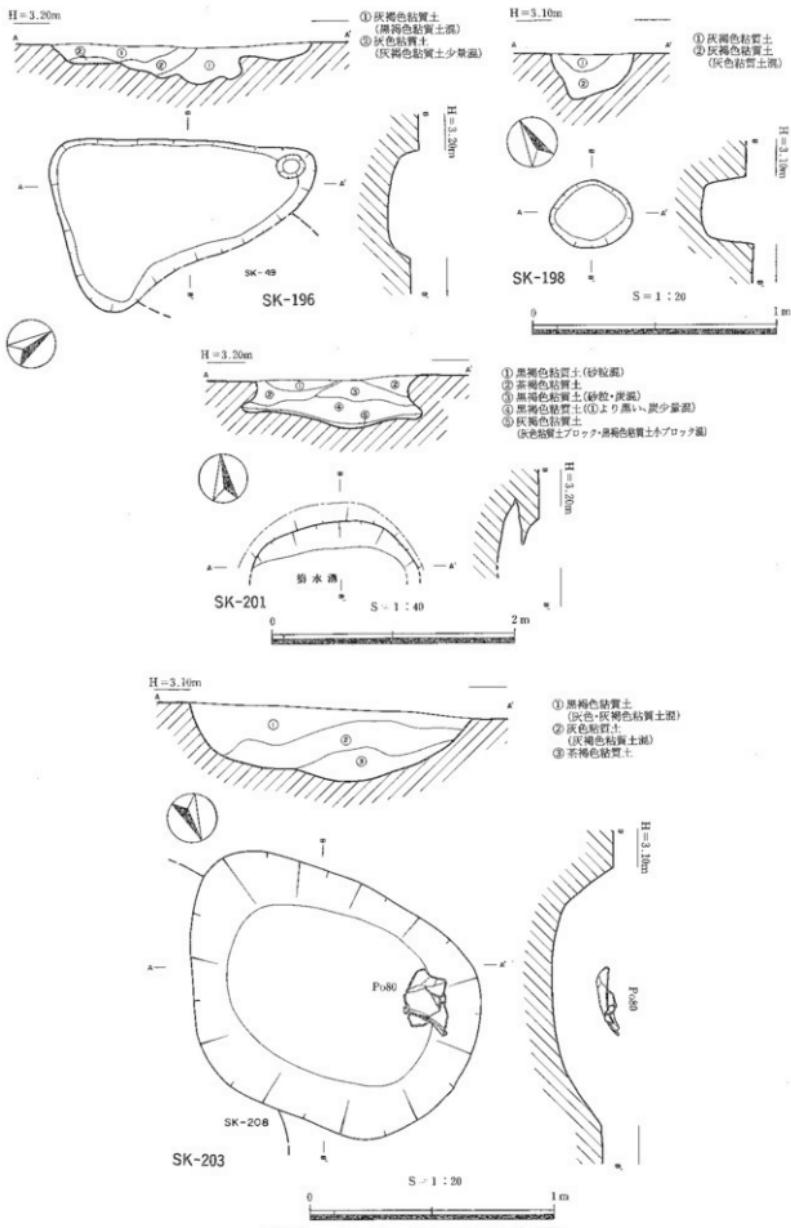
挿図54 SK-182遺構図

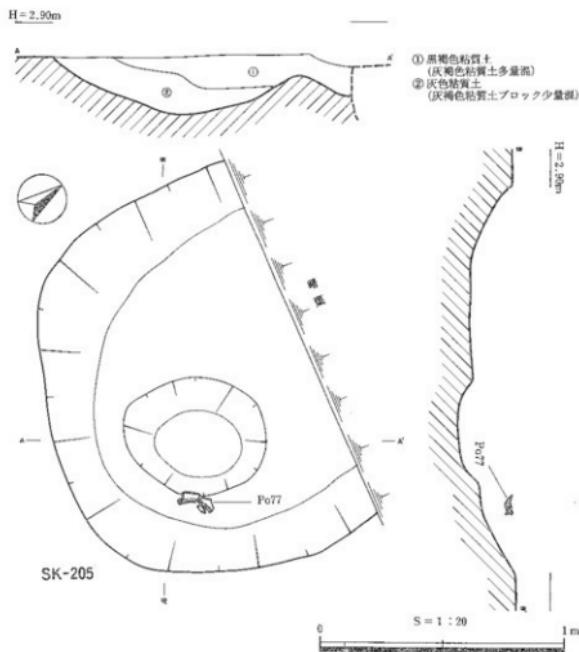
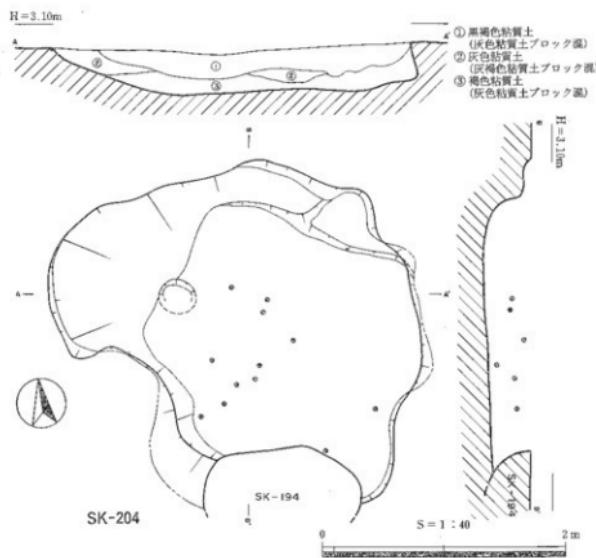


插図55 SK-184・186・187・188遺構図

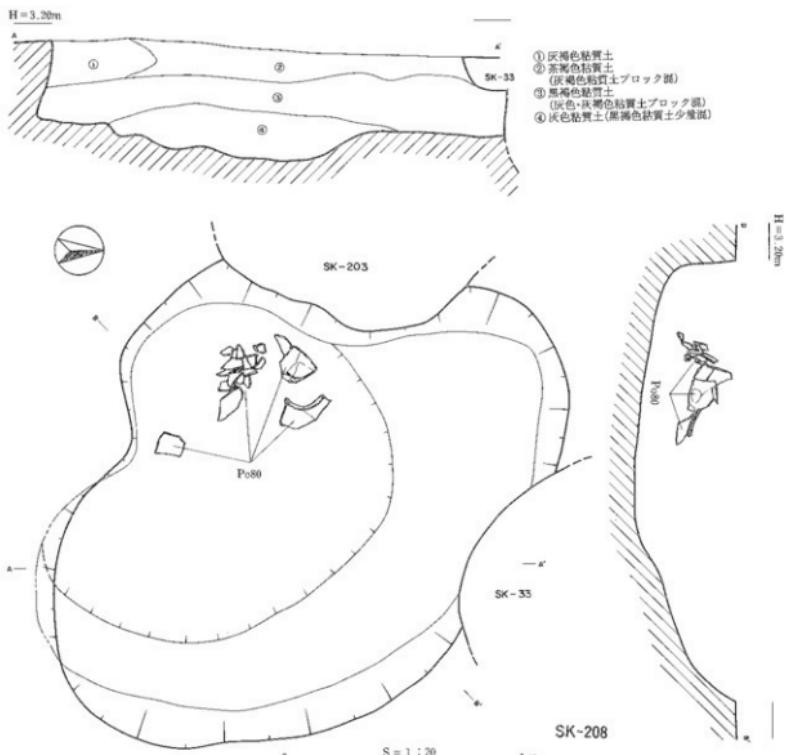
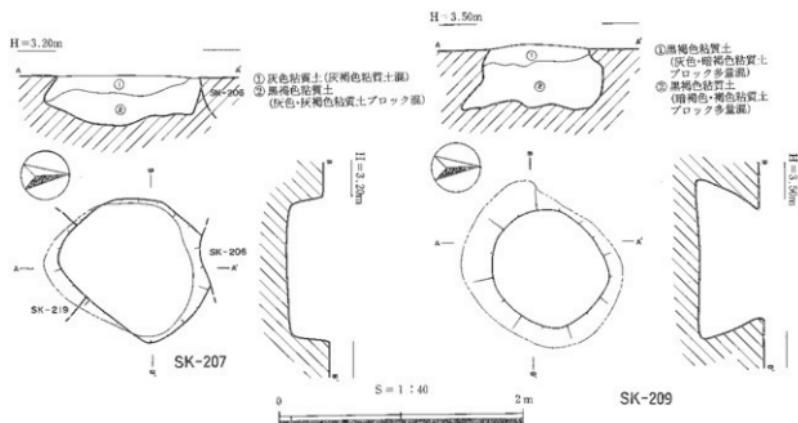


挿図56 SK-189・191・192・193・194・197遺構図



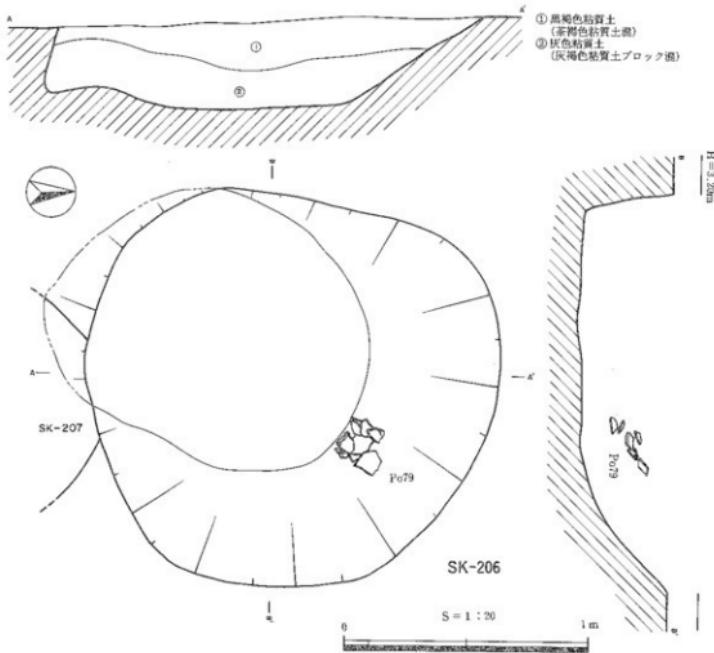


插図58 SK-204・205遺構図

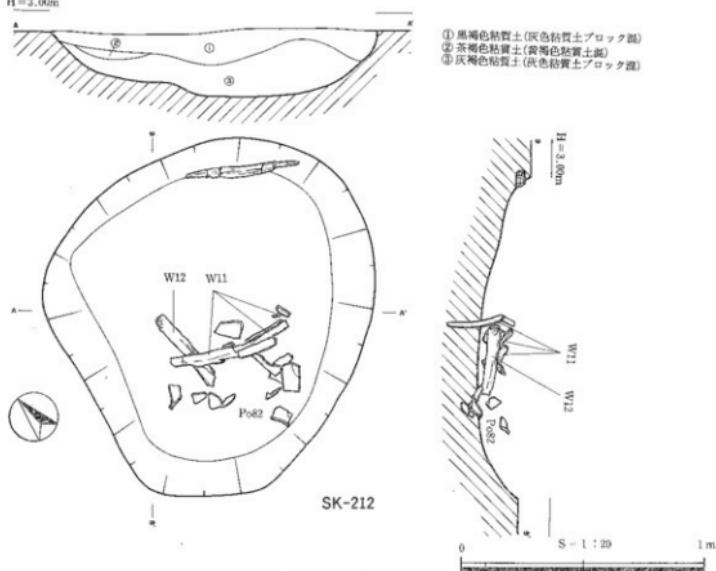


插図59 SK-207・208・209遺構図

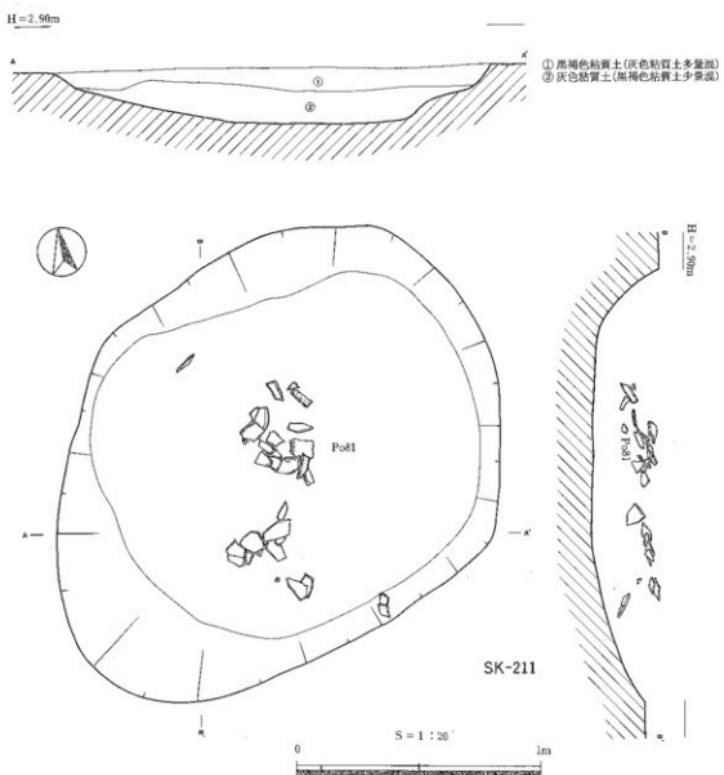
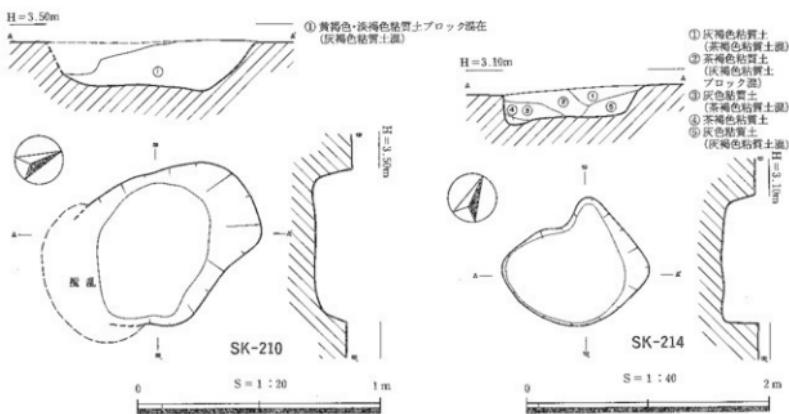
H = 3.20m



H = 3.00m

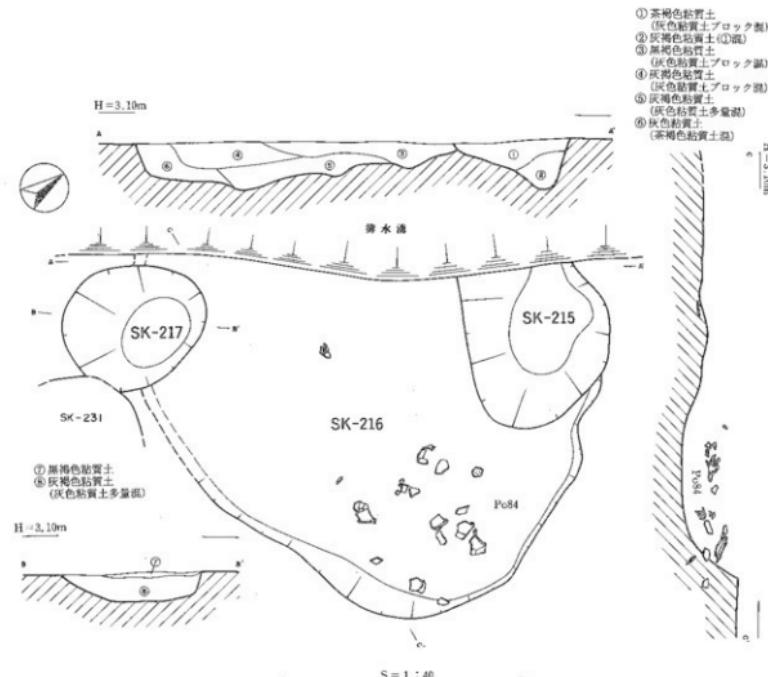
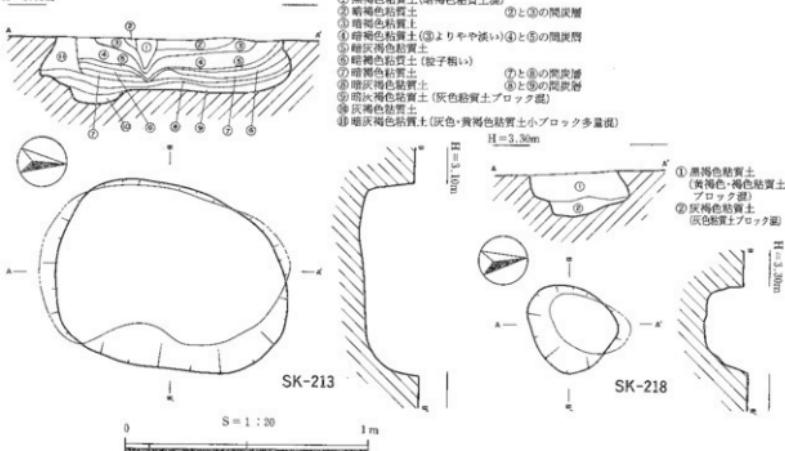


挿図60 SK-206・212遺構図

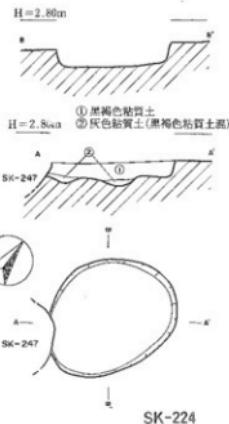
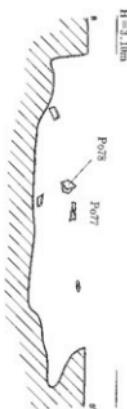
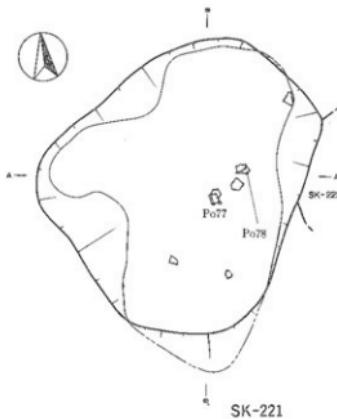
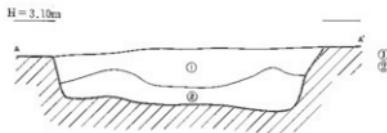
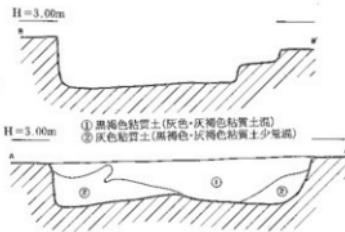
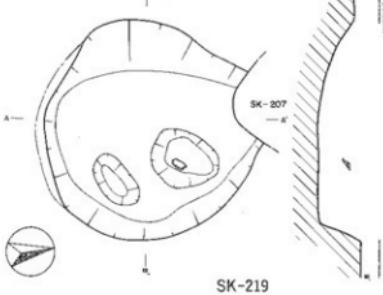
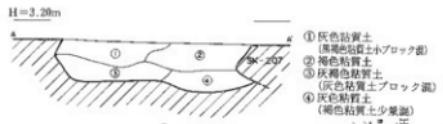


掲図61 SK-210・211・214遺構図

H = 3.10m



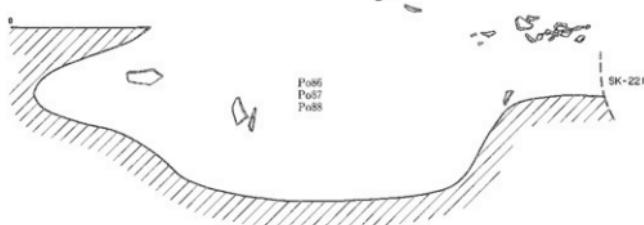
挿図62 SK-213・215・216・217・218遺構図



0 S = 1 : 40 2 m

挿図63 SK-219・220・221・224遺構図

H = 3.00m



H = 3.00m

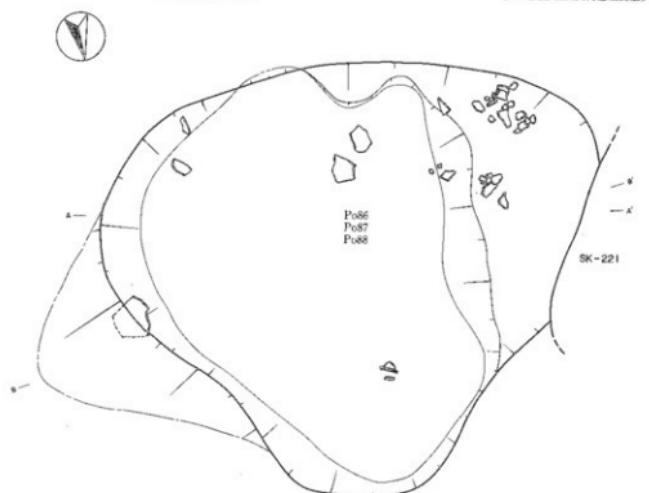
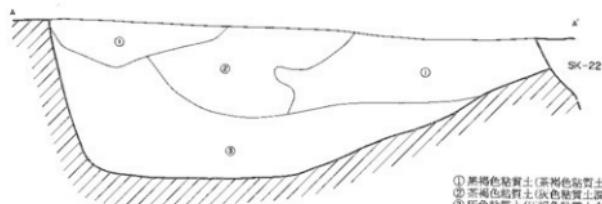
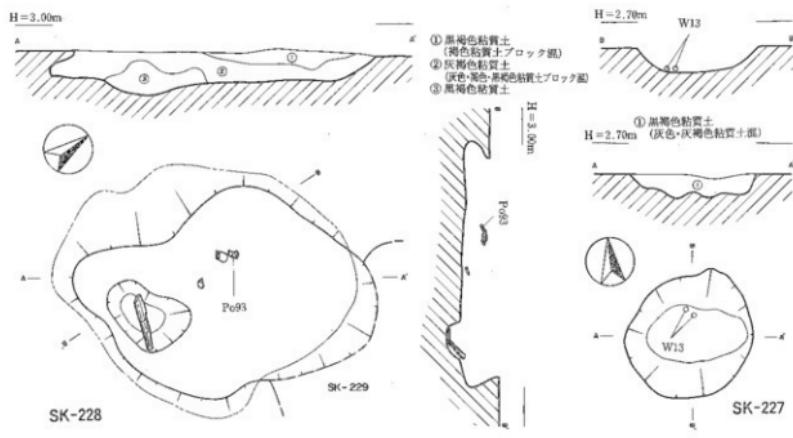
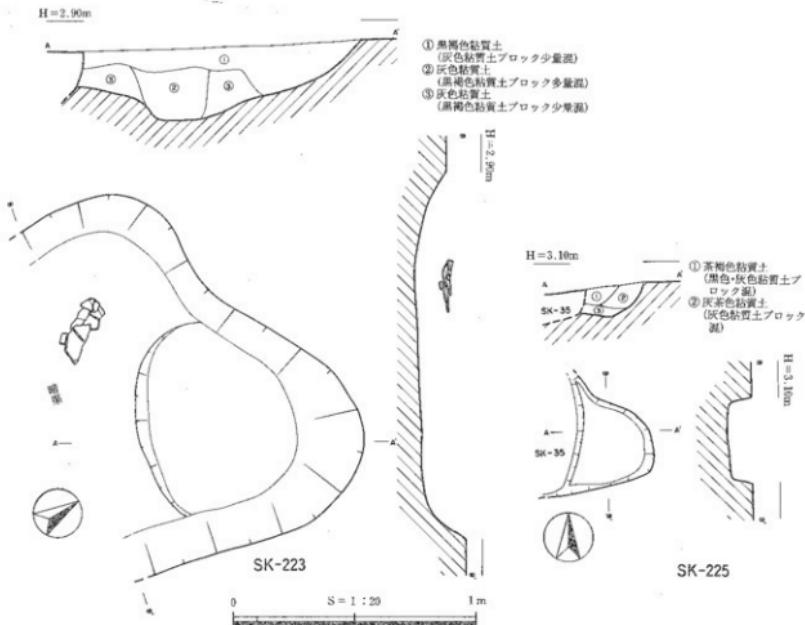
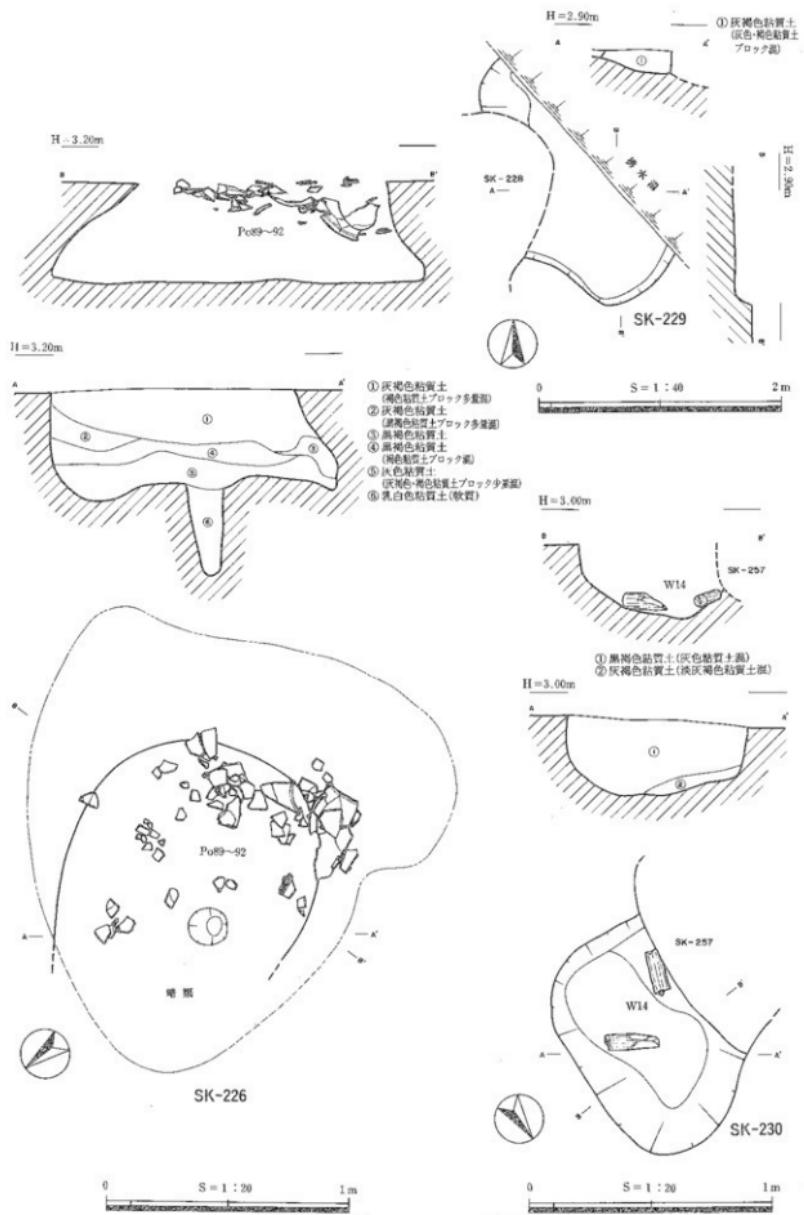


插圖64 SK-222遺構圖



挿図65 SK-223・225・227・228遺構図



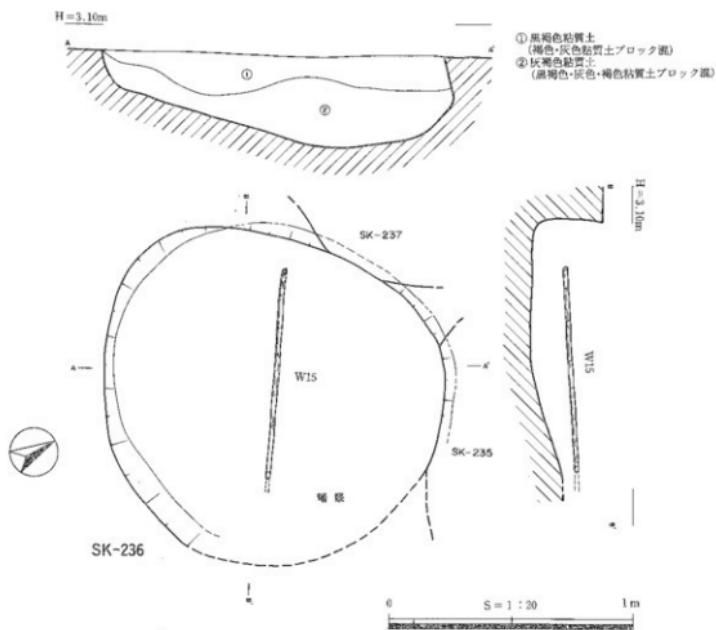
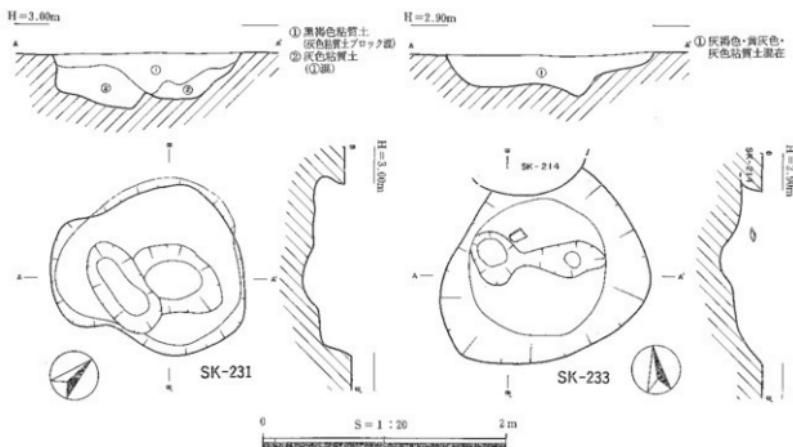
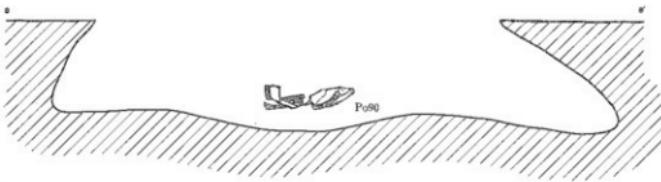
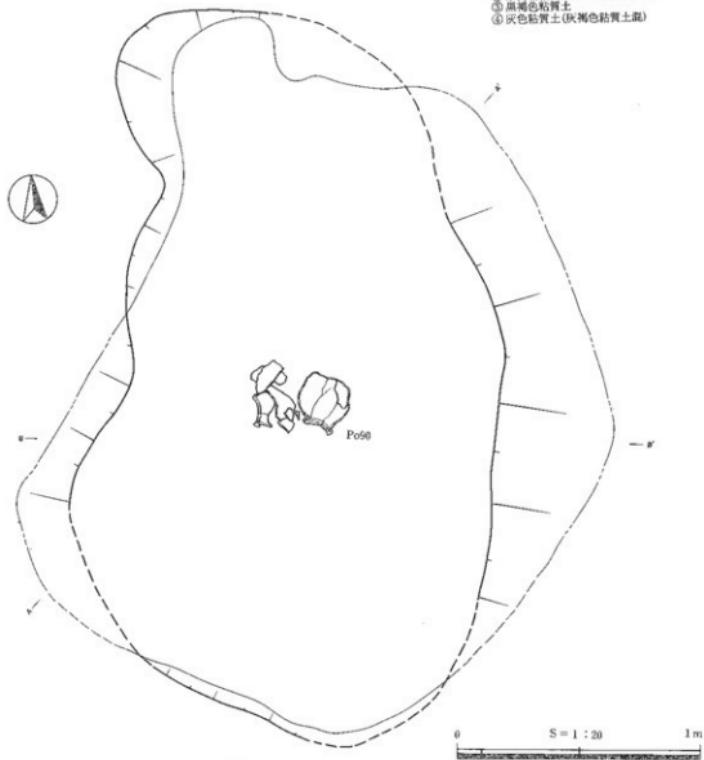
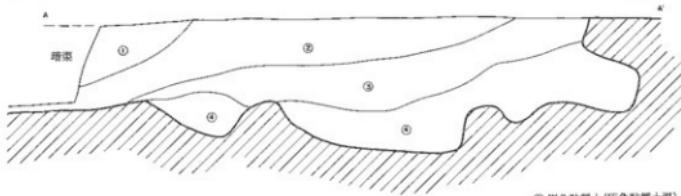


図67 SK-231・233・236遺構図

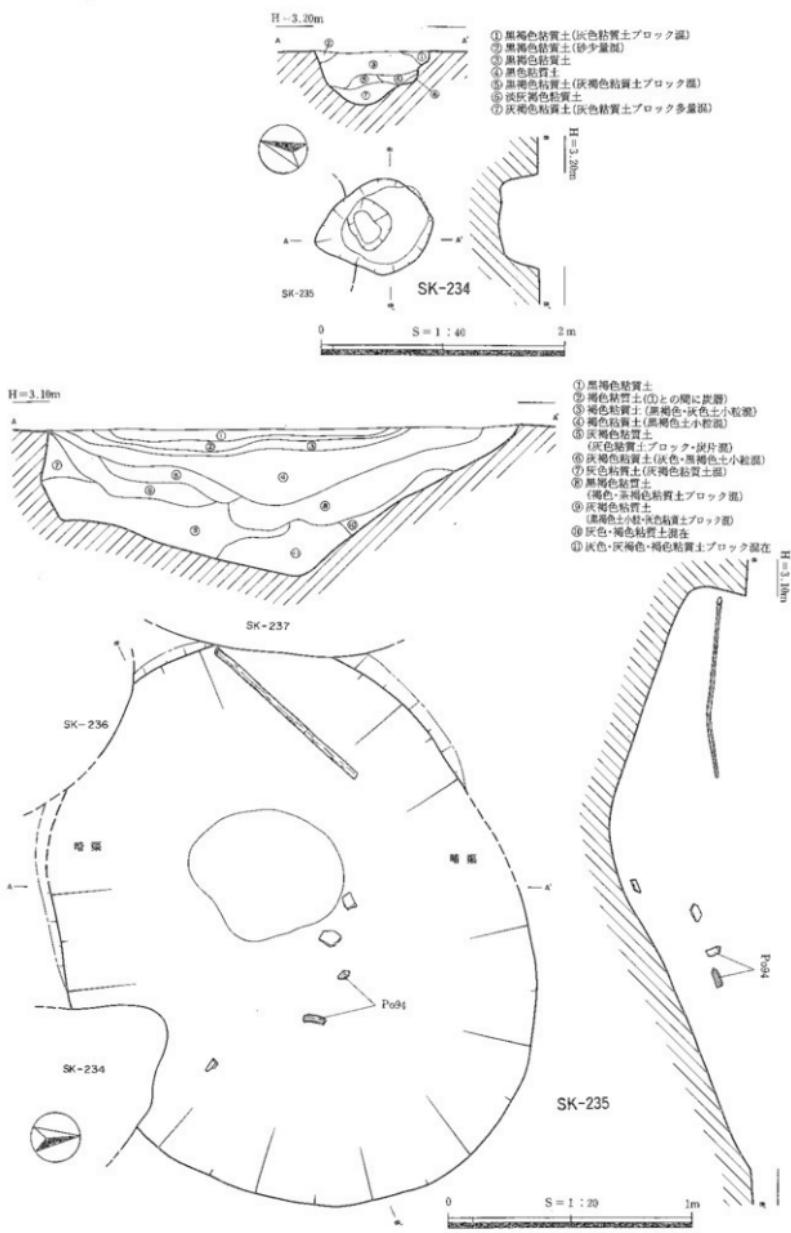
H = 3.20m

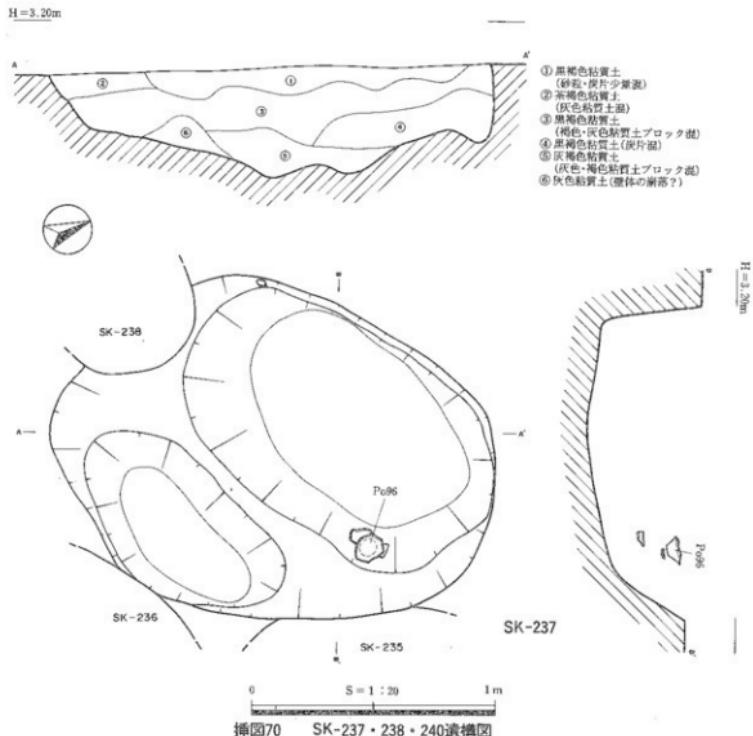
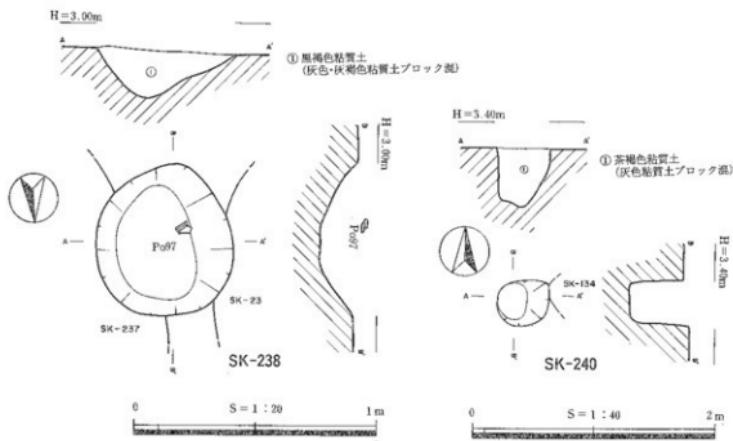


H = 3.20m

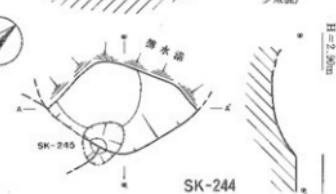
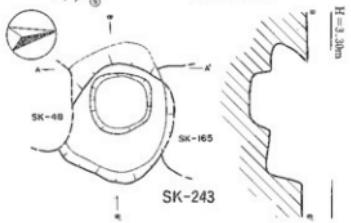
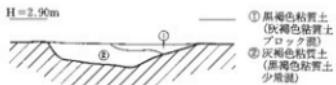
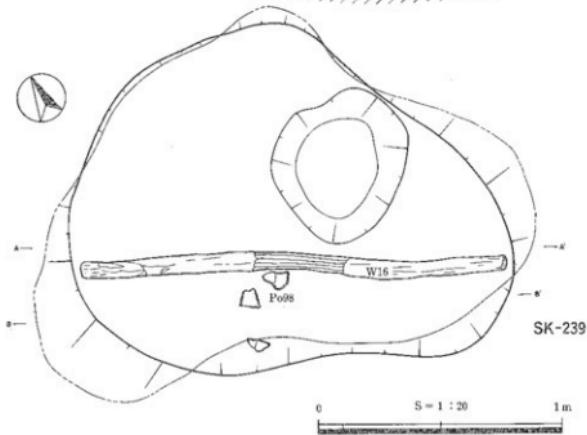
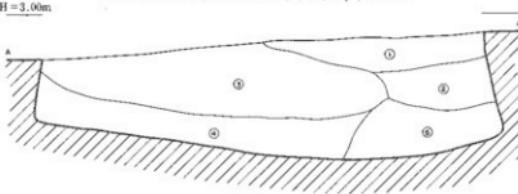
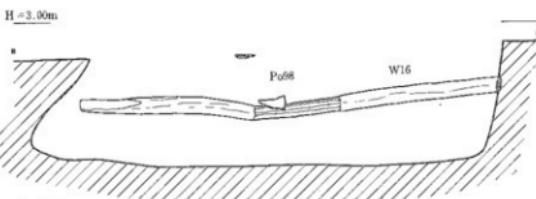


擇図68 SK-232遺構図





掲図70 SK-237・238・240遺構図



插図71 SK-239・243・244遺構図

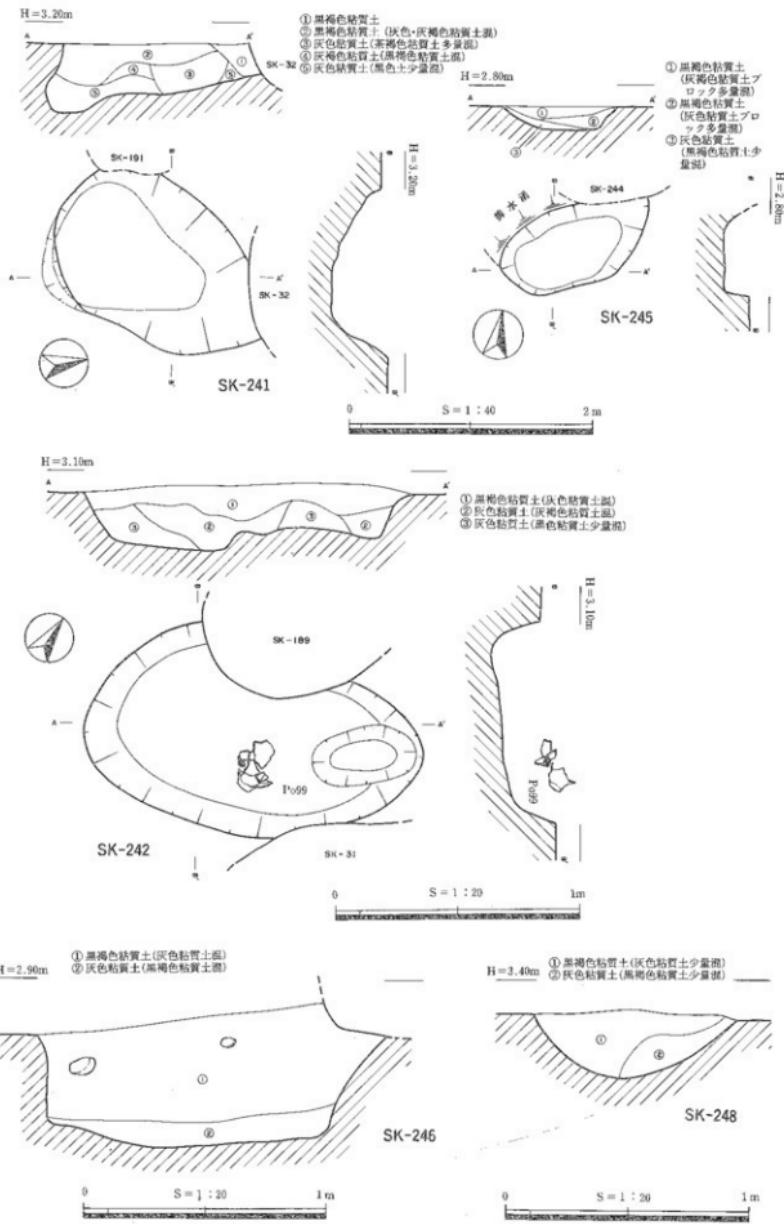
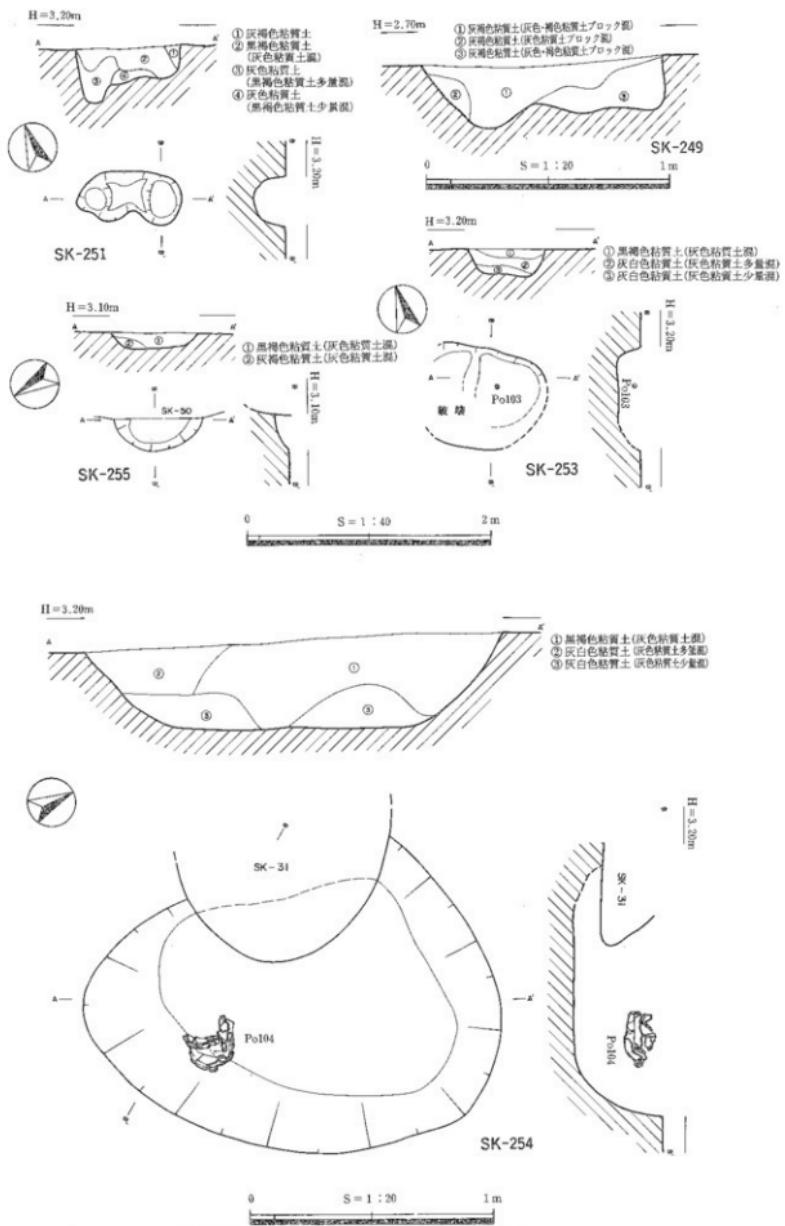
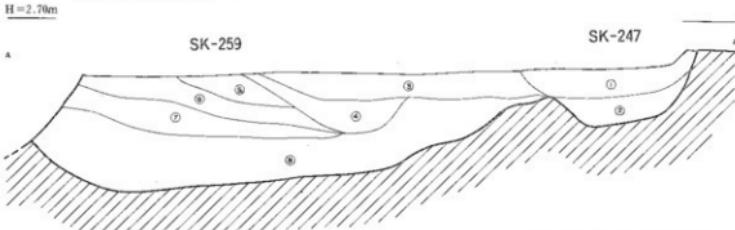
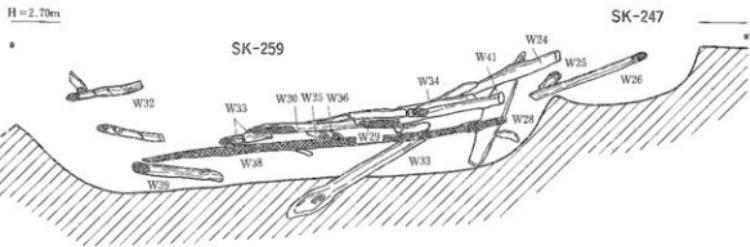


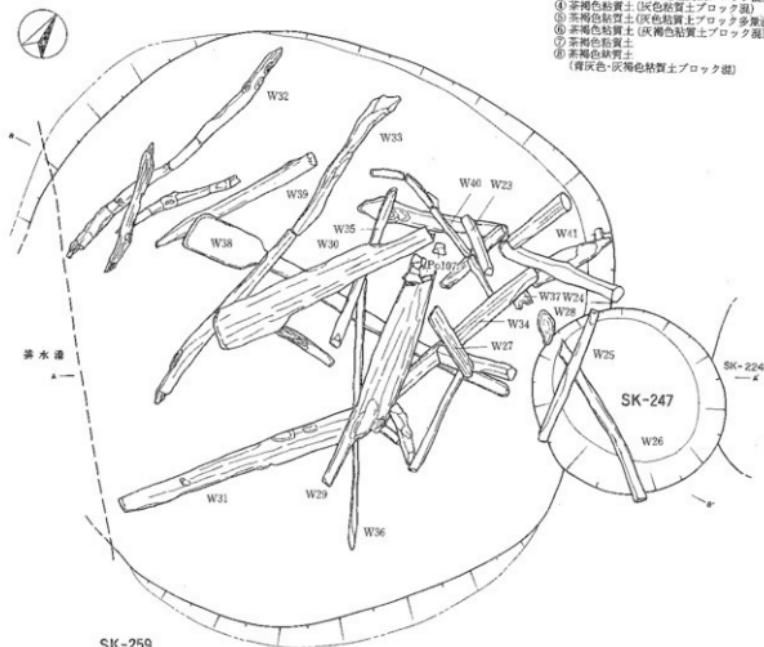
図72 SK-241・242・245・246・248遺構図



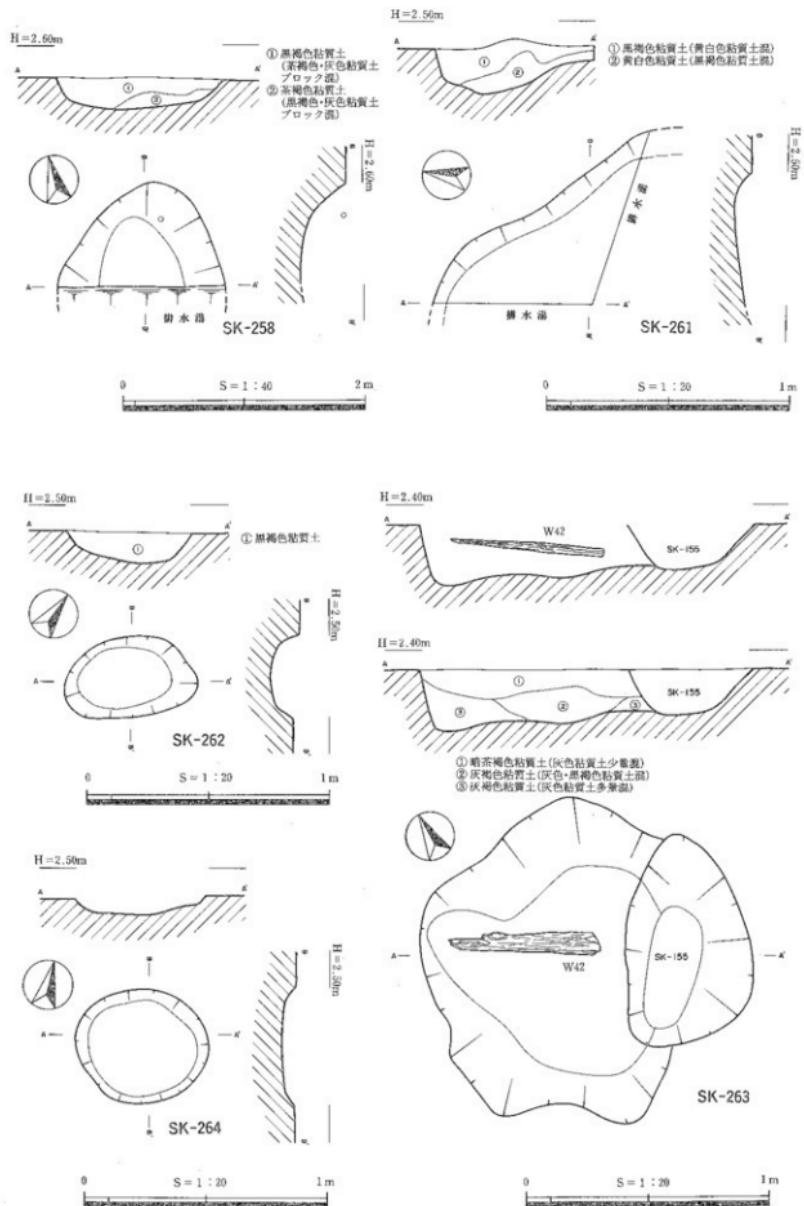
掲図73 SK-249・251・253・254・255構造図



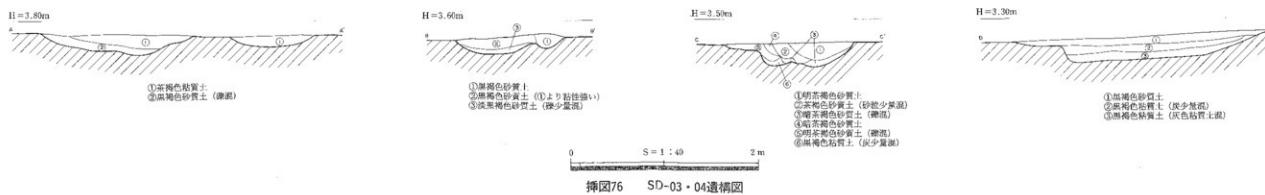
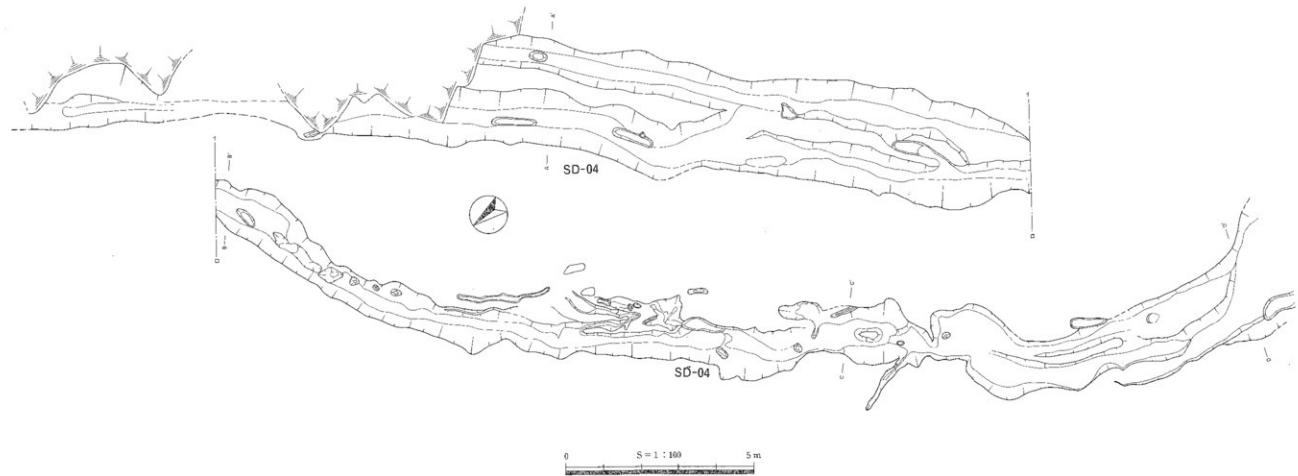
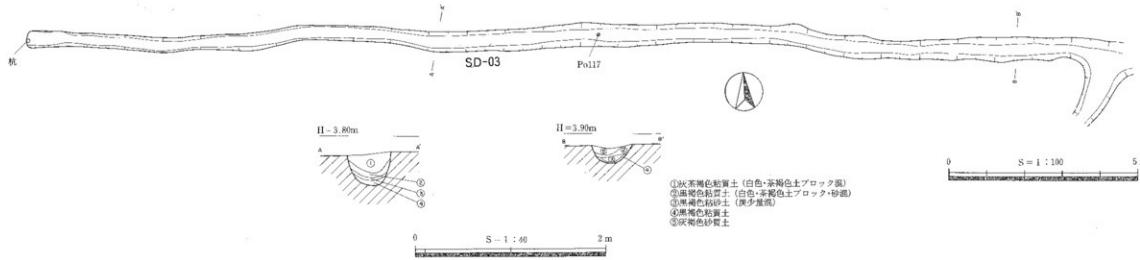
- ① 茶褐色粘質土(灰色粘質土少量混)
- ② 茶褐色粘質土(灰色粘質土多量混)
- ③ 灰褐色粘質土(青灰色粘質土ブロック混)
- ④ 灰褐色粘質土(灰色粘質土ブロック混)
- ⑤ 灰褐色粘質土(灰色粘質土ブロック多量混)
- ⑥ 灰褐色粘質土(灰褐色粘質土ブロック混)
- ⑦ 灰褐色粘質土
- ⑧ 茶褐色粘質土
(青灰色・灰褐色粘質土ブロック混)

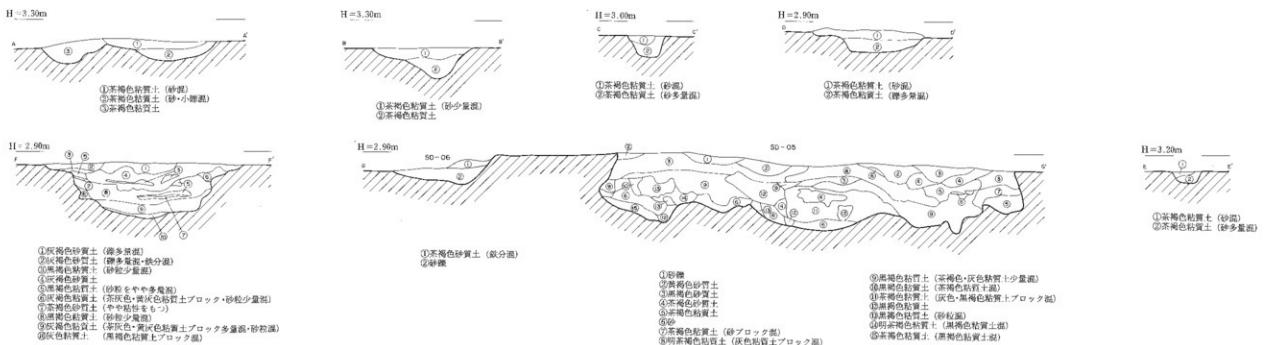
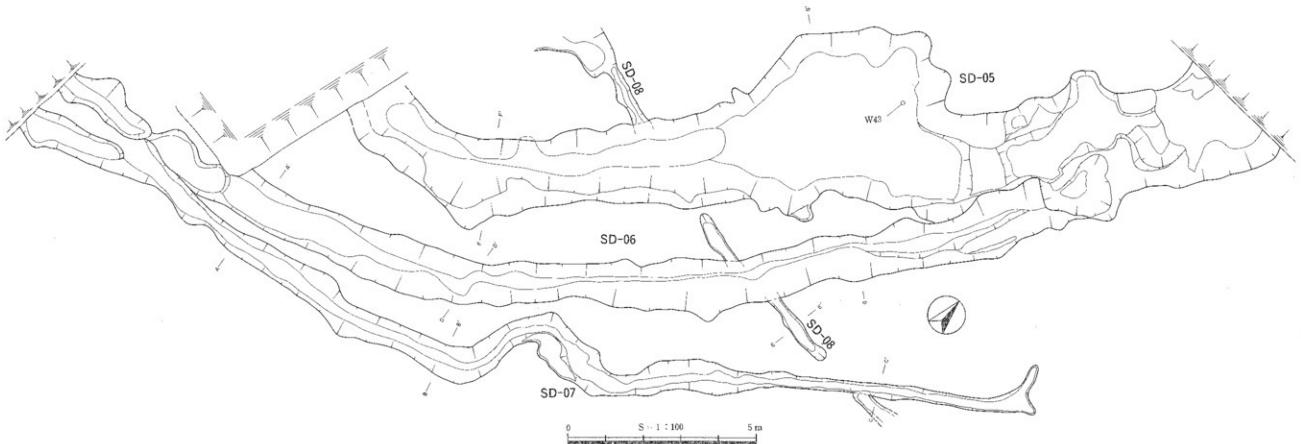


挿図74 SK-247・259遺構図



插図75 SK-258・261・262・263・264造構図





0 S : 1 : 40 2 m
図77 SD-05・06・07・08遺構図

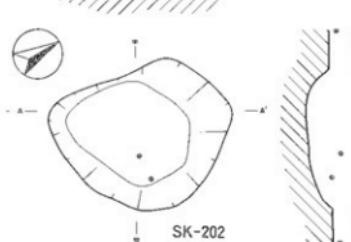
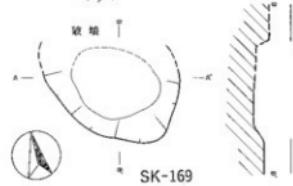
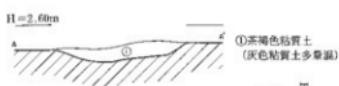
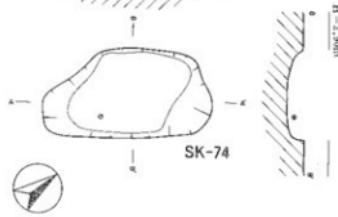
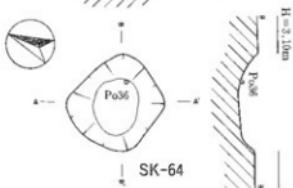
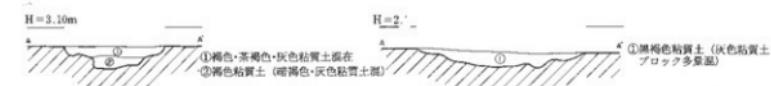
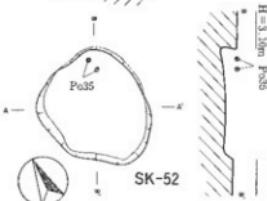
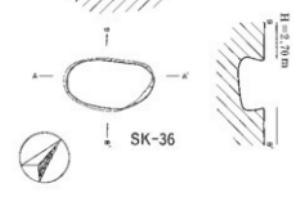
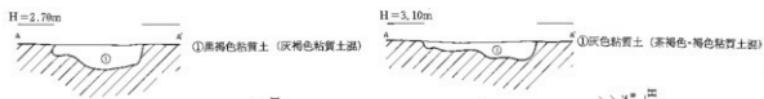
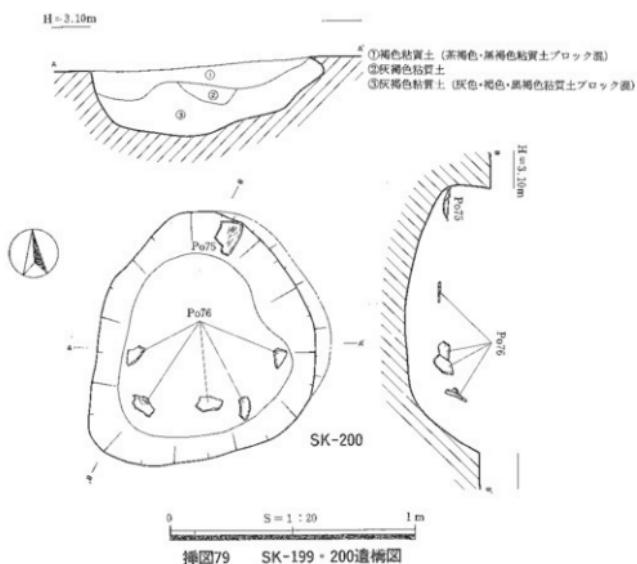
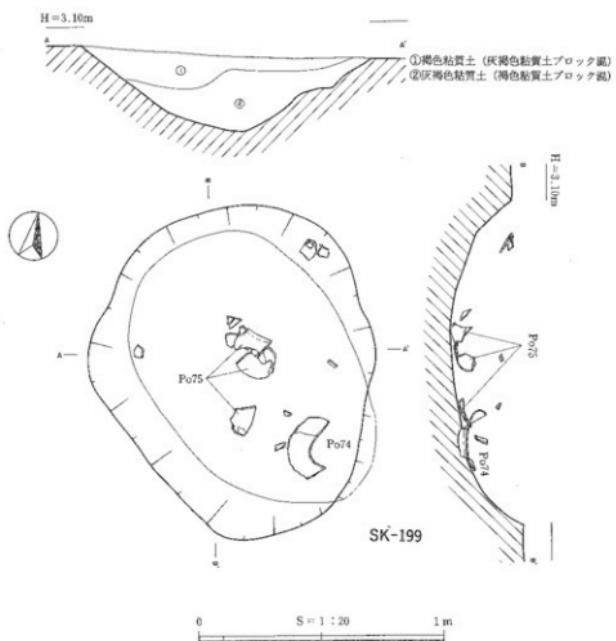
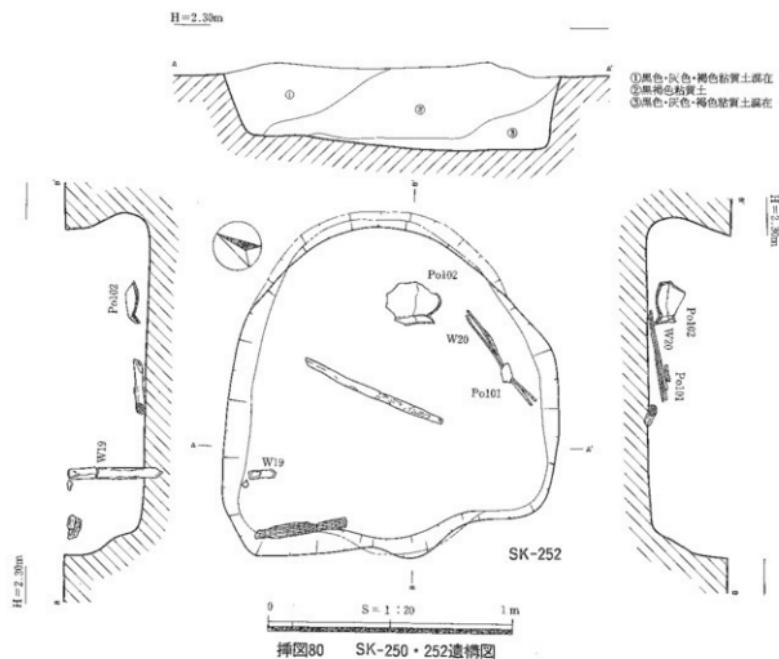
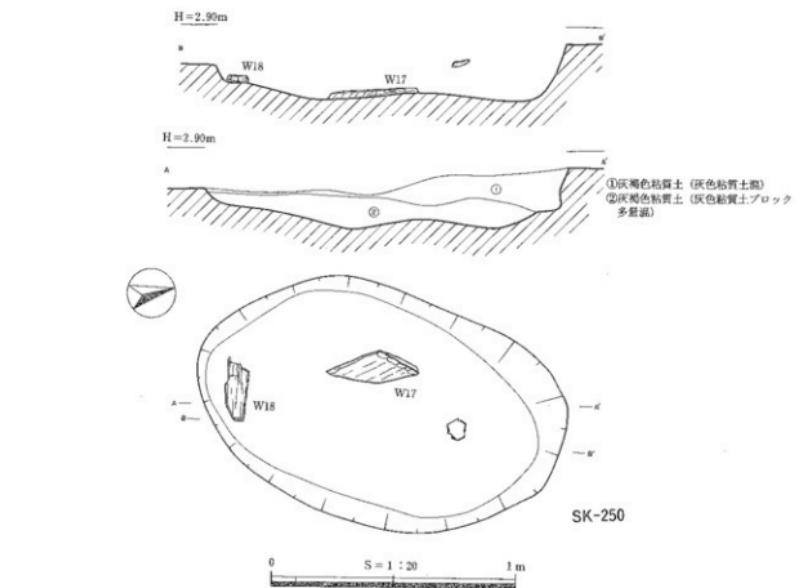


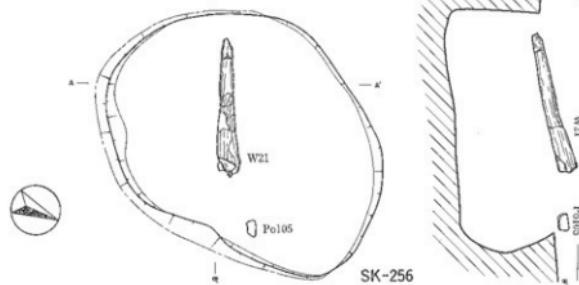
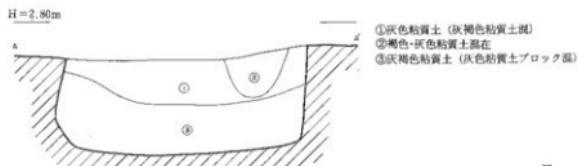
図78 SK-36・52・64・74・169・202遺構図



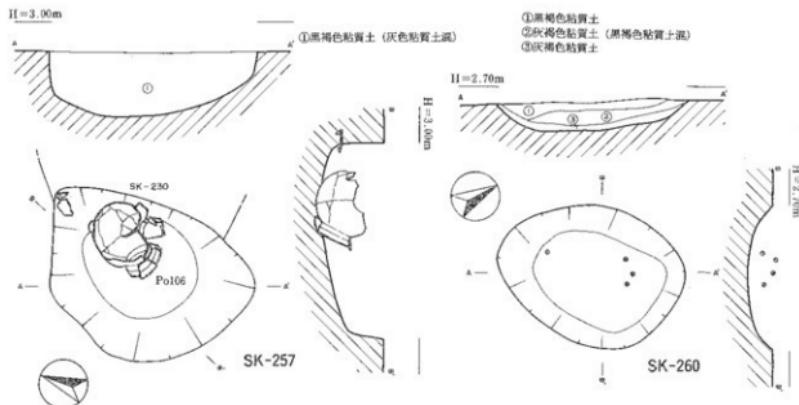
挿図79 SK-199・200遺構図



挿図80 SK-250・252遺構図

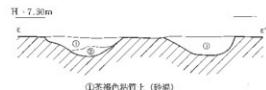
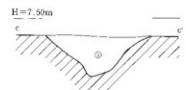
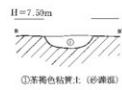
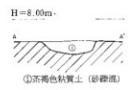
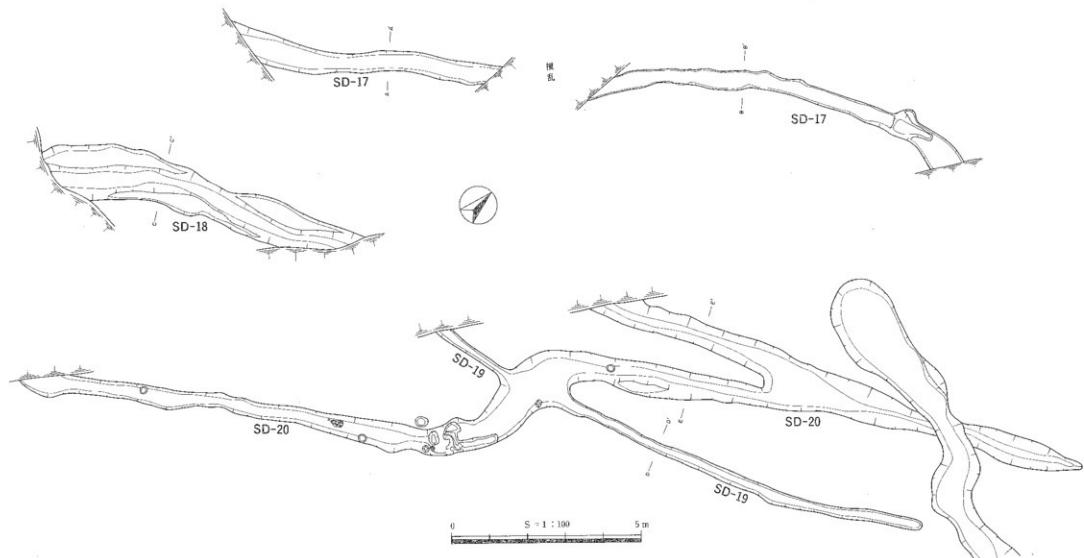


0 S = 1 : 20 1 m

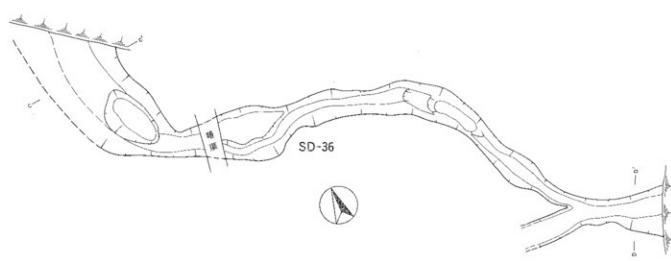
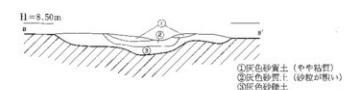
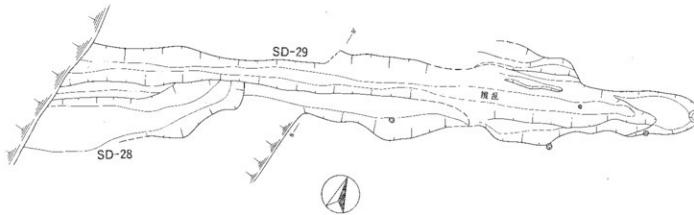
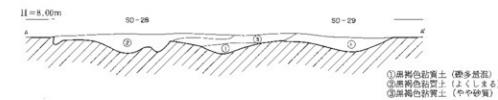
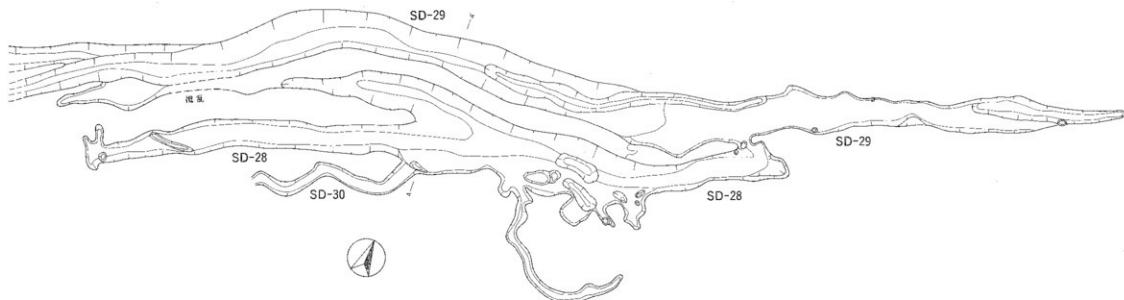


0 S = 1 : 20 1 m 0 S = 1 : 40 2 m

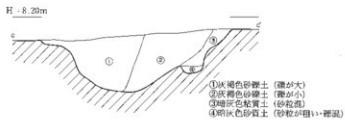
插図81 SK-256・257・260造構図



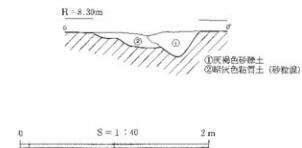
0 S = 1 : 40 2 m
插图82 SD-17・18・19・20造模图



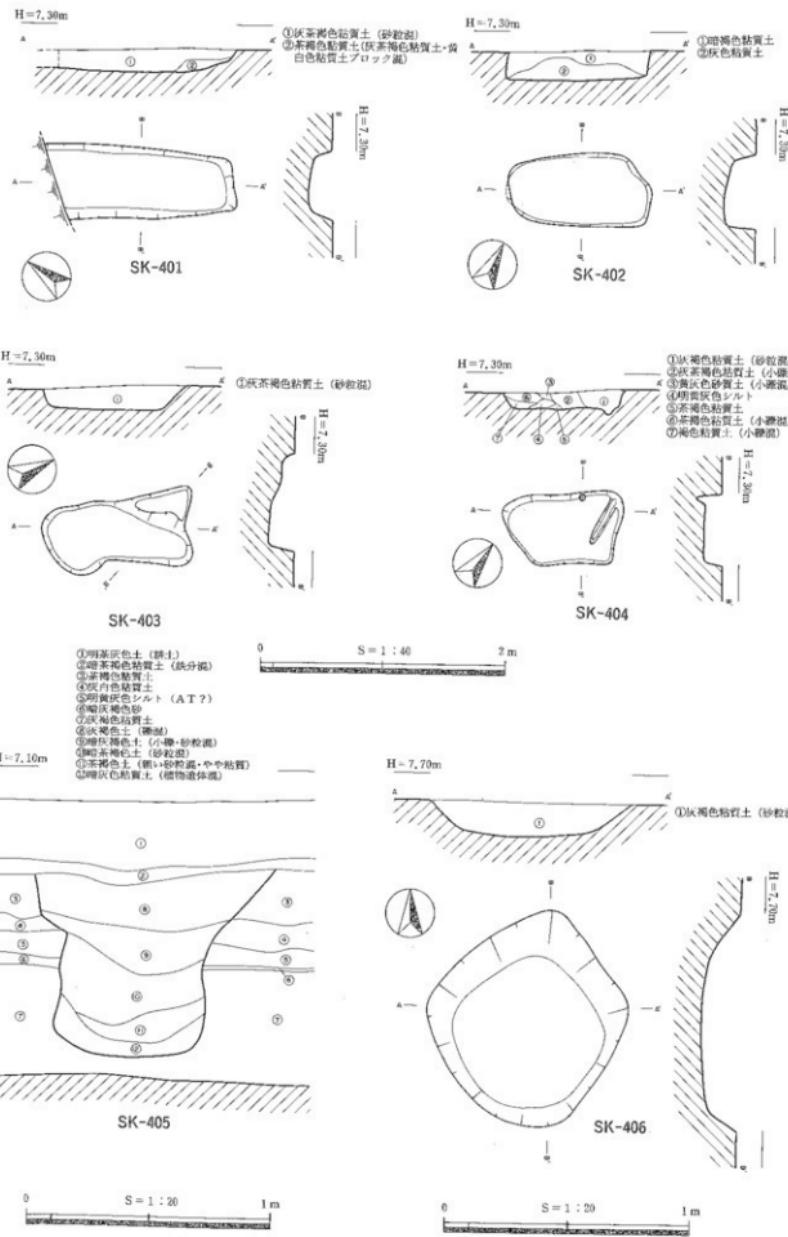
0 S = 1 : 100 5 m

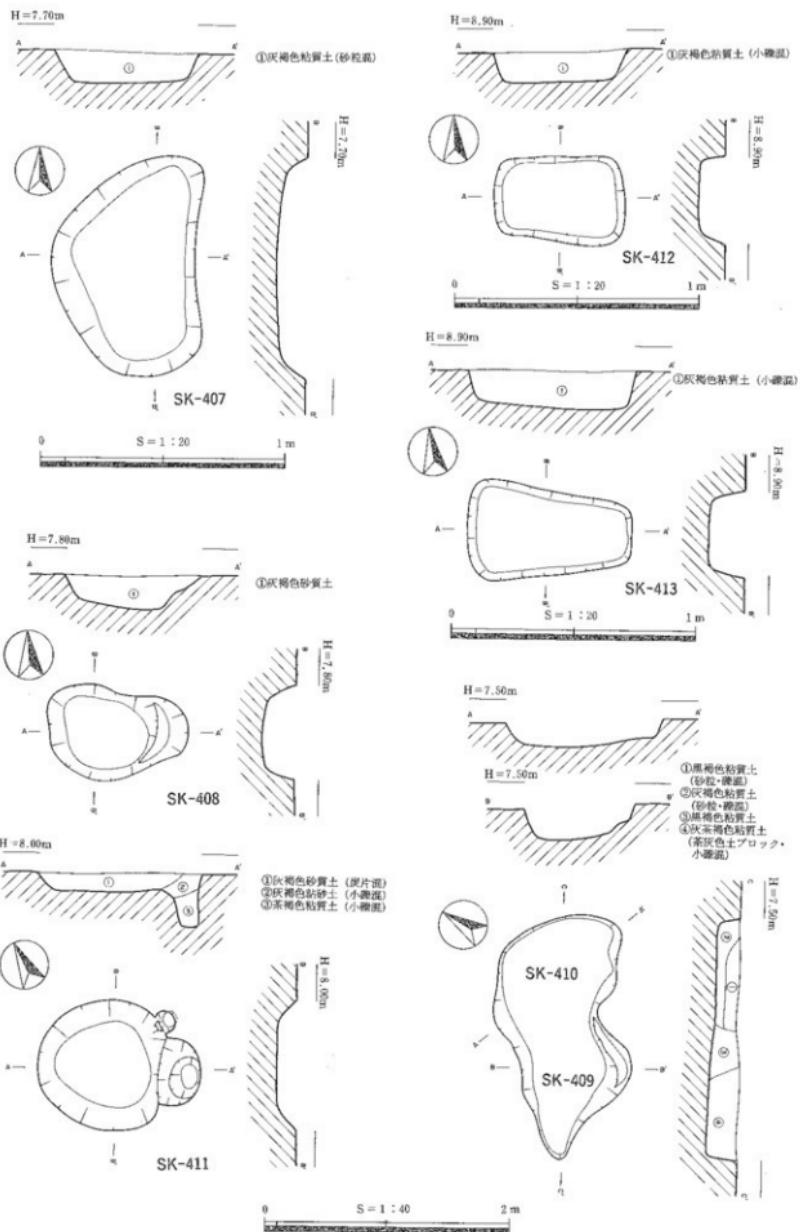


插図83 SD-28・29・30・36遺構図



0 S = 1 : 40 2 m





插図85 SK-407・408・409・410・411・412・413遺構図

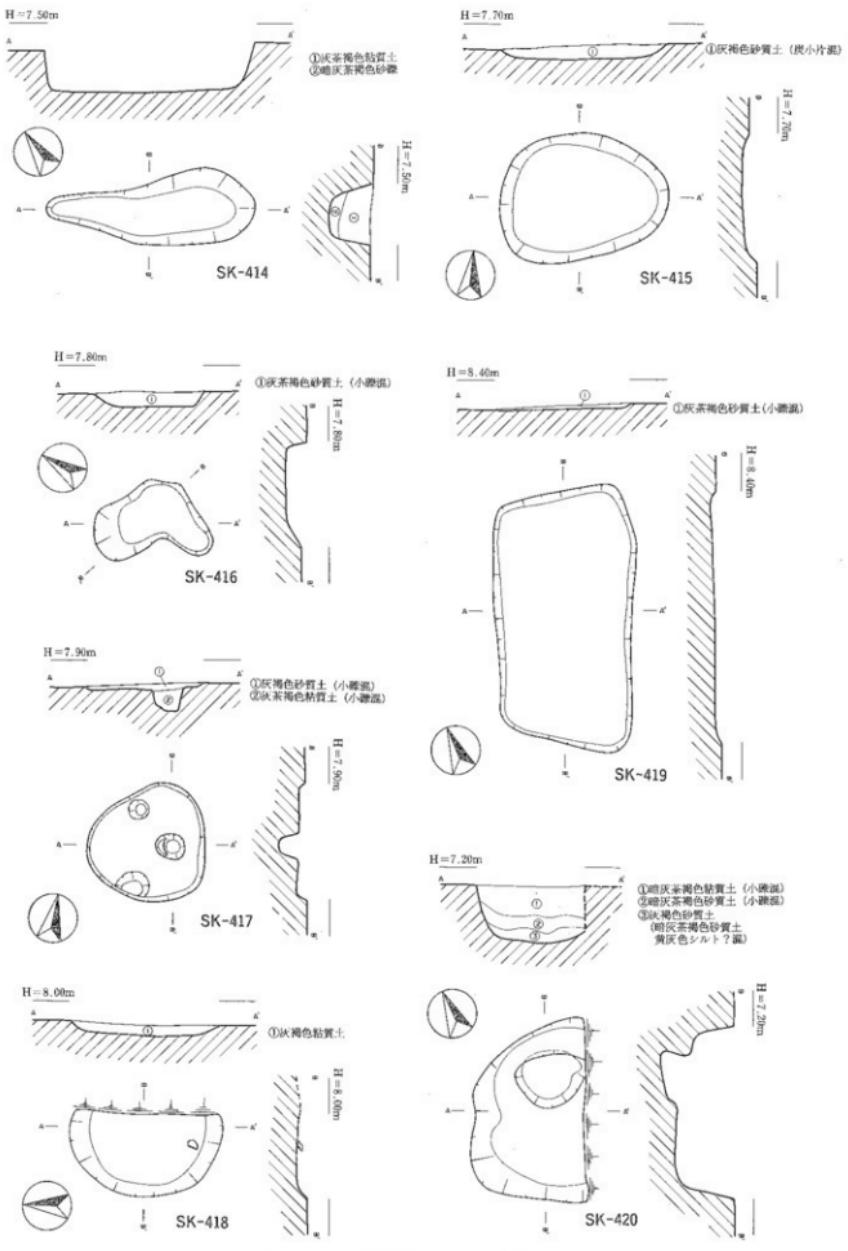
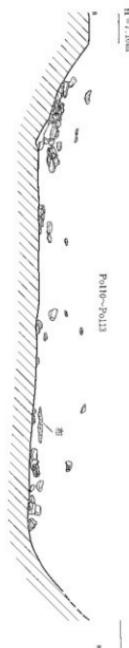
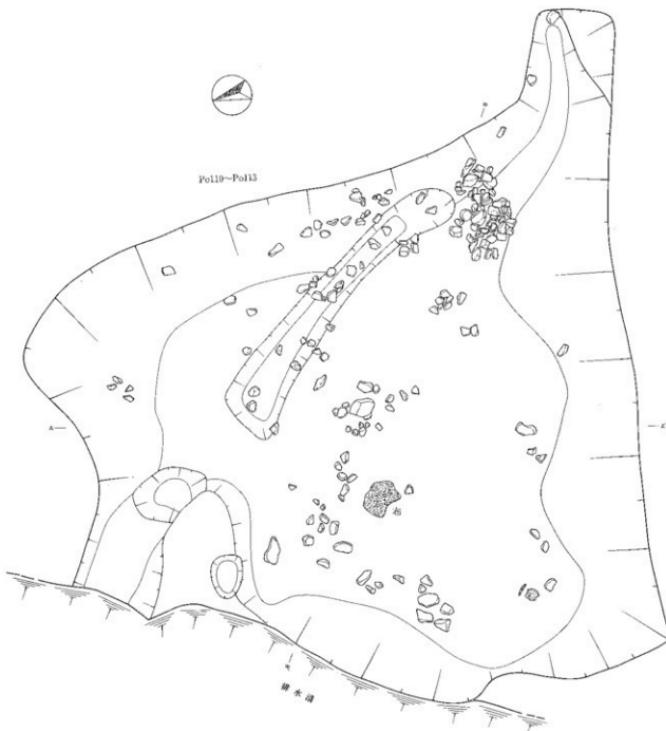
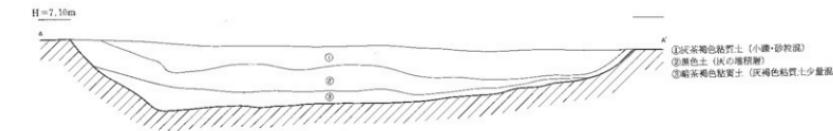
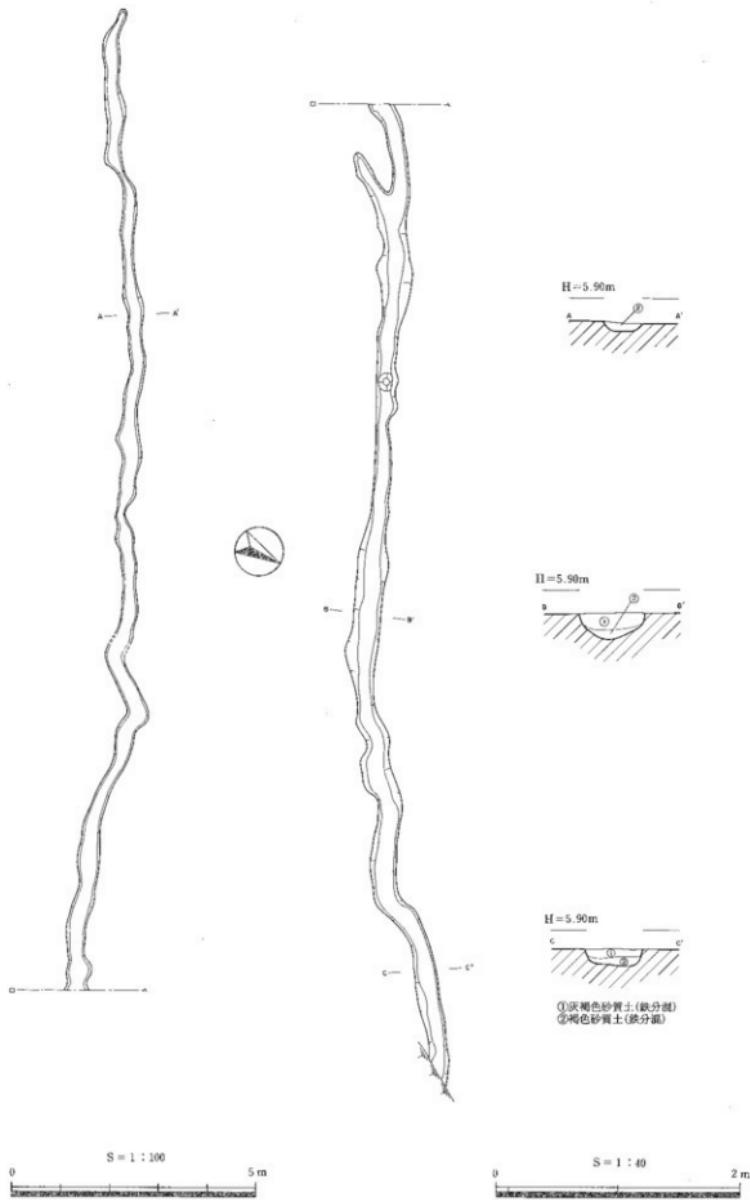


図86 SK-414・415・416・417・418・419・420遺構図



0 S = 1 : 20 1 m

挿図87 SK-421遺構図



插図88 SD-11造構図

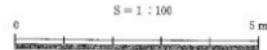
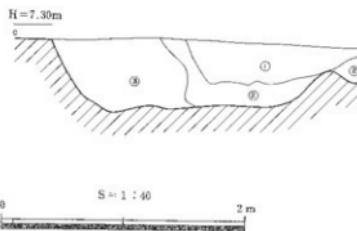
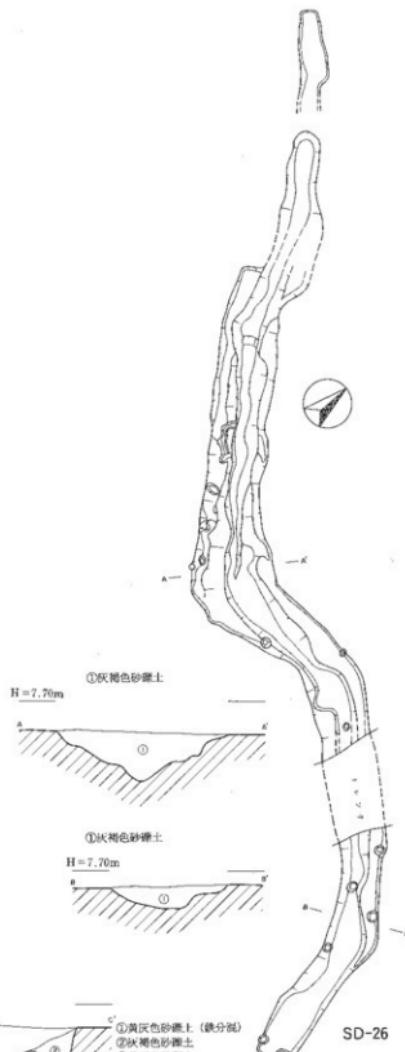
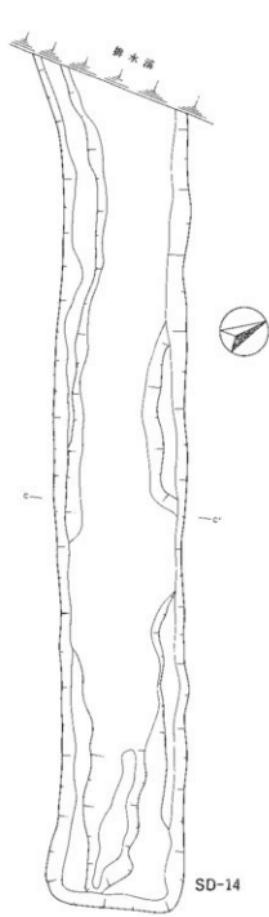
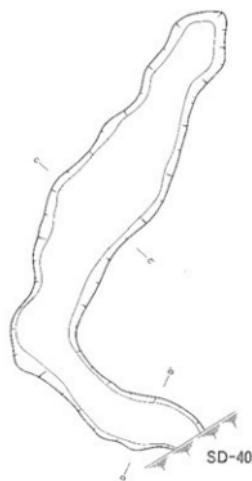
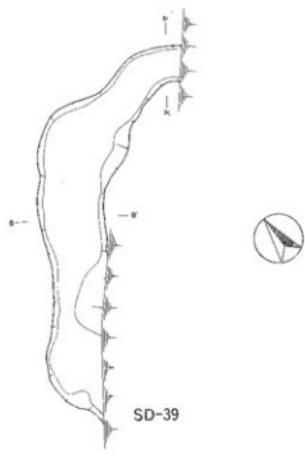
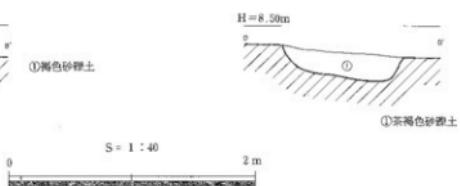
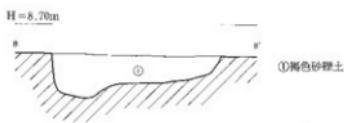
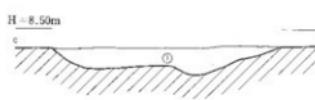
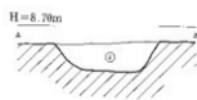


插圖89 SD-14・26遺構圖

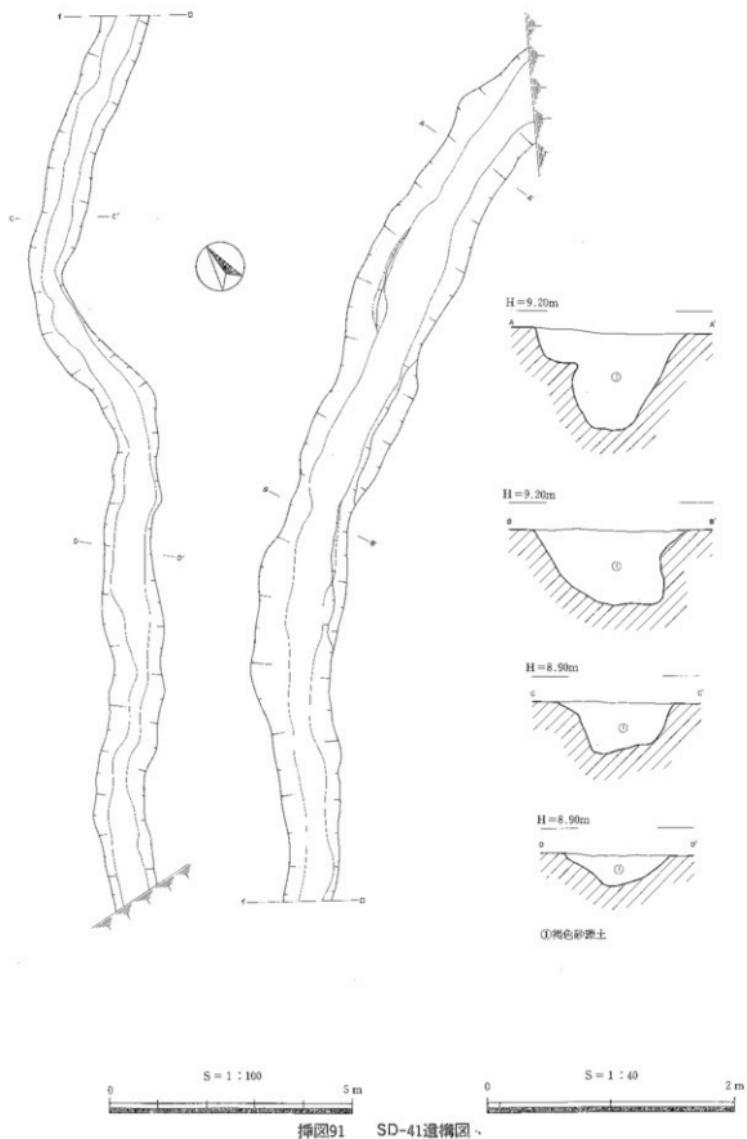


S = 1 : 100
0 5 m



S = 1 : 40
0 2 m

插圖90 SD-39・40遺構圖



擇図91 SD-41遺構図、

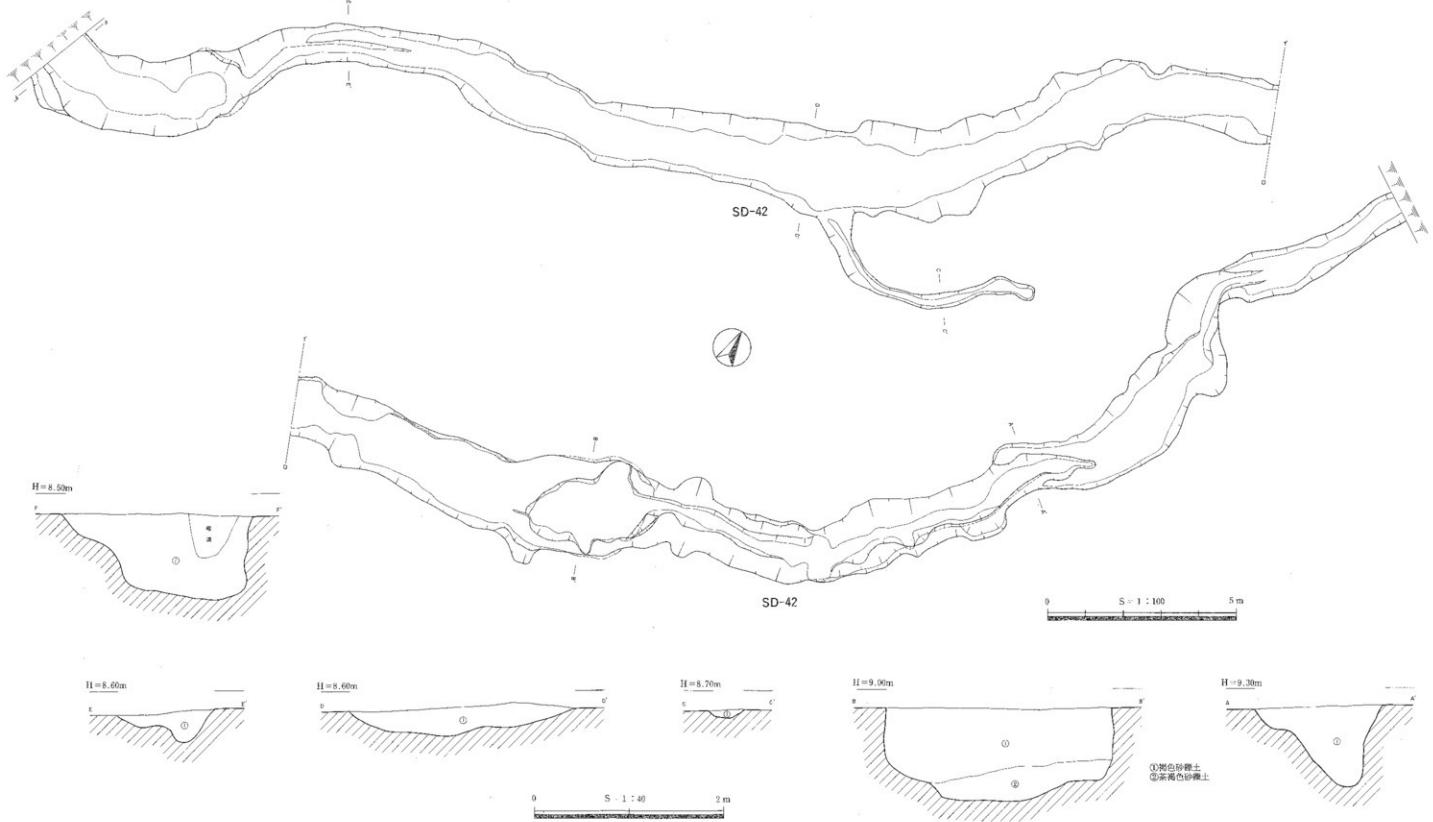


插圖92 SD-42遺構圖

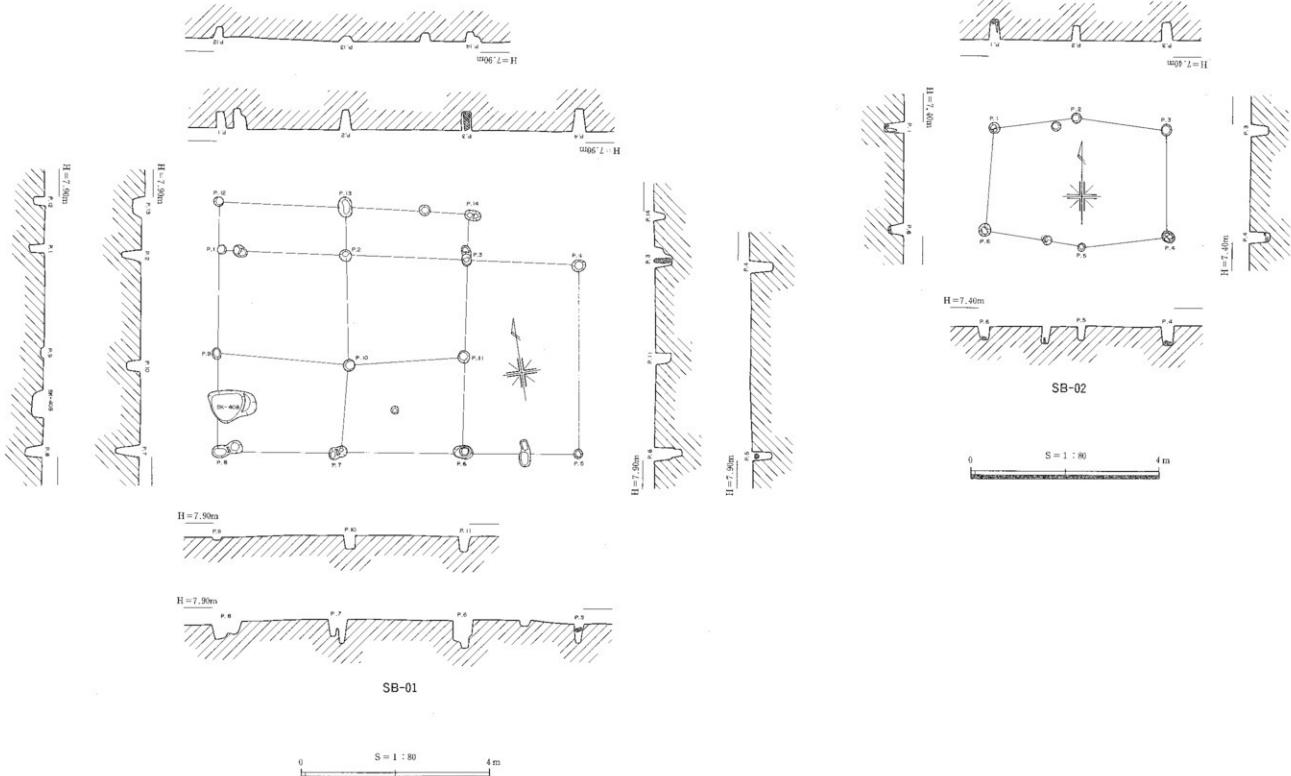
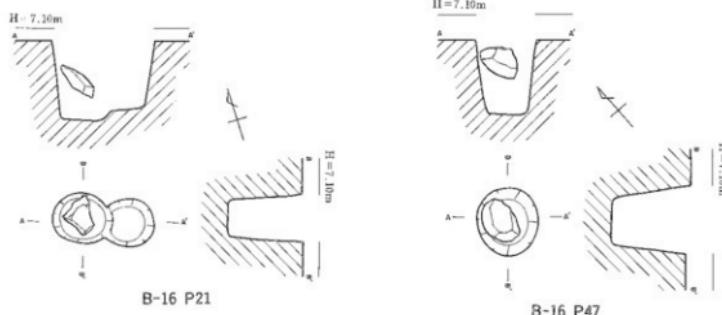
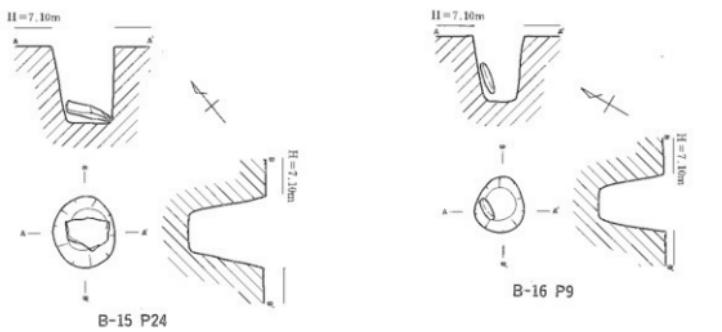
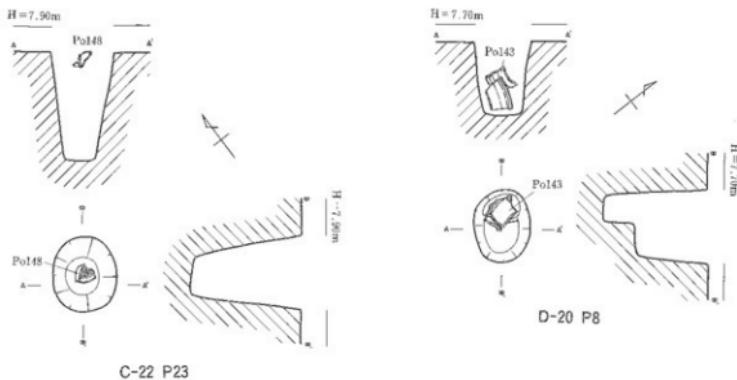
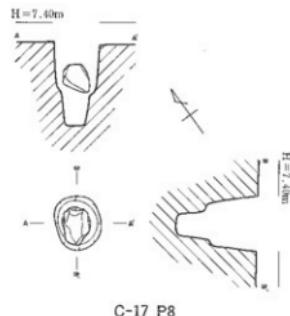
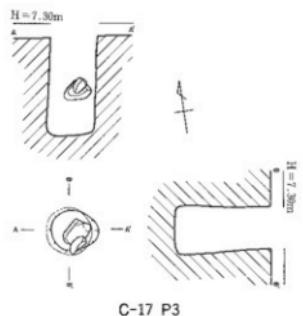
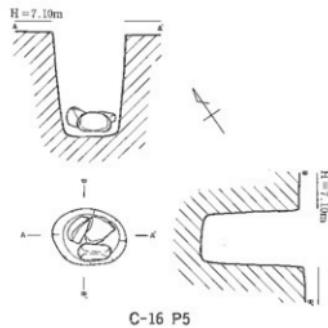
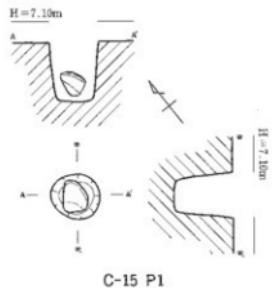
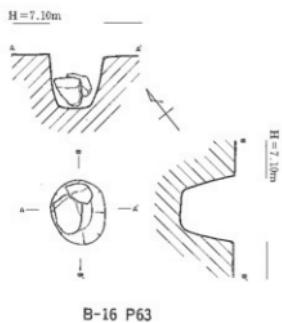
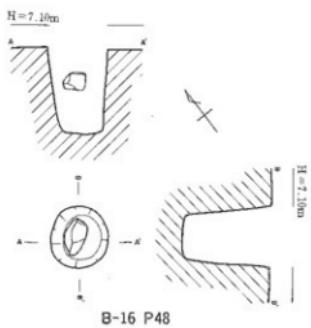


插图93 SB-01・02遺構図



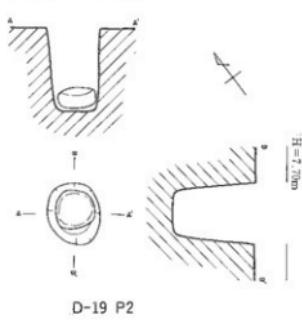
0 S = 1 : 20 1 m

挿図94 4区・ピット内遺物出土状況図 I

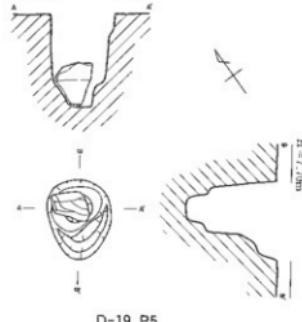


拵図95 4区・ピット内遺物出土状況図 II
S = 1 : 20

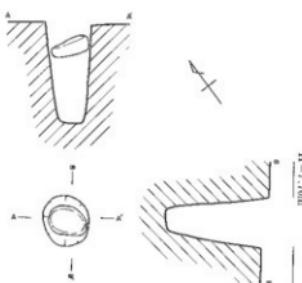
H = 7.70m



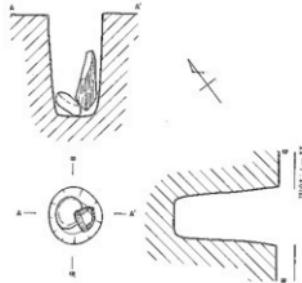
H = 7.70m



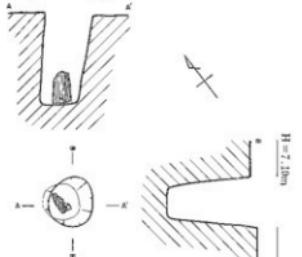
H = 7.70m



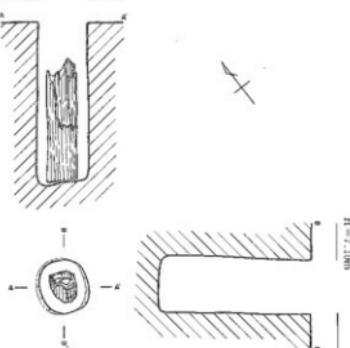
H = 7.10m



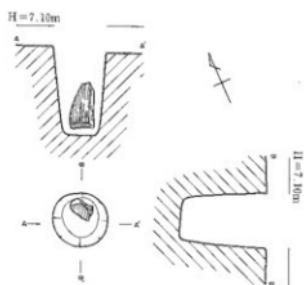
H = 7.10m



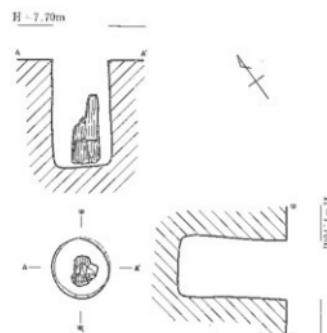
H = 7.10m



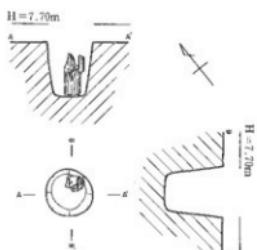
挿図96 4区・ピット内遺物出土状況図 III



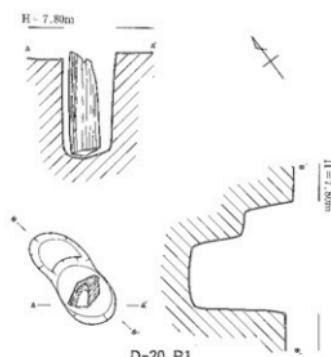
C-16 P8



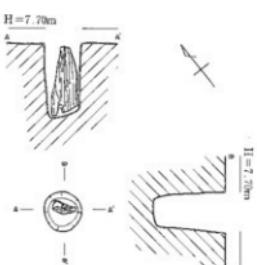
C-19 P2



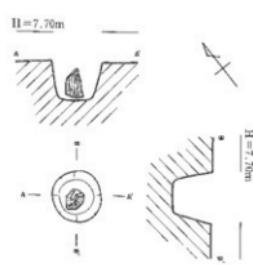
D-19 P23



D-20 P1

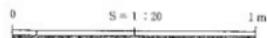
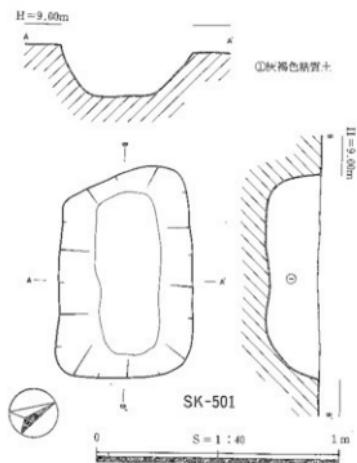
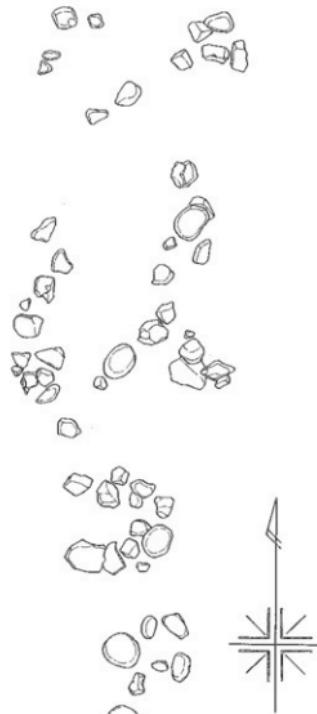
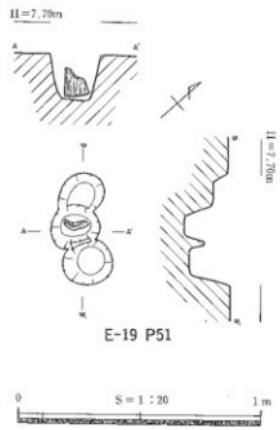


E-19 P5



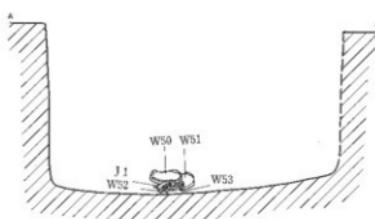
E-19 P29

挿図97 4区・ピット内遺物出土状況図 IV
S = 1 : 20

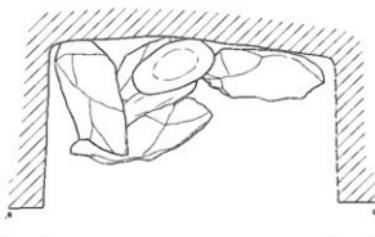
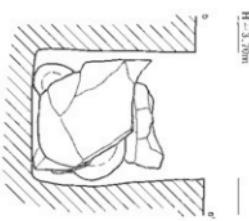
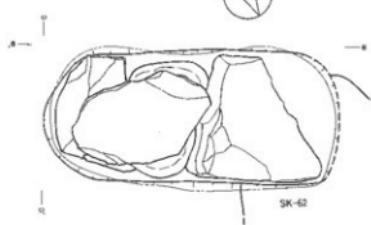
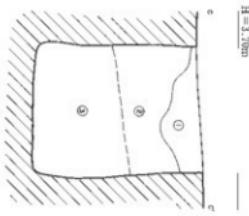
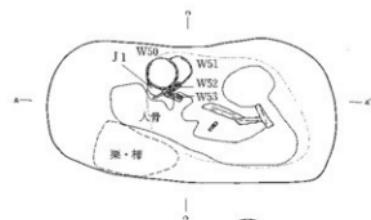


插図98 4区・ピット内出土状況図 V・石列配図・SK-501遺構図

H = 3.70m



- ①茶褐色粘質土
②秋色粘質土(褐色土ブロック)
③灰色粘質土(黑色土少紫泥)



0 S = 1 : 20 1 m

插图99 SX-01遺構図

遺構	挿図	図版	グリッド	平面形	壁立ち上がり	規模(長×短×深さm)	時期	遺物・備考
SK01	11		B14	円形	外傾	0.97×0.93-0.28		
SK02	11		B14	椭円形	内傾	0.96×0.50-0.50	弥生	胸部、木片
SK03	11		C14	不定形	内・外傾	0.72×0.64-0.48		
SK04	11		C14	椭円形	内傾	0.52×0.43-0.37		
SK05	11		C14	椭円形	内・外傾	0.72×0.55-0.60	弥生前期	底部、植物遺体、炭
SK06	11		C14	不定形	内・外傾	0.79×0.54-0.53	弥生前期	底部、植物遺体
SK07	12		C14	椭円形	外傾	1.80×1.31-0.69		炭化植物遺体
SK08	12		C14	ひょうたん形	直立・内傾	0.67×0.33-0.59	弥生前期	胸部、炭
SK09	12		B14	不定形	外傾	不明×1.39-0.54		
SK10	12		C13	円形	外傾	0.43×0.39-0.19		
SK11	12		C14	不定形	外傾	1.55×1.14-0.55		
SK12	12		D10	椭円形	内・外傾	1.09×0.90-0.56		
SK13	13		B10	不定形	内傾	1.96×1.24-0.41		炭
SK14	13	5	B14	円形	内・外傾	1.65×1.62-0.48		棒状木製品
SK15	15		B10	不定形	内・外傾	0.95×0.75-0.28	弥生中期後葉	甕
SK16	13		B9	椭円形	内・外傾	2.31×1.69-0.48	弥生中期後葉	甕
SK17	14		A11	不定形	内・外傾	1.32×1.08-0.30	弥生中期後葉	甕
SK18	14	5	A11	不定形	外傾	1.24×0.84-0.28		胸部
SK19	15		D11	椭円形	内・外傾	2.12×1.53-0.47	弥生	甕、底部、棒状木製品、炭
SK20	16		C11	円形	内・外傾	1.22×1.12-0.34	弥生中期後葉	甕、炭層
SK21	17		A11	椭円形	外傾	0.82×0.65-0.13		胸部
SK22	17		B12	不定形	外傾	1.04×0.39-0.15	弥生中期後葉	甕
SK23	16		A11	不定形	外傾	3.08×2.74-0.33	弥生中期後葉	甕、SK238より旧
SK24	14	5	A11	不定形	外傾	不明×0.43-0.11	弥生中期後葉	甕
SK25	17		D10	円形	内・外傾	0.71×0.70-0.38		炭
SK26	17		A9	不定形	外傾	1.63×1.46-0.34	弥生	胸部、SK28+30より新
SK27	17		A9	不定形	外傾	0.95×0.85-0.34		SK177より旧
SK28	17		A9	円形	内傾	0.96×0.86-0.26	弥生中期後葉	甕、SK26より旧
SK29	17		Z11	不定形	内・外傾	1.20×不明-0.29		
SK30	18		A9	椭円形	内・外傾	1.60×1.28-0.44	弥生中期後葉	甕、底部、SK26より旧
SK31	18		A9	不定形	内傾	1.75×0.94-0.32	弥生	胸部、底部、SK242+254より新
SK32	18		A9	椭円形	内・外傾	1.99×1.42-0.46		底部、木製品、SK241+251より新
SK33	19	6	A10	円形	外傾	1.48×1.45-0.69	弥生中期後葉	甕×2、底部、SK208より新
SK34	19		A10	不定形	外傾	0.93×不明-0.23		胸部、SK154より新
SK35	20	6	A9	不定形	内・外傾	2.97×不明-0.29	弥生中期後葉	甕×3、底部、枝、柄、SK42+181より旧

挿表1 土坑一覧表(1)

遺構	博団	図版	グリッド	平面形	壁立ち上がり	規模(長×短×深さm)	時期	遺物・備考
SK36	78		B12	楕円形 △内・△外傾		0.69×0.39-0.21	古墳	土師器高杯、口縁
SK37	19		A9	楕円形 △内・△外傾		1.47×0.98-0.38	弥生	副部、SK44より新
SK38	19		A9	不定形	外傾	1.02×0.85-0.20		SK39より旧
SK39	21	6	A9	楕丸長方形	外傾	1.42×1.14-0.78		SK38より新
SK40	21	7	A9	楕円形	内傾	1.11×0.80-0.44		植物遺体
SK41	21		A9	楕円形 △内・△外傾		0.63×不明-0.41	弥生	甕、胴部、SK147より旧
SK42	21		A9	円形 △内・△外傾		0.96×0.82-0.38		SK35より新
SK43	21		A9	楕円形 △内・△外傾		0.85×0.48-0.54	弥生	胴部
SK44	22		A9	円形 △内・△外傾		1.31×1.19-0.45	弥生中期後葉	甕×3、SK37より旧
SK45	22	7	A9	楕円形	内傾	1.22×0.89-0.29	弥生中期後葉	甕×2、底部、植物遺体、SK148より新
SK46	21		A9	楕円形	内傾	1.10×0.66-0.51		
SK47	23	7	A9	楕円形 △内・△外傾		2.56×2.02-0.38	弥生中期後葉	甕×2、傳木製品、SK154より新、SK159より旧
SK48	24		A9	不定形 △内・△外傾		0.76×0.53-0.46	弥生中期後葉	甕
SK49	24		A10	不定形 △内・△外傾		不明×1.12-0.22		
SK50	25	8	A10	楕円形 △内・△外傾		不明×1.52-0.60	弥生中期後葉	甕×2、石瓢、刻紋木製品、SK225より新、SK191・241より旧
SK51	24		A10	不定形	外傾	1.06×0.96-0.22	弥生中期後葉	甕
SK52	78		B11	不定形 △内・△外傾		0.98×0.84-0.17	古墳前期	弥生胴部、土師器口縁
SK53	26	8	B8	楕円形 △内・△外傾		0.97×0.84-0.50		木製品
SK54	24		A8	円形	外傾	0.41×0.36-0.18		
SK55	24		A8	円形 △内・△外傾		0.92×0.88-0.40		
SK56	26		A8	円形	内傾	1.12×0.94-0.50		植物遺体
SK57	26		B8	円形	内傾	0.78×0.66-0.43		
SK58	26	8	A9	円形	外傾	1.34×1.14×0.52		
SK59	27	8	A9	楕円形	内傾	0.95×0.76-0.47		
SK60	27		A9	円形	内傾	1.08×0.96-0.40		
SK61	28		A8	楕円形	外傾	0.89×0.61-0.40		
SK62	27		C8	楕円形 △内・△外傾		1.21×0.75-0.59		SX01より旧
SK63	28		C8	不定形	外傾	1.26×0.84-0.46		
SK64	78		B11	不定形	外傾	0.82×0.80-0.18	古墳前期	土師器甕
SK65	28		B11	不定形	外傾	1.24×1.07-0.23		
SK66	28		A11	楕円形	外傾	0.81×0.51-0.10	弥生後期後葉	甕
SK67	28		B8	円形	内傾	0.66×0.56-0.60		
SK68	28		A8	不定形	内傾	0.79×0.64-0.39		
SK69	30		A8	楕円形	外傾	1.59×1.25-0.47		
SK70	30		Z11	不定形	内傾	0.94×0.76-0.38	弥生	胴部、板状木製品

摺表 1 土坑一覧表 (2)

遺構	番号	図版	グリッド	平面形	壁立ち上がり	規模(長×短×深さm)	時期	遺物・備考
SK71	30		B8	楕円形	内傾	1.00×0.69-0.61	弥生	底部
SK72	29		B8	円形	内傾	0.77×0.78-0.58	弥生中期後葉	甕
SK73	29	8	B8	楕円形	外傾	1.62×1.18-0.66	弥生	底部、植物遺体
SK74	78		A11	不定形	外傾	1.38×0.76-0.14	古墳	土師器胸部
SK75	30		B8	不定形	内・外傾	1.44×1.21-0.55		
SK76	30	9	A9	卵形	外傾	1.81×1.36-0.48		
SK77	31		A8	圓丸長方形	外傾	0.37×0.27-0.16		
SK78	31		A8	円形	内傾	0.85×0.80-0.50		植物遺体
SK79	31		A8	楕円形	外傾・不明	0.67以上×不明-0.47		
SK80	31		A8	不定形	内・外傾	0.49×0.36-0.29		
SK81	31		A8	楕円形	内・外傾	2.50×1.64-0.83	弥生中期後葉	査、甕、副部、SK105より新
SK82	32		A8	円形	内・直立	0.47以上×0.41-0.33		
SK83	32		B9	卵形	内・外傾	0.89以上×0.80-0.62		
SK84	33	9	B9	円形	内・外傾	1.36×1.25-0.76		
SK85	32	9	B9	円形	内・外傾	1.43×1.36-0.63	弥生中期後葉	甕
SK86	33	9	B9	方形	内・外傾	0.94×0.84-0.76		
SK87	33	9	B9	圓丸長方形	内・外傾	1.52×0.99-0.60		
SK88	33		A10	不定形	内・外傾	2.57×1.62-0.62		
SK89	34		C9	楕円形	内・外傾	2.62×1.98-0.78	弥生	胸部、植物遺体
SK90	34		A8	不明	不明	不明		
SK91	34		A8	不明	不明	不明		
SK92	34		A8	不定形	内・外傾	1.12×0.91×0.49		
SK93	34		A8	不明	不明	不明		
SK94	34		A8	不明	不明	不明		
SK95	34		A8	不明	不明	不明		
SK96	34		A8	円形	外傾	0.65×不明×0.56		
SK97	34		A8	不明	不明	不明		
SK98	34		A8	不明	不明	不明	弥生中期後葉	甕
SK99	34		A8	不明	不明	不明		
SK100	34		A12	不定形	外傾	0.68×0.58-0.07		SK112より新
SK101	34		A12	不定形	外傾	0.54×0.39-0.07		
SK102	35	9	B9	円形	内傾	不明×1.30-0.56		SK117より旧
SK103	35		B9	圓丸方形	内傾	0.91×0.81-0.55		
SK104	35	9	B9	楕円形	内傾	0.72×0.61-0.52		
SK105	36		A8	楕円形	外傾	1.15×不明-0.33		SK162より新 SK81より旧

掲表1 土坑一覧表(3)

遺構	押抜	図版	グリッド	平面形	壁立ち上がり	規模(長×短×深さm)	時 期	遺物・備考
SK106	35		A8	不定形	内・外傾	1.31×0.89-0.32		SK162より新
SK107	36		B9	不明	内傾	不明		SK113-138より旧
SK108	36		B9	不定形	外傾	0.96×0.89-0.52	弥生中期後葉	発
SK109	36		B9	楕丸長方形	内・外傾	0.96×0.62-0.34		SK139より新
SK110	37		A9	梢円形	内傾	1.52×1.13-0.45		
SK111	37		A12	不定形	外傾	1.06×0.62-0.10		
SK112	37		A12	不定形	外傾	1.07×不明-0.10	弥生前期中葉	発、SK106より旧
SK113	37		B9	梢円形	内・外傾	1.51×0.90-0.46		SK107-114より新
SK114	37		B9	梢円形	内傾	0.88以上×0.58-0.48		SK113より旧
SK115	38		A9	円形	直立・外傾	1.06×1.04-0.42	弥生	胴部
SK116	38	9	C9	円形	内・外傾	1.50×1.39-0.62	弥生中期後葉	発、轆轤、角材
SK117	37		C9	不定形	外傾	1.66×1.20-0.41		SK102より新
SK118	39		B9	梢円形	外傾	1.41×1.20-0.42		SK124より旧
SK119	39		B9	不定形	内・外傾	1.20×0.73-0.40		
SK120	39		B9	卵形	内・外傾	1.22×0.81-0.40		SK145より新
SK121	39	10	B9	梢円形	内・外傾	0.83×0.63-0.40	弥生中期後葉	胴部
SK122	39	10	B9	梢円形	外傾	不明		SK143より新 SK132-141より旧
SK123	39		C9	円形	内・外傾	1.05×不明-0.18	弥生	底部
SK124	40		B9	梢円形	外傾	0.90×0.88-0.40		SK118より新
SK125	40		E3	不定形	外傾	3.37×2.32-0.55		炭
SK126	40		B9	不定形	外傾	0.44×0.40-0.19		
SK127	40		B12	椭丸方形	外傾	1.03×0.64-0.14		板材
SK128	41	10	B9	梢円形	内傾	0.97×0.67-0.72	弥生中期後葉	発、壺、植物遺体
SK129	41		B9	不定形	外傾	1.34×1.04-0.32		SK153より新
SK130	41		B9	椭丸方形	内・外傾	1.36×1.12-0.39	弥生	胴部
SK131	41	11	B9	梢円形	内傾	1.42以上×0.89-0.43		SK143より旧
SK132	42		B9	梢円形	外傾	1.60×1.08-0.91		SK122-135より新
SK133	42		B12	不定形	外傾	0.64×0.37-0.16		
SK134	42		B9	梢円形	外傾	0.82×0.45-0.23		SK240より旧
SK135	42		A9	椭丸長方形	外傾	1.30×0.90-0.76		SK132より旧
SK136	42		B9	不定形	外傾	0.99×0.65-0.25		SK137より旧
SK137	42		B9	円形	外傾	0.84×0.71-0.12		SK136より新
SK138	42		B9	梢円形	外傾	1.16×不明-0.45		SK107より新
SK139	43		B9	不定形	外傾	0.97×0.59-0.32		SK109より旧
SK140	43		A9	梢円形	内・外傾	0.90×0.63-0.53		

插表 1 土坑一覧表 (4)

遺構	排國	図版	グリッド	平面形	壁立ち上がり	規模(長×短×深さm)	時 期	遺物・備考
SK141	44		A9	楕円形	内・外傾	1.48×1.14-0.30		SK122より新
SK142	44		A8	楕円形	内・外傾	1.37×1.14-0.53		
SK143	43	11	B9	楕円形	内・外傾	3.30×2.36-0.90	弥生中期後葉	甕、SK121・144・153より新 甕、SK122より旧
SK144	45		B9	不定形	外傾	5.00×3.82-0.50	弥生中期後葉	甕、SK143・195より旧 甕、190より新
SK145	44		B9	円形	外傾	2.21×1.93-0.51	弥生中期後葉	甕、SK120より旧
SK146	46		B9	円形	外傾	0.40×0.38-0.11		
SK147	46		A9	楕円形	内・外傾	1.35×0.86-0.36		SK41・156より新
SK148	46		A9	楕円形	内傾	1.52×1.06-0.49		SK45・154より旧
SK149	46		A9	隅丸方形	内・外傾	1.09×1.01-0.31		
SK150	46		A9	楕円形	内・外傾	1.04×0.62-0.22		SK47より新
SK151	46		B9	円形	外傾	0.52×0.51-0.40		
SK152	47		Z10	隅丸方形	外傾	0.88×0.65-0.12		
SK153	47		B9	不定形	外傾	不明×1.50-0.42	弥生中期後葉	底部、SK129・143より旧
SK154	48		A9	円形	外傾	2.60×不明-0.62	弥生中期後葉	甕、SK148より新 甕、SK34・47・195より旧
SK155	47		A11	不定形	外傾	0.89×0.52-0.20		SK263より新
SK156	47		A9	楕円形	内・外傾	不明×0.66-0.50		SK147より旧
SK157	47		B9	不定形	外傾	1.17×不明-0.36		
SK158	49		C9	不定形	内・外傾	2.06×1.50-0.42		
SK159	48	11	A9	不定形	内・外傾	0.95×0.80-0.33		
SK160	49	11	A9	不定形	内・外傾	0.96×0.84-0.58		
SK161	49		A9	楕形	内傾	0.82×0.64-0.45		
SK162	49		A8	不定形	内・外傾	1.52×1.00-0.23		SK105・106より旧
SK163	48		C9	不定形	内・外傾	0.58×0.49-0.39		
SK164	49		A9	楕円形	内傾	不明×0.76-0.72		
SK165	50	12	A7	円形	内傾	0.70×0.67-0.37		
SK166	50		A7	不定形	外傾	0.74×不明-0.30		
SK167	50		A8	不定形	外傾	0.96×不明-0.25	弥生中期後葉	甕
SK168	50		A9	不定形	内・外傾	1.23×0.97-0.16		SK243より旧
SK169	78		A11	不定形	外傾	1.12×不明-0.12	古墳前期	土師器甕
SK170	50		A8	不定形	内傾	1.13×不明-0.46		
SK171	50	12	B10	不定形	外傾	1.92×1.74-0.40		
SK172	51		A8	円形	内・外傾	0.72×0.64-0.42		
SK173	51		B10	不定形	内・外傾	2.85×2.00-0.52	弥生中期後葉	甕、底部
SK174	51		B9	円形	内・外傾	1.16×1.08-0.44		
SK175	51		D11	不定形	外傾	1.69×1.47-0.25		

掲表1 土坑一覧表(5)

遺構	挿図	図版	グリッド	平面形	壁立ち上がり	規模(長×短×深さm)	時期	遺物・備考
SK176	51		C11	不定形	外傾	1.03×0.90-0.42		
SK177	52		A9	円形	内傾	2.07×0.45-0.48	弥生中期	觸部、SK27より新
SK178	53		A8	不定形	外傾	不明×1.51-0.31	弥生中期後葉	壺、底部
SK179	52		A9	円形	外傾	0.86×0.49-0.32	弥生中期後葉	壺
SK180	52		A9	不定形	不明	1.59×不明-0.37		SK181より新
SK181	53		A9	不定形	外傾	1.76×不明-0.31	弥生	触部、SK35より新 SK180より旧
SK182	54	12	B10	不定形	外傾	2.81×1.74-0.42	弥生中期後葉	壺、棒状木製品、植物遺体
SK183	52		B10	円形	外傾	0.90×0.72-0.39	弥生	壺、棒状木製品、植物遺体、SK184より旧
SK184	55		B10	不定形	外傾	2.16×1.90-0.40	弥生	底部、SK183より新
SK185	53		A9	不定形	内・外傾	1.23×0.78-0.38		
SK186	55		A9	不定形	外傾	不明×不明-0.42		
SK187	55		A8	不定形	内・外傾	1.04×0.76-0.18	弥生	触部
SK188	55		A4	楕円形	外傾	1.24×0.82-0.22	弥生中期後葉	壺
SK189	56		A9	楕円形	内・外傾	0.99×0.83-0.31	弥生	触部、SK242より新
SK190	45		A9	不明	外傾	不明×不明-0.68		SK144より旧
SK191	56	12	A9	不定形	内傾	1.52×1.06-0.58		SK50より新
SK192	56		B10	不定形	外傾	1.32×1.14-0.48		
SK193	56		B10	楕円形	外傾	0.71×0.41-0.22		
SK194	56		B10	楕円形	内・外傾	1.70×0.75-0.31		SK204より新
SK195	45	13	A10	楕円形	外傾	1.94×1.74-0.60		SK144+154より新
SK196	57		A10	不定形	外傾	2.16×1.11-0.35	弥生中期後葉	壺、壺
SK197	56		Z11	不明	外傾	不明×1.26-0.24		棒状木製品
SK198	57		B11	楕円形	外傾	0.59×0.56-0.36		
SK199	79		B11	楕円形	外傾	1.35×1.09-0.36	古墳前期	土師器壺、高坏
SK200	79		B11	楕円形	外傾	1.06×0.91-0.32	古墳前期	土師器高坏
SK201	57		D11	不明	内傾	不明×不明-0.45		壺
SK202	78		B11	不定形	外傾	1.51×1.24-0.22	古墳前期	土師器高坏
SK203	57		A10	楕円形	外傾	1.36×1.05-0.33	弥生中期後葉	壺、SK208より新
SK204	58		B10	不定形	内・外傾	3.00×2.34-0.84	弥生	口縁、底部、SK194より旧
SK205	58		A10	不明	外傾	1.64×1.13-0.25	弥生中期後葉	壺、底部
SK206	60		B10	円形	内・外傾	1.70×1.61-0.39	弥生中期後葉	壺、SK207より新
SK207	59		B10	楕円形	内・外傾	1.21×1.01-0.42		SK219より新 SK206より旧
SK208	59		A10	不定形	内・外傾	2.45×1.50-0.51	弥生中期後葉	壺、SK33+203より旧
SK209	59	13	B8	円形	内傾	0.97×0.96-0.53		
SK210	61		B8	不定形	外傾	不明×0.58-0.21		

挿表1 土坑一覧表(6)

遺構	挿図	図版	グリッド	平面形	壁立ち上がり	規模(長×短×深さm)	時期	遺物・備考
SK211	61	13	A10	楕円形	外傾	2.18×1.58-0.25	弥生中期後葉	高环、甕
SK212	60	13	B11	円形	外傾	1.48×1.36-0.30	弥生中期後葉	甕、杭、彩色板状木製品
SK213	62	14	B11	楕円形	内・外傾	0.97×0.76-0.27		灰層
SK214	61		A10	不定形	外傾	1.24×0.81-0.30		SK233より新
SK215	62	14	Z10	不定形	外傾	不明×1.18-0.42	弥生中期後葉	甕、SK216より新
SK216	62	14	A10	不定形	外傾	3.42×不明-0.40	弥生中期後葉	甕、SK215+217より旧
SK217	62	14	Z10	円形	外傾	1.22×1.02-0.27		SK216より新
SK218	62		A8	楕円形	内・外傾	0.79×0.66-0.36		
SK219	63		B10	円形	内・外傾	1.82×1.75-0.42	弥生	胸部、SK207より旧
SK220	63		A10	不定形	内・外傾	2.22×1.54-0.38	弥生	甕
SK221	63		A10	不定形	内・外傾	2.78×1.84-0.43	弥生中期後葉	甕、底部、SK222より新
SK222	64		A10	不定形	外傾	2.03×1.80-0.67	弥生中期後葉	甕×2、底部、SK221より旧
SK223	65		A10	不定形	外傾	1.57×1.07-0.32	弥生中期後葉	胸部
SK224	63		A11	円形	外傾	1.19×0.95-0.20	弥生中期後葉	甕、SK247より旧
SK225	65		A9	不定形	内・外傾	1.00×0.61-0.26	弥生	胸部、SK50より旧
SK226	66	14	B10	不明	内傾	1.03×0.90-0.76	弥生中期後葉	甕×4、底部
SK227	65	14	B12	不定形	外傾	1.14×0.97-0.20		板状木製品
SK228	65		B12	不定形	内・外傾	2.48×1.75-0.38	弥生前期中葉	胸部、棒状木製品
SK229	66		B12	不定形	外傾	2.26×不明-0.19		
SK230	66		A11	楕円形	外傾	0.94×不明-0.33		杭、SK257より旧
SK231	67		A10	不定形	内・外傾	1.62×0.97-0.40		
SK232	68		A10	不定形	内・外傾	3.07×1.50-0.56	弥生中期後葉	甕
SK233	67		A10	円形	外傾	1.74×1.50-0.37		胸部、SK214より旧
SK234	69		B10	不定形	内・外傾	0.96×0.77-0.43		SK235より新
SK235	69	15	B10	楕円形	内・外傾	2.40×1.87-0.61	弥生中期後葉	甕、板状木製品、底層 SK234+236+237より旧
SK236	67		B10	円形	内・外傾	1.52×1.34-0.41		胸部、棒状木製品 SK235+237より新
SK237	70		B10	楕円形	外傾	1.86×1.38-0.49	弥生後期後葉	甕、底部、杭、SK235より新、SK236+238より旧
SK238	70		A10	円形	外傾	0.57×0.57-0.21	弥生後期後葉	甕、SK23+237より新
SK239	71	15	A10	不定形	内・外傾	1.89×1.42-0.50	弥生	底部、棒状木製品
SK240	70		B9	楕円形	外傾	0.48×0.40-0.50		SK134より新
SK241	72		A9	不定形	内・外傾	1.98×1.20-0.59		SK50より新 SK32より旧
SK242	72		A9	楕円形	外傾	1.42×0.83-0.25	弥生	底部、SK31+189より旧
SK243	71		A9	不定形	外傾	1.10×0.85-0.28		SK168より新
SK244	71		Z10	不明	外傾	1.24×不明-0.36		
SK245	72		Z11	不定形	外傾	1.34×0.68-0.20		

挿表1 土坑一覧表(7)

遺構	持団	國版	グリッド	平面形	壁立ち上がり	規模(長×短×深さm)	時期	遺物・備考
SK246	72		A12	不明	不明	不明×不明-0.60		
SK247	74		A11	円形	外傾	0.82×0.77-0.31	弥生	底部、SK224・259より新
SK248	72		Z10	不明	不明	不明×不明-0.27	弥生	頭部
SK249	73		A11	不明	不明	不明×不明-0.28		
SK250	80		B11	楕円形	外傾	1.54×0.97-0.23	古墳	土師器頭部、板状木製品
SK251	73		A9	不定形	外傾	0.88×0.33-0.28		SK32より旧
SK252	80	17	A11	不定形	内・外傾	1.41×1.39-0.35	古墳前期	土師器裏、棒状木製品
SK253	73		A9	不明	外傾	不明×0.84-0.23	弥生中期後葉	裏
SK254	73		A9	不定形	外傾	1.73×不明-0.40	弥生中期後葉	裏、SK31より旧
SK255	73		A10	不定形	外傾	0.75×不明-0.14		
SK256	81	15	A11	椭円形	内・外傾	1.23×0.88-0.45	古墳前期	土師器裏、杵
SK257	81	17	A11	不定形	外傾	0.87×不明-0.27	古墳前期	土師器裏、SK230より新
SK258	75		A11	不定形	外傾	不明×1.40-0.27		木片
SK259	74	16	A11	円形	外傾	2.60×2.48-0.57	弥生中期後葉	裏×2、匙、櫛、杭 棒状木製品×9 木製品×8 板状木製品×3、角材 SK247より旧
SK260	81		A11	椭円形	外傾	1.56×1.19-0.21	古墳	土師器
SK261	75		A11	不定形	外傾	不明×不明-0.20		
SK262	75		A11	椭円形	外傾	0.55×0.34-0.13		
SK263	75	17	A11	不定形	外傾	1.38×不明-0.25		木製品、SK155より旧
SK264	75		A11	不定形	外傾	0.56×0.49-0.08	弥生	坏口縁
SK401	84		B-17	長方形	外傾	1.30以上×0.68以上-0.18以上		
SK402	84		B-18	椭円形	外傾	1.17×0.60-0.25		
SK403	84		B-18	不定形	外傾	1.28×0.62-0.21		
SK404	84		B-18	不定形	外傾	1.00×0.62-0.14		
SK405	84		南側花砂地の西壁	不明	直立	1.00×不明-0.72		
SK406	84		E-19	円形	外傾	0.90×0.84-0.15		
SK407	85		E-19	不定形	外傾	0.92×0.60-0.13		
SK408	85		D-19	不定形	外傾	1.16×0.80-0.37		
SK409	85		C-19	不定形	外傾	1.08以上×0.92-0.26		SK410より旧
SK410	85		C-19	不定形	外傾	1.30×0.96以上-0.19		SK409より新
SK411	85		C-22	円形	外傾	1.35×1.09-0.16	中世	土師質土器
SK412	85		C-22	長方形	外傾	0.54×0.35-0.13		
SK413	85		C-22	方形	外傾	0.68×0.42-0.15		
SK414	86		C-18	不定形	外傾	1.73×0.63-0.41		

插表1 土坑一覧表(8)

遺構	挿図	図版	グリッド	平面形	壁立ち上がり	規模(長×短×深さm)	時期	遺物・備考
SK415	86		A-21	楕円形	外傾	1.39×1.05-0.12		
SK416	86		B-22	不定形	外傾	0.91×0.47-0.17		
SK417	86		B-22	不定形	外傾	1.02×0.97-0.16		
SK418	86		D-22	楕円形	外傾	1.25×0.69以上-0.09	中世	瓦質土器
SK419	86		D-25	長方形	外傾	2.19×1.18-0.05		
SK420	86		B-16	不定形	外傾	1.54×0.94以上-0.48		
SK421	87	18	A-16	不定形	外傾	3.55以上×3.55-0.34	中世	土師器、須恵器、布製品
SK501	98	29	C-30	圓角方形	外傾	1.62×1.10-0.38	近世以降	燈明皿

挿表1 土坑一覧表(9)

遺構名	挿図	図版	地区	全長(m)	幅(m)	深さ(m)	時期
SD01			2区	93.0	1.0~2.5	0.10~0.25	弥生中期後葉
SD02			2区	SD-01と同一遺構	—	—	
SD03	76	21	2区	29.5	0.35~0.65	0.2~0.3	弥生中期中葉
SD04	76	21	2区	SD-01と同一遺構	—	—	
SD05	77	22	1区	23.8	1.6~4.9	0.5~0.7	弥生
SD06	77	22	1区	35.0	0.8~1.8	0.2~0.25	弥生
SD07	77	22	1区	24.6	0.26~1.05	0.23~0.32	弥生
SD08	77	22	1区	13.5	0.25~0.4	0.13	
SD09			2区	13.6	0.30~1.1	0.2~0.3	
SD10			3区	17.4	0.4~0.7	0.07~0.3	
SD11	88	23	3区	40.1	0.2~0.7	0.08~0.2	中世
SD12		23	3区	69.6	0.3~3.3	0.1~0.4	
SD13		23	3区	35.8	1.6~5.1	0.3~0.53	
SD14	89	23	3区	16.9	2.5~2.6	0.5	中世
SD15			3区	21.0	1.0~2.5	0.2~0.28	
SD16			4区	6.4	0.16~0.68	0.05~0.18	
SD17	82	24	4区	19.5	0.35~0.8	0.13	古墳
SD18	82	24	4区	8.3	0.8~1.45	0.45	古墳
SD19	82		4区	85	1.0~2.0	0.1~0.3	古墳
SD20	82		4区	SD-19と同一遺構	—	—	
SD21			4区	3.5	0.2~0.3	0.08~0.13	
SD22			4区	13.1	0.08~0.23	0.08~0.23	
SD23			4区	6.4	0.3~3.6	0.04~0.2	

挿表2 溝一覧表(1)

遺構名	挿図	図版	地区	全長(m)	幅(m)	深さ(m)	時期
SD24			4区	6.2	0.2~0.4	0.04~0.1	
SD25			4区	2.5	0.3	0.05~0.1	
SD26	89		4区	19.3	0.8~1.8	0.18~0.4	中世
SD27			4区	8.2	0.15~1.76	0.05~0.2	
SD28	83	24	4区	SD-19と同一遺構	——	——	
SD29	83	24	4区	SD-19と同一遺構	——	——	
SD30	83		4区	25.3	0.25~0.8	0.05~0.2	古墳
SD31			4区	3.5	0.3~0.46	0.06~0.1	
SD32			4区	30.2	0.44~1.43	0.1~0.42	
SD33			4区	5.0	0.12~0.8	0.07~0.23	
SD34			4区	4.1	0.2~1.2	0.04~0.28	
SD35			4区	7.5	0.22~0.4	0.05~0.12	
SD36	83		4区	17.0	0.5~1.7	0.25~0.6	古墳
SD37			4区	6.2	0.55~0.75	0.03~0.05	
SD38			4区	6.6	0.25~0.59	0.3~0.4	
SD39	90	29	5区	8.0	0.7~1.7	0.2~0.3	中世以降
SD40	90	29	5区	12.0	0.8~1.9	0.18~0.3	中世以降
SD41	91	29	5区	36.0	0.9~2.0	0.30~0.94	中世以降
SD42	92	29	5区	62.0	0.9~3.0	0.16~1.05	中世以降

插表2 満一覧表(2)

第4章 出土遺物

今回の調査では、2区・4区を中心に遺構あるいは包含層中から遺物を検出した。それらは量的には多くないが、時期的には縄文時代から近世にいたるものである。本章ではそれらの遺物を縄文土器、弥生土器、古墳時代以降の土器、木製品、石器といった種類ごとに分類して観察の結果を記述する。

第1節 縄文土器（挿図112・116 図版34・37）

今回検出した縄文土器は、4区出土の2点（Po140・151）と5区出土の3点（Po218・219・220）である。Po140は北白川C式深鉢C類の流れをくむ波状口縁部片で、北白川C式と中津式の古い段階との間をつなぐものと思われ、中期末から後期初頭にかけての時期に位置付けることができるものと考える。Po151は縦帶文土器の頸部から胸部にかけての部位にあたるものと思われ、後期中葉に位置付けることができる。Po218は頸部から肩部にかけての部位に相当すると考えられ、後期中葉に位置付けられよう。Po219は元住吉山I・II式に相当する口縁部片で後期後葉に位置付けられる。Po220は中津式に相当する口縁部片で後期前葉に位置付けられる。

第2節 弥生土器

2区南西部に集中する土坑群より、壺形土器を中心とした遺物を検出した。それらは主に中期後葉に属するものであるが、前期前・中葉、後期後葉の土器も若干見られる。ここでは時期ごとに観察の結果を記述し、中期段階の土器については形態分類を行なうことにする。

1. 前期の土器（挿図100・105・108・110・112・116 図版30・31・33・34・37）

壺形土器1点（Po48）、壺胴部片1点（Po93）、底部4点（Po1・2・152・221）と、突帯文土器の口縁部と考えられるもの1点（Po126）が出土している。Po48は大きく外反する口縁をもち、頸部、肩部にそれぞれ凹線を施している。外面はハケメ調整した後へラミガキによって仕上げる。Po93は外面に2条の籠描き沈線が巡り、内外面とも丁寧なヘラミガキにより仕上げている。底部は4点とも安定した平底である。Po126は部分的に突帯部が残っており、外面にヘラミガキ痕がみられるが、風化により調整不明である。これらの土器はいずれも胎土に1～3mmの石英を多く含んでいる。以上のことから底部を除いた3点についてそれぞれの時期を考えると、Po48・93は中葉にあたると考えられる。Po126については、風化しており調整不明な点と、突帯部の残りが部分的であることなどから、ここでは前葉の突帯文土器として扱ったが、前葉にその時期を断定するよりも、遡っても縄文時代晩期の土器であるという方が妥当なものである。

2. 中期の土器

壺形土器がほとんどで、他の器種は壺形土器6点、高环形土器1点のみである。ここでは中期の土器の形態分類を行ない、それらが帰属する時期を併せて検討する。

（壺形土器）

壺形土器については、全体を復元できるものがなく出土点数も少ないため、詳細な分類はできないが、口縁部の形態等により4類に分類できる。

壺A類 口縁部は大きく外反し、端部を斜め下方へ拡張する。頸部下位に刻み目突帯が巡る。

壺B類 無頸壺。口縁端部は内外に肥厚し、その上面と口縁部外面に凹線を施す。また口縁端部外面には刻み目を入れる。胴部外面は籠描き沈線波状文と羽状刺突文で飾られる。

壺C類 口縁端部を上下に拡張して2～3条の凹線を施す。頸部にも凹線を施す。

壺D類 口縁部の形態はC類と変わりないが、口径が小さく、頸部には凹線ではなく突帯が巡る。

〈壺形土器〉

壺A類 口径13~17cmを測る壺で、最も普遍的なタイプである。福岡遺跡においては中型のもので、口縁部の形状により5類に分かれれる。

壺B類 口径18cm以上を測る壺。福岡遺跡においては大型のもので、頸部に突帯を持つものが多い。

壺C類 口径12cm前後を測る小型の壺。

〈高杯形土器〉

浅い椀状の壺部。口縁部は短く立ち上がり、端部は内側に肥厚する。壺部底面は円盤充填による。

(1) 中期中葉の土器

壺A類 (Po 8 挿図101 図版30)

口径22cmを測る。口縁部は大きく外反して水平にのび、端部は内傾し斜め下方へ拡張する。頸部に刻み目突帯が巡る。頸部外面はハケメ調整し、内面はヘラミガキにより仕上げる。

壺A 1類 (Po117・153 挿図110・112 図版33・34)

「く」の字状に屈曲する口縁部。器形は肩部が張らない。外面はハケメ調整後下半部をヘラミガキし、内面は上半部をハケメ調整後ナデる。Po153は内面をヘラミガキしている。

(2) 中期後葉の土器

壺B類 (Po72 挿図107 図版31)

内傾する口縁を持ち、その端部が内外に肥厚する無頸壺。口縁端部上面、口縁部外面にそれぞれ凹線を施し、口縁端部外面には刻み目を入れる。胴部は外面を櫛描き波状文と羽状刺尖文で飾り、内外面ともハケメ調整する。

壺C類 (Po11・12・54 挿図101・105 図版30・32)

口縁端部は内傾し、上下に拡張した外面に2~3条の凹線を施す。頸部外面にも凹線を施す。口縁部は内外面ともヨコナデする。頸部外面はPo11・54はハケメ、Po12はヘラミガキで調整する。頸部内面はヨコナデするが、Po11・12にはヘラミガキがみられる。胴部は肩部が張り、外面はハケメ調整後下半部をヘラミガキし、内面はヘラケズリ後上半部をハケメ調整する。胴部以下も復元できたものはPo54だけであるが、Po11・12についても同様と考える。

壺D類 (Po41 挿図104 図版31)

形態、調整とともに壺C類と変わりないが、口径が小さく、頸部外面には、凹線ではなく断面三角形貼付突帯を巡らす。胴部は内外面ともハケメ調整している。

壺A 2類 (Po154 挿図112 図版34)

「く」の字状に屈曲し、口縁端部を上方へつまみ上げる。外面は凹線状にくぼむ。肩部は内外面ともハケメ調整する。

壺A 3類 (Po66 挿図106 図版32)

「く」の字状に屈曲し、口縁端部を上方へつまみ上げる。外面には凹線を施す。胴部は内外面ともハケメ調整する。

壺A 4類 (Po85 挿図107)

口縁端部は肥厚し、下方へやや拡張される。外面に2条の凹線を施す。肩部は内外面ともハケメ後ヘラミガキが一部に施される。

壺A 5類 (Po 3・5・10・26・30・55 挿図100・101・102・103・105 図版30・31)

今回の調査で出土した中期後葉の壺のほとんどがこのタイプにあたる。口縁端部は内傾して上方あるいは上下に拡張し、外面に3~4条の凹線を施す。胴部は倒卵形をなし、肩部があまり張らない。外面はハケメ調整後下半部をヘラミガキし、内面はヘラケズリ後上半部をハケメ調整する。口頸部は内外面ともヨコナデする。文様と

しては口縁部外面に施される凹線以外にほとんど見られないが、口縁部外面に刻み目を施すもの(Po30)、胸部中位に刻み目を施すもの(Po5・10)、口縁部外面と胸部中位の両方に刻み目を施すもの(Po55)もある。Po3・26は、口径の点でA5類に含まれるものではあるが、頭部に刻み目突帯を持ち、A5類の他のものに比べ肩部が張るもので、壺B類に近いものである。

壺B類(Po4・24・31・34・39・45・62・80・94・103 挿図100・102・103・104・106・107・108 図版30・31・32・33)

口径18cm以上を測るもので今回検出した土器の中では大型の壺である。形態・調整等はA5類と変わりなく、A5類の大型タイプである。ほとんどのものが頭部に刻み目突帯を持つ。Po103は口縁部外面にも刻み目を施している。

壺C類(Po107・116・120 挿図108・110 図版34)

口径12cm前後を測る小型の壺。形態・調整等はA5類と変わりないが、口縁部外面の凹線は2~3条となる。これらの中で肩部内面の調整が観察できるPo107についてみてみると、ハケメがA5類、B類ほど明瞭ではない。この点については、長山馬籠遺跡壺C1類で指摘されており、今回出土したC類についても同様のことが言えるものと考える。

高坏(Po71 挿図106)

口径23.7cmを測る高坏。浅い椀状を呈するが、坏部は直線的に外上方へ広がり、口縁部は内湾しながら短く立ち上がる。口縁端部は内側へ肥厚し、上面は平坦面をなしている。端部上面、口縁部外面、筒部外面にそれぞれ凹線を施し、筒部凹線の下には細い線状の刻み目を施す。坏部外面は上半部を横方向、下半部を縦方向にヘラミガキし、内面はハケメ後ヘラミガキする。坏部底面は円盤充填による。

底部

形態的には平底のものだけといってよく、Po168のみが台付のものである。このPo168は長山馬籠遺跡壺A6・C2類等に類例が求められる脚台部と考える。

註 中原吉他『長山馬籠遺跡』瀬戸市教育委員会 1989

3. 後期の土器(挿図109・110・111・113 図版31・34)

今回出土した後期の土器は僅かで、ほとんど後葉のものに限られている。その器種は壺形、甕形、高坏形、蓋形土器で、蓋形土器以外はいずれも破片である。壺(Po118)は頭部片で外面には凹線を施しているが、内面をヘラケズリしており、前葉のものと考える。今回検出した後期土器の中で唯一後葉以外のものである。壺(Po37・95・97・101・122・123・133・169)は全て後葉の複合口縁部片で、口縁部外面に柳描平行沈線を施し、頭部以下内面をヘラケズリするが、一部にヘラミガキが見られるものもある。高坏は2点(Po109・170)あり、浅い皿状をなす有段の坏部と考える。いずれも赤色塗彩されている。Po109は内面にヘラミガキが見られるが脚部の可能性が考えられるものである。蓋(Po114)は逆椀状の体部に棒状のつまみが付くもので、外面をナデ、内面をヘラケズリにより調整している。

第3節 古墳時代以降の土器

主に4区を中心として古墳時代以降の土器を検出している。

1. 土師器(挿図109・111・113 図版30・31・32・33・34・35)

今回検出した土師器は全て古墳時代に位置付けられるもので、須恵器出現前後の時期までのものに限定される。その器種には壺・甕・高坏・低脚坏・小型壺がみられる。壺(Po134)は複合口縁を呈するもので、端部をつまみ出すようにしておさめている。甕には複合口縁を呈するもの12点(Po63・102・105・106・128・135・173~177)と、「く」の字状口縁を呈するもの7点(Po35・36・74・129・130・139・178)がある。複合口縁を呈するものは口縁端部をつまみ出すものと、平坦面もしくはそれに近い面をなすものに分類できる。調整としては口縁部内外

面をヨコナデし、脚部外面をハケメ、内面をヘラケズリしている。Po173は脚部に櫛状工具による波状文と刻み目がめぐる。「く」の字形状口縁を呈するものには全体を観察できるものはないが、調整技法は複合口縁のものと同様であろう。Po130は口縁端部を内側へ折り曲げるようにして肥厚させている。高环は脚部のみ出土したものも含めると11点（Po21・75・76・131・132・137・138・179～182）ある。环部の形態には有段のものと皿状または椀状のものがある。环部の残りがよい有段のもの2点（Po75・76）についてみると、いずれも环部はほぼ直線的に外上方へのび、Po76は底部との境界で一度屈曲するものである。环部は内外面ともハケメ調整する。出土した脚部は細目の筒部で、Po138は3ヶ所に円形の透かしが入るものである。低脚环（Po127）は「ハ」の字状に低く聞く脚部である。小型臺（Po172）は底部を欠くがほぼ完形にまで復元できるもので、偏球形の脚部にやや外反気味に聞く口縁部がつくものである。口縁端部はつまみ出すようにしておさめている。底部はやや平坦な面をなすものと考える。

2. 須恵器（挿図110・111・113・116 図版34・35・37）

环・高环・高台环・盤がみられる。环（Po183・184）はいずれも内湾する体部で、口縁端部がPo183は外反、Po184は直立するものである。高环（Po185）は浅い皿状の环部である。高台环（Po186）は「ハ」の字状に聞く短い高台を貼り付けたものである。盤（Po110・142）は口縁端部が僅かに肥厚するものである。これらの他に外面に格子状のタキが見られる須恵器片（Po187・188・222・223）が出土している。Po222は内面に同心円文タキが見られる。以上の須恵器は古墳時代末から奈良・平安時代のものである。

3. 須恵質土器・土師質土器・瓦質土器（挿図110・111・114・116 図版34・35・37）

須恵質土器は1点（Po190）あり、鉢の底部と考えられるものである。土師質土器には皿（Po111・144～149・194）と环（Po112・193）があり、皿は底径が8cm前後のものが多い。底面には皿、环とも回転糸切り痕を残している。瓦質土器には土鍋（Po143・191）と鉢（Po192）、胸部片（Po224）がある。これらの土器はいずれも中世のものである。

4. 陶磁器（挿図113・115 図版35・36）

中・近世の陶磁器を13点（Po189・205～216）検出した。それらの陶磁器の制作年代ごとに以下に記述する。Po205・206はその制作年代が13世紀と考えられるもので、いずれも中国産である。Po205は白磁碗、Po206は青磁で見込みに櫛描文がみられる龍泉窯系の皿である。Po207・208は15世紀代のもので、Po207は青磁で端反する口縁をもつ中国産の碗、Po208は白磁皿である。Po189は直立する短い口縁をもつ備前焼の壺で、16世紀のものである。Po209は16世紀後半の盤と考えられ、明代の青花である。Po210・211は17世紀前～中期の唐津碗である。Po212～216は、内面または外面に染付を施した伊万里系のもので、Po212は皿、Po213・214は碗、Po215は仏版器、Po216は环であり、いずれも18世紀初頭のものである。

第4節 木製品

福岡遺跡では、弥生時代、古墳時代、中世の木製品を数点検出した。以下、図化した遺物の中の代表例について記述する。

櫛 W38 (挿図117 図版39)

S K-259出土遺物である。柄部と水かき部からなる。全長152.0cm、柄部幅5.0cm、水かき部幅15.5cm、厚さ1.7~3.7cmを測る。柄端部から中央にかけて少し幅広になり、取り付け部でさらに広くなる。柄端部厚1.7cm、柄中央部厚3.7cm、柄取り付け部厚2.84cmである。水かき上部幅と下部幅の差は0.7cmであるが、先端部で少し狭く仕上げる。水かき上部厚2.6cm、下部厚2.1cm、先端部厚0.5cmである。

両面とも丁寧に加工されており、柄部は断面楕円形、水かき部は断面楕丸長方形を呈する。水かき先端部は両面から削って薄くし、おそらく使用的の為であろうが、一部欠損する。弥生時代中期後葉の土器と共に伴する。

整笄 W9 (挿図117 図版39)

S K-116出土遺物である。心持丸太材を用い、両端部を丸く加工し、中央の握り部を削り込んで細く仕上げる。^{註1} 樹種はヤツツバキである。片側端部は使用による磨滅が顕著である。全長126.0cm、片側端部幅6.4cm、握り部幅4.2cmを測る。もう一方の端部は遺存状態が悪く部分的に不明瞭ではあるが、握り部から端部方向にかけて最大幅6.2cm迄広くなり、端部幅4.57cmにおさめる。両端部とも中央に心がくる。

全面丁寧に加工されており、断面は円形である。両端部幅の差は1.83cmあるが、それは加工する木材に制約された結果と考える。磨滅状態から判断して幅広の端部に使用が片寄っている。弥生時代中期後葉の土器と共に伴する。

杵 W21 (挿図117 図版40)

S K-256出土遺物である。心持丸太材を用い、基部を細く先端部を太く加工する。両端部とも丸く仕上げる。先端部は2分の1欠損するが、使用により磨滅する。全長59.2cm、基部幅3.8cm、先端部幅9.4cmを測る。両端部とも中央に心がくる。

全面丁寧に加工されており、断面は円形である。握り部が細く、持つと先端部がかなり重く感じる。古墳時代の土器と共に伴する。

棒状木製品

W1 (挿図118 図版39)

S K-14出土遺物である。心持丸太材を用い、先端部を両側から削って平坦面をつくりながら薄く仕上げる。^{註2} 樹種はヤツツバキである。全体に遺存状態は悪く柄端部が欠損する。全長106.5cm、柄部幅4.7cm、先端部幅4.6cm、平坦面長22.8cmを測る。

加工は先端部のみであり、柄部には表皮が残存する。柄部断面は円形、先端部断面は楕丸方形に近い。

W6 (挿図118 図版39)

S K-47出土遺物である。心持丸太材を用い先端部を両側から削って平坦面をつくりながら薄く仕上げ、柄端部にかけて加工する。樹種はヤツツバキである。全長129.8cm、柄部幅5~5.3cm、先端部幅6.9cm、平坦面長36.2cmを測る。柄幅は、端部~中央部にかけて同じで、先端部近くで少し狭くなる。

全面丁寧に加工されており、柄部断面は円形、先端部断面は楕丸長方形である。弥生時代中期後葉の土器と共に伴する。

W16 (挿図117 図版39)

S K-239出土遺物である。心持丸太材を用い、先端部を両側から削って平坦面をつくりながら薄く仕上げる。柄端部は粗く、柄中央部の一部分は丁寧に加工する。全長178.0cm、柄部幅5.0~6.9cm、先端部幅6.7cm、平坦面長27.5cmを測る。全体に大きく反る。

加工部分以外には表皮が残存する。柄部断面は円形、先端部断面は胴の張る長方形である。弥生時代の土器と共に伴する。

W34 (挿図118 図版39)

S K-259出土遺物である。心持丸太材を用い、先端部を両側から削って平坦部をつくりながら薄く仕上げる。大部分焼け焦げており遺存状態が悪く、細部の加工については不明である。全長98.6cm、幅6.2~7.3cm、厚さ1.5~2.9cmを測る。柄部断面は長方形に近い。弥生時代中期後葉の土器と共に伴する。

彩色板状木製品 W11 (挿図122 図版38)

S K-212出土遺物で、樹種はモミ属である。片面に赤色顔料を塗付し、8mm程度の等間隔で横方向に小孔列を穿つ。両面とも小孔間に紐縫じ痕が残る。厚さ0.4cmと薄く、割れ裂け防止の為の紐縫じと考える。断片で観察する限り、小孔列の縫の並びは4列でひとまとまりとなる。東大阪市鬼虎川遺跡出土の柄に類似する。弥生時代中期後葉の土器と共に伴する。S K-50出土の剣状木製品と同様に祭祀遺物と考える。

平鋸 W43 (挿図121 図版38)

S D-05出土遺物で、樹種はアカガシ亜属である。2分の1程度残存する。身上部は丸く加工され、柄の取り付け孔周縁は0.5cm隆起するように削り出される。全長25.45cm、復元刃幅22.0cm、取り付け孔径3.9×2.9cmを測る。

匙 W28 (挿図125 図版40)

S K-259出土遺物である。柄部が欠損する。残存長10.5cm、幅5.4cm、厚さ0.2~0.6cmを測る。丁寧に薄く加工されており、漆が塗られる。弥生時代中期後葉の土器と共に伴する。

梳 (挿図123 図版40)

W4・12・14・48はいずれも完形ではないが、先端部のみを加工し他の部分には表皮が残る。W4の先端部の削りは比較的丁寧であるが、他は粗削りである。W4はS K-35、W12はS K-212、W14はS K-230の出土遺物であり、W4・12は弥生時代中期後葉の土器と共に伴する。W4の樹種はヤブツバキである。

W39は完存し、先端部・中央部・基部を丁寧に加工する。中央部の加工は片側20cm程度の範囲を削る。基部は小刻みに丸く仕上げる。S K-259出土遺物で、弥生時代中期後葉の土器と共に伴する。

剣状木製品 W7 (挿図121 図版40)

S K-50出土遺物である。心持丸太材を用い剣の形に加工する。先端部を両側から削り薄くし、剣先部は尖らす。握り部は焼け焦げておらず明瞭ではないが、細く仕上げるようである。全長52.7cm、先端部幅3.5~4.2cm、基部幅4.5~5.1cm、握り部幅4.4cmを測る。

部分的に焼け焦げるがほぼ完形である。先端部断面は圓丸三角形、基部断面は橢円形である。弥生時代中期後葉の土器と共に伴する。S K-212出土の板状木製品W11と同様に祭祀遺物と考える。

板状木製品

W17 (挿図119 図版38)

S K-250出土遺物である。片面に加工痕が明瞭に残り、側縁部が緩やかにカーブする。先端部を両面から削って刃状に仕上げる。全長36.4cm、最大幅15.3cm、厚さ3.0cmを測る。古墳時代の土器と共に伴する。

W30 (挿図118 図版38)

S K-259出土遺物である。片面・両側縁・端部を丁寧に加工する。端部を両側から削って薄くし、側縁部途中に段をつくる。全長91.6cm、幅13.0~16.8cm、厚さ1.35~1.75cmを測る。弥生時代中期後葉の土器と共に伴する。W31と同様に建築材であろうか。

W31 (挿図118 図版38)

S K-259出土遺物である。片面・両側縁を丁寧に加工する。端部から片側側縁部にかけて丸く仕上げ、側縁部途中に段をつくる。全長113.7cm、幅9.2~13.0cm、厚さ0.6~2.3cmを測る。弥生時代中期後葉の土器と共に伴する。建築材であろうか。

W41 (挿図119 図版38)

S K-259出土遺物である。先端部の平面形は丸く、先端部・側縁部の断面形はともに細長い梢円形である。先端部・側縁部とも、両側から削って薄く丸みをもたせて仕上げる。全長48.4cm、幅8.6cm、厚さ1.4~2.55cmを測る。弥生時代中期後葉の土器と共に伴する。建築材であろうか。

その他の木製品 (挿図119・120・122・124・125 図版38・40・41・42)

W5・25の柄状木製品、W13・18・29・42の板材、W44~47の柱材、W32・40のように自然木をそのまま利用するもの等を図化した。また、2区S X-0 1より、合子(簾箱)・櫛が出土した。

註1 S K-259からは木製品が多数出土した。本報告書第3章第1節を参照して頂きたい。

註2 本報告書中の科学分析報告書参照。

註3 「鬼虎川の木質遺物」1987.3 勅東大阪市文化財協会

この中で、表面に赤色顔料を塗付し、横方向に小孔列を穿ち、本体厚0.5~0.8cmの板状木製品が橋B類と報告されている。

第5節 石 器

本遺跡より出土した石器類は、剥片石器としては、石鐵、石錐、加工痕剥片、剥片、碎片、石核が100点認められる。礫石器としては石鐵が2点認められるのみである。(挿表3)

石材別にみると、剥片石器は全て黒曜石といつてもよく(97点)、サヌカイトは3点である。躰石器(石鐵)は、いずれも無斑晶板状安山岩である。

石材 器種	黒 曜 石	サヌカイト	安 山 岩*	計
石 鐵	6	2		8
石 錐	3			3
加 工 痕 剥 片	7			7
剥 片	72	1		73
碎 片	3			3
石 核	6			6
石 鐵			2	2
計	97	3	2	102

*無斑晶板状安山岩

挿表3 石器組成表

1. 剥片石器

石鐵

完成品3点、未完成もしくは欠損したもの5点である。石材別にみると、黒曜石6点、サヌカイト2点である。これらの中で6点については、以下の2類型に分類できる。

I. 凹基無茎鐵

I-A : 剥片鐵を除く凹基無茎鐵 (挿図126 図版36・37)

黒曜石製3点(S 2・8・9)、サヌカイト製1点(S 1)で、S 9のみ未完成である。抉入は非常に浅い逆U字状(ほぼ皿状)(S 1)、やや深い逆U字状(S 2・9)、深い逆U字状(S 8)にそれぞれ分類できる。側縁部はいずれもほぼ直線状である。これらの石鐵は、全体的に調整がやや粗いといえる。S 9については、厚手で右脚部に大きく剝離面を残しているため未完成と考える。

I-B : 剥片鐵 (挿図126 図版36)

素材剥片の縁辺にのみ調整を施すもので、黒曜石製の未成品が1点 (S 3) のみ認められた。抉入は逆U字状で、剝離面の方向は一定している。右脚部のみ調整途中である。

II. 平基無茎錐 (挿図126 図版37)

サスカイト製が1点 (S 11) のみ認められた。ほぼ主剝離面を残し、上半部を欠損する。

石錐 (挿図126 図版37)

完成品1点 (S 12)、未成品2点 (S 13・14) が認められ、3点とも黒曜石製である。S 12は先端部と基部の境界が明瞭でなく、全体の形状がポイント状を呈している。先端部は縁辺に急角度な調整を加えて形成している。中央部と先端部は非常に急角度の断面三角形を呈している。先端部には使用による摩耗痕が先端から0.5cmの部位にまで認められ、やや丸みを帯びている。S 13は先端部と基部の境界が明瞭でなく、厚手で、形状は扇形を呈している。剝離面は粗いが方向は一定しており、先端部の錐部作出は調整途中である。S 14は縁辺の調整のみで、先端部の錐部作出のための調整は施されていない。両面に主剝離面を大きく残し、素材の形状を残す。先端部断面は三角形で、上半部断面は扁平である。

加工痕剥片 (挿図126 図版36・37)

剥片の一部に調整を施すものを加工痕剥片とした。多くは横長剥片を素材とし、その形状を大きく変えることなく刃部を形成するように調整している。S 15は細かい調整が縁辺に施されており、調整石器とも考えられるが、厚手であること、素材の形状を大きく変えていないことなどから加工痕剥片と考える。本遺跡ではS 5・15を含め7点、黒曜石製の加工痕剥片が認められる。

剝片・碎片

本遺跡出土の石器類総数の8割近くを、これら剝片・碎片が占めている。小型のものが多い。他の石器についてもいえることではあるが、これらは主に4区SD-36、5区SD-42の埋土中より出土しており、上流から流されてきた可能性も考えられる。

石核 (挿図127 図版37)

黒曜石2点が認められた。S 16には打面調整が認められ、目的剥片を剝離すると考えられるが、2～3点の小型の剥片に限られ、その後は残核としての形態をなすと考えられる。S 17は形状が盤状を呈している。表面は節理面が剥片剝離作業の妨げとなっている。よって剝離痕自体からは通常の目的剥片の跡は推察できない場合もあり、目的剥片剝離は困難であったと考えられる。しかし、数点の小型の剥片が剝離されている。裏面は主剝離面を大きく残し、母岩から剝ぎとられた後、石核となされたことが判断できる。この面では明瞭な稜をなす2点の剥片を剝離している。

2. 磨石器 (挿図127 図版36)

石鏡

磨石器としては、無斑晶板状安山岩製の石鏡が2点のみ認められた。S 6は橢形で左側縁の角度が鈍く、刃部は直線となる。基部の一部に摩耗痕が認められる。S 7は短冊形に近いもので、刃部に使用段階でできたと考えられる摩耗痕が認められる。どちらも風化が進んでいるため詳細な観察はできないが、S 6については階段状剝離が認められる。

第6節 その他の遺物

本章第1節～第5節で報告した遺物以外に、和鏡・針・古銭・鉄製品等が出土した。和鏡、針は2区SX-01内の副葬品である。詳細については第3章第3節7に報告した。その他の製品の出土地等は挿表5・7を参照して頂きたい。

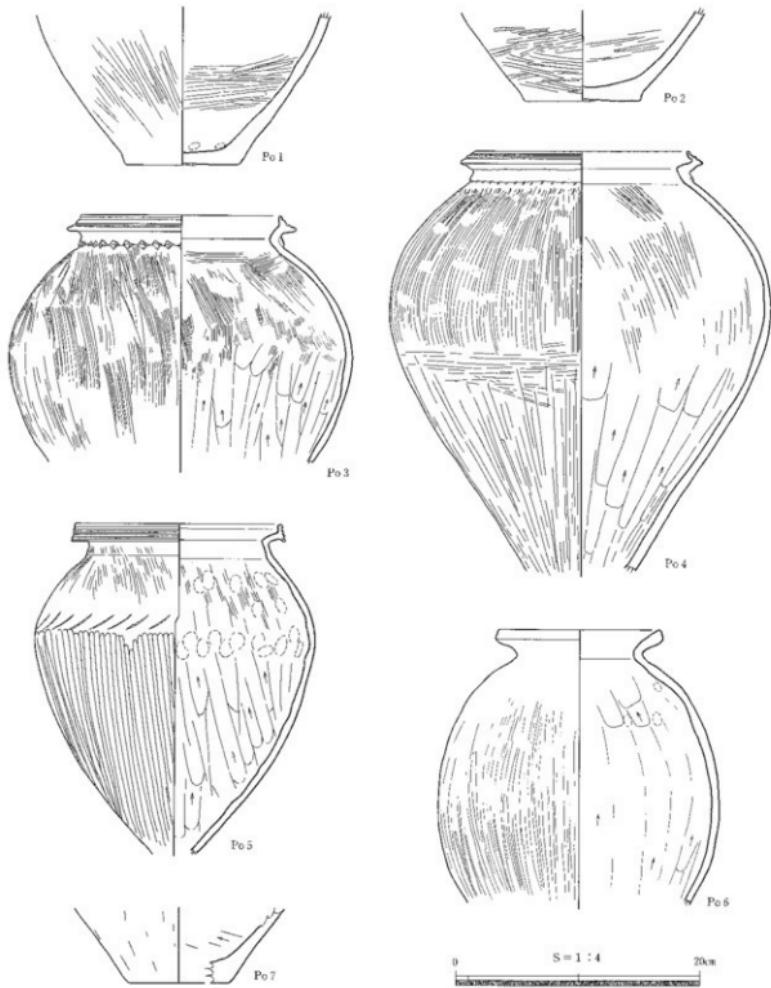


插图100 造境内出土遗物实测图（1）

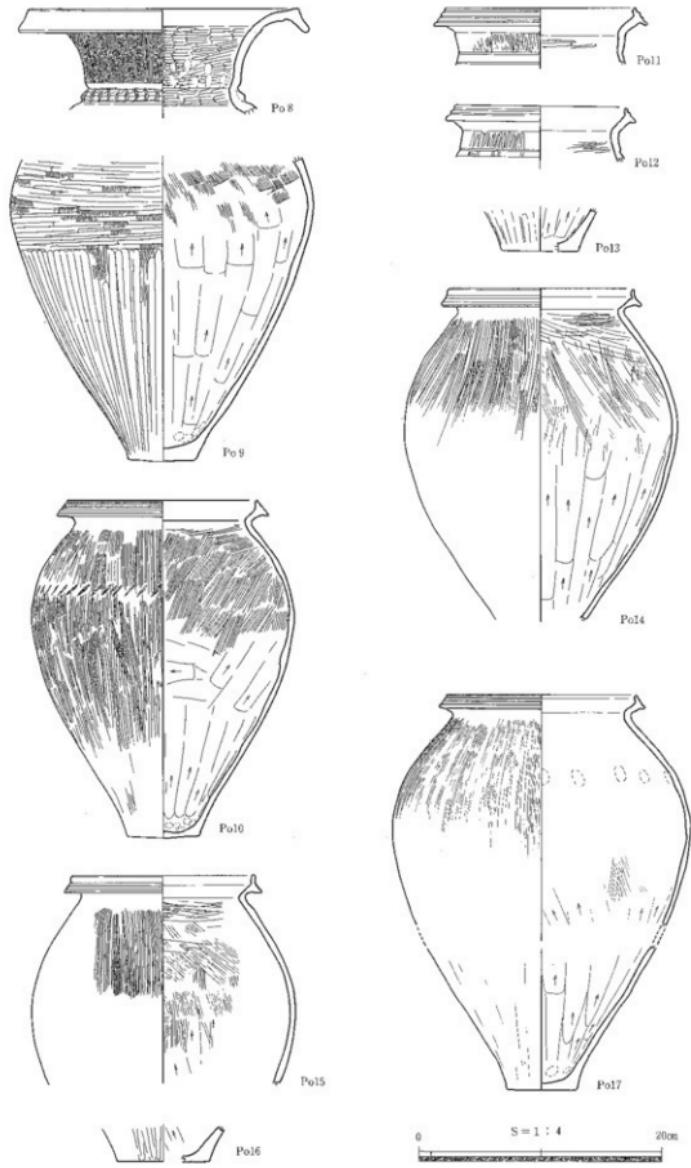
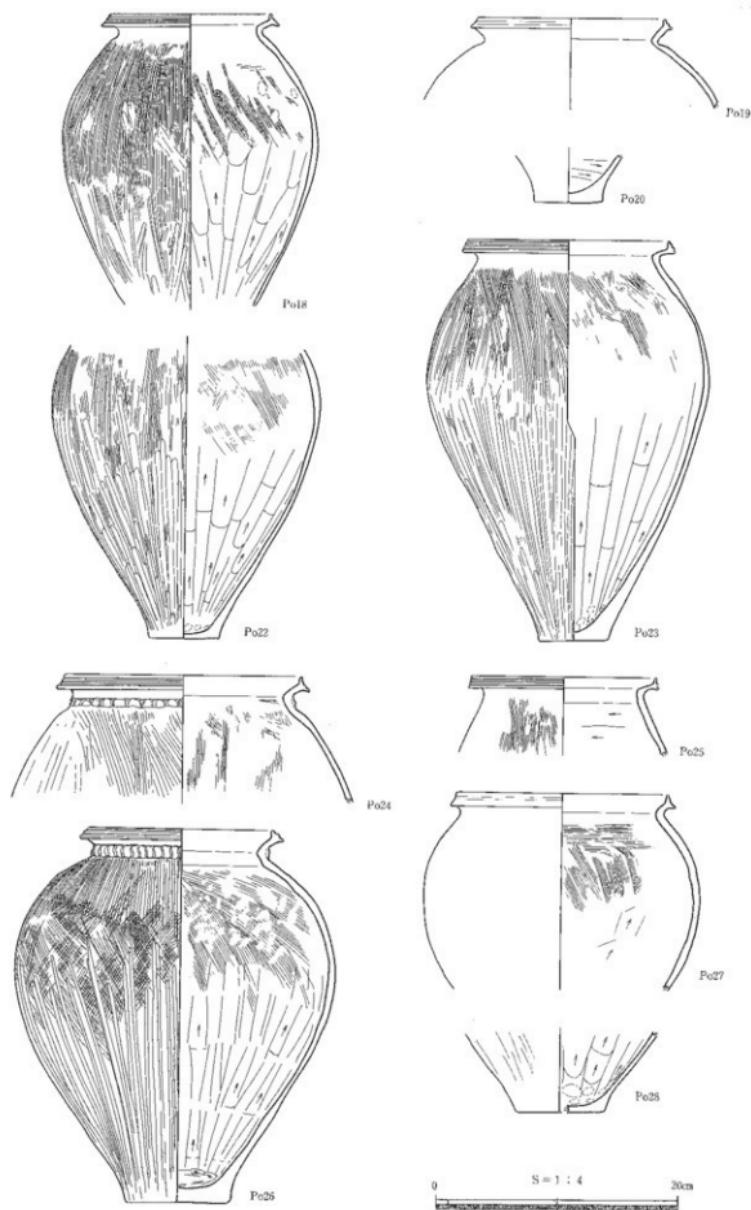
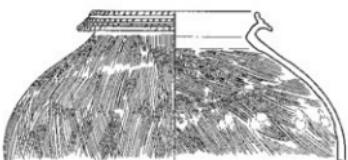
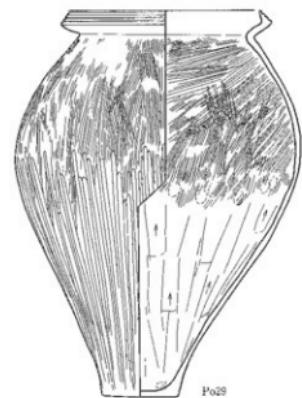


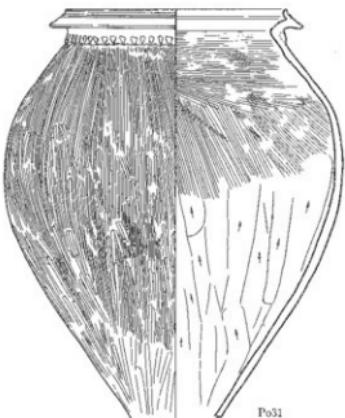
插图101 遗构内出土遗物实测图（2）



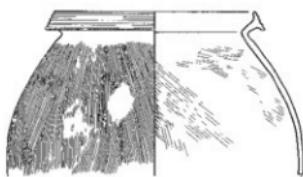
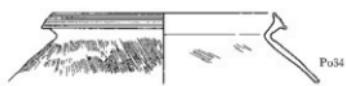
插図102 造橋内出土遺物実測図（3）



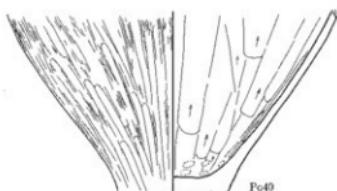
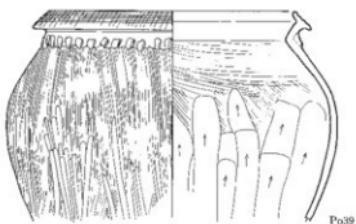
Po30



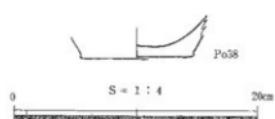
Po31



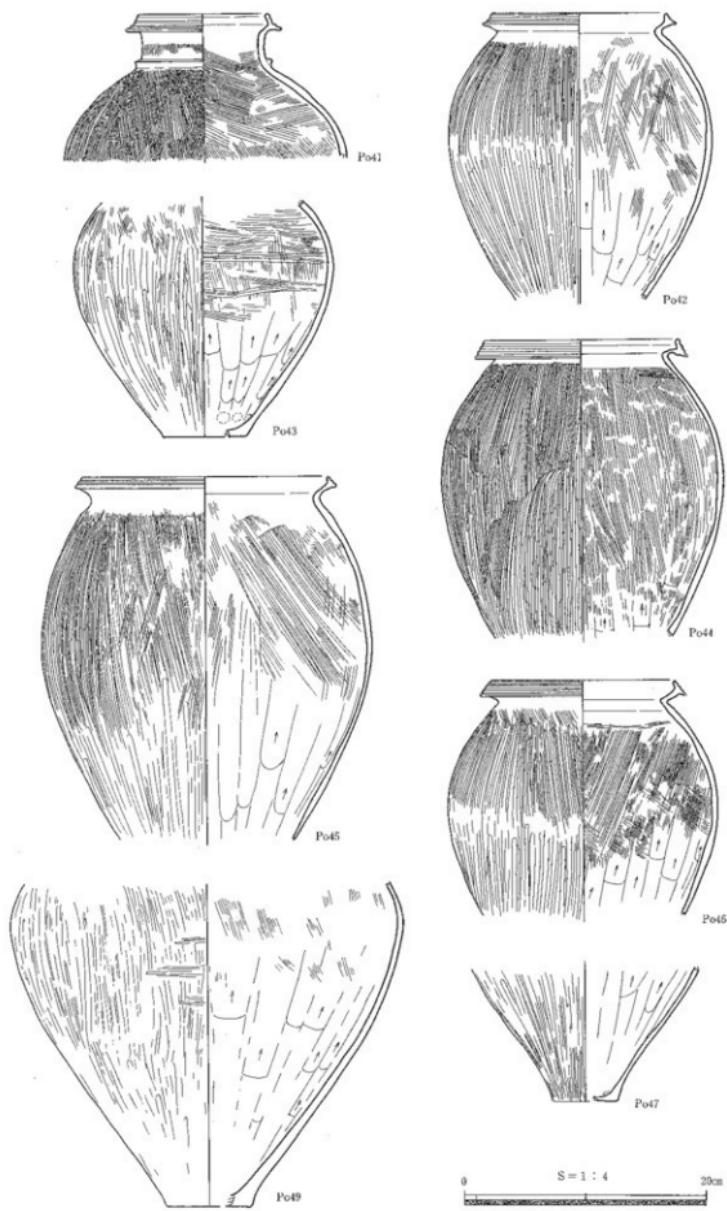
Po33



Po49



插図103 遺構内出土遺物実測図 (4)



插図104 造構内出土遺物実測図（5）

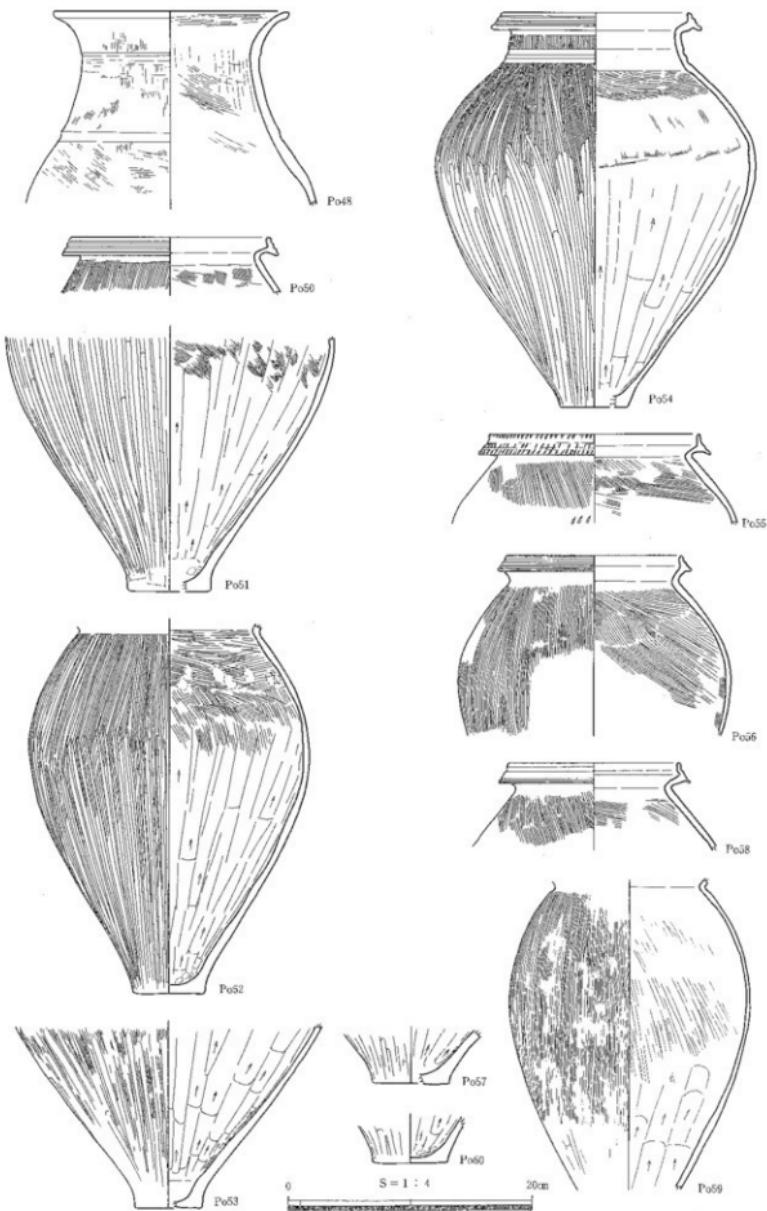


插圖105 遺構内出土遺物実測図（6）

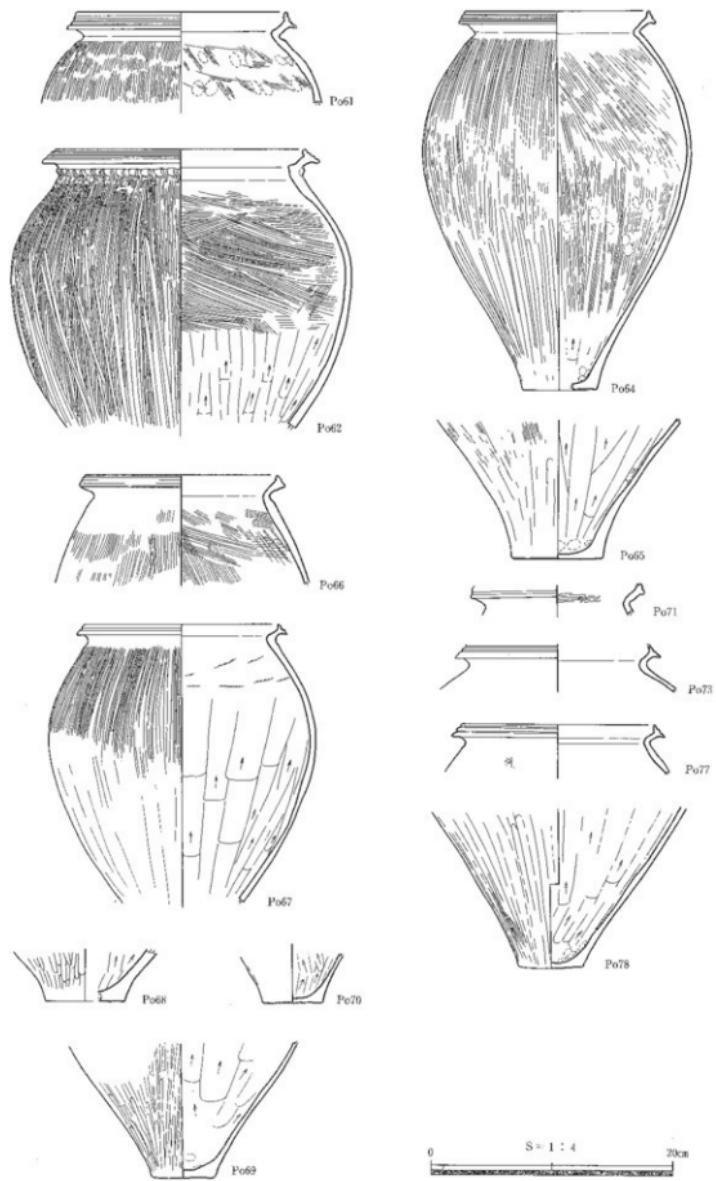
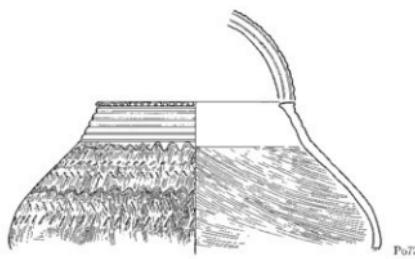


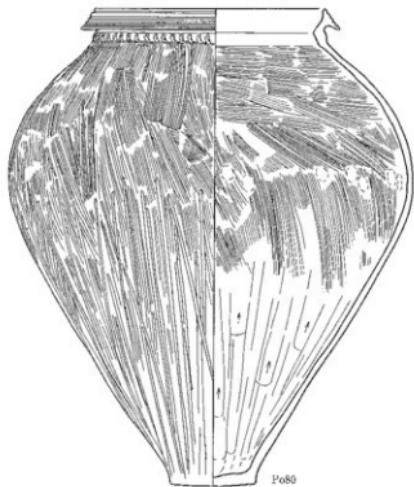
插圖106 遺構內出土遺物實測圖（7）



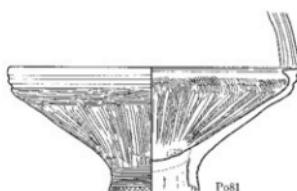
Po72



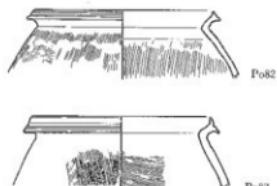
Po79



Po80



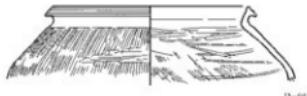
Po81



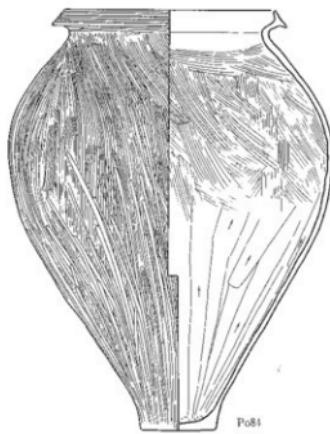
Po82



Po83



Po85



Po81



Po86

0 S = 1 : 4 20cm

插図107 造構内出土遺物実測図 (8)

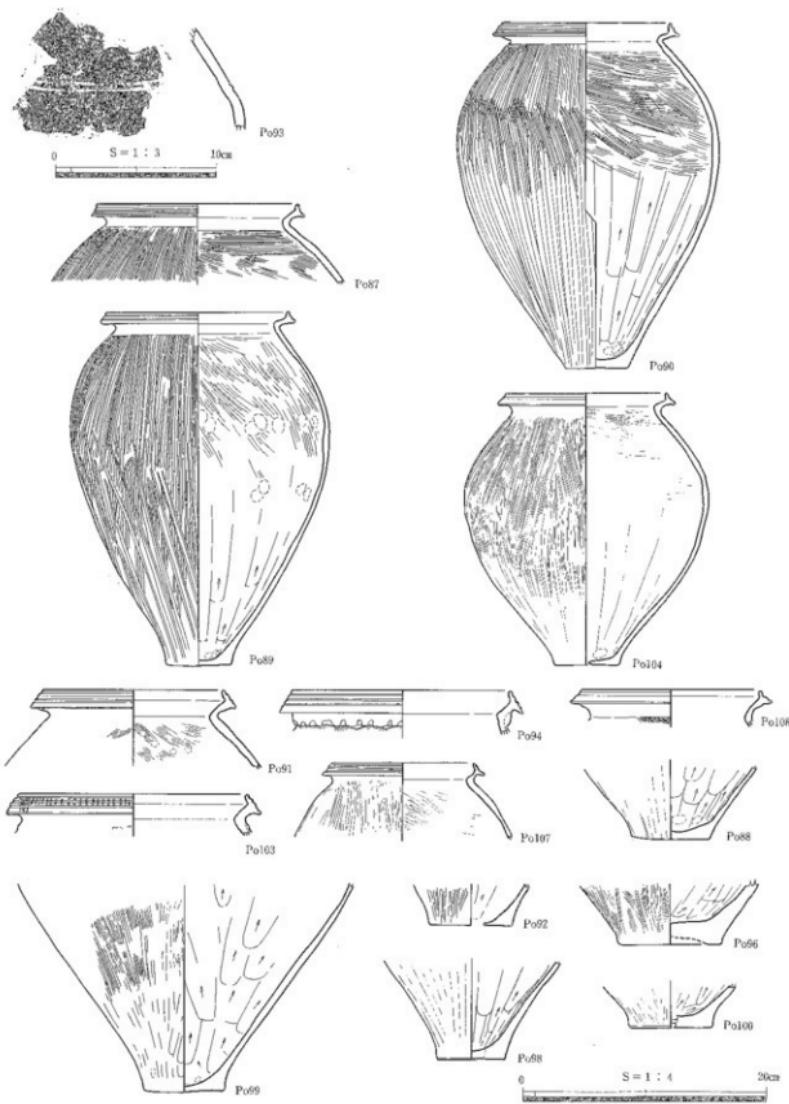
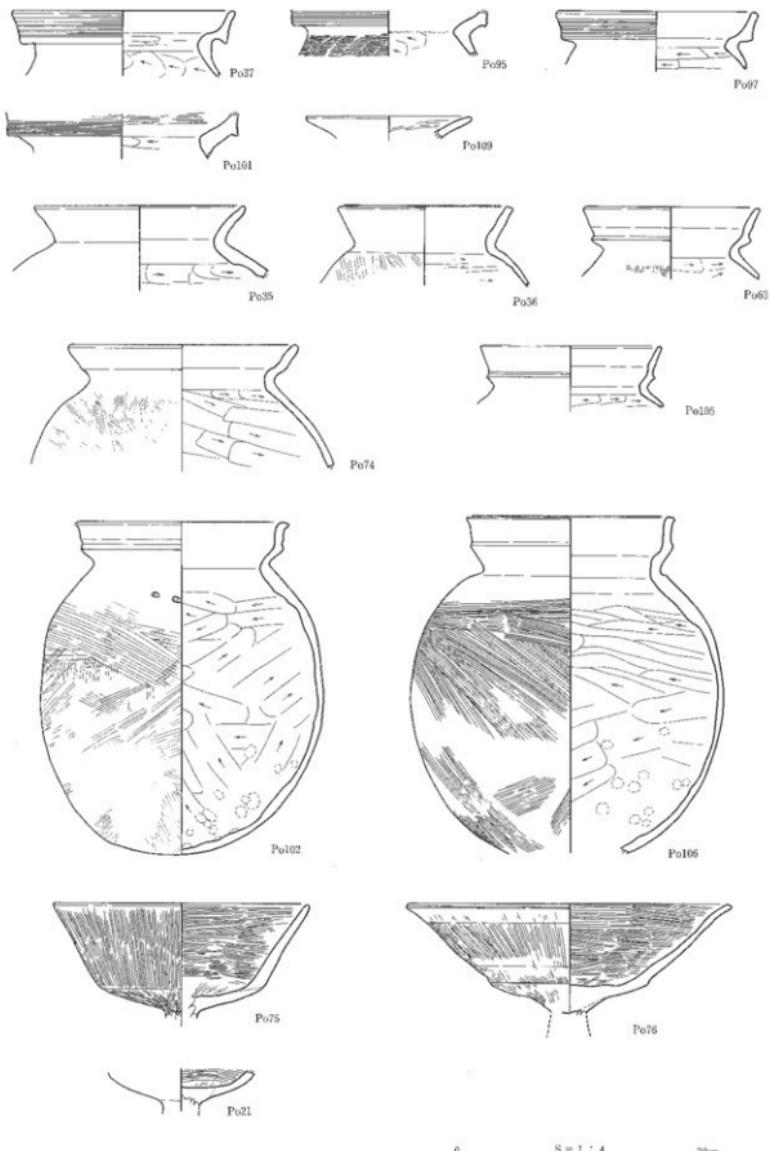
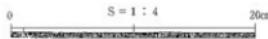
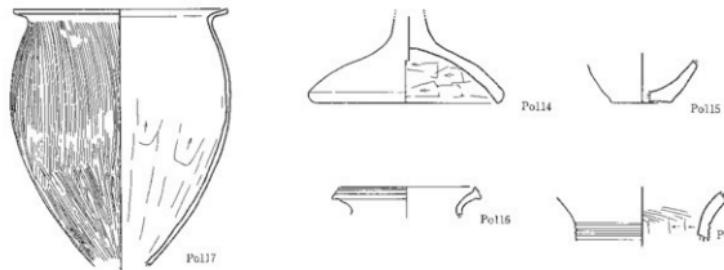
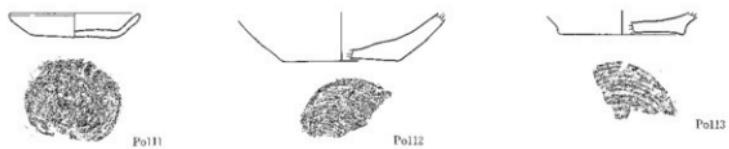


插图108 造情内出土遗物实测图 (9)



挿図109 造構内出土遺物実測図 (10)



挿図110 遺構内出土遺物実測図 (11)

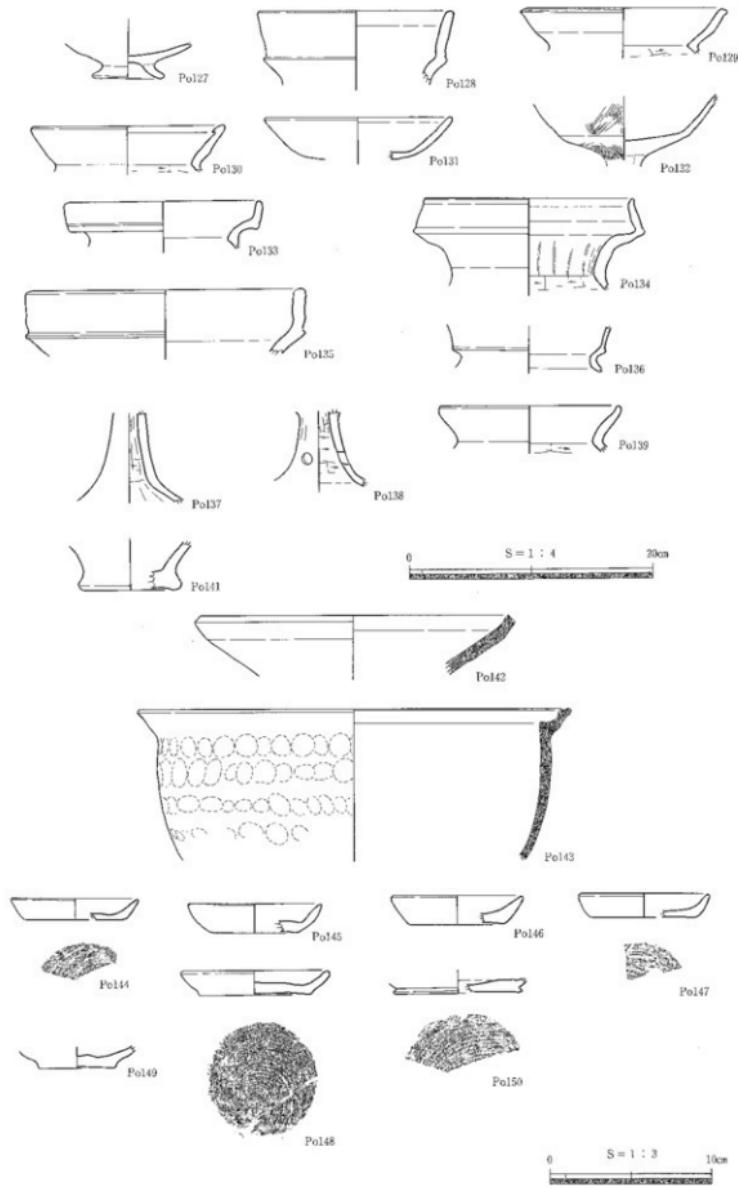
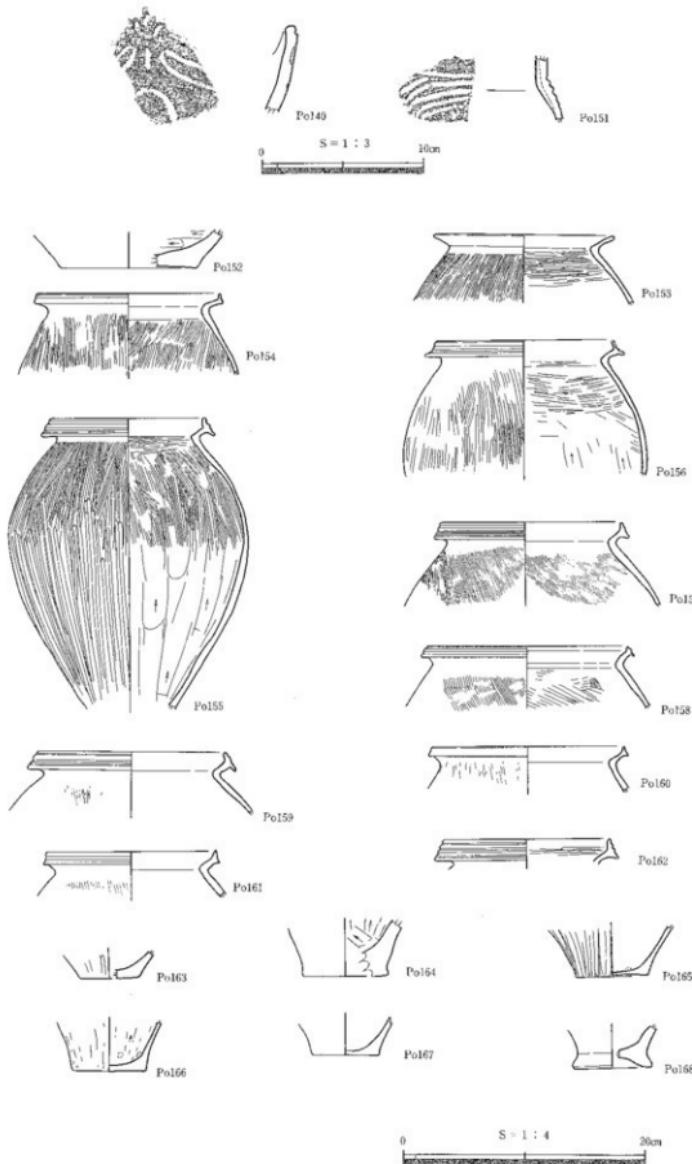


插圖111 造構內出土遺物實測圖 (12)



插図112 繩文土器・遺構出土遺物実測図（1）

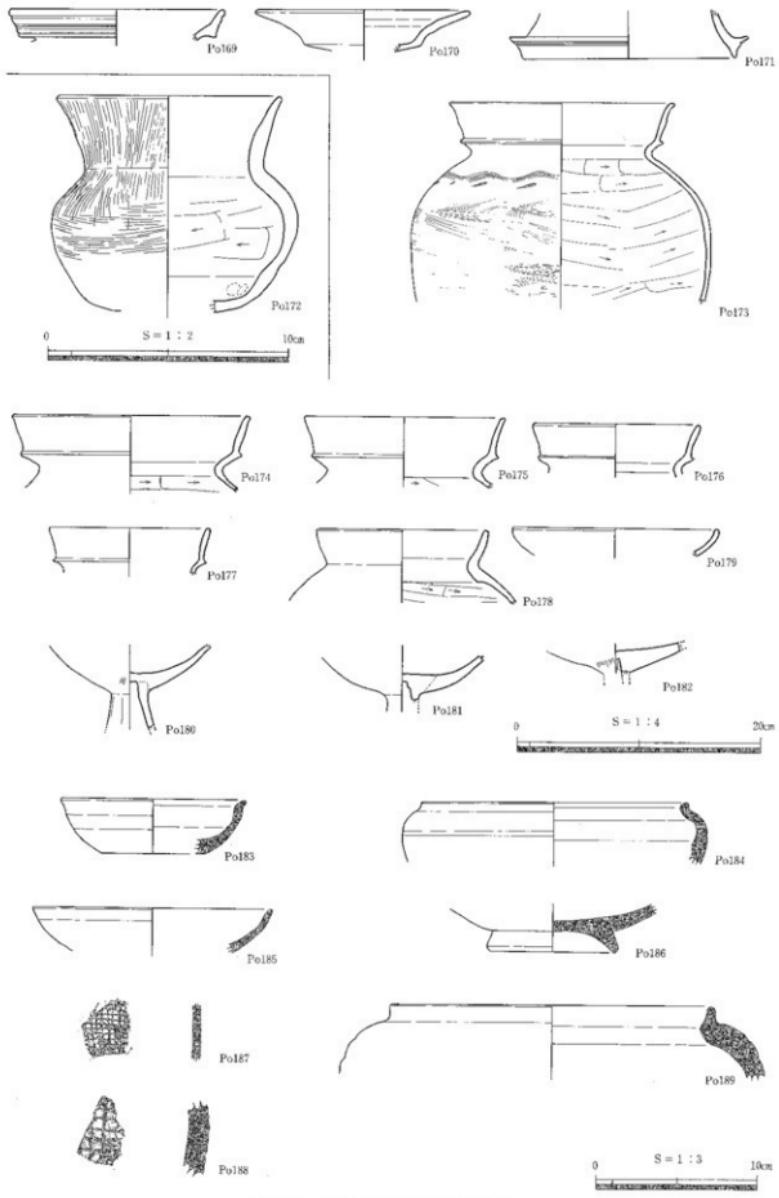


插圖113 遺漏外出土遺物實測圖（2）

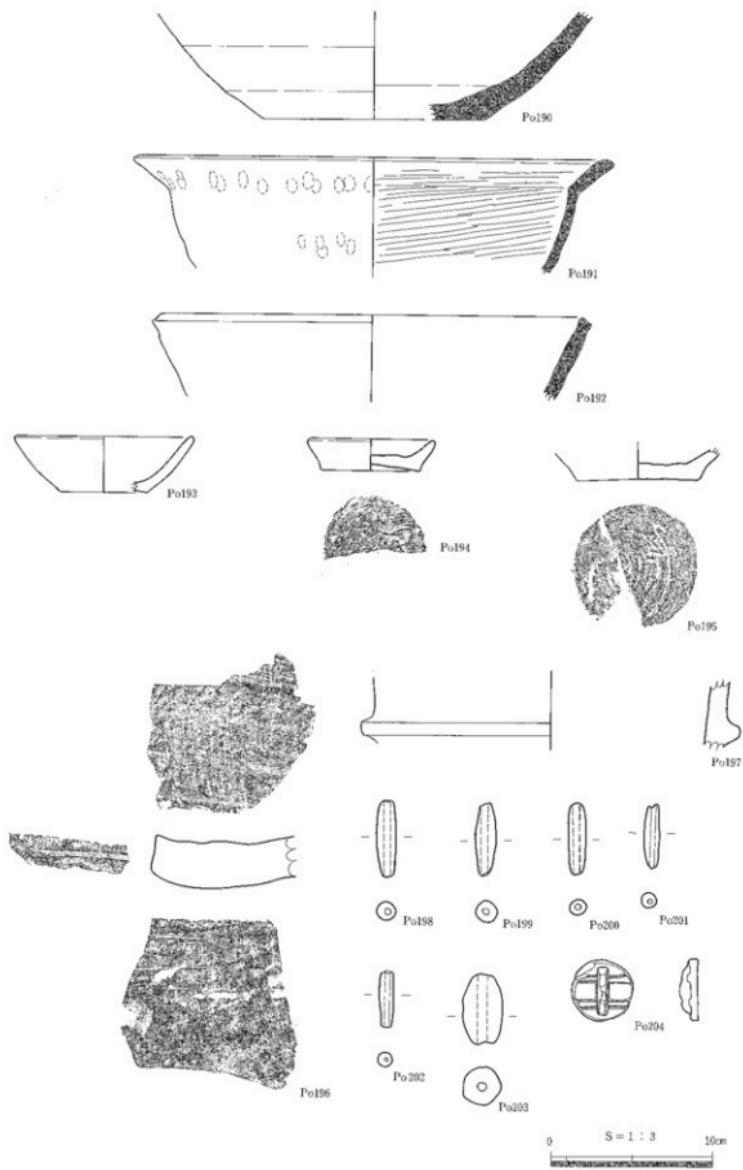


插圖114 遺構外出土遺物實測圖（3）・土製品實測圖

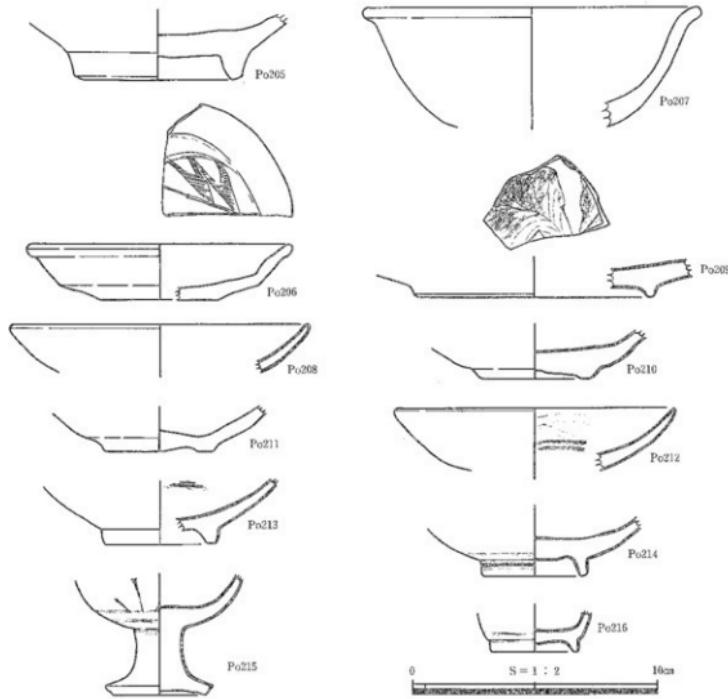


插图115 陶磁器実測図

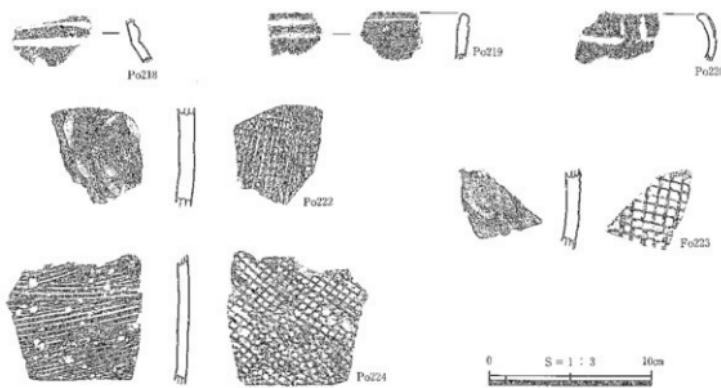
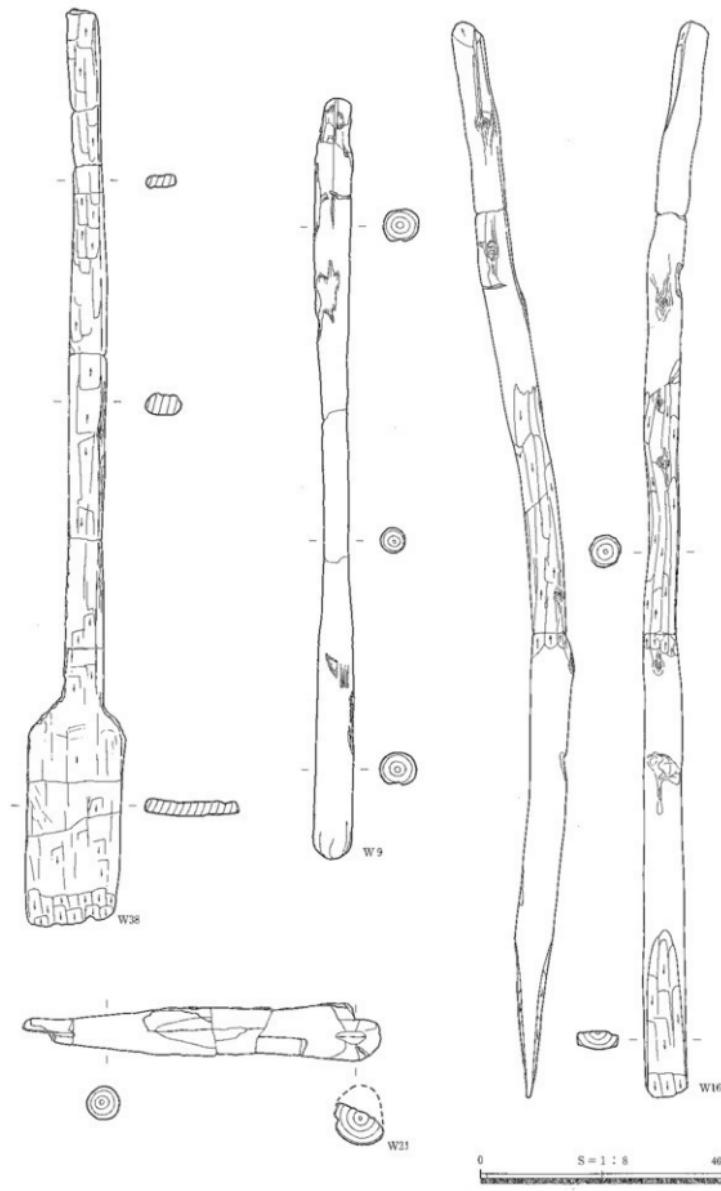


插图116 5区出土遗物实测图



掲図117 木製品実測図 (1)

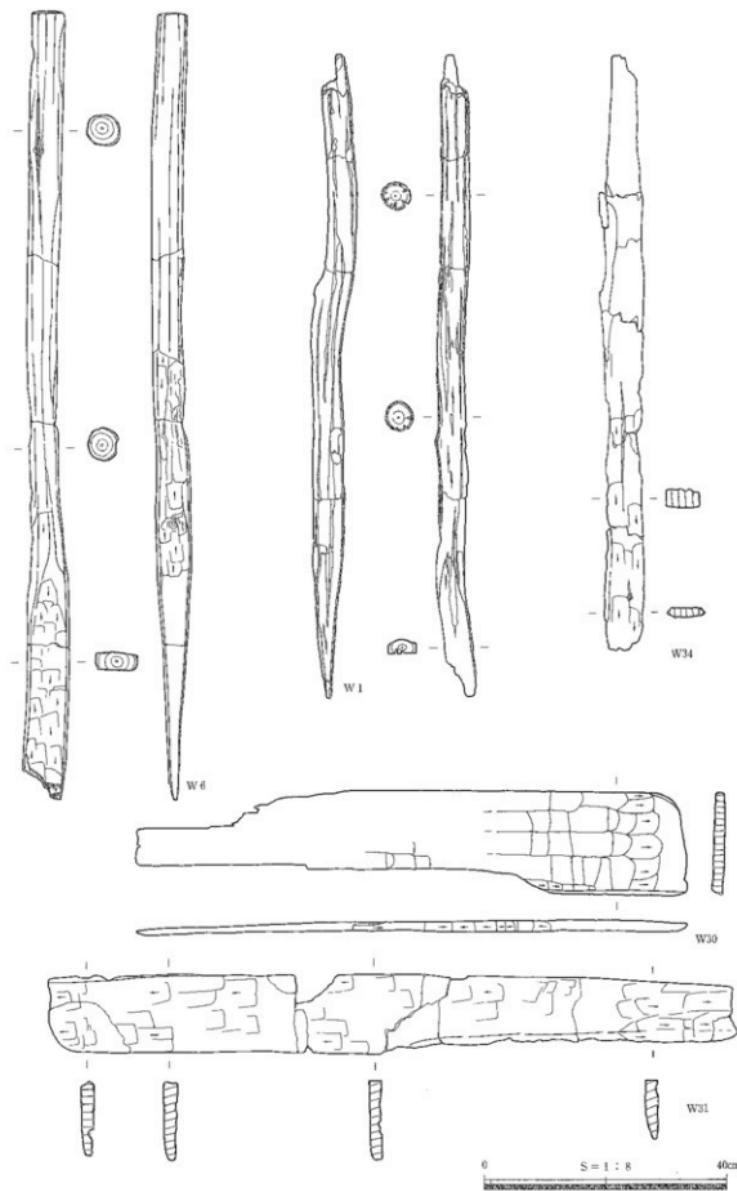
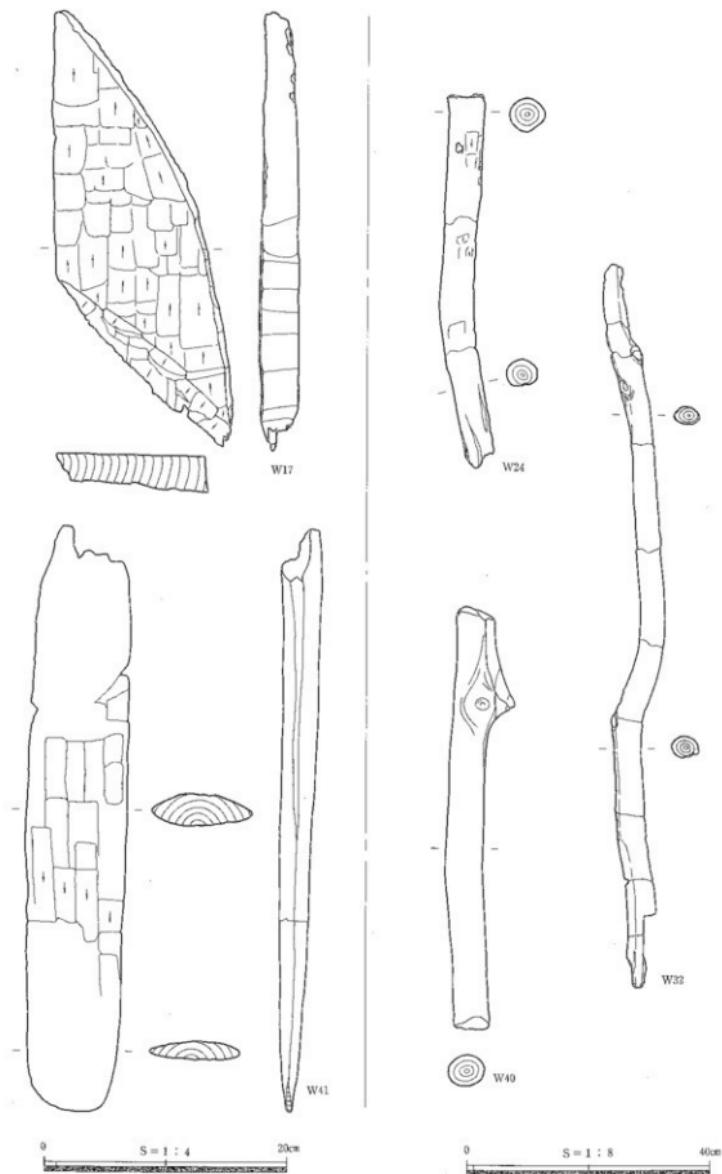
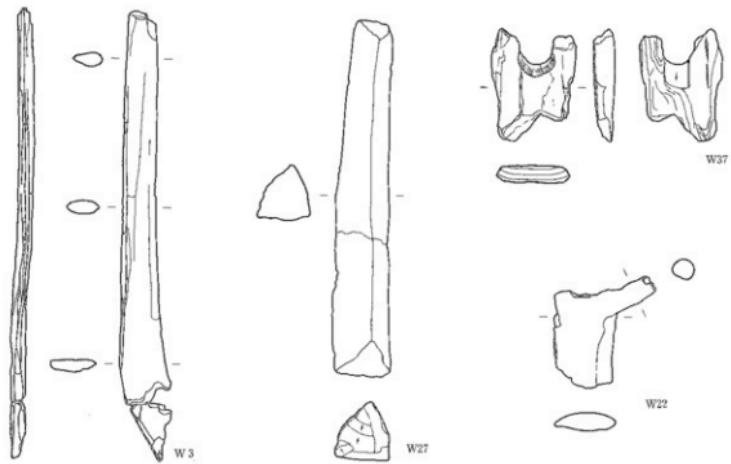
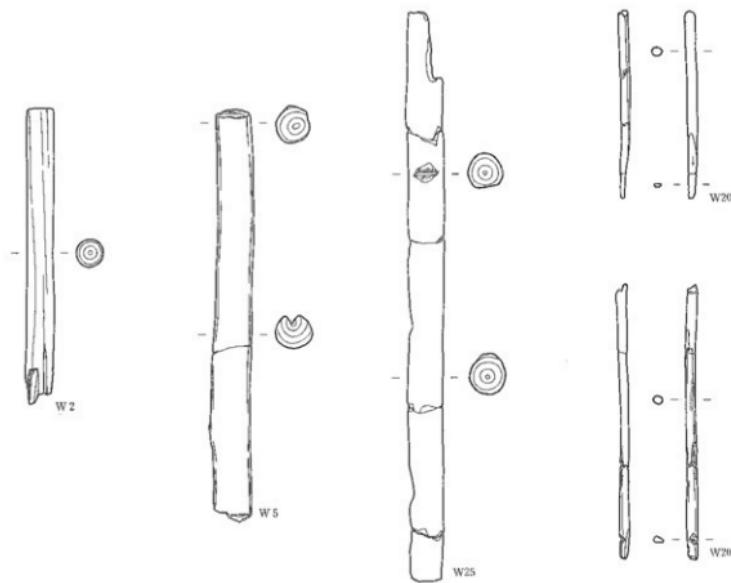
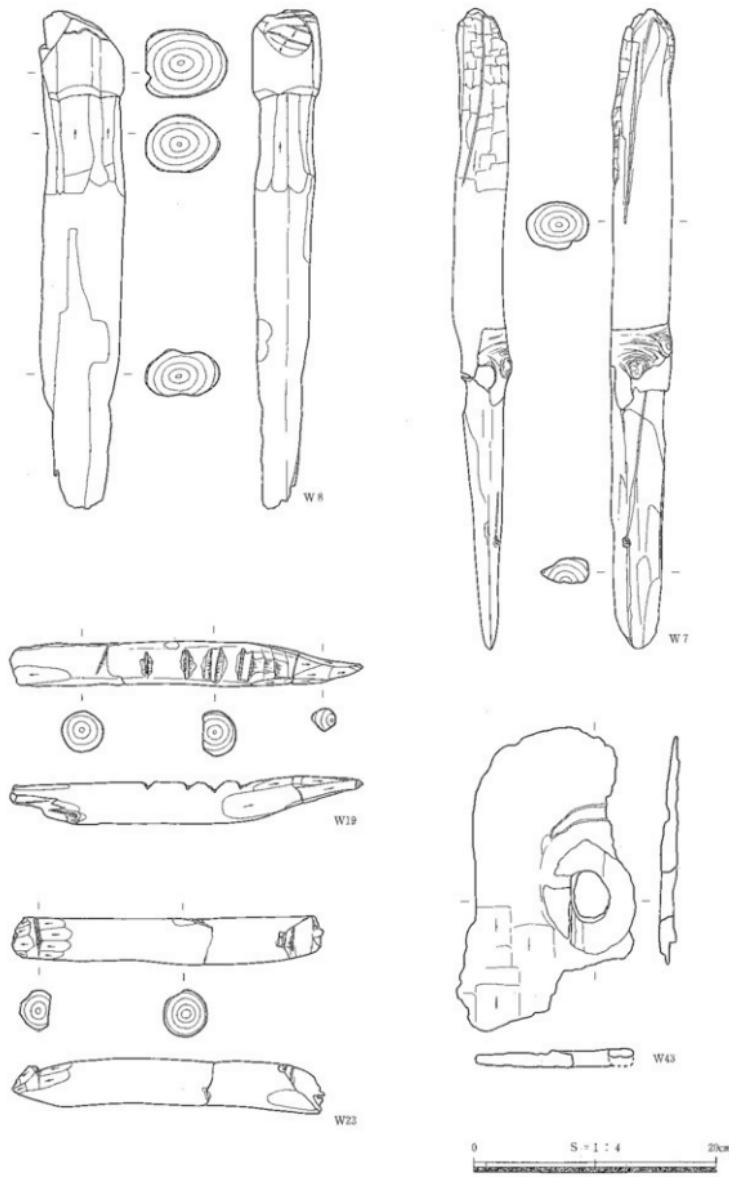


插圖118 木製品實測圖（2）

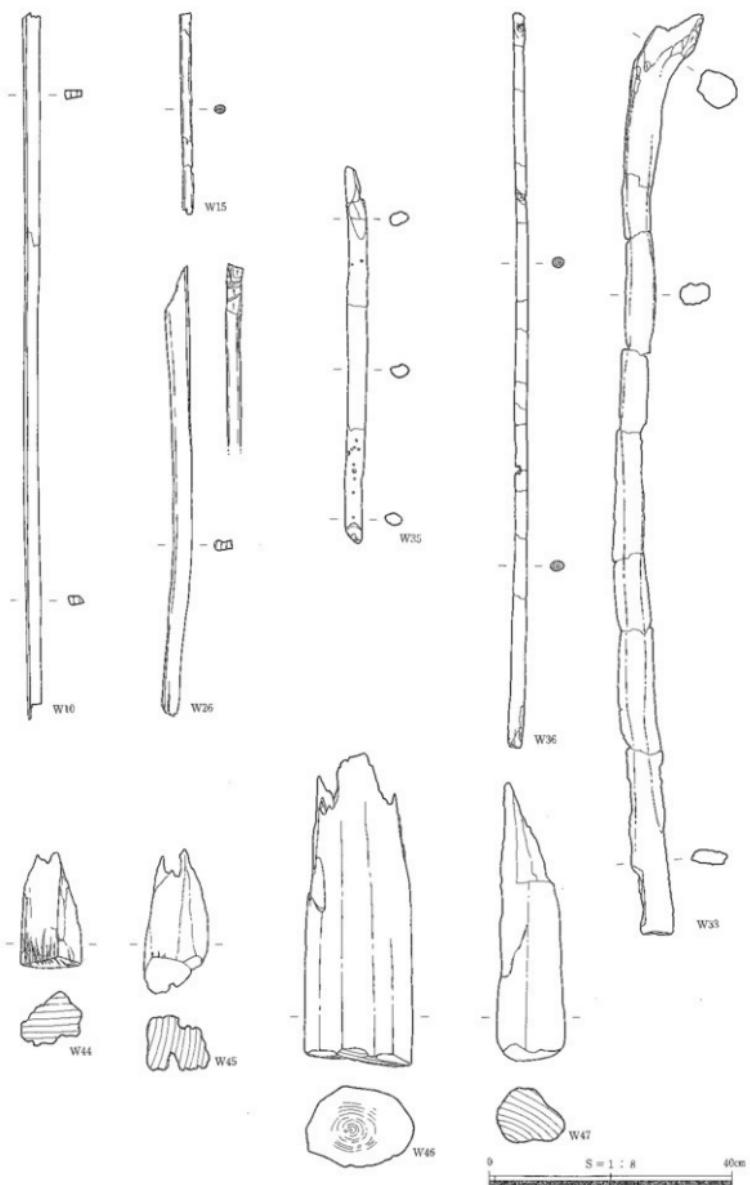




插図120 木製品実測図 (4)



插図121 木製品実測図（5）



挿図122 木製品実測図 (6)

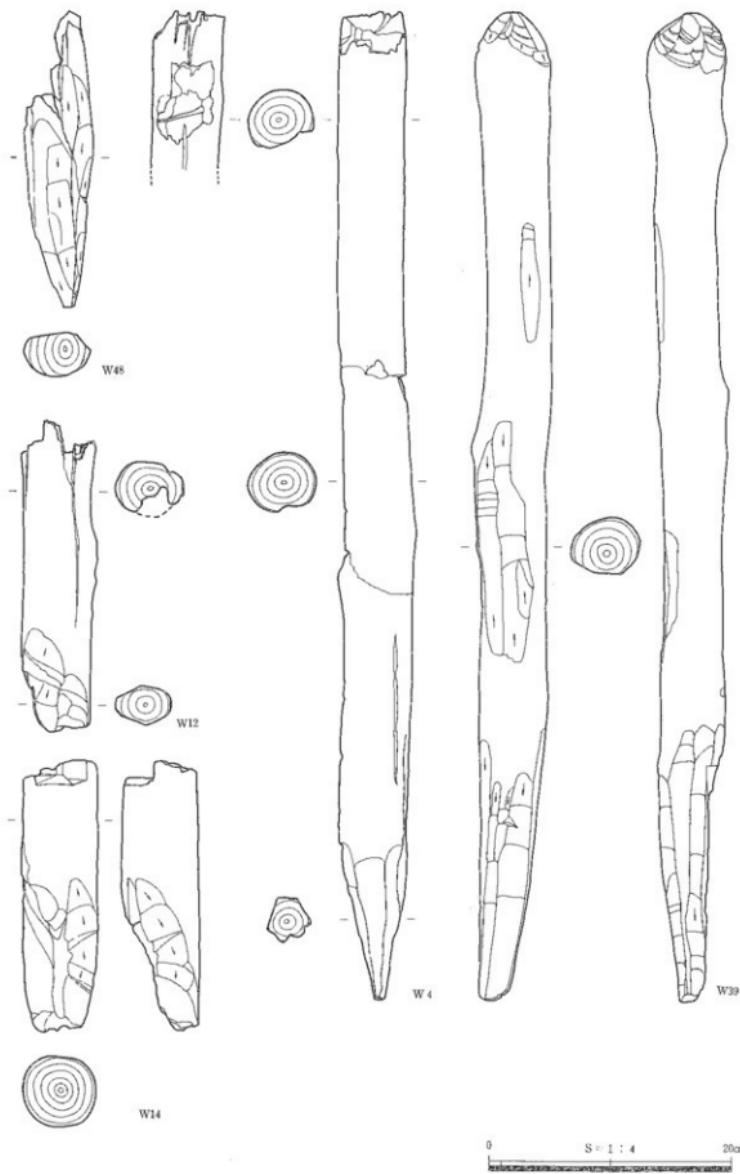
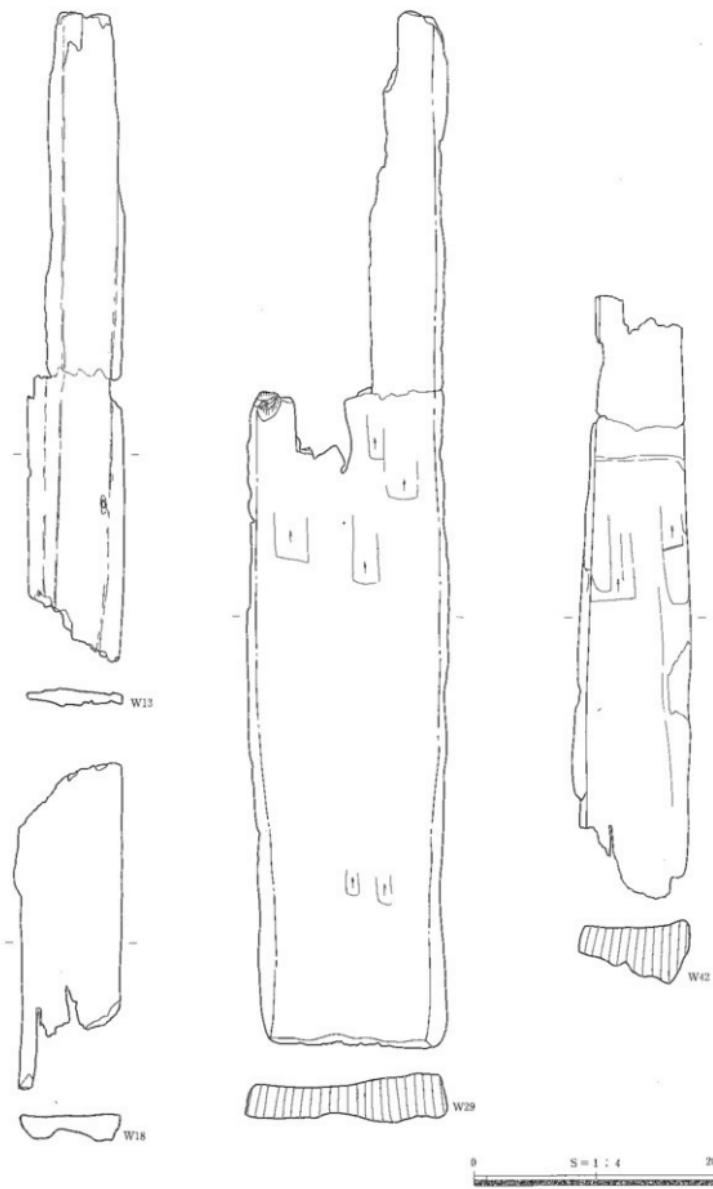
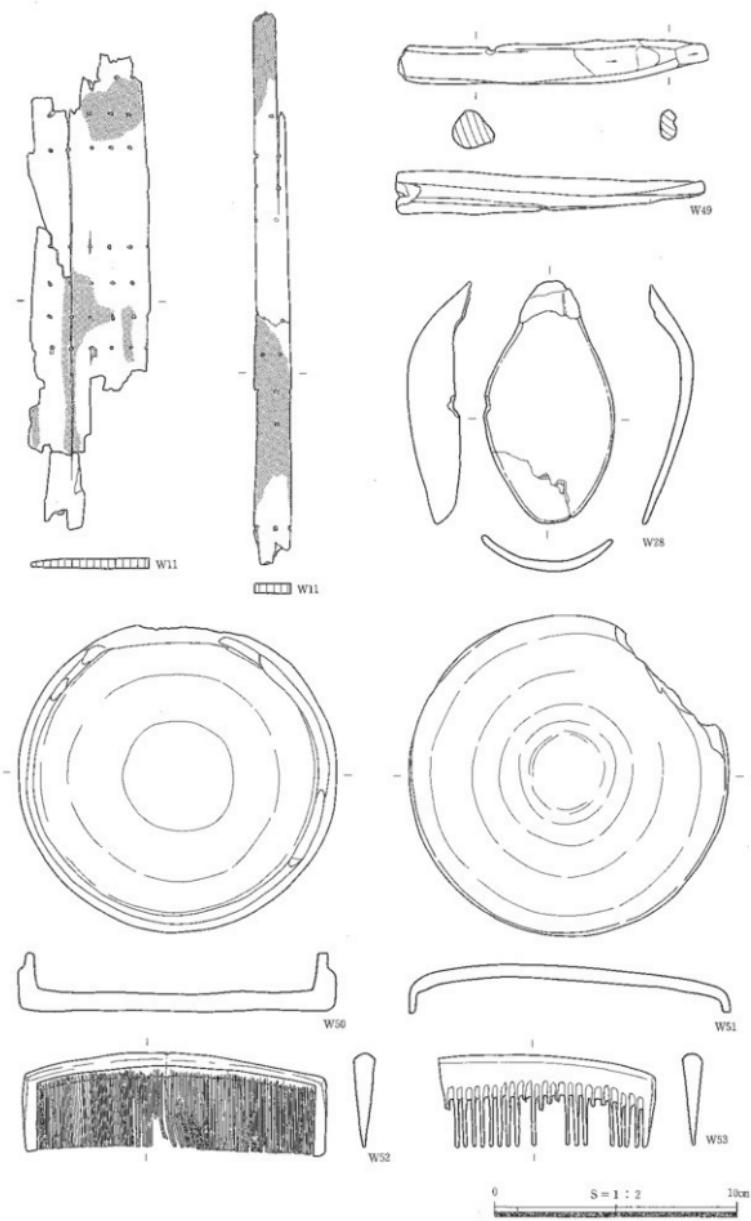


插圖123 木製品測量圖（7）



挿図124 木製品実測図 (8)



插図125 木製品実測図 (9)

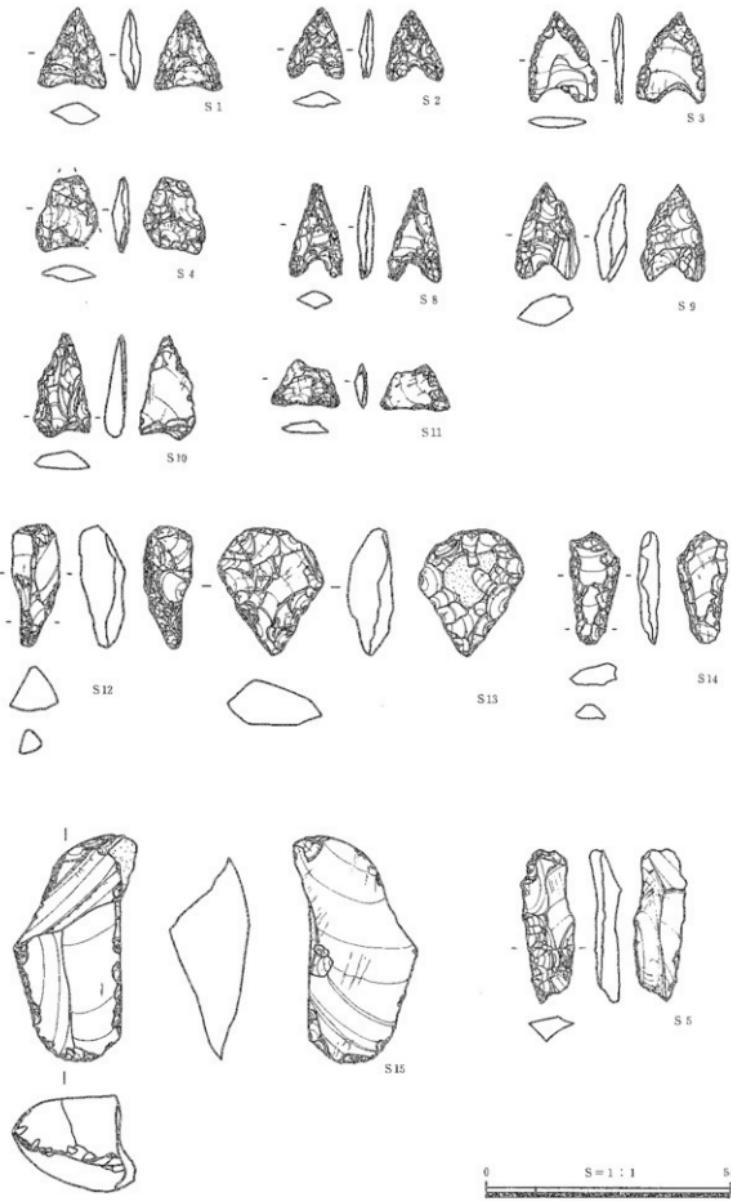


插图126 石锥·石锥·加工痕迹片示意图

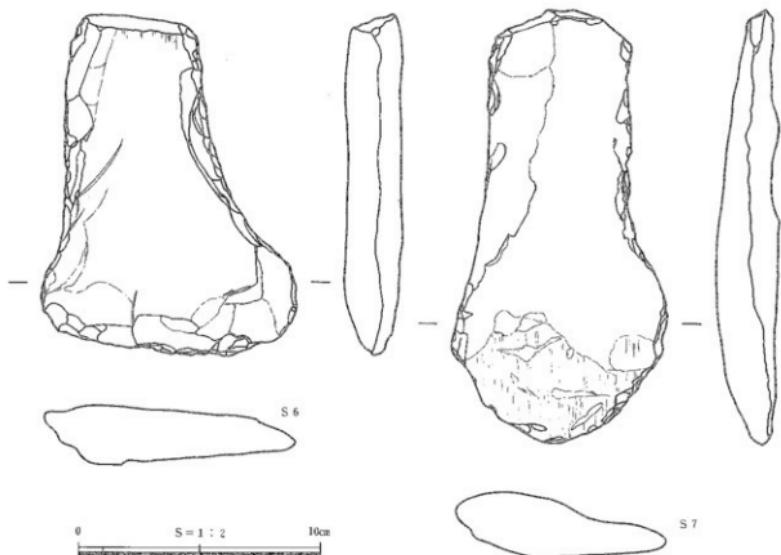
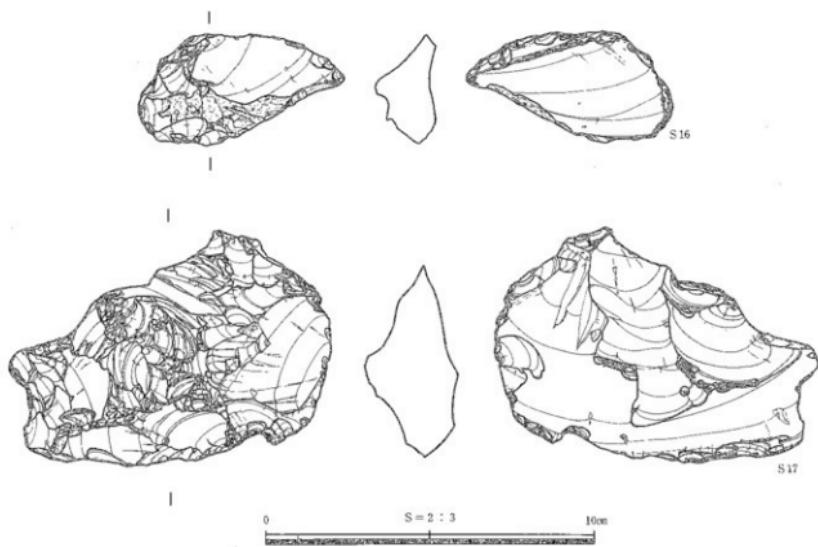


插图127 石核・石器実測図

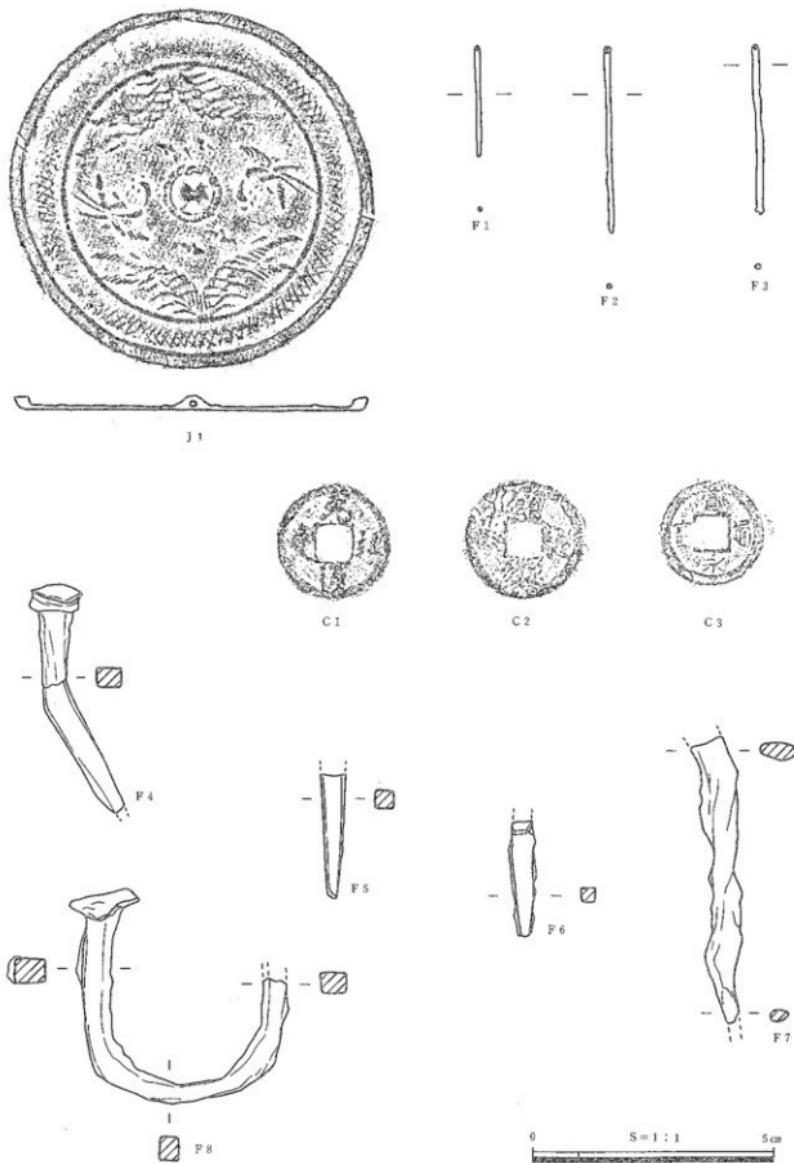


插圖128 和銅・古銭・鐵製品実測図

遺物番号 海防番号 版画番号	取上番号	出土位置	器種	法 (cm)	形態	手 法	胎 土	構 成	色 虹	備考
Po 1 100 30	225	S K95	直面	②12.2△ ④9.1	やや内湾底に立ち上がるしっかりした面部。	外腹ナメヘラミガキ。内面ヨコヘラミガキ。直面ナメ。内面スピチャエ。	1~3mmの良美が多く含む	良好	内外赤褐色 黒斑有	
Po 2 100 30	238, 239	S K96	直面	②7.2△ ④9.3	しっかりした平顔。	内外面ヨコヘラミガキ。直面ナメ。	石英、長石を含む	良好	内外赤褐色 黒斑有	S K16と接合
Po 3 100 30	379, 371 441, 519	S K15	裏	②16.1米 ③20.2△	口輪端部は内側し下に張り出す。外周に4条の凹縫を施す。面部には糞便が詰めぐる。脚部は脛部が入り、その外周に爪形の刻み目を入れる。	口輪端部内外ヨコナザ。脚部内面ヨコヘラミガキ。内面下位ヨコヘラミガキ。内面下位ヘラクズリ。	砂粒を含む	良好	内外赤褐色 黒斑有	SK16と接合
Po 4 100 30	242	S K16	裏	②17.5米 ③24.5△ ④15.5△	口輪端部は内側し下に張り出す。外周に4条の凹縫を施す。面部には糞便が詰めぐる。脚部は脛部が入り、その外周に爪形の刻み目を入れる。	口輪端部内外ヨコナザ。脚部内面ヨコヘラミガキ。内面下位ヨコヘラミガキ。内面下位ヘラクズリ。	細砂粒を含む	良好	内外赤褐色 黒斑有	スヌ付壁
Po 5 100	254, 708	S K17	裏	①17.1米 ②27.2△	口輪端部は内側し下に張り出す。外周に4条の凹縫を施す。面部には糞便が詰めぐる。脇部は脛部が入り、中位に刻み目を入れる。	口輪端部内外ヨコナザ。脇部内面ヨコヘラミガキ。内面下位ヨコヘラミガキ。内面下位ヘラクズリ。脇部内面ヨコヘラミガキ。内面下位ヘラクズリ。脇部内面ヨコヘラミガキ。内面下位ヘラクズリ。脇部内面ヨコヘラミガキ。内面下位ヘラクズリ。	細砂粒を含む	良好	内外赤褐色 黒斑有	スヌ付西。S K22と接合
Po 6 100 30	247	S K19	裏	②11.2米 ③22.6△	「く」の字型に屈曲する口輪。口輪端部はわざに肥厚し、平面度をもつ。	口輪端部内外ヨコナザ。脇部内面ヨコヘラミガキ。内面下位ヨコヘラミガキ。内面下位ヘラクズリ。一部ヨビオサヌ。	砂粒を含む	良好	内外赤褐色 黒斑有	スヌ付壁
Po 7 100	247	S K19	底部	②6.2△ ④8.0米	しっかりした平顔。	外腹面ヨコヘラミガキ。内面ヘラミケツリが認められるが、黒化のためはっきりしない。	石英、黑雲母を含む	良好	内外赤褐色 黒斑有	
Po 8 100 30	495	S K20	裏	②22.0米 ③8.2△	大きく外反する口輪。輪端部は内側し下に張り出す。面部には糞便が詰めぐる。	口輪端部内外ヨコナザ。輪端部内面ヨコヘラミガキ。内面ヨコヘラミガキ。内面下位ヨコヘラミガキ。内面下位ヘラクズリ。内面ヨコヘラミガキ。内面ヨコヘラミガキ。	砂粒を含む	良好	内外赤褐色 黒斑有	
Po 9 100 30	258, 647	S K23	輪部	②21.9△ ③26.1△ ④6.7	面部のあまり張らない倒錐形の平顔。	外腹面ヨコヘラミガキ。内面ヨコヘラミガキ。下位ヨコヘラミガキ。内面ナメハナ。下位ヘラクズリ。内面ヨコヘラミガキ。内面ヨコヘラミガキ。	石英を多く含む	良好	内外赤褐色 黒斑有	
Po 10 100 30	245, 226	S K24	裏	②15.6米 ③27.0△ ④23.4△ ⑤6.6	口輪端部は内側し下に張り出す。面部には糞便が詰めぐる。脇部は脛部が入り、中位に刻み目を入れる。	口輪端部内外ヨコナザ。脇部内面ヨコヘラミガキ。内面ヨコヘラミガキ。内面ナメハナ。下位ヨコヘラミガキ。内面ヘラクズリ。内面ヨコヘラミガキ。内面ヨコヘラミガキ。	細砂粒を含む	良好	内外赤褐色 黒斑有	スヌ付壁
Po 11 100 30	527	S K28	裏	②45.6米 ③4.6△	口輪端部は内側し下に張り出す。外周に4条の凹縫を施す。面部には少なくとも2条の凹縫を施す。	口輪端部内外ヨコナザ。輪端部内面ヨコヘラミガキ。内面ヨコヘラミガキ。内面ヨコヘラミガキ。	砂粒を含む	良好	内外赤褐色 黒斑有	
Po 12 100 30	664	S K30	裏	②44.0米 ③4.2△	口輪端部は内側し下に張り出す。外周に4条の凹縫を施す。面部には少なくとも3条の凹縫を施す。	口輪端部内外ヨコナザ。輪端部内面ヨコヘラミガキ。内面ヨコヘラミガキ。	砂粒を含む	良好	内外赤褐色 黒斑有	
Po 13 100	664	S K30	底部	②3.7△ ③4.4△	平顔。	外腹面ヨコヘラミガキ。内面ヘラミケツリ。底部ナメ。	細砂粒	良好	内外赤褐色 黒斑有	
Po 14 100 30	613	S K33	裏	②15.1米 ③27.1△ ④22.4△	口輪端部は内側し下に張り出す。外周に4条の凹縫を施す。面部には糞便が詰めぐる。輪端部は脛部が入り、中位に刻み目を入れる。	口輪端部内外ヨコナザ。輪端部内面ヨコヘラミガキ。内面ヨコヘラミガキ。内面ナメハナ。下位ヨコヘラミガキ。	細砂粒を含む	良好	内外赤褐色 黒斑有	スヌ付壁
Po 15 100	864	S K33	裏	②11.8米 ③47.2△	口輪端部は内側し下に張り出す。外周に4条の凹縫を施す。面部には糞便が詰めぐる。輪端部は脛部が入り、中位に刻み目を入れる。	口輪端部内外ヨコナザ。輪端部内面ヨコヘラミガキ。内面ヨコヘラミガキ。ナメハナ。	細砂粒を含む	良好	内外赤褐色 黒斑有	スヌ付壁
Po 16 100	864	S K33	底部	②2.9△ ③7.8△	平顔。	外腹面ヨコヘラミガキ。内面ヘラミケツリ。底部ナメ。	細砂粒を含む	良好	内外赤褐色 黒斑有	
Po 17 100	771, 812	S K35	裏	②35.3米 ③27.8△ ④21.4△ ⑤6.4	口輪端部は内側し下に張り出す。外周に4条の凹縫を施す。面部には糞便が詰めぐる。輪端部は脛部が入り、中位に刻み目を入れる。	口輪端部内外ヨコナザ。輪端部内面ヨコヘラミガキ。内面ヨコヘラミガキ。ナメハナ。下位ヨコヘラミガキ。内面ヨコヘラミガキ。ナメハナ。下位ヘラクズリ。内面ヨビオサヌ。	砂粒を含む	良好	内外赤褐色 黒斑有	スヌ付壁
Po 18 100	545	S K36	裏	②31.2△ ③24.1△	口輪端部は内側し下に張り出す。外周に4条の凹縫を施す。面部には糞便が詰めぐる。輪端部は脛部が入り、中位に刻み目を入れる。	口輪端部内外ヨコナザ。輪端部内面ヨコヘラミガキ。内面ヨコヘラミガキ。ナメハナ。下位ヨコヘラミガキ。内面ヨビオサヌ。	細砂粒を含む	良好	内外赤褐色 黒斑有	スヌ付壁
Po 19 100	261	S K35	裏	②31.2米 ③6.8△	口輪端部は内側し下に張り出す。外周に4条の凹縫を施す。面部には糞便が詰めぐる。	風化のため調査不明。	砂粒を含む	やや不良	内外赤褐色 黒斑有	

挿表 4 土器観察表(1)

剖面番号 詳細番号 保護認証番号	取上番号	出土位置	器種	法縫 (mm)	形	態	手法	胎土	施成色	調	備考
Po20 102	240, 817	S K25	底部	②0.8△ ③0.4	平底。		内側ヘラクツリ。腰面テナ。外側腹壁のため調整不明。	細砂粒を含む	良好	内側薄色 外側淡褐色	
Po21 109	855	S K36	高台	②0.6△	片底型。		内面ヨハケ。外側腹壁不明。	1~2 mm の石英を含む	良好	内側淡褐色	
Po22 102	514, 535 536, 539	S K41	腹部	①20.4△ ②22.0△ ③6.5	脇部の張らない壺形。平底。		腰面外観テナハ。下位タテヘラクツリ。内面ナメハ。下位ヘラクツリ。底面ナメハ。内面ニヒオサ。	細砂粒を含む	良好	内側薄色 S K144, SK223 と接合	
Po23 102 30	260, 433 434, 435 443	S K44	蓋	①16.4△ ②33.1 ③21.7 ④0.6	口縫底部は内側し上縁を払拭する。外側に3条の凹縫を施す。脇部は張らない。平底。		口縫部内側ヨコナタ。腰面テナキタ。下位タテヘラクツリミガキ。内面ナメハ。ナメテナメハ。下位ヘラクツリ。底面ナメハ。内面エコサ。	細砂粒を含む	良好	内側淡褐色	スス付青
Po24 102	433	S K44	蓋	①21.6△ ②30.2△	口縫底部は内側し上下に払拭する。外側に3条の凹縫を施す。脇部は張らない。平底。		口縫部内側ヨコナタ。腰面テナキタ。内面ナメハ。ナメテナメハ。内面エコサ。	細砂粒を含む	良好	内側淡褐色	
Po25 102 30	260	S K44	蓋	①15.1△ ②36.3△	口縫底部は内側し上下に払拭する。外側に3条の凹縫を施す。		口縫部内側ヨコナタ。腰面テナキタ。内面ナメハ。ナメテナメハ。	細砂粒を含む	良好	内側淡褐色	
Po26 102 30	469, 461	S K45	蓋	①11.1 ②20.3 ③26.4 ④8.5	口縫底部は内側し上下に払拭する。外側に3条の凹縫を施す。脇部は張らない。平底。		口縫部内側ヨコナタ。腰面テナキタ。内面ナメハ。ナメテナメハ。下位ヘラクツリ。底面ナメハ。内面ナメハ。	細砂粒を含む	良好	内側淡褐色 外側淡褐色	内面に炭化物付着。スス付青
Po27 102	233	S K45	蓋	①17.5△ ②16.1△	1. 口縫底部は内側し上下に払拭する。外側に3条の凹縫を施す。脇部は張らない。2. 脇部は内側し上下に払拭する。外側に3条の凹縫を施す。脇部は張らない。平底。		口縫部内側ヨコナタ。腰面テナキタ。内面ナメハ。ナメテナメハ。下位ヘラクツリ。外側は風化のため削落する。	砂粒を含む	良好	内側淡褐色	
Po28 102	659	S K45	底部	②6.4△ ⑦.0△	平底。		外側タテカツミギタ。内面ヘラクツリ。底面ナメハ。内面ニヒオサ。	砂粒を含む	良好	内側淡褐色 外側淡褐色	スス付青
Po29 103	696	S K47	蓋	①11.9 ②20.3 ③22.5 ④6.3	口縫底部は内側し上縁を払拭する。外側に3条の凹縫を施す。脇部は張らない。平底。		口縫部内側ヨコナタ。腰面テナキタ。内面ナメハ。ナメテナメハ。下位ヘラクツリ。底面ナメハ。内面ニヒオサ。	砂粒を含む	良好	内側淡褐色 外側淡褐色	内面下位に炭化物付着。スス付青
Po30 103	441, 684 496	S K47	蓋	②11.5 ③12.4△	口縫底部は内側し上下に払拭する。外側に3条の凹縫を施す。脇部は張らない。脇部は張る。		口縫部内側ヨコナタ。腰面テナキタ。内面ナメハ。ナメテナメハ。下位ヘラクツリ。	砂粒を含む	良好	内側淡褐色	SK143と接合
Po31 103 31	603, 795 796, 799 798, 799	S K48	蓋	①17.8 ②33.5△	口縫底部は内側し上下に払拭する。外側に3条の凹縫を施す。脇部は張らない。脇部は張る。		口縫部内側ヨコナタ。腰面テナキタ。内面ナメハ。ナメテナメハ。下位ヘラクツリ。底面ナメハ。	砂粒を含む	良好	内側淡褐色	黒斑有。SK 220と接合
Po32 103	746	S K59	蓋	①14.4△ ②20.7 ③21.3 ④4.9	口縫底部は内側し上下に払拭する。外側に3条の凹縫を施す。脇部は張らない。脇部は張る。		口縫部内側ヨコナタ。腰面テナキタ。内面ナメハ。ナメテナメハ。下位ヘラクツリ。	砂粒を含む	良好	内側淡褐色	スス付青
Po33 103	733, 746	S K56	底	①16.2△ ②13.4△	口縫底部は内側し上下に払拭する。外側に3条の凹縫を施す。脇部は張らない。		口縫部内側ヨコナタ。腰面テナキタ。内面ナメハ。ナメテナメハ。下位ヘラクツリ。	砂粒を含む	良好	内側淡褐色	スス付青 SK 221と接合
Po34 103	344	S K51	蓋	①18.1△ ②6.7△	1. 口縫底部は内側し上下に払拭する。外側に3条の凹縫を施す。脇部は張らない。2. 脇部は内側し上下に払拭する。脇部は張らない。		口縫部内外面ヨコナタ。腰面テナキタ。内面ナメハ。ナメテナメハ。下位ヘラクツリ。	砂粒を含む	良好	内側淡褐色	
Po35 109 31	734	S K22	蓋	①17.7△ ②6.4△	外側する「口」の字状口縫。口縫底部は上縁が平坦面となり凹縫をめぐらす。		口縫部内外面ヨコナタ。腰面テナキタ。内面ナメハ。ナメテナメハ。下位ヘラクツリ。	砂粒を含む	良好	内側淡褐色	
Po36 109	39	S K64	蓋	①14.4△ ②6.6△	開閉する「口」の字状口縫。口縫底部は上縁が平坦面となり凹縫をめぐらす。		口縫部内外面ヨコナタ。腰面テナキタ。内面右向ヘラクツリ。	砂粒を含む	良好	内側淡褐色	スス付青。黒斑有
Po37 109 31	713	S K66	蓋	①18.1△ ②6.4△	外側する「口」の字状口縫。口縫底部は上縁が平坦面となり凹縫をめぐらす。		口縫部内外面ヨコナタ。腰面テナキタ。内面右向ヘラクツリ。	砂粒を多く含む	良好	内側淡褐色	
Po38 103 31	279	S K71	底部	②3.4△ ③27.4△	しっかりした底盤。		風化のため調整不明。	1~3 mm の石英を多く含む	良好	内側淡褐色	
Po39 103 31	292	S K72	蓋	①29.2△ ②17.3△ ③27.4△	口縫底部は内側し上下に払拭する。外側に3条の凹縫を施した後強め目を入れる。底面に込み凹縫をめぐらす。脇部は脇部が張る。		口縫部内外面ヨコナタ。腰面テナキタ。内面右向ヘラクツリ。	細砂粒を含む	良好	内側淡褐色 黒斑有	

插表4 土器観察表(2)

遺物番号 辨認番号 回収番号	取上番号	出土位置	器種	法業 (cm)	形態	手	法	施	土	積成	色	質	備考
Po40 163 31	298	S K73	底部	①14.7△ ②8.6	しっかりした平底。	外縁タハケアツナヘマギキ。 内面ヘタケリ。底面ナダ。内面ユビオサエ。	石突、無管		良好	内面暗褐色 外腹淡褐色 ~淡赤褐色	底面有		
Po41 164 31	335	S K81	唇	①10.5△ ②12.0△	口縁部は内傾し上下に張り出す。 外腹に3条の凹線を施す。 脇部は直角で三角形の突部をめぐらす。	I型縁部外腹ヨコナデ。脇部外 腹タハケ。内面ナメハギキ。	細砂粒を含む		良好	内外面淡 灰褐色			
Po42 164	337	S K81	底	①14.2△ ②13.6△ ③11.6△	口縁部は内傾し上下に張り出す。 外腹に3条の凹線を施す。 脇部は直角で三角形の突部をめぐらす。	口縁部外腹ヨコナデ。脇部外 腹タハケ。内面ナメハギキ。 内面ナメハケ。下位ヘラ ケリ。	砂粒を含む		良好	内面淡褐色 外腹淡褐色	スス付着		
Po43 164 340, 430 432	335, 339	S K81	胸部	①9.5△△ ②11.4△ ③6.8△	脣部の張る副底。平底。	外縁タハケ。下位タヘラニ ギキ。内面タハケ。ロコタケ。下 位ヘタケリ。底面ナダ。内面 ユビオサエ。	細砂粒を含む		良好	内外面淡 灰褐色	黒斑有。SK 113と接合		
Po44 164	330	S K85	底	①16.0△ ②12.6△ ③13.0△	口縁部は内傾し上下に張り出す。 外腹に3条の凹線を施す。 脇部は直角で三角形の突部をめぐらす。	口縁部外腹ヨコナデ。脇部外 腹タハケ。内面タハケ。下 位ヘタケリ。	細砂粒を含む		良好	内面淡褐色 外腹淡褐色 ~暗褐色	スス付着		
Po45 164 32	339	S K98	底	①20.2△ ②20.0△ ③27.7△	口縁部は内傾し上下に張り出す。 外腹に3条の凹線を施す。 脇部は直角で三角形の突部をめぐらす。	口縁部外腹ヨコナデ。脇部外 腹タハケ。内面タハケミギキ。 内面ナメハケ。下位ヘラ ケリ。	細砂粒を含む		良好	内面淡褐色 外腹淡褐色 ~暗褐色	スス付着		
Po46 164	301	S K108	底	①15.0△ ②13.4△ ③22.2△	口縁部は内傾し上下に張り出す。 外腹に3条の凹線を施す。 脇部は直角で三角形の突部をめぐらす。	I型縁部外腹ヨコナデ。脇部外 腹タハケ。下位タヘラニギキ。 内面ナメハケ。下位ヘラ ケリ。	細砂粒を含む		良好	内外面淡 灰褐色	スス付着。無 斑有		
Po47 164	301	S K108	底部	①20.9△ ②21.1△	平底。	内面タハラミギキ。内面ヘラ ケリ。底面ナダ。内面ユビオ サエ。	細砂粒を含む		良好	内外面淡 灰褐色	スス付着		
Po48 165 31	850, 906	S K112	底	①19.1△ ②15.9△	口縁部は外反し、脇部はほぼ丸 く起きる。脇部上位外腹に波 打ち、脇部外側にもゆるやか な波打ち。	口縁部外腹ヨコナデ。脇部外 腹タハケ。内面タハラニギキ。 内面ナメハケ。下位ヘラ ケリ。	1~4mmの 石英を含む		良好	内外面淡 灰褐色			
Po49 164	338, 340	S K115	胸部	②26.5△ ③22.4△ ④6.8△	脇部の張る副底。平底。	外縁タハケ。下位タヘラニ ギキ。内面ナメハケ。下位ヘ ラケリ。	砂粒を含む		良好	内外面淡 灰褐色	スス付着。無 斑有		
Po50 165	247	S K116	底	①16.0△ ②4.5△	口縁部は内傾し上下に張り出す。 外腹に3条の凹線を施す。	口縁部外腹ヨコナデ。脇部外 腹タハケ。内面ナメハケ後 ナデ。	砂粒を含む		良好	内外面淡 灰褐色			
Po51 165	346, 347	S K116	胸部	②21.0△ ③7.0△	平底。	外縁タハラミギキ。内面ナメ ハケ後ナデ。下位ヘラカミギキ。 内面ナメハキ。	石突、無管 管を少量含む		良好	内面淡褐色 外腹暗褐色 ~暗褐色	スス付着		
Po52 165	412, 436 437, 438 440, 521	S K121	脇部	②20.2△ ③23.1 ④6.8	脇部の張らない副底。平底。	外縁タハケ。下位タヘラニ ギキ。内面ナメハケ。下位ヘ ラケリ。脇部内面ナメハ キ。	砂粒を含む		良好	内面淡褐色 外腹暗褐色 ~暗褐色	スス付着。S K115と接合		
Po53 165	361, 362	S K123	脇部	②15.0△ ③6.4△	平底。	内面タハケ。下位タヘラニ ギキ。内面ナメハケ。脇部内面ナ メハキ。	石突、無管 管を含む		良好	内外面淡 灰褐色	スス付着。無 斑有		
Po54 165 32	391, 392	S K128	底	①15.1△ ②15.5 ③26.3 ④6.4△	口縁部は内傾し上下に張り出す。 外腹に3条の凹線を施す。 脇部は直角で三角形の突部をめぐらす。	I型縁部外腹ヨコナデ。脇部外 腹タハケ。内面ナメハギキ。 内面ナメハケ。下位ヘラケリ。	砂粒を含む		良好	内面淡褐色 外腹暗褐色	内面に化物付 着。黒斑有		
Po55 165 31	392	S K128	底	①17.0△ ②7.5△	口縁部は内傾し上下に張り出す。 外腹に3条の凹線を施す。 脇部にてもみ口を入れる。脇部にても み口入れをする。	口縁部外腹ヨコナデ。脇部外 腹タハケ後ナデ。内面ナメハ キ。	細砂粒を含む		良好	内面淡褐色 外腹暗褐色	SK173と接合		
Po56 165	604, 606	S K153	底	①14.2△ ②15.0△	口縁部は内傾し上下に張り出す。 外腹に3条の凹線を施す。 脇部は直角で三角形の突部をめぐらす。	I型縁部外腹ヨコナデ。脇部外 腹タハケ。内面ナメハギキ。	細砂粒を含む		良好	内面淡褐色 外腹暗褐色	SK173と接合		
Po57 165	825	S K173	底部	①4.6△ ②6.4△	平底。	内面タハラミギキ。内面ヘラ ケリ。	砂粒を含む		良好	内面淡褐色 外腹暗褐色	黒斑有		
Po58 165	532	S K144	底	①15.8△ ②7.3△	口縁部は内傾し上下に張り出す。 外腹に3条の凹線を施す。	I型縁部ヨコナデ。脇部外 腹タハケ。内面ナメハギキ。 内面ナメハケ後ナデ。	細砂粒を含む		良好	内外面淡 灰褐色			
Po59 165	515	S K145	胸部	②25.7△ ③19.6△	脇部の張らない倒赤形の副底。	内面タハケ。下位タヘラニ ギキ。内面ナメハギキ。下位ヘラ ケリ。	細砂粒を含む		良好	内外面淡 灰褐色	スス付着		

挿表4 土器観察表(3)

遺物番号 国際登録番号 国際登録番号	取上面号	出土位置	器種	法量(cm)	形態	手法	胎土	焼成色	調査備考
Po60 105	809	S K153	底部	②0.6△ ④0.2cm	平底。	外腹タケヘラミガキ。内面ヘラタケリ。底面ナダ。内面ユビオサ。	砂粒を含む	良好	内外面淡褐色
Po61 106	804	S K154	裏	①17.4△ ⑦0.5△	口縁部は内側し、上下に拡張する。外側に1条の凹線を施す。	口縁部内外面コヨナダ。翼部外腹ナダハ。内面ナナメカク後ユビオサ。	砂粒を含む	良好	内外面淡褐色
Po62 106 32	809	S K167	裏	①30.4△ ②3.6△ ⑤0.5△	口縁部は内側し、上下に拡張する。外側に1条の凹線を施す。腹部は口縁部が最も広い。	口縁部内外面コヨナダ。翼部外腹ナダハ。内面ナナメカク後ユビオサ。	砂粒を含む	良好	内外面淡褐色
Po63 109 31	853	S K169	裏	①14.6△ ②0.6△	外傾する後合口縁。口縁部は平幅部をなす。腹部の横は水平方向につまり出される。	口縁部内外面コヨナダ。翼部外腹ナダハ。内面右方向ヘラタケス。	砂粒を含む	良好	内外面淡褐色
Po64 106	868	S K178	裏	①15.9△ ③11.3△ ④0.6△	口縁部は内側し、上下に拡張する。外側に1条の凹線を施す。腹部は翼部が狭く、斜面部となる。	口縁部内外面コヨナダ。翼部外腹タケヘラミガキ。内面ナナメカク。下位タケハ。底面ナタケタケリ。中位部にコヨサ。底面ナダ。内面ユビオサ。	砂粒を含む	良好	内外面淡褐色
Po65 106 32	808	S K178	底部	②11.△△ ⑨.7△	平底。	外腹タケヘラミガキ。内面ヘラタケリ。底面ナダ。内面ユビオサ。	砂粒を含む	良好	内外面淡褐色
Po66 106 32	526	S K179	裏	①15.3△ ②9.2△	腹部は「く」の字状に屈曲し、口縁部は左をつむにあびてくらひぞね。外側に内側を施すが、強くナナメられることにより不規則。	口縁部内外面コヨナダ。翼部外腹タケヘラミガキ。内面ナナメハ。	砂粒を含む	良好	内外面淡褐色
Po67 106	530, 531	S K182	裏	①15.8△ ②23.0△	口縁部は内側し、上下に拡張する。外側に1条の凹線を施す。腹部は翼部があり立ちない。	口縁部内外面コヨナダ。翼部外腹タケヘラミガキ。内面ナダハ。外腹ナタケタケナダ。下位タケハ。底面ナダ。	砂粒を含む	良好	内外面淡褐色
Po68 106	537	S K183	底部	②4.4△ ⑧.4△	平底。	外腹タケヘラミガキ。内面ヘラタケリ。底面ナダ。	砂粒を含む	良好	内外面淡褐色
Po69 106	542, 543	S K184	底部	②11.1△ ⑥.1△	平底。	外腹タケヘラミガキ。内面ヘラタケリ。底面ナダ。内面ユビオサ。	砂粒を含む	良好	内外面淡褐色
Po70 106	543	S K184	底部	②1.9△ ④.8△	平底。	外腹タケヘラミガキ。内面ヘラタケリ。底面ナダ。	砂粒を含む	良好	内外面淡褐色
Po71 106		S K188	裏		口縁部。	外腹に内側を施す。内外面リコナダ。内面にヨハヘミガキがみられる。	砂粒を含む	良好	内外面淡褐色
Po72 107 31	547	S K196	無調査	①14.2△ ②12.1△	内側する口縁部から玉ネギ状の前縁へとつながる。口縁部は内側に内側を施す。腹部は内側を施す。腹部に口縁部の内側には糞みを施し、上部手すり部には2条の凹線がみくる。口縁部外側には1条の凹線を施し、翼部以下外側には直状工具によく直状文と直状刻文を下2段に施す。	口縁部内外面コヨナダ。翼部外腹タケヘラミガキ。内面ナナメカク。物部以下外腹面に方舟ヘラタケリ。	砂粒を含む	良好	内外面淡褐色
Po73 106	549	S K196	裏	②3.7△	口縁部は内側し、上下に拡張する。外側に1条の凹線を施す。先端部は尖る。	内側する口縁部から玉ネギ状の前縁へとつながる。口縁部は内側に内側を施す。腹部は内側を施す。腹部に口縁部の内側には糞みを施し、上部手すり部には2条の凹線がみくる。口縁部外側には1条の凹線を施し、翼部以下外側には直状工具によく直状文と直状刻文を下2段に施す。	砂粒を含む	良好	内外面淡褐色
Po74 109 32	764	S K196	裏	①18.4△ ②9.8△	やや口縁部に外側する「く」の字状口縁。口縁部は丸くおさまる。	口縁部内外面および腰部外腹ヨコナダ。翼部外腹ナナメカク。物部以下外腹面に方舟ヘラタケリ。	石灰を含む	1~3mmの 良好	内外面淡褐色
Po75 109 32	644, 734 737, 764	S K199	裏	②21.△ ②9.5△	内部から直線的に外上方へのびる环状。	内腹タケヘラミガキ。环部内腹ヨコハタケ。底面内腹ハタケナダ。底部と腹部を各に作っており、底部側の腹内は漆工道具による跡が施されている。环部側後腹部には粘土を勧り上げている。	砂粒	良好	内外面淡褐色
Po76 109 32	112, 645 737	S K209	高环	①26.2△ ②9.6△	环部と底部との境界に窓をもつ。時折は青藍緑のもので、口縁部は外反状態となる。口縁部は中腹部をもつ。	外腹タケヘラミガキ。环部内腹ヨコハタケ。底面内腹ハタケナダ。底部と腹部を各に作っており、底部側の腹内は漆工道具による跡が施されている。环部側後腹部には粘土を勧り上げている。	石灰、辰石 を含む	良好	内外面淡褐色 SK209と接合
Po77 106	735	S K295	裏	①15.8△ ③1.9△	口縁部は内側し、上下に拡張する。外側に1条の凹線を施す。	口縁部内外面コヨナダ。翼部外腹面にヨコナダ。内面ナナメカク。物部以下外腹面に方舟ヘラタケリ。	砂粒を含む	良好	内外面淡褐色
Po78 106	733, 735	S K295	底部	②11.6△ ④5.3	平底。	外腹タケヘラミガキ。内面ヘラタケリ。底面ナダ。内面ユビオサ。	砂粒を含む	良好	内外面淡褐色 一茶褐色 外腹淡褐色

挿表4 土器観察表(4)

透か番号 神社番号 図版番号	取上番号	出土位置	器種	法盤 (cm)	形態	手 法	胎 土	焼 成	色 调	備考
Po79 107	731, 732	S K206	甕	①14.0△ ②9.9△	口縁部は内傾し上下に弧張する。外周に2条の凹縫を施す。底部は両部がおり張らない。	口部部内外面コナゲ。脚部外側タハケ。下位タハクミガキ。内面ヨコ、ナナメハケ。中位タハクミガキ。底部へカゼリ。	1~2mmの石粒を多く含む	良好	内面灰褐色。 外面淡褐色 →明褐色	黒帯有
Po80 107 33	349	S K208	甕	①19.0△ ②19.3 ③23.0△ ④7.1	口縁部は内傾し上下に弧張する。外周に5条の凹縫を施す。底部に乳頭状突起がある。脚部は翼状が施る。平底。	口部部内外面コナゲ。脚部外側タハケ。下位タハクミガキ。内面ヨコ、ナナメハケ。中位タハクミガキ。底部へカゼリ。底面ナフ。	砂粒を含む	良好	内面灰褐色。 外面淡褐色 →明褐色	皿底有
Po81 107 32	712	S K211	高环	①25.7 ②10.2△	外縁はやや突出し外方への凹凸が強めである。脚部は内傾し、脚の上からも2条の凹縫を施す。底部は平底面をなす。上部平明部より下りた跡部の内側に残る2条の凹縫を施す。両端は太めで外周に7条の凹縫。その下に突起がみられる。	口部部内外面コナゲ。脚部外側タハケ。下位タハクミガキ。内面ヨコ、ナナメハケ。中位タハクミガキ。底部の一部にビビリサズ。高脚円筒状。	砂粒を含む	良好	内面灰褐色	黒帯有
Po82 107	708	S K212	甕	①14.7△ ②5.3△	口縁部は内傾し上下に弧張する。外周に2条の凹縫を施す。	口部部内外面コナゲ。脚部外側タハケ。	砂粒を含む	良好	内面灰褐色。 外面淡褐色	スス付有
Po83 107	829	S K213	甕	①14.7△ ②8.6△	口縁部は内傾し上下に弧張する。外周に2条の凹縫を施す。	口部部内外面コナゲ。脚部外側タハケ。	砂粒を含む	良好	内面灰褐色	内面スス付有
Po84 107 33	799	S K216	甕	①17.2 ②14.8 ③19.7 ④7.1	口縁部は内傾し上下に弧張する。外周に4条の凹縫を施す。底部は両部があり張らず両脚部形となる。平底。	口部部内外面コナゲ。脚部外側タハケ。下位タハクミガキ。内面ヨコ、ナナメハケ。	砂粒を含む	良好	内面灰褐色	スス付有。黒 斑有
Po85 107	895	S K220	甕	①15.0△ ②6.5△	口縁部は内傾し下方やや弧張される。外周に2条の凹縫を施す。	口部部内外面コナゲ。脚部外側タハケ。下位タハクミガキ。内面ヨコ、ナナメハケ後コヘラギサズ。	砂粒を含む	良好	内面灰褐色	
Po86 107 33	734	S K222	甕	①15.3△ ②11.9△	口縁部は内傾し下方に弧張する。外周に2条の凹縫を施すが、一部ナガリが施されている。底部は両部が厚くなる。	口部部内外面コナゲ。脚部外側タハケ。下位タハクミガキ。内面ヨコ、ナナメハケ。下位タハクミガキ。	砂粒を含む	良好	内面灰褐色 →朱褐色	
Po87 108	734	S K222	甕	①16.5△ ②6.5△	口縁部は内傾し下方に弧張する。外周に3条の凹縫を施す。	口部部内外面コナゲ。脚部外側タハケ。内面ヨコ、ナナメハケ。	砂粒を含む	良好	内面灰褐色	
Po88 108	734	S K222	灰陶	②5.3△ ③5.3	平底。	外縁タハレヒミガキ。内面ヘタケシリ。底面ユビサズ。	砂粒を含む	良好	内面灰褐色	黒帯有
Po89 108 33	218, 263 568, 597 795, 867	S K226	甕	①15.0 ②9.1 ③12.3 ④5.2	口縁部は内傾し上方に弧張する。外周に2条の凹縫を施す。底部は両部が張らず両脚部である。平底。	口部部内外面コナゲ。脚部外側タハケ。下位タハクミガキ。内面ヨコ、ナナメハケ。中位タハクミガキ。底面ナフ。内面ユビオサズ。	砂粒を含む	良好	内面灰褐色 →朱褐色 外周灰褐色 →朱褐色	スス付有。黒 斑有。S K25 と添合
Po90 108 33	768, 793	S K226	甕	①14.8 ②9.5 ③12.8 ④5.1	口縁部は内傾し上下に弧張する。外周に3条の凹縫を施す。	口部部内外面コナゲ。脚部外側タハケ。下位タハクミガキ。内面ヨコ、ナナメハケ。中位タハクミガキ。底面ナフ。内面ユビオサズ。	砂粒を含む	良好	内面灰褐色 外周灰褐色	2.火行有。同 属のK226と添 合有。S K23 と添合
Po91 108	796	S K226	甕	①14.7△ ②6.5△	口縁部は内傾し上方に弧張する。外周に3条の凹縫を施す。	口部部内外面コナゲ。脚部外側タハケ。下位タハクミガキ。内面ヨコ、ナナメハケ。中位タハクミガキ。底面ナフ。内面ユビオサズ。	砂粒を含む	良好	内面灰褐色	
Po92 108	799	S K226	灰陶	②3.2△ ③5.8△	平底。底面の脚部は底面に靠る。	外縁タハレヒミガキ。内面ヘタケシリ。	砂粒を含む	良好	内面灰褐色 →朱褐色	
Po93 108 33	S K228	脚部			外縁に2条のヘタクミガキを施す脚部。	内外面コナゲ。内面ヘタケシリ。	1~3mmの石粒を含む	良好	内面灰褐色 外周灰褐色	黒帯有
Po94 108	785	S K235	甕	①17.8△ ②13.4△	口縁部は内傾し上下に弧張する。外周に3条の凹縫を施す。底部に乳頭状突起がある。	内外面コナゲ。	砂粒を含む	良好	内面灰褐色 外周灰褐色 →明褐色	
Po95 109	787	S K237	甕	②3.3△	底を立てる複合口縁。外周に具鉢部間に平行な縫合を施す。両脚部外縁には具鉢部間に斜引縫合がある。	外縁タハケ。内面ヘタクミガキ。	石英、長石 を多く含む	良好	内面灰褐色 外周灰褐色	スス付有
Po96 108 33	774	S K237	底部	②6.6△ ③8.4	しっかりと立てる平底。底面に脚部間に斜引縫合による斜引溝がある。	内面底外側コナゲ。脚部以降内方向へカゼリ。	砂粒を含む	良好	内面灰褐色 外周灰褐色	黒帯有
Po97 109 31	787	S K238	甕	①16.1△ ②4.4△	底を立てる複合口縁。口縁部は丸くめる。底面は横に筋出せ。外周に脚部に斜引縫合がある。	口縁部内外面コナゲ。脚部以下内方向へカゼリ。	砂粒を含む	良好	内面灰褐色 外周灰褐色 →朱褐色	スス付有。黒 斑有

摺表4 土器観察表(5)

遺物番号 周辺番号	収上番号	出土位置	器種	法量(cm)	形 態	層	手 法	胎 上	素 成 色 調	備 考
Pu08 108 36	770	SK239	底部	Q2.2△ (Q6.5cm)	平底。		外縁タケヘラミガキ。内面ヘラ タケリ。底面ナメ。	石英、黑鐵 母を含む	良好 内面黒褐色 外面灰褐色	ス付青
Pu09 108	776	SK242	底部	Q2.17.△ (Q6.5cm)	平底。		外縁タケヘラミガキ。内面ヘラ タケリ。底面ナメ。内面ヒビオサ。	砂粒を含む	良好 内面灰 外面灰褐色	ス付青
Pu100 108	863	SK247	底部	Q2.5.4△ (Q6.6cm)	平底。		外縁タケヘラミガキ。底面ナメ。 内面ヘラタケリ。	砂粒を含む	良好 内面灰 外面灰褐色	ス付青
Pu101 109	866	SK252	裏	Q3.8△	複合口縁。外面に斜線平行比縫 を施す。裏部の棱に下する。		口縁部内面ヨコナギ。口縁部内 面ヨコヒラミガキ。底部以下内 面が左向かタケリ。	砂粒を含む	良好 内面灰 外面灰褐色	ス付青
Pu102 109 33	867	SK252	裏	Q17.0△ Q27.5	はん倒立する複化した複合口縁。 口縁部は外側に内折し、上部 が平底面をもつ。扁曲形の棱は 第1と2つ目みられ、その際には、 2つの棱間に2つの凹部により間か る部は底盤の跡形をなす。		口縁部内面ヨコナギ。斜面外 面不規則ハナメ。内面不規則 ハナメタケリ。底部ヒビオサ。 斜面外側2カ所に側坑がある。	砂粒を含む	良好 内面灰 外面灰褐色	ス付青
Pu103 108	815	SK253	裏	Q18.8△ Q3.4△	口縁部は内折し下に弧度す る。外面に2条の凹部をもつ。 その間に2つの凹部があり、裏部には斜め柱突 がみだる。		外縁ヨコナギ。	砂粒を含む	良好 内面灰 外面灰褐色	
Pu104 108	899	SK254	裏	Q11.2 Q22.5 Q32.0 Q46.2△	1.口縁部は内折し上方に弧度す る。外側に凹部をもつ。斜面外 面がめぐらしく凹部がある。斜面 は平底。		口縁部内面ヨコナギ。斜面外 面ヨコナメ。下底タケヘラミガ キ。内面ヨコナギ。下位ヘラタ ケリ。底面ナメ。内面ヒビオサ	砂粒を含む	良好 内面灰 外面灰褐色	ス付青
Pu105 109 39	818	SK256	裏	Q14.5△ Q4.9△	片側をもつ口縁。口縁部は やや平坦化をなし、内側にま ずかに肥厚する。裏部の棱は 2条方向に突出し、その上に2 条の凹部がある。		口縁部内面ヨコナギ。斜面内 面ヨコナギ。	石英、黑鐵 母を含む	良好 内面灰 外面灰褐色	ス付青
Pu106 109 33	782, 799 843	SK257	裏	Q16.6△ Q27.5△ Q35.1	はん倒立する複化した複合口縁。 口縁部は上部が内折しない 河原形がめぐる。裏部の棱は2 つともみ出される。四部の凹部 をもつ。		1.口縁部内面ヨコナギ。斜面外 面ヨコナギ。下底タケヘラミガ キ。内面ヒビオサ。	鐵	良好 内面灰 外面灰褐色	内外灰 外付青
Pu107 108	905	SK259	裏	Q11.7△ Q6.0△	口縁部は内折し上下に弧度す る。外面に3条の凹部をもつ。		1.口縁部内面ヨコナギ。斜面外 面ヨコナギ。内面ヨコナメハ ナ。	石英を含む	良好 内面灰 外面灰褐色	ス付青
Pu108 108	873	SK259	裏	Q14.8△ Q2.8△	口縁部は内折し上下に弧度す る。外面に1条の凹部をもつ。		1.口縁部内面ヨコナギ。	鐵	良好 内面灰 外面灰褐色	ス付青
Pu109 109	845	SK294	底部	Q10.3△ Q6.1△	片側をもつ口縁片。		外縁ヨコナギ。内面一部ヨコヘ ラミガキ。	粗砂粒を含む	良好 内面灰 外面灰褐色	外赤褐色 周辺の 可能性有
Pu110 110	639	SK421	裏	Q10.3△ Q3.1△	やや内面灰褐色に開き、口縁部は めぐらしく肥厚する。		内面ヨコナギ。	鐵	良好 内面灰 外付青	
Pu111 110 34	649	SK421	裏	Q3.8△ Q1.5△ Q0.0△	平面から外折して立ち上がり、 口縁部を丸くおさめる。		表面に凹切り減らされる が、全体が風化のため剥離不明。	鐵	良好 内面灰 外付青	
Pu112 110 34	639	SK421	耳	Q2.5△ (Q7.3cm)	下底から内面無に立ち上がる。		表面削除され、その他の風化 のため剥離不明。	鐵	良好 内面灰 外付青	
Pu113 110	641	S K421	底部	Q1.1△ (Q7.8cm)	平底。耳の底板と思われる。		表面削除あり。	鐵	良好 内面灰 外付青	
Pu114 110 34	146	SD01	裏	Q15.8△ Q7.1△	透視状の体形。		複化したため調査不明。	砂粒を含む	良好 内面灰 外付青	斑斑有
Pu115 110	343	SD01	底部	Q2.0△ (Q5.0cm)	平底。		風化のため調査不明。	砂粒を含む	良好 内面灰 外付青	斑斑有
Pu116 110	193	SD02	裏	Q11.0△ Q2.2△	口縁部は内折し上下に弧度す る。外面に2条の凹部をもつ。		1.口縁部内面ヨコナギ。	粗砂粒を含 む	良好 内面灰 外付青	
Pu117 110 33	32	SD03	裏	Q11.5△ Q21.2△	「！」の字に特に尾に尾する口縁。 表面は丸くおさめる。底面は圓 形がめぐらしく斜面がなす。		口縁部内面ヨコナギ。斜面外 面ヨコナギ。下底タケヘラミガ キ。内面上部ナメタケ後ナメナ ダ。下位ヘラタケリ。	粗砂粒を含 む	良好 内面灰 外付青	ス付青
Pu118 110 34	185	SD64	背面部	Q3.5△	外反する頸部。外面に少なくと 4条の凹部をもつ。		外縁風化のため窓蓋不明。内面 ハラタケリ。	I ~ 4 cm の 石英を含む	良好 内面灰 外付青	
Pu119 110	352	SD64	裏	Q14.6△ (Q8.2cm)	口縁部は内折し上下にやや鼓張 する。外面に2条の凹部をもつ。		口縁部内面ヨコナギ。斜面内 面ヨコナギ。ナメハナ。	砂粒を含む	良好 内面灰 外付青	

插表4 土器観察表(6)

遺物番号 機器番号 試験番号	取上番号	出土位置	若 種	法値(cm)	形 態	手 法	鉱 土	焼 成 色	調 理 等	
Po120 110 34	40	SD04	米	①11.9cm ②7.2cm	口縁部は内側し下に弧度がある。外側に3条の溝跡を有す。	口縁部外側ヨコナデ。他は風化のため倒壊不明。	石英、長石を含む	良好	内外面淡褐色へ焼褐色	スス付着
Po121 110 34	191	SD04	米	①14.8cm ②3.1cm	口縁部は内側し下に弧度がある。外側に3条の溝跡を有す。	内外面ヨコナデ。	砂粒を含む	良好	内外面淡褐色	
Po122 110 34	359	SD04	米	①21.8cm ②3.1cm	口縁部は内側し下に弧度がある。外側に3条の溝跡を有す。	内外面ヨコナデ。	石英を含む	良好	内部淡褐色、外壁焼褐色	スス付着
Po123 110 34	175	SD04	米	①15.1cm ②5.2cm	やや外側する複合1縁。口縁部は丸く見える。底部の縁は力でへつて凹入する。外側に3条の溝跡を有す。	口縁部内外面ヨコナデ。	1~2mmの石英を多く含む	良好	内部淡褐色、外壁焼褐色	スス付着
Po124 110 34	187	SD04	馬鈴	②4.5cm ④7.2	しっかりした平底。	風化のため開裂不明。	1~3mmの石英、長石を含む	良好	内部淡褐色、外壁焼褐色	黒帯有
Po125 110 34		SD04	馬鈴	②3.9cm ③5.8cm	平底。	外側タテヘウミガキ。内面ハラカズリ。底面ナメ。内面ユビオチム。	砂粒を含む	良好	内外面淡褐色	内外面スス付着、黒帯有
Po126 110 34	203	SD06			突出文十唇の口縁をか。	外曲にハラミガキがわざかにみられるが、風化により調査不明。	1~3mmの石英を多く含む	良好	内外面淡褐色	
Po127 111	480	SD06	低脚杯	②2.8cm ③5.3cm	「ハ」の字形に低く聞く断面。	風化のため調査不明。	石英、雲母を含む	良好	内外面淡褐色	
Po128 111 34	695	SD08	度	①15.8cm ②6.1cm	やや外側する複合1縁。口縁部は上部が平坦面をなす。底部の縁は力でへつて凹入される。	内外面ヨコナデ。	砂粒を含む	良好	内外面淡褐色	
Po129 111	758	SD08	度	①15.8cm ②3.5cm	口縁部内側に外傾する「く」の字状凹縁。口縁部の縁は外側にむかって扁平界へ平底界になす。	口縁部内外面ヨコナデ。頭部内側右方にヘラクシリ。	砂粒を含む	良好	内外面淡褐色	
Po130 111 34	699	SD08	度	②25.7cm ②20.7cm	外側する「く」の字状凹縁。口縁部の縁は内側に厚底界。	口縁部内外面ヨコナデ。頭部内側左方にヘラクシリ。	石英、長石を含む	良好	内部淡褐色、外壁焼褐色	
Po131 111	894	SD08	高环	①35.4cm ②30.4cm	低い形状の環状。	内外面ヨコナデ。	砂粒を含む	良好	内部灰褐色の外壁淡褐色	
Po132 111	688	SD08	高环	②5.3cm	直錐形に外上方へのびる环部。	外側にハケメが見られるが、風化のため調査不明。	砂粒を含む	良好	内部明褐色の外壁淡褐色	
Po133 111	664	SD09	度	①35.4cm ②3.5cm	やや内部底部に直すする複合1縁。口縁部は丸く見える。底部はつまみ出でて、底部にさきめめる。周辺部の縁は水平方向にみずからつまみ出される。	調整不明。	1~2mmの石英を含む	良好	内外面淡褐色	
Po134 111 34	679	SD09	度	①27.2cm ②7.5cm	筋隔後内側する複合1縁。口縁部はつまみ出でて、底部にさきめめる。周辺部の縁は水平方向にみずからつまみ出される。	口縁部内外面ヨコナデ。頭部内側右方にヘラクシリ。	砂粒を含む	良好	内外面淡褐色	
Po135 111 34	331	SD09	度	①22.8cm ②5.4cm	直錐する複合1縁。口縁部は水平面をなす。底部の縁は水平方向にみずからつまみ出される。	内外面ヨコナデ。	1mm程度の石英を多く含む	良好	内外面淡褐色	
Po136 111	551	SD09	度	②3.6cm	外側する複合口縁。周辺部の縁は水平方向に突出する。	内外面ヨコナデ。	砂粒を含む	良好	内外面淡褐色	
Po137 111	672	SD09	低脚部	②7.2cm	細めの底部。	底部内側凹りおよび左方向へカクシリ。他風化のため調査不明。	1~2mmの石英を含む	良好	内外面淡褐色	
Po138 111	750	SD09	低脚部	②6.8cm	細めの底部。3ヶ所に円形の透かしを入れるものと思われる。	内面凹りおよび左方向へカクシリ。他風化のため調査不明。	砂粒を含む	良好	内外面淡褐色	
Po139 111	753	SD08	度	①14.8cm ②0.6cm	やや内部底部に外側する「く」の字状凹縁。	口縁部内外面ヨコナデ。頭部内側右方にヘラクシリ。	石英を含む	良好	内外面淡褐色	SD09と接合
Po140 112 34	702	SD06	突出文十唇片		突出文十唇片。	内外面とも風化により調査不明。	砂粒を含む	良好	内外面淡褐色	
Po141 111	704	SD06	底部	②3.6 ③8.4cm	台付の底部状となる平底。	内外面ナデ。	砂粒を含む	良好	内部灰褐色の外壁淡褐色	

挿表4 土器觀察表(7)

測量番号 標本番号 回収番号	取上げ年 出土位置	都 種	法量(cm)	形 態	手 法	胎 土	焼 成 色	調 檢
Po142 111 34	628 4 区 B-16 Pit. 42	盤	①19.3cm ②0.8cm	底縁的に開く口縁部。口縁部は内側を上へつまみあがめようにして、むきに肥厚させた。	内外面ヨコナデ。	繊維	良好	内外側灰白色
Po143 111 34	494 4 区 D-26 Pit. 8	瓦質土鍋	①26.9cm ②0.4cm	外側する縁部から、左右にやや肥厚する1箇所に限る。口縁部は内側を上へつまみあがめようとして、むきに肥厚させた。	口部頭内面ヨコナデ。胴部外 面ユビロサエ。内面ヨコナデ。	繊維	良好	内外側灰白色
Po144 111 34	634 4 区 B-15 Pit. 2	皿	①7.8cm ②0.4 ③0.3cm	平底から外傾して立ち上がり、口縁部を丸くおさめる。	内外面ヨコナデ。底面圓板系切 り。	砂粒を含む	良好	内外側灰白色
Po145 111	635 4 区 B-16 Pit. 24	皿	①8.3cm ②0.8 ③0.4cm	平底からやや内側弧形に立ち上 がり、口縁部はまみ出すよ うにしておりめる。	内外面ヨコナデ。底面圓板系切 り。	砂粒を含む	良好	内外側明褐色
Po146 111 34	636 4 区 B-16 Pit. 58	皿	①8.0cm ②0.8 ③0.8cm	平底からやや内側弧形に立ち上 がり、口縁部は丸くおさめる。	内外面ヨコナデ。底面圓板系切 り板がむかずにみられる。	砂粒を含む	良好	内外側明褐色
Po147 111	426 4 区 C-17 Pit. 9	皿	①7.8cm ②0.5 ③0.6cm	平底から外傾して立ち上がり、 口縁部を丸くおさめる。	内外面ヨコナデ。底面圓板系切 り。	砂粒を含む	やや不良	内外側灰白色
Po148 111	525 4 区 C-22 Pit. 23	皿	①9.3 ②1.5 ③0.7cm	平底からやや内側弧形に立ち上 がり、口縁部を丸くおさめる。	内外面ヨコナデ。底面圓板系切 り。	砂粒を含む	良好	内外側明褐色
Po149 111	363 4 区 Pit. 1	皿	①1.3cm ④0.8cm	平底。	内外面ヨコナデ。底面圓板系切 り。	砂粒を含む	良好	内外側灰白色
Po150 111	632 4 区 C-22 Pit. 8	碗	①9.7cm ④7.7cm	平底。	底面圓板系切り。	細砂粒を含む	良好	内外側灰白色
Po151 112 34	454 4 区 陶文土片			底部に相当すると思われる。外 面に複数の幅広の凹溝を残す。	整理不明。	1~3mmの 石片を含む	良好	内外側灰白色
Po152 112	18 2 区	盤	②2.7cm ④11.1cm	しっかりした平底。	外縁。底面にヘラマガキ痕。内 面にラグマキ。全体に風化のた め調整がはっきりしない。	砂粒を含む	良好	内外側青灰色
Po153 112 34	2. 5 2 区	盤	①15.0cm ②5.2cm	「く」の字形に屈曲する1箇 所。	口縁部の外縁ヨコナデ。脚部外 面ヨコナデ。内面ヨコラミガキ 痕。	細砂粒を含む	良好	内外側灰白色
Po154 112 34	5 2 区	盤	①15.0cm ②6.6cm	底部は「く」の字形に屈曲し、 口縁部の上端をつまみあげるよ うにしておりめる。	口縁部内外面ヨコナデ。脚部外 面ヨコタハタ。内面ナメハケ。	細砂粒を含む	良好	内外側灰白色
Po155 112	412 2 区	盤	①15.8cm ②24.6cm ③9.7cm	口縁部は内傾し下に張出す る。外縁に3条の凹溝を施す。 底部は円錐形で張らない。	口縁部内外ヨコナデ。脚部外 面ヨコタハタ。内面ヨコラミガキ 痕。脚部内面ヨコタハタ。下位ヘラケ ズリ。	繊維	良好	内外側灰白色
Po156 112	27, 289 2 区 A-8	盤	①14.5cm ②11.2cm	口縁部は内傾し下に張出す る。外縁に3条の凹溝を施す。 脚部は円錐形で張らない。	口縁部内外ヨコナデ。脚部外 面ヨコタハタ。内面ヨコラミガキ 痕。以下ナメハケ。下位ヘラケ ズリ。	砂粒を含む	良好	内外側灰白色
Po157 112	374 2 区 A-10	盤	①14.8cm ②6.5cm	口縁部は内傾し下に張出す る。外縁に2条の凹溝を施す。	口縁部内外ヨコナデ。脚部外 面ヨコタハタ。内面ナメハケ。	砂粒を含む	良好	内外側明褐色
Po158 112	5 2 区	盤	①14.4cm ②6.2cm	口縁部は内傾し下に張出す る。外縁に3条の凹溝を施す。	口縁部内外ヨコナデ。脚部外 面ヨコタハタ。内面ナメハケ。	砂粒を含む	良好	内外側明褐色
Po159 112	895 2 区 A-10	盤	①14.4cm ②4.9cm	口縁部は内傾し下に張出す る。外縁に2条の凹溝を施す。 ナメ跡がある。	口縁部内外ヨコナデ。脚部外 面ヨコタハタ。内面ナメハケ。	砂粒を含む	良好	内外側明褐色
Po160 112	96 2 区 A-10	盤	①15.6cm ②3.5cm	口縁部は内傾し下に張出す る。外縁に2条の凹溝を施す。 ナメ跡がある。	口縁部内外ヨコナデ。	石灰、更は 石英を含む	良好	内外側灰白色
Po161 112	104 2 区 A-11	盤	①12.8cm ②3.6cm	口縁部は内傾し下に張出す る。外縁に2条の凹溝を施す。	口縁部内外ヨコナデ。	細砂粒を含 む	良好	内外側青 灰白色
Po162 112	105 2 区 A-11	盤	①12.6cm ②2.1cm	口縁部は内傾し下に張出す る。外縁に4条の凹溝を施す。	内外面ヨコナデ。内面屈曲部に ヨコラミガキ。	石英、黑曜 石を含む	良好	内外側灰 灰白色
Po163 112	57 2 区 A-10-11	盤	①1.9cm ④0.8cm	平底。	内面ヨコタハタ。内面ナメハ ケ。	砂粒を含む	良好	スス付器
Po164 112	294 2 区	碗	①4.0cm ④0.5cm	平底。	内面にヘラケズリがみられるが、 全体に風化のため調整不明。	1~3mmの 石片を多く 含む	良好	内外側明 灰白色

挿表4 土器観察表(8)

遺物番号 神奈川県立 歴史博物館 蔵番号	取上番号	出土位置	基　種	法量(cm)	形　態	手　法	施　工	焼　成	色　調	備　考
Po165 112	88	2区 A10	遮断	②4.0△ ⑤5.9△	平底。	外面タテヘラミガキ。内面ヘラ ケツリ。底面アマナ。内面ヒビオ サエ。	砂鉄を含む	良好	内面灰 色。外端 黄褐色	無斑有
Po166 112	320	2区	底部	②4.0△ ⑤5.8△	平底。	外面タテヘラミガキ。内面ヘラ ケツリ。底面アマナ。内面ヒビオ サエ。	施青	良好	内面灰 色	内外面スベ付 有
Po167 112	79	2区 A11	底部	②2.6△ ⑤6.4△	平底。	調査不明。	砂鉄を含む	良好	内面淡黃 褐色。外 端灰褐色	
Po168 112	8	2区	底部	③1.1△ ⑤6.5△	台付の底部。	内外面ヨコナギ。	砂鉄を含む	良好	内面暗黃 褐色。外 端灰褐色	スベ付有
Po169 113	37	2区 C11	裏	①17.4△ ②12.6△	片持ちする複合口縁。口沿部斜 入。内側に2本の伏掛を施してい る。外側に偏振平行弦 縫を施す。	内外面ヨコナギ。	石英を含む	良好	外付塗 繪白	スベ付有
Po170 113	893	2区	高脚	①17.1△ ③3.4△	浅い腹状をなす有段の坪部。	内外面ヨコナギ。	細砂粒を含 む	良好	内付塗 绘白 一赤褐色	赤色並彩
Po171 113	7.27	2区	脚	②3.7△ ⑤17.3△	脚部は外側に上し下に抵する。 脚部3本の伏掛を施していた と思われるが、風化のために1本 ははつらくなっている。	風化のため調査不明。	砂鉄を多く 含む	良好	内付塗 绘白	
Po172 113 34	291	4区	小型蓋	①9.3 ②9.5△ ③16.2	やや外付突出部に上へへのり口 縁。口縁部にはこみ出さう に見える。脚部は外側に上 し下に抵する。脚部は外側に上 し下に抵すると思われる。	口縫部。脚部外側タテハケ。脚 部中辺コハハ。丁度ナギ。口 縁部内側ヨコナギ。脚部内側ヘ ラケツリ。底面アマナ。内面ヒビ オサエ。	石英を含む	良好	内付塗 绘白 一淡 灰褐色	無斑有
Po173 113 35	546	2区 A11	裏	①15.1△ ②16.3△	外付する複合口縁。脚部は 外側に上し下に抵する。脚部 は外側に上し下に抵する。 脚部は外側に上し下に抵する。 脚部は外側に上し下に抵する。	口縫部外側および脚部外側ヨ コナギ。脚部内側ヘラケツリ。 底面内側下部は水半方方向 に突出する。脚部は外側に上 し下に抵する。脚部は外側に上 し下に抵する。	1-3mmの 石英を含む	良好	内付塗 绘白 一茶 褐色	スベ付有。無 斑有
Po174 113	145	2区 A11	底	①19.2△ ②6.9△	外付する複合口縁。口縫部は 外側に上し下に抵する。	内外面ヨコナギ。脚部内側ヘラ ケツリ。	石英、黑雲 母を含む	良好	内付塗 绘白	
Po175 113	128, 145	2区 A11	底	①14.4△ ②5.5△	やや外付突出部に外付する複合 口縁。1脚部は外側にわち子に 伏掛する。脚部は外側に上 し下に抵する。	口縫部内外面ヨコナギ。脚部内 側右方側ヘラケツリ。	細砂粒を含 む	良好	内付塗 绘白	
Po176 113	132	2区 A11	裏	①13.3 ②4.1△	外付する複合口縁。1脚部は わち子に平面をなす。脚部は 外側に上し下に抵する。	内外面ヨコナギ。	石英を含む	良好	内付塗 绘白 一外 端暗褐色	スベ付有
Po177 113	108	2区 A11	裏	①13.7△ ②3.7△	外付する複合口縁。脚部は 外側に上し下に抵する。	内外面ヨコナギ。	細砂粒を含 む	良好	内付塗 绘白	スベ付有
Po178 113	129	2区 A11	底	①15.6△ ②5.9△	やや内溝する「く」字状口縁。	1脚部内外面ヨコナギ。脚部外 側ナギ。内面ヘラケツリ。	施青	良好	内付塗 绘白	
Po179 113	137	2区 A11	溝部	①16.7△ ②2.3△	内面し口縫部はやや堅厚削製 ににくくおめる。	内外面ナギ。	石英を含む	良好	内付塗 绘白	
Po180 113	374, 375	4区 D-22	高脚	②7.2△	施青にのげる坪底部。	風化のため調査不明。	砂鉄を含む	良好	内付塗 绘白 一外 端淡 褐色	
Po181 113	291	4区	高脚	②3.4△	施青の坪底部。	風化のため調査不明。	石英を含む	良好	内付塗 绘白	
Po182 113	373	4区 D-23	高脚	②2.5△	坪底部。	風化のため調査不明。	砂鉄を含む	良好	内付塗 绘白	
Po183 113	246	2区 A 9	底部 外	①11.4△ ②4.9△	内面しながら立ち上がり。口縁 部は外上方へこみ出さよう にして丸くおきめる。	内外面ヨコナギ。底面ヘタ切り 施青ナギ。	施青	やや不良	内付塗 绘白	
Po184 113	830	2区	底部 外	①16.4△ ②5.8△	内面する脚部に加え直立する口 縁部。1脚部は内側に脚部をも つ外側に丸く凹凸がみられる。	内外面ヨコナギ。	施青	良好	内付塗 绘白	
Po185 113	156	1区 B14-15	底部 外	①14.9△ ②2.8△	内面し、口縫部を丸くおきめ る坪底部。	内外面ヨコナギ。	施青	良好	内付塗 绘白	
Po186 113 35	399	4区 D-22	底部 外	②3.1△ ②7.8△	やや横状底部の底面に「ハ」の 字状に開く高台を貼り付け る。	外付ヨコナギ。内面ナギ。	施青	良好	内付塗 绘白	
Po187 113	219	2区 D11	底部片			外付格子状タキヨ。内面ナギ。	石英を含む	良好	内付塗 绘白	

表4 土器概観表(9)

遺物番号 群番号 個別番号	取上番号	出土位置	基種	法規(cm)	形 感	手 法	胎 土	燒 成	色 調	備 考
Po188 113	334		陶器片		外周格子状タキ口。内面トア。	織密	良好	内外面青灰色		
Po189 113 35	291	4 区	唇	①20.2cm ②4.3△	盛立する切い口縁。肩部は張る。 薄唇形。	内外面ヨコナデ。	織密	良好	内外面青灰色 外面褐色	自然抽苔
Po190 114 35	296	4 区	底裏背芯部	①6.5△ ④13.6cm	しっかりした底部。腹面はやや内肉丸味に打ち上がる。	内外面ヨコナデ。底面ヘラクス 縁によるナデ。	織密	やや不良	内外面灰色	
Po191 114	296	4 区	土鍋	①30.0cm ②7.0△	内寄する側部から外傾し、輪郭を外に引き出さないようにしておきめる。 口縁部にコブ。	外周ナデ。ユビオサエ。内面ト アによるナデ。	織密	良好	内面明青 灰色。外 面褐色	ス付青 褐色
Po192 114	493	4 区 D 26	瓦蓋体	①6.7cm ②2.2△	口縁部は張り干されることにより上端が凹状になし、やや肥厚する。	内外面ヨコナデ。	織密	良好	内外面青 灰色	
Po193 114	762	4 区 D 18	片	①19.9cm ②9.5 ③6.6cm	平底からやや内面青灰色に立ち上り、口縁部を丸くおきめる。	内外面ヨコナデ。底面凹凸切 り。	織密	良好	内外面青 灰色	
Po194 114	492	4 区 D 29	皿	①8.6cm ②3.2 ③6.2	中央に盛り上がる底面から外上方に立ち上り、口縁部を丸くおきめる。	内外面ヨコナデ。底面凹凸切 り。	砂粒を含む	良好	内外面淡 褐色	
Po195 114	296	4 区	底部	②17.8cm ④7.6	平底。	底面凹凸切り。内面ナデ。	織密	良好	内外面青 灰色	
Po196 114 35	14	1 区	下瓦		施香作による。	凸面ナデ。一部ヘラケズリ。凹 面部分。	砂粒を含む	良好	内外面青 灰色	
Po197 114	19	3 区	破片	②4.1△	水平方向にタガを突出させる円 筒切妻の一部。	黒化したため調整不確。	石英を含む	良好	内外面淡 褐色	
Po198 114 35	228	2 区 D11	土縛	④△ 8 ②1.2 ③0.4	ややいびつな筋縫形。	ナデ。				
Po199 114 35	323	4 区	土縛	④△ 7 ②1.4 ③0.5	ややいびつな筋縫形。	ナデ。				
Po200 114 35	328	3 区	土縛	④△ 5.6 ②1.1 ③0.4	ほほん柱形。	ナデ。				
Po201 114 35	221	2 区 D11	土縛	④△ 1 ②0.9 ③0.4	ややいびつな筋縫形。	ナデ。				
Po202 114 35	138	2 区	土縛	③△ 6 ②0.9 ③0.3	いびつな円柱形。	ナデ。				
Po203 114 - 35	404	4 区 E 22	土縛	④△ 4 ②0.4 ③0.5	幼稚形。	ナデ。				
Po204 114 - 35		4 区 E 23	不明土製品	④△ 3.8	円形の粘土板に粘土縁を貼り付 けたつまみ状の製品。	ナデ。	織密	良好	内外面 淡褐色	
Po205 115 - 35	456	4 区	白磁瓶	②△ 3.5 ④△ 9.9	高台を持つ。中国製。	織密	良好	内外面乳 白色		
Po206 115 - 35, 36		4 区	青磁皿	①△ 19.6cm ②△ 3.5	見込みに墨描文がみられる青磁 高台の皿。	織密	良好	内外面淡 灰色		
Po207 115 - 35	467	4 区 E - 22	青磁碗	①△ 14.6cm ②△ 9.6	開口する口縁部。中国製。	織密	良好	内外面淡 灰色		
Po208 115 - 35	227	2 区 C11	白磁皿	①△ 12.4 ②△ 6.6△	端部を丸くおきめる口縁部。	織密	良好	内外面乳 白色		
Po209 115 - 35, 36	439	2 区	盤	①△ 5.6 ②△ 5.5	明代の青花。高台部を扭り出 している。	織密	良好	内外面乳 白色		
Po210 115 - 35	328	3 区	碗	①△ 7.6 ④△ 6	唐津の鍋医碗。	織密	良好	内外面淡 褐色		
Po211 115 - 35	218	2 区 D11	碗	①△ 9.6 ④△ 4.4	内澤の鍋医碗。	織密	良好	内外面淡 褐色		
Po212 115 - 35	439	2 区	皿	①△ 11.4cm ②△ 2.5△	輪郭部を丸くおきせる口縁部。内 面に色々な模様を施す。伊万里 窯。	織密	良好	内外面淡 褐色		
Po213 115 - 35	761	4 区 D - 23	皿	②△ 6.5 ④△ 6.6	内面に染付を施した底部。伊万里 窯。	織密	良好	内外面乳 白色		
Po214 115 - 35	328	3 区	碗	②△ 6.6 ④△ 2.7cm	青色の染付を施した碗。伊万里 窯。					
Po215 115 - 35	328	3 区	伝磁器	②△ 4.7△ ③△ 8.8	青色の染付を施した脚の付く杯。 伊万里窯。	織密	良好	内外面乳 白色		
Po216 115 - 35	354		杯	①△ 6.5 ③△ 5.5	青色の染付を施した杯。伊万里 窯。	織密	良好	内外面乳 白色		

插表 4 土器観察表 (10)・土製品・陶磁器観察表

遺物番号	標印番号	出土位置	器種	法量(cm)	形	場	手	法	鉄	土	鐵	成	色	圖	備考
Po217 116 37	934	SK561	陶器 表面凹	①8.1cm ②1.8 ③0.8	口縁部は尖りぎみに丸くおきまる。立ちあがりは先端部を深く。底面は突出ぎみの平底。	口縁部外側から内面全体に輪状。外ヨコナザ。	磨	良好	内側青白色。 外側灰色。						
Po218 116 37	929	SD41	陶文土器片	⑥厚さ 6.7	外面上に2条の凸縁を施す胸部片。	風化のため調整不明。	1~3mmの 石片、1mm の砂粒を含む	良好	内側青白色。 褐色。						
Po219 116 37	931	SD42	陶文土器口 蓋部	⑤厚さ 6.7	外面上に幅1cmの2条の凸縁。内側 に1条の凸縁を施す口部片。	風化のため調整不明。	0.5~1.5mm の砂粒を多 く含む	良好	内側青白色。						
Po220 116 37	934	SD42	陶文土器口 蓋部	⑤厚さ 6.6	外面上に凸縁を施す内側する口部 片。	風化のため調整不明。	1~3mmの 石片を含む	良好	内側青白色。 褐色。						
Po221 116 37	933	5区 A-26	底部	②6.6△ ④8.8	平底。	外面上ビオラエ後ナズ。内側調 整不明。	1~2mmの 砂粒を含む	やや不良	内側黄褐色。 外側 黒褐色。						
Po222 116 37	918	3区	底裏器片			内面同心円文タキタキ。	底面	良好	内側青 灰色。						
Po223 116 37	916	5区	底裏器片			内面タキタキナズ。	外側格子状 タキタキ。	底面	良好	内側青 灰色。					
Po224 116 37	915	5区	瓦質器片			内面ハケ目。	外側格子状タキタキ。	底面	やや不良	内側青 褐色。					

插表4 土器觀察表(II)

遺物番号	標印番号	同類番号	出土位置	収上番号	全長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	形	場	時	期	備
W 1	118	39	SK14	280	106.5	4.5~4.7	2.3~4.9	先端部を両側から削り、平面面をつくり薄く仕上げる。それ以外の加工は明瞭でなく、ところどころ表面が残存する。基部付近では曲面が目立つ。		—	株式製品	
W 2	129	40	SK19	710	24.6	2.2	2.2	端部を切削したまででは片面加工する。表面は盤円形である。		弥生時代	柄	
W 3	120	SK32	616	37.2	2.3~4.0	1.1		両面加工で、両側端部を薄く仕上げる。先端部では幅は大きくなりなくなる。		弥生時代	木製品	
W 4	123	40	SK35	617	89.8	5.9	5.9	先端部が尖る。基部付近に一部剥離がある。ところどころ表面が残存する。		弥生時代中期	杭	
W 5	130	40	SK35	772	34.0	2.6~3.4	2.1~3.1	端部を側面から削り仕上げる。断面は盤円形である。柄である。		弥生時代中期	柄	
W 6	118	39	SK47	369~564	129.8	5.6~6.9	3.0~5.4	先端部を両側から削り、平面面をくり、薄く仕上げる。先端部では幅は大きくなる。		弥生時代中期	株状木製品	
W 7	121	40	SK50	747	52.7	3.0~5.1	0.9~3.9	先端部を両側から削り、片側ナット状に仕上げ、基部はやや削り加工する。先端部は丸く仕上げる。		弥生時代中期	株状木製品	
W 8	121	40	SK53	277	41.0	7.1	6.7	基部をこげた断面状に削り出す。基部付近を両側から削り込む。先端部を比較的細く仕上げる。		—	木製品	
W 9	117	39	SK116	348	126.0	4.2~6.4	4.2~5.3	両端部を丸く仕上げ、側面は削り加工する。全圓丁寧に仕上げる。		弥生時代中期	堅所	
W 10	122	SK116	349	69.0	1.1~1.4	0.5~0.8		全面を加工し、断面はほぼ長方形である。端部は欠損する。		弥生時代中期	内村	
W 11	125	38	SK112	762	22.9	1.3~1.6	0.4	両面加工で全面を丁寧に仕上げる。丁寧に仕上げた間に彩色を施す。様子は円錐形の壺などによく見られる。		弥生時代中期	彩色状木製品	
W 12	123	SK212	706	25.8	6.2	4.6		先端部が尖るが、加工は無い。ところどころ表面が残存する。		弥生時代中期	杭	
W 13	124	38	SK227	779	53.4	4.3~ 8.05	1.45	片方は丁寧に彫り取りするが、他方の加工は無い。		—	板材	
W 14	123	40	SK236	778	22.7	6.45	6.2	先端部を片側から削り尖らす。削りは粗い。		—	杭	
W 15	122	SK236	765	23.3	1.6~2.8	1.3		端部は切削したまで、ところどころ表面が残存する。断面は欠損してしまっている。		—	株状木製品	
W 16	117	39	SK239	909	178.0	5.0~6.9	5.3	先端部を両側から削り、平面面をくり、薄く仕上げる。中央部の一部分と端部も加工する。全体的に質味である。		弥生時代	株状木製品	
W 17	119	38	SK259	791	36.4	15.3	3.0	端部を両側から削りする。前面に削り痕が明確に残る。		古墳時代	板状木製品	
W 18	124	38	SK259	792	27.2	8.85	2.0	削り取り加工を施す。側面部の削り取りも丁寧に仕上げる。		古墳時代	板材	
W 19	121	40	SK252	866	29.3	0.9~9.7	2.0~3.4	全面に刷毛で表面を片側から削り尖らす。部分的に彩色らしい色彩(赤色)が認められる。		古墳時代	株状木製品	
W 20	139	SK252	872	15.4以上	0.9~8.6	0.3~0.8		全面加工で端部を片側から削り尖らす。部分的に彩色らしい色彩(赤色)が認められる。		古墳時代	木製品	
W 21	117	40	SK256	794	59.2	9.4	8.25	基部に彫刻する部はよく加工する。両端部とも丸く仕上げる。先端部は使用の為彫減する。心持丸太棒を用いる。		古墳時代	舟	

插表5 木製品一覧表(1)

文物番号	辨認番号	固有番号	出土位置	取上番号	全長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	特徴	時期	種別
W22	120	SK259	860	9.3	5.2	1.7	ゴルフクラブの形状であるが、加工痕は明瞭でない。	弥生時代中期	自然木?	
W23	121	SK259	876	25.9	3.3~3.8	2.3~3.6	先端部は削りから削って尖らせ、基部は片面だけ抉りを入れる。先端部に斜面をかけて扇形気味である。全削丁寧に加工する。	弥生時代中期	木製品	
W24	119	SK259	877	61.9	4.7~6.0	5.9	ところどころ表面が残かしし、一部抜け出げる。	弥生時代中期	自然木?	
W25	129	40	SK259	878	47.8	1.8~3.0	2.6~3.4	人差し指に表皮が残存するが、削面は菱形である。表面も丸みが残されている。柄どうろう。	弥生時代中期	柄
W26	122	SK259	879	72.7	2.8~3.7	1.3~1.7	両を4箇所取り、窪い角部に加工し、先端部を片側から削り尖らす。	弥生時代中期	縦状木製品	
W27	126	SK259	882	29.55	3.3~4.75	4.5	面取り加工を施す。大部分削け出せる。	弥生時代中期	木製品	
W28	125	69	SK259	883	10.05	5.4	内外面共に丁寧に加工され、彫墨りが施される。柄は丸削である。	弥生時代中期	柄	
W29	124	36	SK259	885	85.9	14.7~16.6	3.7	両面・側端部とともに丁寧に加工する。部分的に抜け出げる。	弥生時代中期	柄材
W30	118	36	SK259	886	91.6	13.0~16.8	1.35~1.75	全面加工である。片面・側面・端部は丁寧に仕上げる。端部は内側から削り、落く穴だらけ。側端部の途中に段をつくす。	弥生時代中期	板状木製品
W31	118	38	SK259	887	113.7	9.2~13.0	0.6~2.3	片面・側端部を丁寧に加工する。片方の端部はややカーブを持たせ。旗舟は火薙の為不明である。	弥生時代中期	板状木製品
W32	119	SK259	880	119.65	3.7~5.3	3.3	加工痕は認められない。端舟が立ち、片側端部が研くなっている。	弥生時代中期	自然木利用	
W33	122	SK259	891	151.05	4.2~6.1	5.4	先端部を尖らし球状に基部を断面長方形に加工する。大部分分け切れる。	弥生時代中期	縦状木製品	
W34	118	39	SK259	892	98.6	6.2~7.3	1.5~2.0	生存状態が悪く、完全な形ではないが、先端部を両面から削り平削れをつくり落とす。大部分が削け出せる。	弥生時代中期	板状木製品
W35	122	SK259	894	62.8	4.2	2.45	先端部を片面から削り尖らす。基部も片面削り丸く仕上げる。	弥生時代中期	板状木製品	
W36	122	SK259	895	121.0	1.7~2.4	1.65	先端部を側面から削って尖らす。基部は切断したままである。片側全面に表皮が残る。	弥生時代中期	板状木製品	
W37	120	SK259	897	9.3	6.9	1.8	表面であるが完全な形ではないが、円孔が確認できる。柄を逆さに込めてあるよう。	弥生時代中期	木製品	
W38	117	39	SK259	899	152.9	5.0	1.7~3.7 15.5	正面丁寧に加工する。断面形状は倒卵形で後円形。先端部は横丸真方柱を呈する。先端部は両面から落く所あり。側端部は丸く仕上げる。	弥生時代中期	欄
W39	123	40	SK259	901	81.8	5.5~6.5	4.7	先端部を削り尖らす。中央の一部分と基部を加工する。基部は丸く仕上げる。	弥生時代中期	柄
W40	119	SK259	902	69.8	5.6~10.1	6.4	全面に表面が残存する。側端部が研くなる。	弥生時代中期	自然木利用	
W41	119	38	SK259	903	48.4	8.6	1.4~2.55	全面丁寧に加工する。先端部・側端部共に両面からの削りにより削り出せ上げる。先端部の平面部は丸みを含む。	弥生時代中期	板状木製品
W42	124	SK263	864	53.0	7.2~9.8	2.2~5.0	片面にはあるが、他側は全く加工する。両側端は丁寧に仕上げる。	—	木製品	
W43	121	36	SD205	233	25.45	14.85	1.4	全面加工をして、先端部を3mm程に落とす。中央部の丸周部を幅25mm高さ3mm程度削り出す。	弥生時代	平策
W44	122	42	4区 H-16 Pit-66	607	19.3	9.6~9.9	7.9	面を3箇所が横は一定でない。基部下部を斜めに切削する。側面は楕円・三角形である。	中世	柱材
W45	122	42	4区 C-16 Pit-8	609	23.9	10.1	8.7	側を4箇所が横は一定でない。最下部を斜めに切削する。側面は四角形である。	中世	柱材
W46	122	42	4区 C-16 Pit-1	611	52.1	17.95	13.4	面を9箇所が横は一定でない。最下部を斜めに切削する。側面は楕円形である。	中世	柱材
W47	122	42	4区 D-29 Pit-1	512	46.25	11.25	9.6	基部2cmの面を2面取り。他は未加工である。基下部を斜めに切削し、断面側丸・角形である。	中世	柱材
W48	123	2区 A11	716	24.6	5.7	3.5	先端部を片面から削り尖らす。表皮が残存する。	—	柄	
W49	125	2区	831	12.8	6.7~1.8	0.6~1.8	断面であるが全面丁寧に加工する。先端部は頗る仕上げる。	—	棟	
W50	125	41	2区 SX-01	337	12.5	2.4	0.7	内外面削込み・側端抜き加工をする。側部を削り出す。側部はトヨノキである。	中世	合子柵
W51	125	41	2区 SX-01	358	13.25	2.0	0.6	内外側面削込み・側端抜き加工をする。側板はシナノキである。	中世	合子柵
W52	125	41	2区 SX-01	359	12.6	3.9	0.85	側面から比較的太い側を抜き出し表面を平滑に研ぎあげる。側板はイヌノキである。	中世	棟樋
W53	123	41	2区 SX-01	360	9.05	3.9	0.8	側面から比較的太い側を抜き出し表面を平滑に研ぎあげる。側板はイヌノキである。	中世	檜柳

挿表5 木製品一覧表(2)

遺物番号	取上番号	捕団番号	団版番号	出土位置	器種	石材	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)	備考
S 1	548	126	36	SK50	石鏃(凹)	サスカイト	1.65	1.37	0.43	0.7	(凹) ... 平基無茎鏃
S 2	369	126	36	4 区	石鏃(凹)	黒曜石	1.43	1.15	0.30	0.3	
S 3	489	126	36	4 区-D-25	石鏃(凹)	黒曜石	1.86	1.41	0.21	0.5	剝片鏃(未成品)
S 4	507	126	36	4 区	石鏃	黒曜石	1.57	1.27	0.35	0.6	未成品もしくは欠損
S 5	646	126	36	SD36	加工痕剥片	黒曜石	3.16	1.05	0.50	1.4	
S 6	284	127	36	3 区-F-3	石鏃	無斑晶板状安山岩	14.15	10.60	2.45	410	撥形
S 7	283	127	36	2 区撫土中	石鏃	無斑晶板状安山岩	17.93	8.95	2.70	430	短筒形に近い
S 8	930	126	37	SD42	石鏃(凹)	黒曜石	1.93	1.10	0.32	0.6	
S 9	937	126	37	SD42	石鏃(凹)	黒曜石	2.00	1.32	0.65	1.3	未成品
S 10	943	126	37	SD39	石鏃	黒曜石	2.10	1.16	0.42	0.8	未成品
S 11	935	126	37	SD42	石鏃(平)	サスカイト	0.93	1.42	0.24	0.3	(平) ... 平基無茎鏃
S 12	935	126	37	SD42	石鏃	黒曜石	2.50	1.00	0.93	1.9	
S 13	945	126	37	SD42	石鏃	黒曜石	2.62	2.18	0.92	4.3	未成品
S 14	946	126	37	SD42	石鏃	黒曜石	2.32	1.02	0.43	1.1	未成品
S 15	950	126	37	SD40	加工痕剥片	黒曜石	4.65	2.53	2.00	15.9	
S 16	913	127		5 区表土中	石核	黒曜石	3.45	6.33	1.85	31.8	
S 17	911	127	37	表探	石核	黒曜石	7.22	10.0	2.90	154	

捕表 6 石器類観察表

遺物番号	取上番号	捕団番号	団版番号	出土位置	特徴	時期	種別
J 1	355	128	41	2 区 SX-01	径7.3cm、厚0.1cm、縁厚0.3cmを測る。外周に網目文様を施し、紐を挟んで双鳥ススキが描かれる。	中世	和鏡
C 1	405	128	42	4 区 E-22	径2.3cmを測る。元祐通宝である。	中世	古銭
C 2	411	128	42	4 区 E-22	径2.4cmを測る。種類は不明。	—	古銭
C 3	832	128	42	2 区	径2.1cmを測る。寛永通宝である。	近世	古銭
F 1	356	128	42	2 区 SX-01	残存長2.3cm、径0.1cmを測る。基部に糸通し穴が確認できる。 先端部は欠損する。	中世	針
F 2	356	128	42	2 区 SX-01	全長3.9cm、径0.1cmを測る。基部に糸通し穴が確認できる。 先端部は欠損する。	中世	針
F 3	356	128	42	2 区 SX-01	残存長3.5cm、径0.1cmを測る。基部に糸通し穴が確認できる。 先端部は欠損する。	中世	針
F 4	448	128	42	4 区 C-17	残存長4.7cm、幅0.5~0.6cm、基部幅1.1cmを測る。先端部は欠損する。	—	釘
F 5	490	128	42	2 区	残存長2.6cm、幅0.2~0.5cmを測る。基部は欠損する。	—	釘
F 6	707-15	128		2 区	残存長2.4cm、幅0.3~0.6cmを測る。	—	鐵製品
F 7	707-22	128		2 区	残存長6 cm、幅0.3~0.8cmを測る。基部は欠損する。	—	鐵製品
F 8	725	128	42	4 区 D-23	大きく屈曲する。残存長4.4cm、幅0.4~0.6cmを測る。端部は欠損する。	—	鐵製品

捕表 7 和鏡・古銭・鉄製品一覧表

第5章 まとめて

第1節 土坑群について

福岡遺跡では、1・2区から多数の土坑が検出された。検出数は265基を数えたが、調査地は限定された範囲であるため、調査地外にはまだ多くの土坑が存在すると考えられる。これらの土坑は、海拔3m前後の狭い範囲に密集して存在していたが、南側の自然流路と東側の人為的な溝があたかも土坑群を取り囲むかのように存在していた。このような例は、京都府綾部市三宅遺跡⁽¹⁾や奈良県安堵町東安堵遺跡⁽²⁾などでも報告されている。

土坑には遺物を伴わないものが多く、時期を特定できないものが多かった。時期を特定できた土坑には、いくつか古墳時代に属するものがあったが、大多数は弥生時代中期後葉にあたるものであり、極めて短期間に数多くの土坑が掘られたことになる。

土坑は、二つのタイプに大別できる。一つは、断面形が袋状かそれにちかい形態を呈し、埋土に褐色系粘質土ブロックを多量に含むもので、土坑群の北側で多く検出されており、切り合い関係の見られない単独のものも多くある。もう一方は、断面形が椀状ないし皿状を呈し、灰色粘質土ブロックが多量に含まれるもので、土坑群の南側に集中しており、切り合い関係の認められるものが多い。

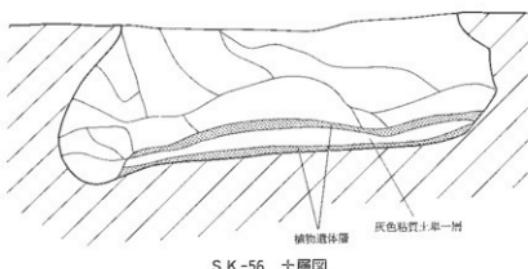
これらの土坑の埋土は、基本的に褐色系と灰色系の粘質土ブロックが多少とも混在したものであり、单一土による層を形成する土坑は少数である。これは、土坑の掘り下げに伴う排土が土坑の埋土となっている為であろう。土坑埋土はブロック状の土が主体となっており、自然堆積層があまり認められないという事実は、そこに人間の関与を想定させる。つまり、掘り下げの終わった土坑を排土処理用に転用したためと考えられる。

土坑内遺物から見るかぎり、掘り下げの完了後に土坑を積極的に利用しようとした様子は認められない。これは、土坑を必要として掘り下げが行なわれたのではないことを意味している。土坑群の周辺には礫混じりの層が広がっているが礫を含まない灰色粘質土に土坑が集中すること、灰色粘質土の下に存在する砂質土まで掘り抜いた土坑がないこと、後述する掘削具と考えられる木製品が土坑中より検出されたこと、土坑が海拔3m前後の低地上に位置しており貯蔵穴や落し穴・土壤墓としては立地場所が適さないこと⁽³⁾から、粘土採掘用の土坑だと考える。

現在粘土採掘坑とされている遺構は、古墳時代以降の窓に伴うものが大半である。これは、窓に伴わない土坑(群)の場合は、粘土採掘坑とする積極的な根拠に欠けるからであり、貯蔵穴・土壤墓などの意義付けがされているものの中にも、粘土採掘が主たる目的であった遺構も含まれているであろう⁽⁴⁾。

よい粘土を求めるならば、それだけ多くの排土が発生する。平坦地において土坑を密集して掘る場合には、排土をいかに処理するかが問題となる。最も効果的なのは、不要の土坑に排土を埋めてしまうということである。こうすれば、排土の処理と不要な土坑の埋め立てが同時にできることになる。事実、福岡遺跡の土坑では、基本的に埋土は径10~20cmぐらいいの粘質土のブロックが混在しあったものが多く、沈澱などによる自然堆積のものは多くない。これは、ブロック状に掘り上げられた排土が埋まつたためであり、掘り上げから埋め戻されるまでが比較的の短期間であったことを意味すると考える。

土坑には、植物遺体層の存在するものがある。多くは自然堆積と思われるものであるが、植物遺体層を意図的に利用したと考えられる例が存在する。SK-56では底面付近の植物遺体層の上に灰色粘質土單一層がありその上にも植物遺体層が存在していた。灰色粘質土には他の粘質土ブロックの混入は認められなかった。埋土は基本的



SK-56 土層図

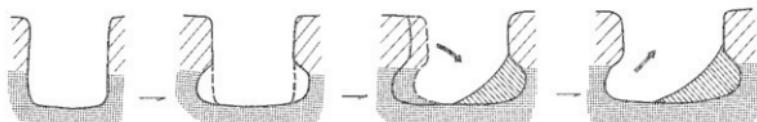
に粘質土ブロックの混じりあったものであることから灰色粘質土層は自然堆積とは考えにくく、意図的に植物遺体によって上下を覆わるように置かれたものと考えられる。この例は植物遺体層が灰色粘質土を区別する目的で使用されたと考えられる例であり、灰色粘質土の扱いに特別の配慮が払われていることがわかる。これは、土坑の性格を考える時に重要な示唆となる。不要な排土が混じらないように特定の土を区別していることから、この土（灰色粘質土）は特定の用途のために意図的に採掘された土であることが分かる。その用途としては土器の胎土として使用したと考えることもできよう⁽¹⁾。そうなると、周間に存在する土坑こそ粘土採掘坑だと考えることができる。SK-56などの例は、採掘の終わった土坑を土の仮置き場に転用した例だとみることができる。

福岡遺跡からは、比較的良好な状態で木製品が出土したが、その中に掘削具と考えられるものが存在した。掘削具と考えられる木製品は4点あったが、そのうちW38は櫛を掘削具に転用したと考えられる特殊例である。残る3点は形状から「掘り棒⁽²⁾」とされるものであり、複数回の使用が当初より意図されていたと思われる。刃部・柄とも丁寧な加工が施されたW6と、緊急の使用に際して取り急ぎ材の先端部を削り出したものと思われる調整の粗いW1・W16に分けられる。両者は検出状況も異なり、前者はほぼ土坑底面から検出されたのに対し、後者は埋土の中程より浮いた状態で検出された。土坑中より掘削具が検出されたことは、意図されていた粘土の採掘が終了した時点で掘削具を廃棄したのであろう。そうなると、粘土の採掘は計画的に集中して実施された時期とそうでない時期があったことが掘削具の調整から推察される。

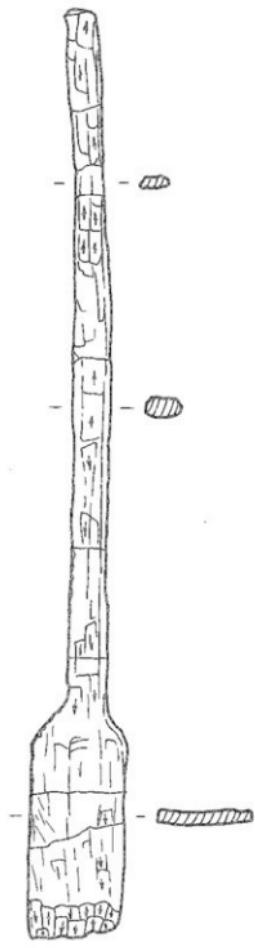
掘削具の使用方法を考えてみたい。櫛を転用したと思われるW38を除く3点の掘削具とも、刃部の幅は6cm前後であり一度に多くの土を採掘するには不向きであるが、抵抗が少ないため壁体を突き崩し土坑を掘り広げることにはかえって有効だと考えられる。能率的に必要な粘土層を追っていく土坑拡張のほうが有効であろう。

灰色粘質土の上には褐色系粘質土が存在した。土坑のなかには褐色系粘質土ブロックが多く含まれるものとあまり含まれないものがあり、それぞれの土坑が集中する傾向があることは偶然ではなく、褐色系粘質土の堆積があまり進まないときに採掘されれば褐色系粘質土ブロックの混入はわずかであり、逆に褐色系粘質土の堆積が進んでからの採掘では褐色系粘質土ブロックの混入は多くなる。これが正しければ埋土の観察から時期差が推測できることになる。このように考えると、土坑群の南側が古く北側が新しいことになる。SK-143では、壁体が崩落したと思われる粘土塊が断面図に認められる。この粘土塊からは、灰色粘質土の上に褐色系粘質土が存在していたことがわかる。この例からみて、ある時点での土坑掘り下げでは、褐色系粘質土から灰色粘質土に掘り込んでいることはほぼまちがいない。

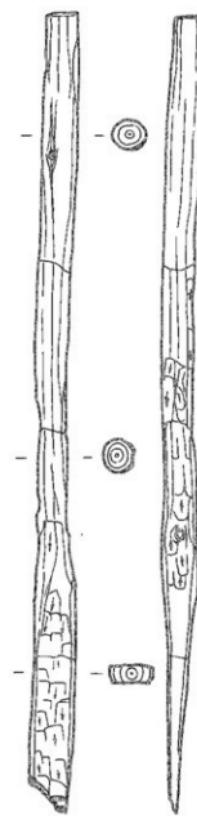
袋状に掘り抜いた場合、調査の経験に基づくならば、一ヶ月もすると壁体が崩落した。袋状を呈する土坑は、掘り下げ後短期間に埋まったに違いない。SK-226では、約40cmの深さに対し、部分的ではあるが60cm程度も底部を掘り広げている。この掘り広げている部分の埋土は黒褐色粘質土層であり、掘り上げながら極めて短時間で土坑が埋まっていることがわかる。また、この埋土は、粘質土のブロック状の混入が認められなかったことから自然に堆積したものと考えられる。土坑群は、扇状地の扇端部に位置するため、水をかぶることも多くそのままに黒褐色粘質土が堆積していったのであろう。このような黒褐色粘質土層はSK-232のように褐色系粘質土ブロックと灰色系粘質土ブロックの混在層の下に存在する例もある。これは、掘り上げ後に土坑がある期間埋められることなく放置されていたことを意味している。



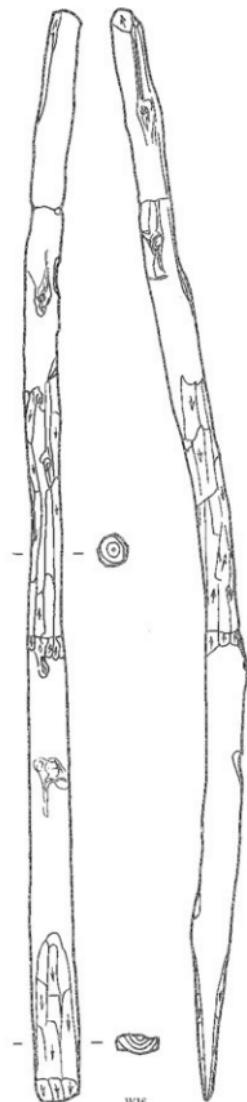
粘土採掘坑・掘削模式図（敷田東遺跡より一部改変）⁽³⁾



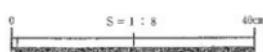
W38



W6



W16



掘削具 実測図

最後に、土坑群の性格についてまとめてみたい。土坑に伴って掘削具と考えられる木製品の出土、粘土を仮置きしたと思われる土坑の存在、遺物がほとんどなく、出土した土器もほとんどが小破片であること、さらに、掘り上げられた土坑のなかには、ある時期放置されていたことが埋土からわかるものがあることなどから土壙墓とは考えにくく、粘土探査坑だと考える。土坑には形態・埋土から大きく2つに分けられるが、これは、1土器型式内での時期差だと考えられ、これより集中して粘土が探査された時期があり、後には粘土探査があまり行なわれなくなっていることが推察される。

該当時期の淀江平野の集落に関して、あまり明らかにはされていない現在においては一つの推論であるが、今後の発掘調査などによる資料の増加にともない、この推論の是非も明らかとなろう。

註

- (1)『三宅遺跡』『京都府遺跡調査概報』第31冊 京都府埋蔵文化財調査研究センター 1988
- (2)『東安堵遺跡』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第46冊 奈良県立橿原考古学研究所 1983
- (3)福永伸哉氏は密集する土坑群の例をあげて検討を加え、土壙墓と結論付けられている。福岡遺跡の土坑群も例にあげられている遺跡と共通する点があり注目される。
- 福永伸哉『古墳時代の共同墓地』『待兼山論叢』史学篇 第23号 大阪大学文学部 1989
- (4)栗原文蔵『粘土及び用土の探査』『考古学叢考』中巻 斎藤忠先生頌寿記念論文集刊行会 1988
- (5)1つの推論であり、土器の胎土分析などを通して粘土使用の実態を明らかにしていく必要がある。
- (6)同様の掘削具が富山県の小杉流通業務団地内遺跡群No.21遺跡からも出土している。この遺跡は、弥生時代中・後期の粘土探査坑とされているものである。報告者は刃部調整の丁寧なものを鏃、粗いものを掘り棒と名付けているが、福岡遺跡出土の掘削具とそれぞれ形態的にも類似しているものである。さらに、具体的にどのような用途で使用されたのかは不明だが、両遺跡からはともに杵が出土しており注目される。
- 『小杉流通業務団地内遺跡群 第7次緊急発掘調査概要』 富山県教育委員会 1985
- (7)『蘇田東遺跡』群馬県考古資料普及会 1983

第2節 土壙墓（S X-01）について

S X-01は、遺物の保存状態が良好であったため埋葬方法の復元が可能であった。そこで、遺物の出土状態を述べ、若干の考察を加えてみたい。

和鏡（J 1） 合子身（W50） 合子蓋（W51） 梳櫛（W52） 解節（W53）
針1（F 1） 針2（F 2） 針3（F 3）カッコ内は遺物番号と対応

遺骸頭部東側（顔側-Aグループ）

和鏡 薄く紗を挟んで、解節の上に一部重なる
粘砂土が上を覆い、その上の一部重なる位置に合子身がある
鏡背を上に向ける
ほぼ地山直上
南側で梳櫛と接する

合子身 粘砂土を挟んで下側に和鏡
下の合子蓋と直に接する
内面に針1・3、歯、骨が存在（針2も同様の可能性）

合子蓋 一部植物遺体を挟んで地山に接する

北側上部に合子身が直に接する

南側上部に石が直に接して存在

梳櫛 地山に対し、ほぼ垂直に刺さる

解櫛に食い込む

北側で和鏡と接する

西側で上に骨が乗る

東側で合子蓋・合子身と接する

解櫛 下側には植物遺体を挟んで骨が存在

梳櫛が食い込む

薄く砂を挟んで北側上部に和鏡が存在

約1%を失う（埋葬時には欠損していた可能性が大きい）

針1 合子身内面出土

針2 位置不明

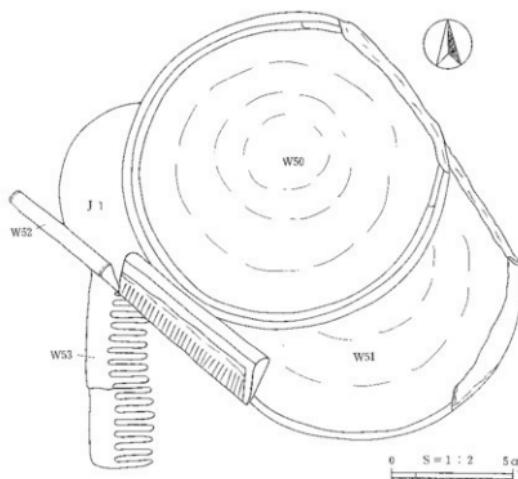
合子身内面出土の可能性が大きい

針3 合子身内面出土

遺骸頭部西側（後頸部側-Bグループ）

栗および柿と思われる種子と帶

- J 1 和鏡
- W50 合子身
- W51 合子蓋
- W52 梳櫛
- W53 解櫛



S X-01 遺物出土状況

S X-01出土の遺物について

S X-01からは、良好な副葬品が検出された。特に、木製品の保存状態は良好であった。それらの遺物は、墓壙内の2ヶ所に集中していた。一方は遺骸頭部東側（顎側-Aグループ）であり、もう一方は遺骸頭部西側（後頭部側-Bグループ）である。

Aグループの遺物のなかで、下に位置するのは解櫛である。この解櫛は、肩か胸と思われる骨の上に乗っており、櫛の歯を東に、折れ面を北側にして出土した。この解櫛の北側の折れ面の上に、薄く砂質土を挟み一部重なる位置で出土したのが和鏡である。和鏡は、鏡背面を上に向かってほぼ地山直上で検出された。鏡背面に残る付着物から布に包まれていた可能性があるが、鏡箱と考えられる合子には当初から入れられていなかったものと思われる。この和鏡に接し、解櫛に一部食い込み、地山に対して直立した状態で検出されたのが梳櫛である。これは、梳櫛が上からの強い力を受けたことを意味している。梳櫛は北西・南東軸をとっていたが、北西側は骨の下になっていた。よって、梳櫛が解櫛に食い込んだのは、遺骸が腐敗する以前の可能性が大きい。合子身は、和鏡の上に一部重なる位置で出土した。しかし、合子身と和鏡は直に接しておらず、間に粘砂土が存在したことから、合子身は二次的に検出位置に動いたと考えられる。この移動は、合子身内面には骨が入り込んでいるがその下からは検出されないことから、埋葬から比較的短期間での移動だと考えられる。この合子身の南東側の下より、一部重なって検出されたのが合子蓋である。合子蓋と合子身は直に接しており、合子蓋はその下に植物遺体を一部挟んで直に地山に接することから、両者が二次的に検出位置に移動したとは考えにくく、埋葬時より合子蓋の上に合子身が共に内面を上に向けた状態で置かれていたと考えられる。しかし、合子身は埋葬後にいくらか動いたようである。その原因としては、直上に置かれた結晶の重みによることが考えられる。また、梳櫛の奇妙な出土状態も同様に結晶のためだと考えることができる。針1・2・3は、針2の出土位置が明確でないが、針1・3とも合子身の内面より見つかっていることから、針2も合子身の内面に置かれていたと考えられる。合子身の内面には、遺骸の頸部分と思われる骨・歯も入っていた。

Bグループは、栗および柿と思われる種子からなる。これらは一括して置かれており、両者を特に区別した様子は認められなかった。

AグループとBグループの内容を比較すると、一部欠損した状態で出土した解櫛の存在により、Aグループは被葬者が生前愛用した品である可能性がうかがわれる。解櫛は、和鏡の下になっていた北側が失われており、注意深く精査したにもかかわらず残りの約半分は検出できなかった。よって、この部分は埋葬時には欠損していたと考えざるを得ない。そうすると、この解櫛と対をなすであろう梳櫛をはじめとするAグループに属する副葬品は、埋葬に際して新たに用意されたと考えるよりも被葬者の愛用していた品々と考えるのが妥当である。

それに対して、Bグループは性格が異なる。どちらも木の実であり、加工を加えた様子は認められない。明らかに埋葬に際して供え物として置かれたことが推察される。遺骸を安置した直後に置かれたのであろう。これらとは別に、遺骸の脚部から胴部にかけて遺骸を挟むようにして上下に植物遺体（加工の認められないもの）が認められた。これは、合子蓋や解櫛の下にあったものと同じものであり、遺骸が安置された後に植物遺体が掛けられ、その後でAグループ遺物が副葬されることになる。

S X-01の持つ問題点・特徴を考えてみたい。

第一に、立地が異例である点が挙げられる。本来、墓は見晴らしのよい丘陵上に営むものとされている。実際、福岡遺跡の東側に近接する向山・瓶山丘陵からは中世墓が検出されている¹¹⁾。墓域と考えられるこれらの丘陵ではなく、水はけの悪い低地からS X-01が単独で検出された。後世の削平を考える必要はあるが、S X-01の残存状況を考えると、同様の墓があればなんらかの痕跡が残るはずであり、他の墓は周囲に営まれていないと考えて良いだろう。そうすると、この墓は特別の理由があって単独でこのような立地をとったことになる。被葬者は、副葬品の質・量から考えても当時の一般民衆とは考えられない。同様の階層の人々が葬られたのであろう丘陵上の集団墓地に葬られなかつたことは、埋葬者にはS X-01被葬者と集団墓地被葬者との違いが明確に意識されていたこ

となる。それが何によるのかについては、現時点では適切な解釈を持たないが今後類例の増加を待って再検討したい。

第二に、立地的には適していない場所に在るにもかかわらず、副葬品が充実している点が挙げられる。これは保存状態が良かったことも一因であろうが、それだけとは思われない。木製遺物が検出されなかった他の遺跡の場合、本来副葬されていなかったのか、副葬されていたものが失われたのかは明らかでないが、その点を考慮にいれても S X-01 が質的に優れた副葬品を持つことは間違いない。その一方で、一般に検出され易い土器類が全く検出されなかっことも注目する必要があろう。

第三に、埋葬形態に関する点が挙げられる。S X-01 では、他の遺物の残り具合から考えて木棺の使用は考え難い。代わりに、遺骸の上下に植物遺体が存在した。似たような形態が長瀬高浜遺跡にも見られるが⁽¹²⁾、これは遺骸や棺を布などで覆う「棺」⁽¹³⁾と呼ばれる風習⁽¹⁴⁾に当たるものであろう。

第四は、遺骸と副葬品の配置関係についてである。遺骸は北頭東顎の横臥屈葬であり、副葬品は遺骸頭部の前側と後側に分けて置かれていた。両者には性格の違いが読み取れるが、ともに頭部付近にあるという共通性がある。

第五は、詰石（石組）についてである。遺骸の上には大柄の石を 6 個使って、遺骸を覆い隠す・押え込む状態となっている。これは、死者の蘇り防止といった葬送観⁽¹⁵⁾が反映しているのであろう。

第六に、埋葬が行われた時期（季節）については、栗や柿と思われる木の実の副葬、充分に成長した植物遺体の存在から秋であろう。

第七に、被葬者についてである。和鏡を副葬している基は「多くの場合、群集墓の中の一基」で「古墓群の中における立地・共伴する副葬品など、集落の中心的・指導的人物の墓」であり、「おそらく被葬者は特別な社会的地位にあり、鏡はその象徴としてかなりの権威と財力を持つ者のみが所持し得た高価で貴重な品であった⁽¹⁶⁾」と考えられている。S X-01 は、墓地には適さない低地に営まれた単独墓であることから、和鏡を副葬しているものの、集落の中心的・指導的人物の墓とは考え難い。さらに、歯牙の鑑定からは遺存状態が良くなかったために断定はできないものの、被葬者が熟年の女性である可能性が示唆⁽¹⁷⁾されている。

第八に、年代については時期決定の資料となる土器類が全く検出されなかつたので明らかにできなかった。しかし、副葬されていた和鏡が平安時代末のものである⁽¹⁸⁾ことから、上限を平安時代末に押さえるにとどめておく。

第九に、和鏡が副葬された墓についてであるが、近年の発掘調査の増加に伴い、墓から和鏡が発見される例も増えてはきているもののその数はまだ多くない。そのなかで、当遺跡は和鏡と被葬者、和鏡と他の副葬品の関係が比較的良好に分かる極めて稀な例だと見える。今後、類例の増加を待ち再検討したい。

註

- (1)『向山古墳群』鳥取県西伯郡淀江町教育委員会 1990
- (2)『長瀬高浜遺跡発掘調査報告書Ⅲ』鳥取県教育文化財団 1981
- (3)斎藤 忠『東アジア葬・墓制の研究』第一書房 1987
- (4)小田村宏氏は、瑠璃光寺跡遺跡出土の中世墓の検討のなかで詰石を有する墓についても言及し、詰石に関しては被葬者の性別・年齢以外の要因が関係しておらず、死者の蘇り防止といったような造墓集団の宗教観・葬送観に裏付けられた行為の一つだと考えられている。
『瑠璃光寺』山口市教育委員会 1988
- (5)前田洋子「和鏡の用途の展開について—出土鏡・水中検出鏡を中心として—」
『北山茂夫追悼日本史論集 歴史における政治と民衆』 日本史論叢会 1986
- (6)井上貴央氏の御教示による。詳細は付論参照。
- (7)前田洋子氏の御教示による。

第3節 小 結

平成2年度・3年度の福岡遺跡の発掘調査によって確認した遺構・遺物を概観してまとめとする。

遺構 1区・2区で弥生時代の遺構を検出した。溝によって区画されるように251基の土坑が分布する。時期は中期後葉頃である。土坑の性格は、本章第1節でも記述したように粘土探査坑と考えられる。現在のところ当時の粘土探査坑の報告例は少ないが、今後の調査により類例が増加し、さらに細かな検討が加えられるであろう。2区のSD-03については、排水の為に掘られたと考えているが、1区SD-05はその規模も異なることから、他の性格を想定する方が良いであろう。その詳細については今後の課題である。その他に、1区・2区で自然小河川を確認した。

古墳時代の遺構としては、2区で13基の土坑を検出したが性格は不明である。また、4区では自然小河川をいくつか確認した。

中世以降の遺構は、2区で土壤墓1基(SX-01)、3区で杭列、4区で土坑21基・掘立柱建物2棟・ピット群・石列、5区で土坑1基・杭列・ピット等を検出した。また、1区・3区・4区・5区で自然小河川を確認した。2区の土壤墓については第3章第3節並びに本章第2節に記述した。福岡遺跡で中世遺構が集中するのは4区だけであるが、これは、4区の地点が、「倉常」という小字名で呼ばれていることと関連すると考えられる。その中で、特筆されるものとして、4区SK-421内灰層下より平織りの麻布が出土しているが、その出土状況等から祭祀的性格が考えられる。他に、3区・5区の杭列の時期については中世まで遡る可能性もあるが明確でない。

遺物 今回の調査により、縄文時代～古墳時代・中世以降の土器・木製品・石器・和鏡・針・古錢・鉄製品等が出土した。縄文時代の土器は中期～後期頃の口縁部片等が少量である。弥生時代の土器は、1区・2区を中心に出土しており、その大半は中期後葉のものである。器種は甕が殆どであるが、壺や高杯も少量ながら出土している。古墳時代以降の土器は、4区を中心に、土師器・須恵器・瓦質土器・陶磁器が出土した。陶磁器の中には僅かであるが中国産のものも含まれる。

木製品は弥生時代以降のものを検出した。弥生時代の木製品は1区・2区より出土している。堅杵・樅・棒状木製品(箆状工具か?)・匙・彩色板状木製品(柄か?)・平歛・建築材等であるが、その用途等について不明な点が多く残っており、今後の課題である。古墳時代では、杵・板状木製品等を検出し、中世では、2区SX-01より合子(箆箱)・櫛・4区より柱材が出土した。その他に、杭列に用いられた木杭を多数検出したが、この時期については不明である。

石器類は、剥片石器として石鏽8点・石錐3点・加工痕剥片等、礫石器として石鏽2点が出土した。剥片石器の石材は、100点中97点が黒曜石、3点がガヌカイトである。

和鏡・針は2区SX-01の副葬品である。和鏡は、銅薄双鳥文鏡で、その形態的特徴から12世紀後半に鋳造されたものと考えられる。

最後に、福岡遺跡の発掘調査の実施及び報告書の作成に際して、指導・助言・協力頂いた各位に感謝の意を表します。